

外国人散在地域における 多様な学びの選択肢創造 プロジェクト

報告書



はじめに

日本における「外国ルーツの子どもたち」の教育保障の問題が明るみになって、既に40年が経とうとしている。1980年代に中国残留者やインドシナ難民の子どもたち、1990年代に「日系人」の子どもたちの教育が「問題」として認識され、「日本語ができない子どもたち」を対象とした日本語教育とはどのようなものか、「日本語ができない子どもたち」がどのようなことを目指し、日本語をどのように教えれば良いのかを試行錯誤する時代であった。次第に「日本語で意思疎通はできるが、教科等の学習に困難がある子どもたち」の存在に注目が集まり、子どもの日本語教育は日本語の言語的特徴を一時的に教えるのでは十分ではない、生涯において必要になる思考を支えるためのことばの力、アイデンティティ、親子関係など、認知面や情意面を視野にいったことばの学習という点に着目されるようになった。その後ろ盾となったのが、カナダのCumminsが提唱した「複数の言語や文化環境で育つ子どもたち」の言語能力の捉え方であった。ここから外国ルーツの子どもたちに対する日本語教育とは、母語も含め複数の言語能力の発達途中にある子どもたちに対することばの教育であり、将来、日本あるいは他の国や地域の社会で生きていくために働くことば、アイデンティティ形成を支え、周囲との関係性の中で生きていくためのことばの教育であるという、子どものライフコースを支えるという観点を持ち、取り組むものとして認識が広がりつつある。

しかしながら、研究者等がこれらの重要性をいくら訴えても、学校生活でのやりとりができるようになるまで日本語の言語的特徴を教え込むのが日本語教育であるという信念に基づき、日本語支援が行われていることもある。また、子どもあるいは元子どもたちが生きている現実世界は、過酷で理不尽さに溢れている。青木(2023)には、その過酷さや理不尽さを自覚している子どもと元子どもだった青年たちの声が赤裸々に語られている。彼らの心からの訴えは、胸に迫るものがあり、声を聞いた者の心を動かし、行動を引き出す。他方、語ることばを持たない者がいる。ことばだけでなく、語る場、語る相手がいない者といっても過言ではない。実は、語ることができない者の方が圧倒的に多いのではないだろうか。

本プロジェクトはそのような語ることができない者の声を聞き取ることによって、潜在的ニーズを捉えることへの挑戦である。質問紙調査とインタビュー調査によって実施した。

質問紙調査は、表面的には質問項目に目を通し、回答するという単純な行為である。しかし、その質問項目は調査員の考えを基にしながら丹念に練り上げた結果である。回答者は、質問項目に目を通すことにより、学ぶことに対する自分の状況を知ると同時に他の選択肢が拓かれていることも知ることができるように構成されている。

インタビュー調査では、時間をかけて当人の生い立ちから詳細に聞き取っていった。ここでもまたインタビュアーに質問されることによって、当人が意識していなかったことやあまり思い出すことがなかったこと、当時はことばにならなかったことなどが言語化されていった。いずれにおいても当人にも意識化されていなかった思いを引き出す効果を含むものである。

NPO法人アレッセ高岡ではかねてより「市民性教育」の視点から、青少年の社会参画を軸としたプロジェクトに取り組んできた。本プロジェクトもその一環として行われた。調査員は質問紙調査で質問項目を練り上げ、インタビュー調査でインタビューーとインタビュアーの両方を経験することによって、協力者は質問項目に回答し、インタビューーになることによって、ことばで自らの「生」を語るという経験となった。これを機に、文化的にも言語的にも多様な環境で生きる当人たちにとって、ことばが自らの「生」を支えるために機能するきっかけとなるのではないだろうか。本プロジェクトにかかわった外国ルーツではない関係者もまた彼らの語らいに耳を傾け、心を寄せようと試みることによって、ことばとは何か、支援とは何か、文化的言語的に多様な環境で生きるとはどういうことなのか、この社会でどのように生きているのかなどについて改めて考えるきっかけとなった。さらに、特筆すべきは、質問紙調査は、富山県の世論調査としても実施した点である。全ての「富山県民」を対象とすることによって、外国ルーツの調査員が富山で「学び直し」の機会を求めている人々の存在を知り、ニーズを包括的に捉え、学びの機会や場を行政そして市民へ提案すべく検討を重ねた。彼らは日本語教育が必要なあるいは何かしらの支援対象の子どもたち／元子どもたちでもなく、この地の一市民として、地域課題を捉え、社会参画を図っているのである。このように本プロジェクトにかかわった者のひとりひとりの心の中に「市民性」が確実に萌芽していると感じている。

外国ルーツの住民が、「日本語ができない人」ではなく「文化的にも言語的にも多様な環境で生きる人」として、社会の一員として生きるために、十全に思いを語り他者とのかかわることばを持ち、そこに壁がある限り挑み続けたい。また、近い将来、試みの域を脱して、「プロジェクト」から「事業」となり、「外国人散在地域における多様な学びの選択肢創造事業」として始動する日を心待ちにしている。そして、報告書を手にとった方も参画して下さることを願っている。なぜなら、十全に思いを語り他者とのかかわることばを持つことは、誰にとっても、この社会で生きていくために、重要なことだからである。

(上越教育大学 准教授 原瑞穂)

【引用文献】

- 青木由香(2023)「外国ルーツ青少年の声とライフコース—外国人散在地域で活動する市民団体の歩みから—」『子どもの日本語教育研究』第6号、pp40-63.
https://www.kodomo-no-nihongo.com/files/uploads/%E7%AC%AC6%E5%8F%B7_p40-63%E7%89%B9%E9%9B%86%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B94.pdf (2024年2月18日閲覧)

目次

はじめに	1
1. 問題の所在	7
2. 富山県の現状	10
3. プロジェクト概要	19
4. ニーズの把握	23
4.1. 質的調査(インタビュー)	24
4.2. 量的調査(アンケート)	58
4.3. 質的・量的調査のまとめ及び総合的考察	105
5. 提言	111
6. 調査員の振り返り	122
6.1. 勉強会や調査員とのやりとりから	122
6.2. 調査員の振り返り	123
おわりに	131
参考資料	132
I 詳細アンケート調査票	132
II 令和5年度県政世論調査に掲載していただいた本プロジェクトの設問	143
III 外国ルーツの若者インタビューリスト	146
IV 調査協力承諾書等	156
V 調査検討会議・勉強会・報告会等	157
VI ニーズ対応	159
VII 活動写真	160
VIII 指導者・調査員名簿	163

図表一覧

図表 2-1 富山県内の外国人児童生徒数の推移.....	10
図表 2-2 都道府県別 日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の在籍人数.....	11
図表 2-3 富山県の学校設置者別外国籍高校生数	12
図表 2-4 北陸・甲信越のR6年度高校入試における「措置」や「枠」の設置状況.....	13
図表 2-5 都道府県別 高校入学後の支援の状況	15
図表 2-6 全国の日本語指導が必要な高校生等の進路状況	16
図表 4-1 ニーズ調査の全体像	23
図表 4-2 インタビュー対象者のプロフィール	25
図表 4-3 [詳] フェイス—回答者の性別・全体	60
図表 4-4 [詳] フェイス—回答者の年代・全体	60
図表 4-5 [詳] フェイス—回答者の居住地・全体.....	60
図表 4-6 [詳] フェイス—回答者の職業/立場・全体.....	60
図表 4-7 [詳] フェイス—「学生」の学校種	61
図表 4-8 [詳] フェイス—「学生」以外の最終学歴.....	61
図表 4-9 [詳] フェイス—回答者の外国ルーツの有無・全体.....	62
図表 4-10 [詳] フェイス—外国ルーツ・年代別	62
図表 4-11 [詳] フェイス—非外国ルーツ・年代別.....	62
図表 4-12 [詳] フェイス—外国ルーツ・性別	62
図表 4-13 [詳] フェイス—非外国ルーツ・性別	62
図表 4-14 [詳] フェイス—外国ルーツ・女性・職業/立場別	63
図表 4-15 [詳] フェイス—非外国ルーツ・女性・職業/立場別	63
図表 4-16 [詳] フェイス—外国ルーツ・男性・職業/立場別	63
図表 4-17 [詳] フェイス—非外国ルーツ・男性・職業/立場別	63
図表 4-18 [詳] フェイス—外国ルーツ・「学生」・学校種別	63
図表 4-19 [詳] フェイス—非外国ルーツ・「学生」・学校種別.....	63
図表 4-20 [詳] フェイス—外国ルーツ・「学生」以外・最終学歴・性別	64
図表 4-21 [詳] フェイス—非外国ルーツ・「学生」以外・最終学歴・性別.....	64
図表 4-22 [詳] 学びの希望の有無—全体	65
図表 4-23 [詳] 学びの希望の有無—外国ルーツ・年代別	65
図表 4-24 [詳] 学びの希望の有無—非外国ルーツ・年代別	66
図表 4-25 [詳] 学びの希望の有無—外国ルーツ・男性・年代別	66
図表 4-26 [詳] 学びの希望の有無—非外国ルーツ・男性・年代別	67
図表 4-27 [詳] 学びの希望の有無—外国ルーツ・女性・年代別	67
図表 4-28 [詳] 学びの希望の有無—非外国ルーツ・女性・年代別	67
図表 4-29 [詳] 学びたい理由—外国ルーツ・年代別	68
図表 4-30 [詳] 学びたい理由—非外国ルーツ・年代別	69

図表 4-31 [詳] ほしい卒業資格—外国ルーツ・性別	70
図表 4-32 [詳] ほしい卒業資格—非外国ルーツ・性別	70
図表 4-33 [詳] 学生時代に十分学べなかった理由—外国ルーツ・年代別	71
図表 4-34 [詳] 学生時代に十分学べなかった理由—非外国ルーツ・年代別	71
図表 4-35 [詳] 学びたくてもできない理由—ルーツ別	72
図表 4-36 [詳] 学びたくてもできない理由—外国ルーツ・年代別	73
図表 4-37 [詳] 学びたくてもできない理由—非外国ルーツ・年代別	73
図表 4-38 [詳] 学びたくない理由—全体・職業/立場別	74
図表 4-39 [詳] 学びたくない理由—外国ルーツ・年代別	74
図表 4-40 [詳] 学びたくない理由—非外国ルーツ・年代別	75
図表 4-41 [詳] 学びたい内容—ルーツ別	76
図表 4-42 [詳] 学びたい内容—外国ルーツ・年代別	76
図表 4-43 [詳] 学びたい内容—非外国ルーツ・年代別	77
図表 4-44 [詳] 学びたい場・方法—ルーツ別	78
図表 4-45 [詳] 学びたい場・方法—外国ルーツ・年代別	78
図表 4-46 [詳] 学びたい場・方法—非外国ルーツ・年代別	79
図表 4-47 [詳] 学びたい場・方法—外国ルーツ・性別	79
図表 4-48 [詳] 学びたい場・方法—非外国ルーツ・性別	80
図表 4-49 [詳] どのような人に教えてほしいか—外国ルーツの回答	81
図表 4-50 [詳] どのような人に教えてほしいか—非外国ルーツの回答	81
図表 4-51 [詳] どのような人に教えてほしいか—ルーツ不明者の回答	82
図表 4-52 [詳] 日本の学校生活の良いところ—ルーツ別	82
図表 4-53 [詳] 日本の学校生活の良くないところ—ルーツ別	83
図表 4-54 [詳] 情報量の十分さ—外国ルーツ	84
図表 4-55 [詳] 情報量の十分さ—非外国ルーツ	84
図表 4-56 [詳] 情報量の十分さ—外国ルーツ・年代別	84
図表 4-57 [詳] 情報量の十分さ—非外国ルーツ・年代別	84
図表 4-58 [詳] 情報の入手元—外国ルーツ・年代別	85
図表 4-59 [詳] 情報の入手元—非外国ルーツ・年代別	86
図表 4-60 [詳] 求められる情報源—外国ルーツ・年代別	87
図表 4-61 [詳] 求められる情報源—非外国ルーツ・年代別	87
図表 4-62 [詳] 求められる情報源—外国ルーツ・性別	87
図表 4-63 [詳] 求められる情報源—非外国ルーツ・性別	88
図表 4-64 [詳] 人生の夢や目標について—外国ルーツの回答	90
図表 4-65 [詳] 人生の夢や目標について—非外国ルーツの回答	93
図表 4-66 [詳] 人生の夢や目標について—ルーツ不明者の回答の回答	94
図表 4-67 [詳] 自由記述	95
図表 4-68 [県] フェイス—性別	96

図表 4-69 [県] フェイス—年代	96
図表 4-70 [県] フェイス—最終学歴	96
図表 4-71 [県] フェイス—最終学歴が義務教育以下、性別・年代別	96
図表 4-72 [県] 学びの希望の有無—性別	97
図表 4-73 [県] 学びの希望の有無・年代別	97
図表 4-74 [県] 学びの希望の有無・学歴別	98
図表 4-75 [県] 学びたい理由—性別	99
図表 4-76 [県] 学びたい理由—年代別	99
図表 4-77 [県] 学びたい理由—学歴別	100
図表 4-78 [県] 学生時代に十分学べなかった理由—性別	100
図表 4-79 [県] 学びたくてもできない理由—性別	101
図表 4-80 [県] 学びたくてもできない理由—年代別	101
図表 4-81 [県] 学びたい内容—性別	102
図表 4-82 [県] 学びたい内容—年代別	103
図表 4-83 [県] 学びたい場・方法—性別	104
図表 4-84 [県] 学びたい場・方法—年代別	104
図表 4-85 質的・量的調査のまとめ	105
図表 5-1 提言一覧	111
図表 5-2 10の提言の位置付け	111

1.問題の所在

総務省のデータによると、富山県内の15歳未満の子どもの人口全体に占める割合は10.9%で都道府県別38位と全国でも特に深刻な少子化に陥っており、県内の児童生徒数(小中高)はこの25年間減り続け、約4万人も減少している(約30%減)。一方、県内の外国人児童生徒数はほぼ右肩上がりであり、同期間にその数は3倍に膨れ上がっている(文部科学省「学校基本調査」)。すなわち、外国にルーツを持つ子どもの全体に占める割合は急速に高まっている。そして、この傾向は今後も続いていくことが予想され、外国にルーツを持ち、異なる文化・習慣を持つ子どもや日本語を母語としない子どもがクラスにいるのが当たり前、むしろ多数派となっていく未来も現実味を帯びてきている。

増え続ける外国ルーツの子どもたちは富山県内でどう生きているのか。3年にわたって続いたコロナ禍は、外国にルーツを持つ子どもの教育にも大きな影響を及ぼしたと考えられる。実際、度重なる休校や地域日本語教室の閉室により外国にルーツを持つ子どもの学びが分断されてしまったケース、入国制限で再入国できず学びが中断してしまったケース、保護者の失業・時短勤務命令による家計逼迫により進学を断念したケース等が散見されている。富山県はいわゆる「外国人散在地域」であることから、これらは個別特殊なケースとして処理されがちであるが、実際には氷山の一角であると考えられる。

富山県に住む外国にルーツを持つ若者たちからは、繰り返し「○○しかない」という言葉が語られる。例えば、夜間中学や、ブラジル学校などの民族学校、英語で教育が受けられるインターナショナルスクールなどは、富山県にはない。既存の学校も、小中学校はほとんどが画一的であり、高校は日本語指導が必要な生徒はごく一部の(特に私立)学校しか(もしくはどの学校も)選べない状況となっている(2章参照)。すなわち、言語や文化適応の壁にぶつかった外国にルーツを持つ生徒にとって、富山県には自分に合った学びの選択肢がほとんどない状況であり、そこに外国人労働者としての家族が置かれる不安定な雇用状況が重なり、彼らの多くは学業不振や進学断念、不登校、中退、不就学等のリスクにさらされている。

一方で、学びの継続に困難を感じているのは、外国にルーツを持つ子どもたちだけではない。富山県内の小中学校で不登校の状態(30日以上欠席)にある子どもの数は増加の一途を辿っており、令和4年度で2,675人と過去10年間で最多となっている(富山県教育委員会小中学校課・経営管理部学術振興課, 2023)。外国ルーツの子どもたちが感じている「学びづらさ」は、外国にルーツがない日本人の子どもたちも同様に感じている可能性がある。さらに、平均寿命の延びに伴い「人生100年時代」と呼ばれる中、近年では、社会人になってからの学び直しである「リカレント教育」¹が注目を集め、年齢の枠にとらわれない、ライフステージの変化に

¹ 令和元年度に「富山県リカレント教育等産学官連携推進会議」が実施され、「県政世論調査」においてもリカレント教育の取り組みについての質問が設けられるなど、富山県政においてもリカレント教育の推進が意識されていることが窺える。しかし、令和5年度県政世論調査のリカレント教育の取り組みに関する設問においては「特に何もしていない」が61.2%と令和4年度調査よりも5.3ポイント増えているなど、県の施策が成果を上げているとはいえない状況にある(そもそも一般県民にとっては、リカレント教育に関して県でどのような施策が採られているのか見えにくい)。

じた学びが求められている。すなわち、学びのニーズや学びの継続における課題の存在自体は、外国ルーツの有無や年齢等にかかわらず、多くの富山県民に共通している。もちろん、学びのニーズや学びの継続における障害の内容については、外国ルーツの有無や年代差、性差等による違いもあるだろう。富山県では、特別支援や不登校に注目してそれらに合わせた学びの選択肢を作ろうとする動きは比較的活発に見られるが、外国にルーツを持つ子ども・若者・労働者の学びに注目した取り組みは貧弱である²。子どもの教育に話を限っても、外国ルーツの子どもの文化適応や言語の課題、特別支援の課題、不登校の課題等は、実際には切り分けられないケースも少なくないことから、それぞれバラバラに対応しようとしても、人的・金銭的成本がかかるだけでなく、実際の効果的な支援につながらない可能性が高い。個々に寄り添うと同時に、多様な子どもたちが集う教育現場全体を包括的に捉え、それぞれの課題や支援リソースを有機的に繋ぎ合わせながら、総合させていく視点が求められる。

文部科学省の「第4期教育振興基本計画」においては、「多様な個人それぞれが幸せや生きがいを感じるとともに、地域や社会が幸せや豊かさを感じられるものとなるよう、教育を通じてウェルビーイングを向上」することが目指されている。富山県ではウェルビーイングを成長戦略の中心に位置付け、推進しているが、富山県のすべての県民について、どのような学びのニーズがあり、どのような障害がその継続を阻んでいるのかを明らかにすることは、富山県において教育を通じたウェルビーイングの向上を実現することに直結する、むしろ、富山県における教育を通じたウェルビーイングの向上には、多様な県民の学びのニーズを正確に捉えることが前提となると言えよう。

本プロジェクトは、今まで可視化されてこなかった外国にルーツを持つ富山県民のニーズに着目しつつ、各種属性の共通点と相違点を調査によって明らかにし、多様な県民が学びを継続するために必要な選択肢を総合的に考察し、提案することで、富山県民のウェルビーイング向上の礎を築くことを目指す。

(NPO法人アレッセ高岡 理事長 青木由香)

²「富山県外国人材活躍・多文化共生推進プラン(令和元年9月策定)」では、外国人材の「確保」「マッチング」「適応」「定着」といった観点による施策が並び、子どもの教育に関しては、指導教員等の確保や資質・能力の向上、就学機会の確保等、既存の学校への適応のみが目指されているに過ぎない(唯一「外国人児童生徒等に対するキャリア教育の支援」が掲げられていることが希望だが、実際の県としての取り組みは明らかでない)。「人」が富山県での生活の中で成長するという観点で県の施策を見れば、「技能実習」「特定技能」の特定の在留資格のスキルアップが部分的に挙げられてはいるものの、ほぼ日本語力の向上のみがターゲットとされ、外国にルーツを持つ住民が「人」として生きていく・成長していくための富山県の施策は非常に限定的であると言わざるを得ない。

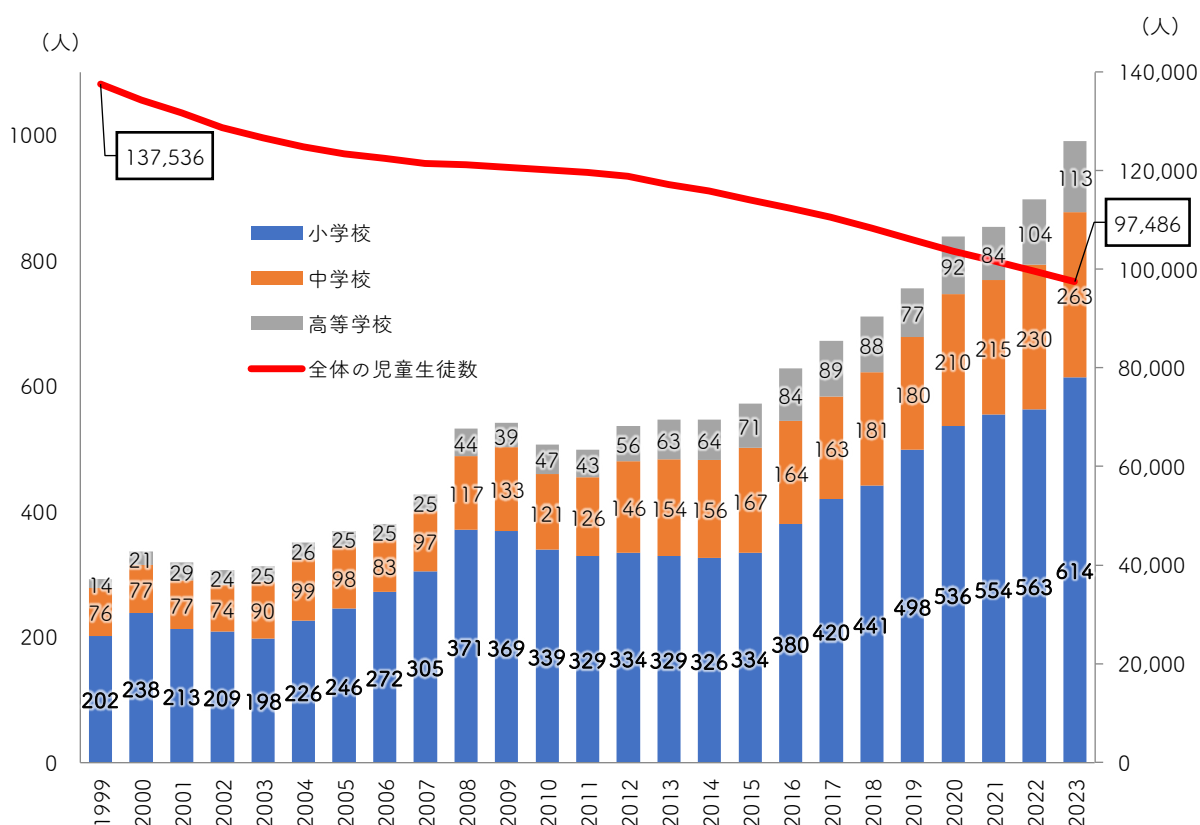
【参考文献】

- 総務省(2023)「統計トピックスNo.137我が国のこどもの数-「こどもの日」にちなんで - (「人口推計」から)」
<https://www.stat.go.jp/data/jinsui/topics/topi1370.html> (最終閲覧日：2023年12月22日)
- 富山県教育委員会小中学校課・経営管理部学術振興課(2023)「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要(県内国公立学校分)」について」
<https://www.pref.toyama.jp/3002/20231003monkoukouhyour4.html> (最終閲覧日：2023年12月22日)
- 富山県経営管理部学術振興課高等教育振興係「富山県リカレント教育等産学官連携推進会議」
<https://www.pref.toyama.jp/1119/kurashi/kyouiku/gakkou/keikaku/kj00020756/index.html>(最終閲覧日：2023年12月22日)
- 富山県生活環境文化部国際課「富山県外国人材活躍・多文化共生推進プラン」
<https://www.pref.toyama.jp/1018/kurashi/kyousei/kokusai/kj00020882.html> (最終閲覧日：2023年12月22日)
- 富山県知事政策局広報・ブランディング推進室広報課「令和5年度県政世論調査結果(概要)」
<https://www.pref.toyama.jp/1021/kensei/kenseisanka/kenseisanka/kj00001700/yoron-gaiyou2023.html> (最終閲覧日：2023年12月22日)
- 文部科学省(2023)「第4期教育振興基本計画(令和5年6月16日閣議決定)」
https://www.mext.go.jp/a_menu/keikaku/index.htm (最終閲覧日：2023年12月22日)
- 文部科学省「学校基本調査」(平成11年度～令和5年度)

2.富山県の現状

富山県は、外国人散在地域¹と呼ばれる北陸3県の中では比較的外国人住民が多い県である。2024年1月現在で101カ国・地域21,917人、総人口比2.2%と過去最多を更新し、「在留外国人統計」調査が始まった2012年の13,646人から61%増加している(富山県国際課, 2024)。

富山県内の外国人児童生徒数の推移にもそれは表れている(図表2-1)。文部科学省「令和5年度 学校基本調査」によると、富山県の外国人児童生徒数は、小中高と義務教育学校・特別支援学校を合わせて1,005人であるが²、1章でも述べたとおり、この約20年間で富山県内に在籍する小学生・中学生・高校生数は約3倍となっており、折れ線グラフで示した県全体の児童生徒数が減少の一途を辿っているのと対照的である。



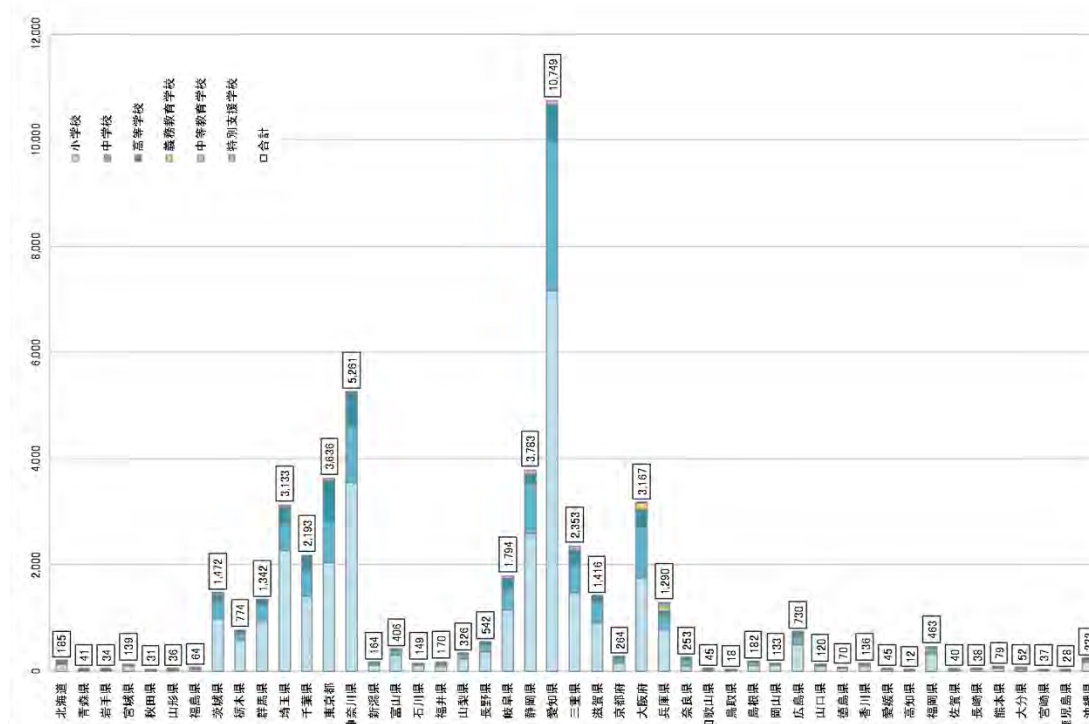
図表 2-1 富山県内の外国人児童生徒数の推移

※文部科学省「学校基本調査」を基に作成。左軸は外国人児童生徒数、右軸は全体の児童生徒数を示す。

¹ 中川他(2015)は外国人散在地域の目安を人口に占める在留外国人の割合が1%未満としている。富山県の数字は中川らの基準値を超えているが、後述するように、多くの学校には日本語指導が必要な児童生徒がいない、もしくは少なく、教育支援を考える際には外国人散在地域であるとの前提で議論を進めるのが適当であると考えられる。

² この数字には不就学の子どもや、高校に進学できなかった、あるいは中退してしまった子どもの数は含まれていないことに注意する必要がある。

しかし、外国人の子どもが増えていると言っても、絶対数は東海や関東等のいわゆる外国人集住地域と呼ばれる都府県に比較して桁違いに少ない。図表2-2は、文部科学省(2022a)「令和3年度 日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査結果の概要(概要版)」に掲載されている都道府県別の日本語指導が必要な外国籍の児童生徒数であるが、富山県は406人と近隣県の中では多い方とはいえ(石川県149人、福井県170人、新潟県164人)、東海や関東に比べれば少なく見える。なお、富山県の日本語指導が必要な外国籍の児童生徒406人を言語別に見ると、上位3位はポルトガル語132人、フィリピン語59人、中国語46人である。



図表 2-2 都道府県別 日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の在籍人数

※文部科学省(2022a)より引用

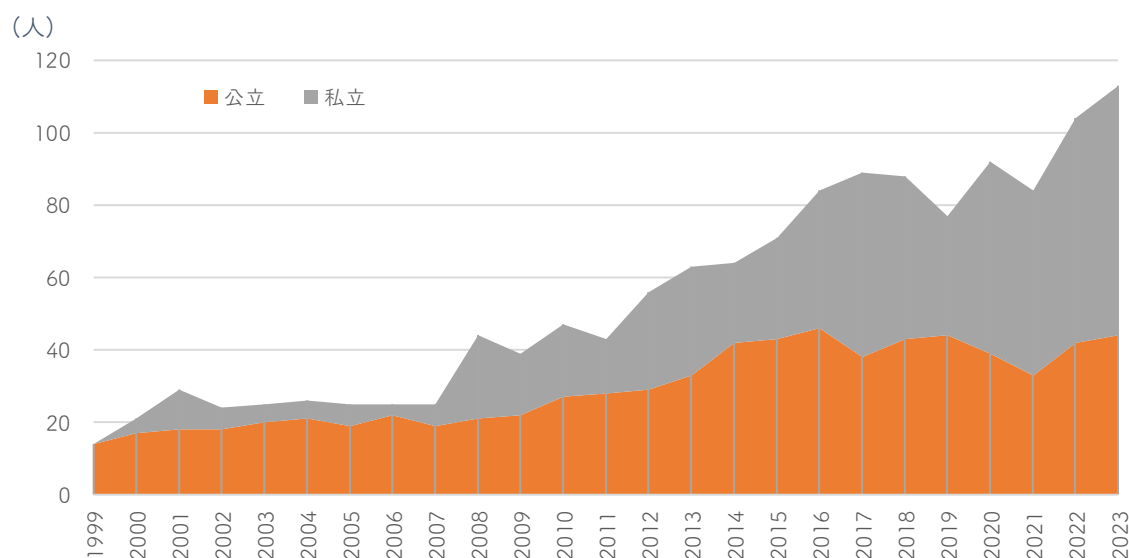
文部科学省「令和3年度 日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査」のデータをさらに詳しく見ると、富山県内の65%の小中学校は日本語指導が必要な児童生徒の在籍数が0となっており、指導が必要な児童生徒が在籍する小中学校だけで見ても、要支援者は単純計算で1校あたり3～4人、学年に1人いるかないかといった程度である。そのため、彼らの存在自体が学校にとっては偶発的なものとして捉えられ、彼らへのサポートはシステムティックに取り組まなければならない課題としては認識されにくい状況にある。

また、図表2-1に視線を戻すと、外国人小中学生に比べて、外国人高校生の数が極端に少ないことが分かる。2020年時点での富山県の外国人中学生は210人であるのに対し、2023年の外国人高校生は113人に半減する。日本語指導が必要な生徒数に至っては、2018年の中学生が95人であるのに対し、2021年の高校生は5人に激減する(文部科学省, 2020; 同左, 2022b)。

日本全国の日本語指導が必要な中学生等の進路状況については、文部科学省(2022a)において、全中学生等が進学率99.2%なのに対し、日本語指導が必要な中学生等は89.9%と10ポイント近く低いこと、進学も就職もしていない者の率は全中学生等が0.6%なのに対し、日本語指

導が必要な中学生等は5.0%と8.3倍になっていることが指摘されている。富山県のための日本語指導が必要な中学生等の進学率を示したデータは得られていないが、上記の中学生から高校生への激減状況を見ると、富山県の日本語指導が必要な中学生の進路状況は全国に比べてより深刻だと言えそうである。

次に、高校に進学できた生徒の進学先について見てみたい。まず、富山県内の高等学校の設置状況であるが、県立高校39校、私立高校10校の、合わせて49校があり(特別支援学校および国立高等専門学校を除く)、県立高校のうち6校が定時制・通信制課程を擁する。私立高校は全て全日制課程である。49校全て男女共学であり、インターナショナルスクール等やブラジル学校等民族学校は(高等部はおろか小中等部も)ない。富山県内の外国籍高校生数の推移を在籍校の学校設置者別(公立／私立)に分けて見てみると、図表2-3に示すように、その数は2008年以降増え続けているが、増加分のほとんどを私立高校が請け負っていることが分かる。先に富山県の外国人高校生は113人と述べたが、うち、県立高校に通う生徒が44人(約40%)、私立高校に通う生徒が69人(約60%)である(文部科学省, 2023)。全体の生徒数は公立高校が私立高校の3.5倍であるにもかかわらず³、外国籍生徒については私立高校に在籍する割合が高い。実際、定時制高校を含め県立高校進学への壁は厚く、日本語指導が必要な生徒の多くは県内の私立高校に進学している現状がある。



図表 2-3 富山県の学校設置者別外国籍高校生数

※文部科学省「学校基本調査」を基に筆者作成

³ 文部科学省(2023)によると、富山県の生徒数は公立高校が19,031人、私立高校が5,441人で合わせて24,472人、うち全日制課程(本科)の生徒数は23,597人、定時制課程(本科)の生徒数は876人である。県内高校の全日制本科の生徒数に占める私立高校の生徒数の割合は20%台である。

それでは、なぜ、富山県では外国にルーツを持つ子ども、とりわけ日本語指導が必要な生徒の県立高校進学者が少ないのであろうか。

まず、考えられるのが「入口が閉ざされている」可能性である。「入口」というのは端的に言えば高校入試のことであり、公立高校の入試制度は各自治体によって違いがある。図表2-4は北陸・甲信越6県の公立高校令和6年度入学者選抜における外国人生徒に対する特別枠・特別措置の設置状況をまとめたものである⁴。表中の○は「有り」、×は「無し」を表す。

	枠	条件年数	試験内容・設置校	措置	条件年数	試験内容
新潟県	○	海外2年以上 入国2年以内	全ての公立高校、定員外で若干名、数英・面接・作文	-	同左	※左記「海外帰国生徒等特別選抜」は一般選抜内において行われるため、特別措置として捉えることもできる。
富山県	×			○	6年以内	ルビ振り
石川県	○	3年未満	全日制7校・定時制6校、定員外で若干名、面接・作文	○	3年未満	ルビ振り
福井県	○	なし	全日制2校、定員内でそれぞれ20名・3名程度、英数(＋ルビ)・面接	○	海外2年以上 入国2年以内	国数英・面接
山梨県	○	海外2年以上 7年以内	全ての公立高校、定員外で各校学級数相当人数、国社数理英から自己選択した3教科・日本語面接(3校では自己選択した2教科・日本語または英語の面接)	×		
長野県	-	同右	※右記「特別配慮」では募集定員枠外での選抜が行われるため、特別枠として捉えることもできる。	○	3年以内	時間延長、ルビ振り、 数理英・作文・面接

図表 2-4 北陸・甲信越のR6年度高校入試における「措置」や「枠」の設置状況

図表2-4から分かるように、富山県では特別枠は設置されておらず⁵、特別措置はあるものの一般の入試問題の漢字にルビを振るという内容に止まっている。長野県も明示的な枠は設けられていないが、「特別配慮」と呼ばれる特別措置は、募集定員枠外で行われる選抜に適用され、内容もルビ振りだけでなく、試験時間の延長、受験科目減、面接・作文などを組み合わせ、日本語のハードルをできるだけ下げて生徒の持っている力を見極めようという工夫がな

⁴ 外国人生徒・中国帰国生徒等の高校入試を応援する有志の会(2023)(以下、「有志の会」とする)を参考にしているが、各県の令和6年度の入試実施要項を参考に青木がまとめ直しており、有志の会(2023)とは一部異なるところがある。

⁵ ただし、2023年12月22日に開催された「第4回県立高校教育振興検討会議」(富山県教育委員会)では、「外国人生徒に係る特別定員枠」の議題が設けられ、特別枠設置の検討が始まっている。

「資料4」<https://www.pref.toyama.jp/documents/37951/shiryo4.pdf>

「議事概要」<https://www.pref.toyama.jp/documents/37951/gijiroku4.pdf>

されている。

また、富山県の入試要項をよく読むと、特別措置の対象は外国籍の生徒に限られている。しかし、これでは日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒はこの特別措置を受けることができない⁶。特別枠や特別措置の対象の線引きを、富山県のように明示的に国籍でもって行うのは全国でも珍しいと言われる。一方、対象の線引き(条件)に関して特筆すべきは、福井県が特別枠の対象条件に滞日年数制限を設けていないということである。これは、これまでに多く指摘されてきた、日本語力の弱さや学業不振を抱える日本生まれ・育ちの外国ルーツの子どもたち(西川・青木, 2018等)に進学の道を拓くものであると言える。

さらに、特別枠をどのように(どの高校に)設置するかという点では、新潟県と山梨県が県内すべての公立高校において募集定員の外に枠を設置しており、注目に値する。これにより、日本語指導の必要性という一面的な基準によって進学可能な高校が極端に限定されてしまう(選ぶことができない)状況を回避しており、枠の設置によって日本語のハードルを下げつつ、生徒の本来の学力や興味・関心に合った学校選びができるようになっている。

なお、令和5年度入試までは石川県も富山県同様特別枠を持っていなかったが、令和6年度入試より全日制県立高校7校および定時制県立高校6校で特別枠を創設。学力検査を課さず、面接・作文のみで選抜を行うというものとなっている。学力検査の教科数を減らしたり漢字にルビを振ったりしたとしても、日本語による試験問題である以上は日本語力のフィルターを通した学力しか測れないという現実を踏まえての英断だと思われる。

このように、富山県での県立高校への進学は容易ではなく、結果として、比較的寛容に生徒を受け入れてくれる私立高校に外国ルーツの生徒・日本語指導が必要な生徒が集中することになる⁷。つまり、富山県における外国人高校生の私立高校への偏りは、高校生本人や保護者がいくつもある選択肢の中から積極的に選んで勝ち取った結果というよりは、選択肢がほとんどない中で選ばざるを得なかった、消極的選択の結果であると考えられる⁸。事実、2008年のリーマンショック時、外国人派遣労働者を中心として富山県でも吹き荒れた派遣切りの嵐が象徴しているように、不安定な経済状況にある外国人家庭は少なくない。家計を第一に考えるなら県立高校に進学することが望ましいであろうが、日本語指導が必要な生徒にとってはそれが可能な選択肢として与えられていないのが現状である。

ここまで、日本語指導が必要な生徒にとって非常に厳しい富山県の高校入試制度を見てきたが、この狭き門を突破して進学を果たした彼らは、入学後どのような支援を受けられるのであろうか。次の図表2-5は、有志の会(2023)の調査による公立高校入学後の支援の状況を示したものである。北陸・甲信越に加え、支援が充実していると思われる神奈川県・東京都(関東)および大阪府・奈良県(近畿)の情報も合わせて示す。

⁶ 文部科学省(2022)によると、令和3年度時点では富山県内の小中学校に在籍する日本国籍の日本語指導が必要な児童生徒の数は65名である。

⁷ しかし、私立高校入学においても、日常会話程度の日本語力は最低限求められる。2023年7月11日付の読売新聞では、中3の2学期に射水市の中学校に編入してきたウクライナ避難民の生徒が私立高校入試で不合格になったことが報じられている。

⁸ 原・青木・齋藤(2023)では、散在地域である2つの県において「日本語指導が必要」な生徒受け入れが私立高校に偏っていることを踏まえ、その私立高校における受け入れ実態や課題について考察されている。

		支援の有 無・内容	補足事項
関東	東京都	A, B, D, E, G, H	D担当教員の加配は在京枠の8校、G外部支援者は在京枠の8校全体を「多文化共生スクールサポートセンター事業」としてNPOに委託、ABは在京枠校と日本語指導が必要な生徒が多数在籍する定時制高校、Eは、「外部人材予算」により、日本語指導が必要な生徒が在籍する高校に配置、Hは数校で実施。
	神奈川県	A, B, D, E, G, H, その他	在県外国人等特別募集を行っている高校(2022年度は16校)においては、上記の取組みのほぼすべてを実施。ただし、2校(横浜旭陵、高浜)ではAの日本語授業が行われていない。日本語指導が必要な生徒の在籍している高校(約10校)においては、取り組み内容は各高校によって異なる。
北陸・甲信越	新潟県	B, E	6校(全日制4校、定時制2校)
	富山県	その他	県立の定時制高校4校(新川みどり野高校、雄峰高校、志貴野高校、となみ野高校)【その他の施策】日本語の対話が難しい外国人生徒や保護者との面談等において利用する双方向通訳機を、1台ずつ配備している。
	石川県	E, その他	概ね5校程度で実施、【その他の施策】例えば、学校によっては外国語を話せる方に非常勤としてきて頂き、授業や補習などのサポートをしてもらっている。
	福井県	A, B, G	特別募集枠校2校および、定時制1校で実施。 ただし、Aは特別募集枠校1校と定時制1校で実施。
	山梨県	B, D, H	
	長野県	E	
近畿	大阪府	A, B, C, D, E, F, G, H	特別枠選抜実施校を含む日本語指導が必要な生徒が在籍する46校において、それぞれの状況に応じて実施している。
	奈良県	A, B, C, D, E, F, G, H, その他	10校【その他の施策】県教委による母語通訳者派遣事業【保護者懇談・家庭訪問・合格者説明会など】

【支援の内容】

- A.教育課程に位置づけられた日本語授業の実施
- B.教科学習において個別対応や習熟度別の授業を実施
- C.母語(継承語)保持のための授業の実施
- D.担当教員の加配
- E.日本語の授業などの講師や支援者の雇用
- F.母語(継承語)の支援のための講師や支援者の雇用
- G.その他外部支援者(コーディネーターなど)の雇用
- H.日本語指導が必要な生徒を対象としたキャリア教育(出口支援)

図表 2-5 都道府県別 高校入学後の支援の状況

※外国人生徒・中国帰国生徒等の高校入試を応援する有志の会(2023)より抜粋

図表2-5を見ると、富山県は高校入学の支援が「ある」とし、その内容として県内定時制高校4校に通訳機を1台ずつ配置していることを挙げている。しかし、少なくともこれは日本語指導が必要な生徒に対する「日本語指導」ではないことは明らかである。各校1台の通訳機の配置は、緊急時の生徒とのコミュニケーションや保護者会等での活用が予想されるが、一人ひとりの生徒の日々の学習活動の中にどう活かされているのかは検証されなければならない。

一方、全国的な動きとしては、2023年度から高等学校においても特別の教育課程による日本語指導の編成・実施が可能となった⁹。特別の教育課程による日本語指導とは、学校生活や

⁹ 東京学芸大学の文部科学省委託「高等学校における日本語指導体制整備事業」により、高校における日本語指導体制構築のための以下の資料が作成・公開されている。『高等学校における外国人生徒等の受入れの手引』 https://www2.u-gakugei.ac.jp/~knihongo/seika/upload/koko_nihongo_tebiki.pdf / 『高等学校の日本語指導・学習支援のためのガイドライン』 https://www2.u-gakugei.ac.jp/~knihongo/seika/upload/koko_nihongo_guideline.pdf

教科の学習に必要な日本語の指導を正規の授業として在籍学級以外の教室で行うもので、小中学校では2014年度から導入されている。高校においては特別の教育課程による日本語指導を21単位を超えない範囲で卒業単位数(74単位以上)に含めることができ、個別の指導目標・指導計画に基づいて実施されることから、個々の生徒の状況と日本語の能力に応じたきめ細やかな指導が授業時間内に受けられる等、メリットは大きく、全国の高校での運用が広がっている。しかし、2023年度において富山県内の高校で特別の教育課程による日本語指導が行われた実績はない。

このように、富山県は、狭き門をくぐり抜けて高校進学を果たしても、日本語指導を必要とする生徒は必要な支援が受けられていない可能性が高い。必要な支援が得られなければ、授業にもついていけず、脱落してしまうことになる。文部科学省(2022a)でも、全高校生等の中退率が1.0%なのに対し、日本語指導が必要な高校生等の中退率が5.5%と5.5倍に上がることが指摘されているが(図表2-6)、富山県は全国的に見て高校段階での支援体制の不整備が目立つことから、県内で高校に進学できた生徒たちの状況は、これよりも深刻であることが推測できる。

	中退率	進学率	非正規就職率	進学も就職もしていない者の率
日本語指導が必要な高校生等	5.5%	51.9%	39.0%	13.4%
全高校生等	1.0%	73.4%	3.3%	4.8%

図表 2-6 全国の日本語指導が必要な高校生等の進路状況

※文部科学省(2022a)より

すなわち、富山県では外国人児童生徒、特に日本語指導を必要とする生徒の多くが高校に進学できていない、または、進学できて中退してしまう、もしくは、日本語指導が必要であるにもかかわらずそれが認識されておらず、必要なサポートが受けられていない、よって中退につながっているという状況にあり、そのことが前述の外国籍生徒数や日本語指導が必要な生徒数の高校段階での激減につながっているということが言えよう。

また、図表2-6(文部科学省, 2022a)によると、全国の日本語指導が必要な高校生等の進路状況として、卒業後の上級学校への進学率は全高校生等が73.4%なのに対し、日本語指導が必要な高校生等は51.9%と20ポイント以上低く、就職した場合であっても非正規の職に就いている率が全高校生の3.3%に対し、日本語指導が必要な高校生等は39.0%と11.8倍にも上っており、さらに、卒業後に進学も就職もしていない者の率は全高校生が4.8%なのに対し、日本語指導が必要な高校生等は13.4%と2.8倍となっている。富山県のみデータは入手できていないが、先述の中退率と同様、富山県は支援体制の不備により、全国よりもさらに深刻な状況にあると考えられる。

もちろん、厳しい状況の中でも、富山県の高校を卒業した外国ルーツの生徒あるいは日本語指導が必要な生徒で進学・就職を果たしている者はいる。ただ、どのような高等教育機関や企業に進学・就職しているのかについてのデータはない。例えば、富山県で最大の学生数

を擁する富山大学には、学部生の出身高校所在地による地域別入学者数や留学生数が公表されているが、ここには日本の高校を卒業した外国ルーツの生徒は含まれない¹⁰。裏を返せば、富山大学は留学生の受け入れや入学後の支援については体制を整えていると考えられるが、日本の高校を卒業して進学しようとする外国ルーツの生徒や日本語指導が必要な生徒については、受け入れを想定していない・支援体制を整備していないと言えよう。全国では近年、宇都宮大学(国立)や東洋大学(私立)を筆頭に、日本の高校を卒業した外国ルーツの生徒を対象とする入試制度整備の動きが広まっているが(読売新聞オンライン, 2023.10.13付)、富山県内の大学においてこの流れをキャッチアップしようという動きは、今のところ見られない。

さらに富山県においては高等教育機関自体が少ないという点も指摘しておかなければならない。県内に設置されている大学は、総合大学である富山大学(国立)のほかは、工学部と看護学部を擁する富山県立大学、現代社会学部と子ども育成学部を擁する富山国際大学(私立)、単科大学である高岡法科大学(私立)のみである(ここでは短大や高等専門学校、大学院大学を除く)。大学数が5校以下にとどまる都道府県は、富山県のほか、和歌山県、愛媛県、高知県、大分県(5校)、徳島県、香川県(4校)、鳥取県(3校)、島根県、佐賀県(2校)の10県である。最も多い東京都の144校との開きは非常に大きい(富山県学術振興課, 2024; 文部科学省, 2023)。高校卒業後、もっと学びたいと思い、入試を突破する日本語力・学力を持つ生徒であっても、学びたいと思う内容を学べる高等教育機関が富山県になれば、県外に流出せざるを得ず、また、そのための経済力がなければ、進学自体を諦めなければならない。

以上、富山県における子ども・若者を対象とした教育機関について、主に外国にルーツを持つ子どもの目線から、いかに学び続けることが難しい状況にあるかを見てきた。4章では、このような厳しい状況下で学びの継続を望む(または望まない)富山県民の声を、質的・量的に可視化していく。

(NPO法人アレッセ高岡 理事長 青木由香)

【参考文献】

- 石川県教育委員会(2023)「令和6年度石川県公立高等学校入学者募集要綱」<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kyoiku/gakkou/senbatu/documents/r6youkou.pdf> (最終閲覧日: 2024年2月11日)
- 外国人生徒・中国帰国生徒等の高校入試を応援する有志の会(2023)「都道府県立高校における外国人生徒・中国帰国生徒等に対する2023年度高校入試の概要」https://www.kikokusha-center.or.jp/shien_joho/shingaku/kokonyushi/other/2022/2022houkokushoA4.pdf
- 富山県学術振興課(2024)「令和5年度富山県の高等教育機関」https://www.pref.toyama.jp/documents/35770/r5_ikkatu_kansei.pdf (最終閲覧日: 2024年2月11日)
- 富山県教育委員会(2023)「令和6年度富山県立高等学校入学者選抜実施要領」https://www.pref.toyama.jp/documents/37292/r6_youryou.pdf (最終閲覧日: 2024年2月11日)
- 富山県生活環境文化国際課多文化共生係(2024)「富山県内における外国人住民数について(令和6(2024)年1月1日現在)」(発表日: 2024年2月20日) https://www.pref.toyama.jp/1018/gaikokujin_juminsu/2024_1_1.ht

¹⁰ ただし、「地域別入学状況(学部学生)」の「その他」とされる9名には「高等学校卒業程度認定試験合格者」および「外国の学校等出身者」がカウントされており、これらは日本の高校卒業者ではない外国ルーツの学生(留学生以外)も含まれていることが推測される。

ml (最終閲覧日：2024年2月23日)

- 富山大学「地域別入学状況(学部学生)令和5年度」<https://www.u-toyama.ac.jp/outline/overview/statistics/regional/> (最終閲覧日：2024年2月23日)
- 富山大学「外国人留学生数 令和5年5月1日現在」<https://www.u-toyama.ac.jp/outline/overview/statistics/international/> (最終閲覧日：2024年2月11日)
- 中川祐治・足立祐子・内海由美子・土屋千尋・松岡洋子(2015)「外国人散在地域における『特別の教育課程』による日本語指導」『福島大学地域創造』第26巻第2号
- 長野県教育委員会(2023)「令和6年度長野県立高等学校入学選抜要綱」<https://www.pref.nagano.lg.jp/kyoiku/koko/saiyo-nyuushi/shiken/ko/r6/documents/r6yoko1.pdf> (最終閲覧日：2024年2月11日)
- 新潟県教育委員会・新潟市教育委員会(2023)「令和6年度 新潟県公立高等学校入学選抜要項」<https://www.pref.niigata.lg.jp/uploaded/attachment/381674.pdf> (最終閲覧日：2024年2月11日)
- 西川朋美・青木由香(2018)『日本で生まれ育つ外国人の子どもの日本語力の盲点—簡単な和語動詞での隠れたつまづき』ひつじ書房
- 原瑞穂・青木由香・齋藤ひろみ(2023)「散在地域における『日本語指導が必要』な高校生支援の課題」2023年度日本語教育学会秋季大会ポスター発表, 大会予稿集pp.278-273.
<https://www.nkg.or.jp/event/.assets/yokou-23autumn231016-1115.pdf>
- 福井県高校教育課(2024)「令和6年度 福井県立高等学校 入学選抜実施要項」https://www.pref.fukui.lg.jp/doc/koukou/nyugaku/r6youkou_d/fil/R6yoko.pdf (最終閲覧日：2024年2月11日)
- 文部科学省「学校基本調査」(平成11年度～令和4年度)
- 文部科学省(2023)「令和5年度 学校基本調査」(富山県経営管理部統計調査課「とやま統計ワールド 令和5年度学校基本調査報告書」https://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/ga_kihon/_rep5/index.html
- 文部科学省(2020)「平成30年度日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について(報告書)」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001128761&cycle=0>
- 文部科学省(2022a)「令和3年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果の概要(概要版)」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001159321&cycle=0>
- 文部科学省(2022b)「令和3年度 日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査結果について(報告書)」<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001159322&cycle=0> (最終閲覧日：2024年2月11日)
- 山梨県教育委員会(2023)「令和6年度山梨県公立校等学校山梨県立特別支援学校高等部入学選抜実施要項」<https://www.pref.yamanashi.jp/documents/84777/r6nyushiyokou.pdf> (最終閲覧日：2024年2月11日)

【新聞記事】

- 読売新聞 2023.7.11付「避難民 高校進学できず ウクライナ少年 行政の教育支援なく」(読売新聞オンライン 2023.7.15付「『高校で友達作りたかった』ウクライナ避難民の15歳、進学できず…行政の支援なく」<https://www.yomiuri.co.jp/national/20230712-OYT1T50223/>)
- 読売新聞オンライン 2023.10.13付「外国ルーツ生徒の大学進学を支援…書類・面接で選考し入学後に日本語指導、多様性が学生の刺激に」<https://www.yomiuri.co.jp/local/kansai/news/20231013-OYO1T50041/>

3.プロジェクト概要

2章で述べてきたように、富山県は外国にルーツを持つ青少年にとって「学びの選択肢がない(少ない)」外国人散在地域である。学びを求める外国ルーツ青少年がその学びを継続させていくためには、彼らに必要な選択肢を用意しなければならない。では、具体的にどのような選択肢が求められるのか。

本事業(2023年度「外国人散在地域における多様な学びの選択肢創造プロジェクト」(休眠預金活用事業：資金分配団体(公財)日本国際交流センター「外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業」採択事業)は、当地域に求められる学びの選択肢を用意するため、多様な県民に対するニーズ調査を行い、データを踏まえて提言を行うというものである。まず、外国ルーツ青少年にとっての学びの継続にどのような障害が存在しているのか、どのような学び方や学ぶ場を求めているのかを、質的・量的調査によって明らかにする。そして、具体的にどのような学びの選択肢が当地域に必要か・可能かを調査員が多様なステークホルダーとともに考える。さらに、調査の過程で浮かび上がってきた学びのニーズに応えるため、地域の学習支援教室の中に学びの場を作りつつ、その実践を通して、様々な選択肢について検証を行う。そして、その検証作業と外国人散在地域の特性を踏まえ、地域に必要で可能な学びの選択肢案を考察し、自治体等に対して提言する。

本事業のデザインにおいて重視したのは、このニーズ調査を「誰が」「誰に」行うのかという点である。

「誰が」調査を行うのか

アレッセ高岡では、2020年度より市民性教育(Citizenship Education)¹事業を進めている²。市民性教育事業をスタートさせたのは、2010年に地域における学習支援教室を始めてから約10年、日本語を母語とする日本人を前提とした授業やテスト・入試に「適応」することばかりを追い求めての「支援」を続けていても、外国ルーツ青少年が本来持っている能力や可能性は十分に引き出せず、活かすことができないと感じ、そこから脱却する必要があると考えたからである。当団体では「市民(Citizen)」を日本人も外国人も「地域にともに生きる全ての人々」と捉え、「市民性教育」の目的を「参加者の批判的思考やリテラシーを養い、地域の一員としての意識を高め、地域や世界の課題を自分ごととして捉えて解決策を探り、自分たちの思いや考えを発信して多くの人を巻き込みながら、多様な人々が共に地域の未来をつくる多文化共生実現のための社会変革へとつなげる」と設定し、各種講座やイベントを企画・実施してきた³。

外国ルーツ青少年にとって学びの選択肢が限られているという当地域の課題は、まさに当

¹ 「市民性教育」については、様々な捉え方・定義があるが、当団体ではオスラー&スターキー(2005, 2010)の「コスモポリタン・シティズンシップ教育」、UNESCO(2013)の“Global Citizenship Education”、名嶋義直編(2019)の「民主的シティズンシップ教育」に基づき、多様な地域住民同士の対話の場作りを重視した市民性教育事業を展開してきた。この取り組みが評価され、2022年度国際交流基金「地球市民賞」の受賞につながった。

² 休眠預金活用事業として採択された「CLD青少年のための市民性教育プログラム」(2020～2022年度、資金分配団体(公財)日本国際交流センター「外国ルーツ青少年未来創造事業(SYDRIS)」)がそのスタートとなっている。

³ 青木(2023)では、当団体が市民性教育事業を始めることになった問題意識とそこに至ったプロセスが詳しく述べられている。

地域に住む外国ルーツ青少年の「自分ごと」である。市民性教育の視座から見れば、この調査を実施する主体は地域に住む外国ルーツ青少年こそがまさに相応しい。外国ルーツ青少年からなる調査員が、「自分ごと」として、県内の学びの継続を阻む障害や学び方・学ぶ場に関する具体的なニーズ等を明らかにし、地域においてどのような学びの選択肢を公的・私的に提供していけるのか、多様なステークホルダーと共に考え、県や市町村に提言書を出す。その過程で様々な人々を巻き込み、つながること、そして、調査内容の検討や実施、そこで把握されたニーズへの対応、課題共有のためのイベントの企画・実施等、外国ルーツ青少年が中心となって考え、実行すること、これらの活動を通して、外国ルーツ青少年自身が学び、大きく成長することを期待している。すなわち、本事業は、調査・提言を実行する外国ルーツ青少年(調査員)を対象とした市民性教育でもある。

「誰に」調査を行うのか

当事者でもある外国ルーツ青少年が調査員を務めることで得られる大きなメリットとして、同じく外国ルーツ青少年を対象とした調査を行う場合の言語の壁を最小限に低くできるということがある。日本で学び続けることに困難を抱え、もっと学びたい・学び直したいというニーズを持つ外国ルーツ青少年は、日本語では十分に理解したり表現したりすることができない場合や、日本語での理解力・表現力に問題がなくても、対話の中で内省したり考えを深めたりそれを的確に表現したりするには、母語や母語と日本語のコードスイッチングまたはコードミキシングの方が容易である場合も往々にしてあると考えられる。また、言語だけでなく、ルーツとなる国や地域、宗教など、文化的バックグラウンドを共有していることで、相手が話す言葉の奥に隠れた感情や含意などを理解し、バックグラウンドを共有していない場合よりも深く話を掘り下げていけるのではないかと考えられる。そこで、本事業では、外国ルーツ調査員が外国ルーツ青少年にピアでインタビューを実施することとした。

一方、アンケート調査では、調査対象を外国ルーツ青少年に限定しない。つまり、調査対象は、(13歳以上の)全ての富山県民である。ここでの「富山県民」とは、日本国籍であろうと外国国籍であろうと無国籍であろうと、全ての富山県に在住する(または長く在住していた)人々である。今回なぜ調査対象を外国ルーツ青少年以外に広げるのかについては、散在地域で長年活動してきた当団体の問題意識が根底にある。これまで、外国ルーツ青少年の支援のあり方について心ある教員・教育委員会や政治家と課題を共有できたとしても、そこで提案されるのは、「散在している日本語が分からない外国人を一か所に集めて指導する」、すなわち、“いかに効率的に日本語を詰め込んでいくか”といった発想での対応ばかりであった。しかも、散在地域においてはその実現に必要な「数」(指導対象者の数、指導者の数、それを支える財政)を確保できないという理由から、議論が振り出しに戻るのを繰り返してきた。しかしながら、良かれと思ってなされるその提案は、本当に外国ルーツ青少年のニーズに合致しているのか、一度立ち止まって考える必要があると考える。

アレッセ高岡は、2010年より地域における学習支援教室を開始し、220人以上の外国ルーツ青少年に学習サポートを行ってきた。中には、外国ルーツ青少年のみを対象とした学習空間で、学校では得られない自分らしくいられる場をそこに見出す外国ルーツ青少年がいる一方で、「日本人の友人も連れて来ていいか」と、日本人とともに学ぶことを求める外国ルーツ青

少年もいた。学校で学びについても、当時日本語の取り出し指導を受けていたパキスタンルーツの生徒が「できれば同じ教室で同じ内容をみんなと一緒に学習できた方が、クラスメイトに質問できるし友達もできるしいい」と語るなど、「日本語ができないから」「(日本語での)勉強が分からないから」等という理由で周囲と切り離されることに対する外国ルーツ青少年の違和感や戸惑い、悲しみの声を何度も聞いてきた。一方、学校現場では、特別支援教育のニーズや不登校への対応ニーズの高まりから、その理解と実践の深化・体制整備が進みつつある。そこで何度も繰り返される「個に応じた指導」や「柔軟な対応」「インクルージョン」の発想は、日本語指導が必要な児童生徒への対応にも通底するものである。(先の「日本語が分からない外国人を一か所に集めて効率的に日本語を指導する」という考え方は、むしろこの方向性に逆行するものではないだろうか。)とすれば、日本語指導が必要だからといって、日本語母語話者である日本人青少年と外国ルーツ青少年を切り離して外国ルーツ青少年だけに特化した対応や場ばかりではなく、日本人青少年も外国ルーツ青少年もともに学ぶインクルーシブな教育のあり方をも考えていく必要があるだろう。現実問題、散在地域においては、「日本語が分からない外国人ばかりを一か所に集める」のは難しいのであり、散在するそれぞれの学校や地域でインクルーシブな学びの場を作っていくことの方が、現実的なのではないかと考える。以上のことを踏まえれば、本事業で実施する調査は、外国ルーツ青少年を主なターゲットとしつつも、日本人も含めた広い層を対象として調査を行い、その共通点と相違点を見極めながら、教育において外国ルーツ青少年に特化すべき点だけでなく、接点や重なりをも探っていくべきである。

以上のことを踏まえて設計された当プロジェクトの全体像は、図表3-1のとおりである。

事業設計：学びの選択肢創造のプロセス



図表3-1：本調査・提言事業の全体像

(NPO法人アレッセ高岡 理事長 青木由香)

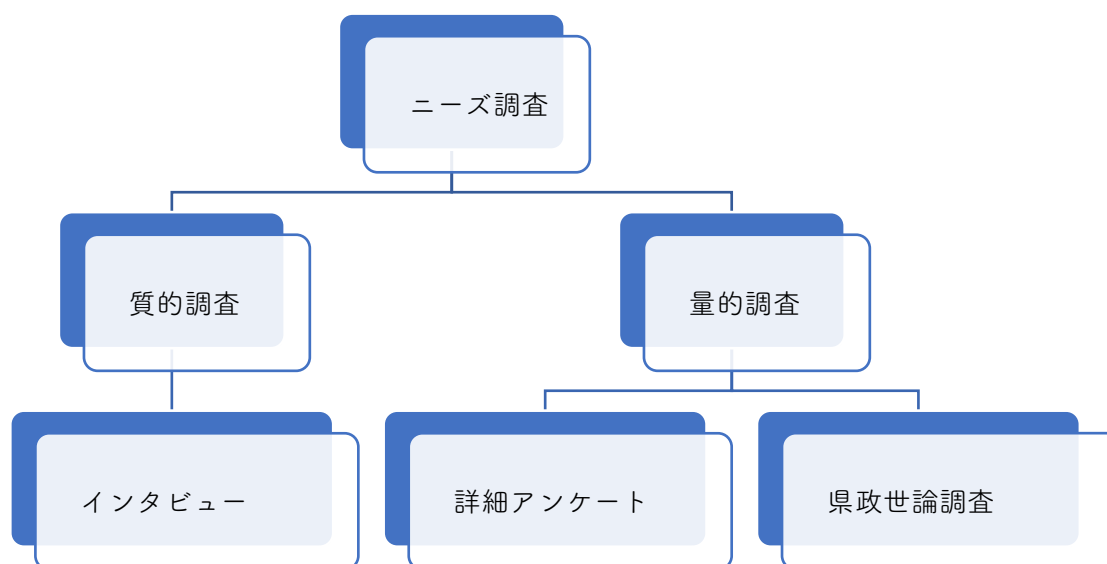
【参考文献】

- 青木由香(2023)「外国ルーツ青少年の声とライフコースー外国人散在地域で活動する市民団体の歩みからー」『子どもの日本語教育研究』第6号(子どもの日本語教育研究会) https://www.kodomo-no-nihongo.com/files/uploads/%E7%AC%AC6%E5%8F%B7_p40-63%E7%89%B9%E9%9B%86%E3%82%B1%E3%83%BC%E3%82%B94.pdf (最終閲覧日：2024年2月27日)
- 名嶋義直編(2019)『民主的シティズンシップの育て方』ひつじ書房
- Osler, A., & Starkey, H. (2005). *Changing Citizenship : Democracy and Inclusion in Education*. Maidenhead, UK : Open University Press. (オードリー・オスラー&ヒュー・スターキー著、清田夏代・関芽 訳(2009)『シティズンシップと教育 変容する世界と市民性』勁草書房)
- Osler, A., & Starkey, H. (2010). *Teachers and human rights education*. Stoke-on-Trent, UK : Trentham Books. (オードリー・オスラー&ヒュー・スターキー著、藤原孝章・北山夕華 監訳(2018)『教師と人権教育ー公正、多様性、グローバルな連帯のために』明石書店)
- UNESCO. (2013). Outcome document of the Technical Consultation on Global Citizenship Education: Global Citizenship Education : An Emerging Perspective. *Conference material of the Technical Consultation on Global Citizenship Education*, Seoul, 2013.
<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000224115> (最終閲覧日：2023年10月27日)

4. ニーズの把握

本プロジェクトにおけるニーズ調査は、図4-1のとおり量的調査と質的調査から構成されている。

量的調査では、外国にルーツを持つ青少年の取り巻く環境および外国ルーツの青少年と同じ学びのニーズを持つ人の存在を調査するため、13歳以上の全ての富山県民を対象に、アンケートを行った。質的調査は、富山県の小学校／中学校／高校で教育を受けた、もしくは、教育を受けようとした経験のある外国にルーツを持つ人々を対象に、外国にルーツを持つ調査員がインタビューを行ったものである。



図表 4-1 ニーズ調査の全体像

4.1.質的調査(インタビュー)

4.1.1.本インタビュー調査の特色

今回のインタビュー調査の最大の特徴は、ピアインタビューに取り組んだことにある。一般的に、インタビューとは、対象となる出来事について、よく知らないものが、よく知っているものに質問を投げかけることで、よく知らないものがよく知っているものから情報を聞き出すというものである。しかし、今回のインタビュー調査は、対象となる出来事について、ある程度お互いに知っている者どうしが向かい合い、質問し答えるという形で行われたものである。こうした場面で時々起きるのは、インタビュアとインタビュイーとの入れ代わりで、質問していたつもりだったのに、いつの間にか、インタビュイーから質問されて、インタビュアが答えているというやりとりである。ピアインタビューでは、こうした関係の逆転を繰り返すことで、インタビュアとインタビュイーは、今まで以上に、対象となる出来事をよく知るようになるし、さらにはお互いのことをよく知る関係へと変化する。

今回の調査は、外国ルーツの子どもや青年のニーズを拾い上げることが大きなねらいであり、この後のインタビューの分析にあるように、生の声で拾い上げられる「ニーズ」は、必要性の大きさが語りという形ではっきりと示されている。加えて、そのニーズは、お互いのニーズをよりわかる可能性の高いピアによって聞き取られたことによって、その切実さや辛さもともに拾い上げられてもいる。

ただし、ピアインタビューの醍醐味は、実はその先にある。それは、この報告書ができあがった後でも、かれらは同じニーズをもつものとして、つながる可能性をインタビュー調査を通してつかんだという点にある。つまり、インタビュアとインタビュイーとして出会っているわけだが、その入れ替わりを経験することによって、かれらは関係を深めることになり、その先の関係を結ぶことにつながっているからである。

外国ルーツの子どもや青年の声は、なかなか聞き取られることがないだけでなく、それぞれが切り離され、孤独や戸惑いや悲しみを内に秘める傾向にある。ピアインタビューには、そうした傾向に少しでも抗う要素が盛り込まれている。調査結果として文字にはならないけれども、かれらがつながっていく可能性に開かれた調査方法として、ピアインタビューはとても価値のある取り組みだと考える。それに取り組んだ本調査の意義が大きい。

(日本女子大学 教授 清水睦美)

4.1.3.インタビュー調査の概要

本インタビュー調査の対象者は、富山県で教育を受けた経験がある外国にルーツを持つ若者をスノーボーリング方式によって集めて行ったものである。インタビューは半構造化面接法を採用し、国籍、移動経路、出身家族の様子、宗教、母国とのつながり、在日同国人コミュニティの様子、学歴、仕事歴、経験、将来像などの情報を収集した。調査期間は2023年6月3日から2024年2月3日までで、13名のインタビューを行った。対象者のプロフィールは表1に示したとおりである。なお、本調査はピアインタビューを実施しているため、インタビュー情報も掲載している。また、滞日期间は累積の期間である。

対象者	性別	ルーツ	年齢	滞日期间 (計)	最終学歴	現職	インタビューの ルーツ(年齢)
A	女	パキスタン	24	24年	専門士	不動産	パキスタン(23)
B	男	フィリピン	23	22年	短期大学士	会社員	フィリピン(29)
C	男	パキスタン	18	18年	専門士	学生	パキスタン(23)
D	男	ブラジル	28	28年	中学校	工場	ブラジル(29)
E	女	ブラジル	27	13年	高等学校 (海外)	工場	ブラジル(29)
F	女	パキスタン	16	5年	中学校	学生	パキスタン(23)
G	女	パキスタン	25	10年	専門士 (海外)	中古車販売	パキスタン(22)
H	男	フィリピン	16	10年	中学校	学生	フィリピン(29)
I	女	ロシア	23	23年	学士	経理・貿易	ロシア(18)
J	女	フィリピン	17	17年	中学校	学生	中国(18)
K	女	ブラジル	18	4年	中学校 (海外)	工場	ブラジル(17)
Y	男	中国	21	7年	短期大学士	フリーター	中国(18)
Z	男	パキスタン	17	1年	中学校 (海外)	無職	イギリス(17)

図表 4-2 インタビュー対象者のプロフィール

4.1.4.インタビュー調査の結果

4.1.4.1.インタビューによって把握された外国ルーツのニーズ

前節で示したように、本インタビューには「お互いのことを知る」というピアインタビューの意義があるために、インタビューイから聞き取られた内容は多岐に渡るわけだが、その中から、日本社会に対するニーズとして把握できたものを、ここでは提示していきたい。

① 日本語に関するニーズ

日本語ができないことから、学校に入学できなかったことや友達ができなかったという声がある。学校での授業で内容が理解できなかったり、試験にもしっかりと取り組めなかったりと、日本語ができないことでの生きにくさと、日本語の習得における困難を抱えていたことがわかる。

言語学習を支援してくれる教育機関もないと、富山県教育環境への不満も窺える。

日本に来てからも諸事情で勉強を続けることができず、一番の理由は言葉の壁でした。日本で授業を受けるには日本語が非常に重要なので、日本語ができないから目標に近づけなくて満足できません。私はもっと勉強したいのですが、この点で外国人をしっかりとサポートしてくれるような教育機関がここにはありません。これ以上はいけないし、これから来る外国人のために日本語を簡単に学べる教育機関があるべきです。日本語ができないからといって彼らの夢が叶わないままにしてはなりません。

(Gさんのインタビューデータより)

インタビュアー：ここに外国人がたくさんいる場合、彼らが住みやすくするためには何をすべきだと思いますか？彼らをどのようにサポートできると思いますか？

Gさん：外国人をサポートできる最大のことは言葉だと思います。現地の人は物事について十分な情報を持っていないので、言葉の壁なく何でも簡単に情報を得ることができ、同時に情報を提供できる機関が必要だと思います。外国人にとって簡単な仕事をここに置くべきだと思います。そして、私はここに日本語だけでなくさまざまな言語のセンターがあるべきだと思います。他の国であるように、日本語だけでなく他の言語のセンターもあれば、私がやりたかったようなコースをやりたい人がいたら、アプローチしやすいと思います。

(Gさんのインタビューデータより)

ここでの私の経験は9～10年です。第一に、ここに語学学校があるべきです。外国人がそれほど難しく感じないように、日本語だけでなく英語もどこにでもあるべきです。

(Gさんのインタビューデータより)

語彙がかなり苦手で、少しは話せますが初級から中級に行くくらいですが、まだダメです。もっと頑張らないといけないと感じています。私は仕事をしているので、勉強する機会が減りました。学校にいたら、もっとたくさんのことを学んでいたと思います。しかし今は、この語彙の問題があります。私の発音は悪くない方だと思います。本当に発音が悪い人を見てきました。でも話せるようになるまではまだ時間がかかります。

(Kさんのインタビューデータより)

お母さんは私と弟の勉強のために日本に来ました。そして金銭的な問題も日本の学校通っていた時は、日本語が分からずテストはなんとなくで受けていました。日本語を読もうとしたけど、うまく読めず大変でした。参加が難しかった授業も多々ありました。それで成績表も結構やばかったです。

(Kさんのインタビューデータより)

大学行けなかったのは、日本語があまり上手ではなかったのが、勉強するのが少し大変でした。

(Yさんのインタビューデータより)

私は日本語を話せなかったのが、友達を作ることができませんでした。中学校ではあまり友達がいませんでした。当時は日本語も英語もあまり上手ではなかったのが、友達とコミュニケーションをとることができませんでした。

(Yさんのインタビューデータより)

インタビュアー：あなたの両親はあなたの様子に満足していると思いますか？

Fさん：勉強については心配しています。N3（日本語検定三級）を受からなければ、BIT（日本語コースがある専門学校）に入学もできないから。授業を理解するためにも日本語を学ぶ必要があります。(後略)

インタビュアー：家族で一番問題があるのは誰ですか？

Fさん：みんなそれぞれ問題があります。私は勉強だし、兄は初めの頃日本語ができないためパートでもどこにもつけないし、お父さんもビジネスで問題がありました。宗教上の理由から色々問題がありましたが、宗教上の問題より言語の問題が一番大きいです。母も言語に困難さを感じています。

(Fさんのインタビューデータより)

インタビュアー：あなたのご両親は、今あなたに満足していると思いますか？

Zさん：いいえ、言語の壁のせいで高校に通えておらず家にいて、時間を無駄にしているので少しピリピリしています。(日本に来て)2年経ちましたが何も得られていないので。その他は大丈夫です。

インタビュアー：あなたの両親は家族が日本に来て良かったと思っていますか？

Zさん：はい、そうですね。私達は日本がいい国だと思って、テクノロジーは日本が1番だと聞いてここに来ました。1番大きな問題は人々が日本語以外の言語を使わないことです。

(Zさんのインタビューデータより)

また、職場でのプレッシャーについても語られている。

ここはやっぱり日本だと思うから。日本人は幼い頃から社会のルールにさらされてきました。特に面接と就職活動の時にいくつかの言語について難しさを感じた。日本語はとても便利ですが、私たち外国人(中国人)にとって日本語は日本人に比べたら絶対に劣ると思いますので、プレッシャーは少し大きくなります。

(Yさんのインタビューデータより)

② 経済的支援に関するニーズ

次に、質的調査(インタビュー)から、出身地域に関係なく共通して課題となっていたのが、経済的な困窮である。

インタビュアー：中学校まで通ってたよね、なんで続かなかったですか？

Dさん：母がシングルマザーだから。子ども二人。家計を手伝うために、学校を休んで、母の仕事まで行って手伝っていました。それをみた母は「だめ、学校に行きなさい。私が何とかするから。」と言ってました。私は家の状況を見てみぬふりはできなかった。母のためだった。仮に学校に通い続けたとしても、出費だけが発生するので辞めました。仕事したかったです。母と一緒に長い間仕事しました。結婚した後は、すべてが変わりました。けど、学校が続かなかった理由がそれです。どうせ勉強は嫌いだったし。

(Dさんのインタビューデータより)

インタビュアー：今の親は、今のあなたの様子に満足していると思いますか？

Jさん：あんまりしてないと思います。

インタビュアー：じゃあ、なんでそう思いますか？

Jさん：すぐに働いてほしいと思ってると私は思います。

インタビュアー：それは家の経済的な問題があるからですか？

Jさん：そうですね。

(Jさんのインタビューデータより)

Jさん：やっぱり兄弟も結構ちっちゃい子たちが海外にいたりだとか、なのでお母さん1人だけじゃ足りません。その日本にいる家族の分も、もちろんお母さんの実家にいるフィリピンの家族の分も、全部お母さんが1人でお金を支えているから、その分が私に回ってくる。

インタビュアー：一番年上だから？

Jさん：そう、一番上だから。お母さんもう働けなくなるというか、夜の仕事だから年も年だし、続けられないっていうのもあるんですよね。だから、早く働いてほしいっていう気持ちもわかるけど、やっぱそんな大家族を支えるってなったら、それなりの稼ぎは必要

だし、ちゃんと大学は出たいって思っているからもう少し待ってほしいなとは思っているけど、
ってところですね。(中略)

Jさん：お母さんの弟は警察官になろうとしてるし、お母さんの妹は看護師になろうとして
る。それぞれ大学行ってるし、かつ、私の妹と弟も小学校通っている。もう1個の下から2
番目の子はもう今年卒業して中学生だから、色々、お金のやりとりはかかります。やっぱ
りお母さんだけじゃ、支えられるほどの稼ぎはそこで得られないから、学費とか諸々。

インタビュアー：お母さんは兄弟の中で一番上ですよ。

Jさん：そうです、だからその役割が私にそろそろ回ってくるんだなっていう。

(Jさんのインタビューデータより)

教育に関しての通訳サポートは不要だと思います。現在は通訳機もあるからです。でも経
済的なサポートはもっと欲しかったです。例えば、3年しか使わない学校の制服はとても
高いと思います。

(Kさんのインタビューデータより)

困窮を背景に、経済的支援制度の情報入手に関するニーズも多くあった。例えば、奨学
金制度の説明を入学時や卒業間近のような特別な機会時だけでなく、毎年説明会を開いて欲
しいという声や、説明会時だけでなく随時説明が聞けるようにして欲しいという声があがっ
ていた。

Bさん：家庭の事情で、やっぱそういう、制度みたいな、色々あるんですけど、そういうこ
とをこう、もうちょっと早く説明してくれる人がいたらなってのはありました。

インタビュアー：それは、奨学金？年金？

Bさん：奨学金も含めてなんですけど、やっぱ、親いないことによる、要は、国民年金、な
んか確か、遺族年金みたいな制度があるんですけど、割と漠然と請け負ったりとかはして
ましたけど、まあ、やっぱその当時後見人だった大家さんに任せて、よくわからなかった。

(Bさんのインタビューデータより)

Cさん：まあ、なんですかね、そこらへん、申し込もうとは家族内で相談したんですけど、
やっぱ、返せなくなるんじゃないかっていう心配が、どうしても残っちゃって親の方が、
それで、ほんと、行きたかったんですけど、でも、高校は本当にどこでもいいとは言っ
たんで。(中略)

Cさん：中学は、担任の先生から、自分から聞いて、そういう奨学金に関して、ちょっと
色々教えてくれたんですけど、やっぱ複雑で自分もその時全然わからなかったし、親もも
う全然分からなくて、難しいですね。やっぱそこに、なんか変なとこに引っかかってしま
うと怖いんで。(中略)

インタビュアー：奨学金の説明会行った時に親は、結構理解はできましたかね？

Cさん：そうですね、できましたね。でも、その機会は1回しかなくて、もうちょっと、2、

3回あった方が。その時も大体のことは詳しくってところまで説明されなかったんで、やっぱ、ある程度のことしか説明されなかったんで、もっとかみ砕いて説明はあった方が。

インタビュアー：親のわからないところを質問できる場も、そういう時間とか、そういう機会がもっとあった方がよかったかなって思いますか？

Cさん：思います。その時もなんか、集団でそれぞれ通訳の人がいてって感じだったんで、やっぱ個人でちょっと相談したいなっていうのもありました。

(Cさんのインタビューデータより)

加えて、英語やポルトガル語などの多言語での情報を提供して欲しいという声もあった。

インタビュアー：奨学金とかで、英語の説明とか、そういう書類とかがあったら、もっと自分の視野というか、進路としては広がったなとかっていう風には思いますか？

Cさん：思います。

インタビュアー：もし十分なお金があれば、今の学歴以上のものを望んだりはしましたか？その 当時、中学の頃とか。

Cさん：しましたね。やっぱり。

インタビュアー：やはり、奨学金の情報についてはあった方がよかったなって思いますか？

Cさん：あった方が本当によかったです。今も一応、給付型っていうので奨学金やってるんですけど。まあ、それでもちょっとやっぱり複雑で難しいところもありますしね。あとは、それをちょっと親にもやっぱ説明したいんで、そういう場があった方がいいです。

(Cさんのインタビューデータより)

このことから、学びに伴う経済的負担は大きく、金銭的サポートへの関心は高いこと、そして、経済的サポートに関する情報の得にくさや情報の不足を感じていることが分かった。また、奨学金だけでなく、年金制度など、学校では教えてくれない制度の詳細を知れる場や機会が欲しいという声もあった(B,C,G,I)。一方で、奨学金に関する情報があっても、書類が多すぎて、日本語が分からない保護者への説明に苦勞し、学校の事務の人に聞いたものの、自分一人では限界を感じていた人もいる(J)。

③ いじめ・差別の実態と、それに関するニーズ

質的調査(インタビュー)で多く語られたのは、周囲と髪や髭、肌の色や目の色、服装(ムスリム女性がするスカーフ)といった見た目や文化が違うことによるいじめ、日本語ができなかったり上手に使いえなかったりすることでの周りからの差別に関してである。

インタビュアー：いじめの理由はなんでしたか？

Aさん：うーん。まあ、私にも非があるのかもしれないけど…。

インタビュアー：やっぱりそういう見た目とか？

Aさん：だろうね。別に私、人に害与えるようなことなかったし。平穩に過ごしたい人だったから。
(Aさんのインタビューデータより)

Dさん：私が4年生まで通った最初の学校を転校して、その後別の小学校に行きましたが、その学校ではブラジル人が大嫌いでした。

インタビュアー：彼らは誰を憎んでいたのでしょうか？

Dさん：日本人は私を嫌ってました。理由は、私は日本人じゃないからです。軽いいじめはあったけど、殴られるほどではなかったです。でも一回だけ喧嘩して、私とその子の髪の毛を手に巻きつけたことがある、その後、みんなは私のこと怖くなった。日本人の友達はいませんでした。唯一友達だったのがボリビア人二人とブラジル人の女の子一人だった。

(Dさんのインタビューデータより)

私が通っていた小学校は、差別ありました。日本人とブラジル人を別々の教室になることがありました。他の学校ではそんなのなかったから、おかしいって思っていました。

(Eさんのインタビューデータより)

インタビュアー：学校で差別された経験はありましたか？

Jさん：あ、ありますね。全然。

インタビュアー：それは中学校の話ですか。

Jさん：中学と小学校。

インタビュアー：小学校の時はどんな差別をされましたか？

Jさん：親がフィリピン人っていうのもあって、多分フィリピンっていうのは貧しいから、なんかそういう汚いとかっていうイメージを持たれてて、そういう扱いをされてました。

(Jさんのインタビューデータより)

私は日本語を話せなかったので、友達を作ることができませんでした。

その後、何人かの子供たちが私にあだ名を付けました。それから彼らは私にあまり優しくなく、私をいじめました。

(Yさんのインタビューデータより)

インタビュアー：差別のこととか、人間関係のトラブルとかっていうのはどうでしょうか？

Cさん：一応ちょっとありましたね。なんかすごい複雑なんですけど。なんか、自分はやってないんだけど、イメージというか、見た目で偏見がすごくて。それで、やってないことをこいつがやりましたとか、いろんなことをなんか言われて、それで、ちょっと、その友達だった人ともなんか仲悪くなったりってのはありました。

(Cさんのインタビューデータより)

中には、周りの冷たい視線が気になるため、ロシア正教の女性が頭に被り物ができないという声や、いじめがあったわけではないが、壁を感じるという声もあった(1)。

1さん：うちの宗教では被り物をした方がいいっていうのはあるんやけど、ショールみたいな。それをなんかすごい気にしてない。時期は気にしないで、めっちゃ被るけど。なんか、お母さんとかは、あんまり被れないよね。その、イスラエルとか、お母さんに、常に被ってたんだけど、被りたくて被ってたって感じなんで、日本に来ると浮くから。あー、そういうファッションとか。イスラームほど、厳しくないから、自分の選択になるから。ま、ちょっと居心地悪かったらできんね。

インタビューー：うーん、確かにそう。

1さん：ま、東京とかやったらね。そんな、みんな人の格好とか誰も見てないから。

(1さんのインタビューデータより)

1さん：私は日本のそういう、自分の同い年の子たちと一緒にそうやって生活してきたけど、ずっと物足りなかった。(中略)日本人は、自分が壁を作ってたんか、向こうが壁を作ってたんかわからんけど、ずっとやっぱなんかこう違ってた。なんか、自分が完全にすごい親友とか、完全に信用しきってた子でも、どっかで変な行動したり、なんかあれ？みたいなことがすごい、特に、ちっちゃい時とか、そういうの気づかんやけど、大人になるにつれて、やっぱおかしかったよねとか、今になってそういうの考えたりするとか、自分なんだろうな、ロシア人的思考で、元々そういう思考で、でもそんなロシアに住んでなかったしね、なんかこう、接していたら、なんか急に冷たくなったりとか、急に離れたりとか、あと、みんなで仲良くしてたのに、私よりも他の日本人の友達の方が、なんか色々たくさん知ってて、私だけあんま知らなかったとか、私だけあんま心開いてなかったなとか、そういうのがたくさんあって、1人とかじゃなくて、そういう事例がたくさんあったから、それって、国、私が日本人じゃないの関係あるのかなと思って、元々日本がその外国人が、ロシアとカナダみたいにたくさんおって、なんかそういうの。(中略)

インタビューー：なんか日本がちょっと外国人怖がってるっていうか、壁作っとるのあるよね。

1さん：ほんとにそういう事例多すぎて、急に行動変わったとか。あの時、なんであの子、そのあと戻ったとしても、一時期変な行動してるとか、私は別に行動を変えてないけど、そのつもりだけかもしれないけど、そういうのがたくさんあって、だから完全に私でもその、理屈とかじゃなくて、結構、感情で動くタイプの人だから。(中略)

もっとそういう理屈で動く慎重な人やったら多分、もっと色々気づいてたと思うね。そういうので、もっと心開かなかったと思うんやけど。この、心開くことについて、結構あんまり理屈とか考えないで、感情で動くタイプなんやけど、結構、心開くとか、すぐみんなに、それで接するんやけど、向こうは多分こう、私ほど心開いてなかったり、やっぱ、日本人に対する扱いと違うから、温度差あるんやけど、私は気づかないみたいなすぐには、でもなんか後で気づいて「ん？」みたいな、なることが多かったと思う。それは、コミュニケーションにおいて、多分、難しいところやと思うね。なんかこう、仕事とかやったら、

仕事は仕事、また別の難しいコミュニケーションなところあると思うけど、友達っていう関係とかやったらそういうのがきつい気がする。

(Iさんのインタビューデータより)

インタビュアー：私も、多分〔個人名〕も結構ラッキーやったけど、たまにひどい話とか聞くもんね。

Iさん：なんだろうね、そうやな。私は基本的に、ハーフとかやったら違うかもしれんけど、完全なるロシア人やから日本に住んでることを割り切っとるというか。割り切るようになったのは社会人になってからかな。子供の時は、そんな多分考えてなかったけど、今はなんていうの。ロシア人やから。日本では、ただのお客さんみたいな。お客さんっていうか、よそ者みたいな感じやから。それは、割り切ってるから今はなんか結構楽やけど。子供の時なんて、そんなこと思わんしね。今はわかることでも、その時はわからなかったりとか。その子供の時に分かったらね、あれやけど。

インタビュアー：でも、ロシアとかカナダだったら、多分さそんな割り切らんくても、普通に生きてけるじゃん。日本だと、割り切ってる生きていかんのがちょっと、悲しくない？そういう環境っていうか。

Iさん：辛いと思うけど、自分の子供がここで育つとしたら私はそう言うかもしれん、子供の時から。

インタビュアー：そういう心得でおった方が、多分傷つく回数は少ないよね。

Iさん：ね。そうそうそう。

インタビュアー：なんか理不尽なことあっても、まだなんか説明つくっていうか。

Iさん：そうそう。完全なるお客さんというか、もう本当によそ者というか。感じたと思う。もう常にそれを感じてるし。それを割り切ってからそういうの感じるようになったけど。

(Iさんのインタビューデータより)

Iさん：なんか...〔個人名〕の話になるけど、私は本人あんま覚えてないんやけど、お母さんの話によると、私が小学生ぐらいの時かな、すごい〔個人名〕を羨ましがってた理由があって。それはお父さんが日本人ってことで、それがやっぱすごい私にとって大事やったみたい。なんかのハーフになりたかったんやろうね。ちょっとでも、こう日本を持てば、きっとなんかあったんやろうね、子供の頭の中で。親に、お母さんに言ってたみたい。他はお父さん日本人なんに、うちはなんで違うのって。

インタビュアー：どうしようもないけどね。

Iさん：そう。そういうのもあったみたい。多分それは関係すると思う。小学校ぐらい、ほんと最初の方やと思う。あと、髪を黒くしたかった時期はあった。それも多分関係する。それは中学校ぐらいかな。あと前髪とかも。日本人って前髪するやん、海外はあんま前髪せんけど、やっぱ日本社会におるから、外国人だからっていうのは必ずしも関係はしないのかもしれないけど、でも、ちょっとは関係すると、やっぱり日本人に近づこうみたいな、日本人っぽくしようとしたこと、あったかな。(中略)そういう日本人を真似るのも、中学

校の最後らへんかな、すごい減ったのが。英語のALTの先生とか来て、自分は英語得意な方やからさなんか、途中から別に日本じゃなくて、そういう外国人方面で行こうみたいな思考になってくんよ。そこらへんから、逆に外国人として目立っていかうみたいな頭がシフトチェンジしていくんやけど、それまでは、結構日本人っぽくしようとするのね。前髪とか、黒髪とか、なんか他にあったかな。

インタビュアー：高校入る頃くらいになって、ハーフのこととか、外国でなんか自分出してくよね。

Iさん：確かにそんな感じあるわ。

(Iさんのインタビューデータより)

他にも、言語が原因でいじめに発展したケースや嫌がらせを受けたりと嫌な思いをしたケースはある(Y)。「小中では差別があった」「小さい頃は『顔が違う』』というのがいじめの理由で大きかった」「仲間はずれにされて辛かった」「エスカレータ式で周りに他の学校がなかったため、小学校から中学校に進学しても周りの人は変わらないため、いじめなどは続いた」と辛い思いを語ってくれていた。

以上のように、異質性を理由とするいじめや差別は常態化していて、それを避けるために、外国ルーツの若者が様々な工夫をしながら生活していることが分かる。そのことを通して、自分の文化や個性を捨ててしまっている現状があることが分かる。

加えて、とても残念に思うのは、こうしたいじめを学校では先生が丁寧に対応してくれなかったという語りが多く聞かれたことである。学校でのいじめに対する担任の対応の問題について、次のように語られている。

Aさん：[個人名・妹2]の6年の先生に関しては、もう先生がそういうの続きすぎてもうね、諦めてるのかわかんないけど、しっかりとした対応はしてなかったと思う。だって、そもそも[個人名・妹2]に対して態度があんまりよろしくなかったっていうかね、露骨に出てたって聞くし。(後略)

インタビュアー：妹さんが学校を変えたいと言っていた時に、変えてあげようと思いましたが？

Aさん：一回ほんとに思ったことはある。でもちょっとね、妹本人も成長するにつれて、そういうね、先生がなんか別に、しっかり対応してくれてないっていうことに対して、「もういいよ、あの先生、そういう感じやから」とか「もう期待してないから」って言うようになって、まあ、もう嫌やけどもういいよって。ここで、別の学校行きたいけど、そこでもうまくできるかどうかもわからんし、もう6年だからね、中学校に行けば、行くまでの辛抱やから、この先生に関しては、ほぼ諦めとったっていうか、もう、そこを耐えとった感じやね。悪い意味で、耐性がついてしまったっていうか、いろんなことに関しては、諦めとる感じはあったね。その、子どもが嫌がらせしてくるとか傷つけてくるとか、そういうことに関しても、もうそういうやつやから何言っても意味ないよってなった。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：偏見で、決めつけで、やってないことをやったと言われ、嫌な思いをしたと。やはり、こういう差別であったり、そういう人間関係のトラブルであったりとか、自分自身でちょっと入れ違いがあったりとかっていうのも大きいと思うんですが、今の話を聞いていた場合、ルーツを持つことによってのこともあると思うので、やはりそういう面で、子供の頃から、理解をしていただける環境が学校内であった方がいいですね。

Cさん：特に、生徒だけじゃなくて、やっぱ、先生も理解した方が、助け、その、中学の時のそのことも、一応先生には話したんですけど、なかなか対応してくれませんでしたね。

(Cさんのインタビューデータより)

インタビュアー：その時ちょっと差別というか、いじめられてたんですけど、先生が助けてくれました？

Jさん：助けてくれるというか、話は聞くだけ聞いて差別に対して行動に移してくれることはなかったですね。

(Jさんのインタビューデータより)

さらには、学校の先生からの差別を感じていたという声もあった。

Aさん：いじめとかかな、〔個人名・妹2〕に関しては。まあ、小学校の特に4年生あたりからかな。わかんないけどね、ちょっと子どもたちも元気盛んになってきて、ちょっと偶然、やんちゃな子たちがいっぱいな学年になっちゃったから、〔個人名・妹1〕も。で、それで結構いじめられたりして、結構辛い思いをして、学校辞めたい、違う学校に行きたいと言ってたこともあったね。(中略)小6の時か、なんかね先生もねちょっと最悪したりするのがあって、なんかね、なんでだろうね、〔個人名・妹2〕にあからさまにきつい態度に取ってくる先生だったの、小6の先生は。で話を聞くには、人と違う人がどうこうみたいな、なんか古臭い考えの人なんかな。でもなんか、外国人はそもそもなんか、いやみみたいな感じなんかな。それが、〔個人名・妹2〕には露骨に出てたらしい、その先生。

インタビュアー：それを見たことはあるの？

Aさん：私はないけど、〔個人名・妹1〕は感じてたらしい。〔個人名・妹2〕はちょっと意識しやすいから、大げさに考えてるのかなとも思ったけど、でもなんかちょっと、クラスメイトの子と話す機会が1回だけあった時に、あの先生はちょっと...みたいなのも聞いたし、姉である〔個人名〕の友達も、その先生にいい印象がなかったらしいのね、最悪するっていう噂を聞いてて。だからなんか、そうなんだろうなって。私がどうなってるんですかって、結局クラスメイトもいじめたりするから、そこらへん先生なんもしてないんですか。っていうのを聞きに行ったりしたけど、頑張ってますがみたいなこと言っとるけど、上っ面なんかな。とか思ったりもした。

インタビュアー：ちゃんと対応してくれてそんな感じはせんかった？

Aさん：正直、全く。そんなに私はもう期待してなかった。

(Aさんのインタビューデータより)

Iさん：差別で言ったら私は恵まれてたけど、1回だけそういう差別みたいなのがあって、中3。東京から富山に引っ越してきた時なんやけど、もう受験期で、その担任の先生が、私の人生でそんな嫌な扱いされたのはその時初めてで、私にだけめっちゃ怒ってたの、その人は、他の人が宿題を出さない感じでも、そっちにはなんか普通に優しいのに、私だけにめっちゃ怒るみたいなあったし、その診断相談とかも、あんま親身になってくれなかったし、私が受けて、受かった高校なんやけど、でもこういう話はよく聞くよね。絶対いけませんよって。もう完全にそれ、あなたは絶対いけないよみたいな感じで言われてて、そういう差別的なところかな。まあ、なんだろうね、これはほんとに、日本に外人があんまいなかったことなんかね。私はそれを経験したのがその時やったから、今まであったんかもしれん。他に、でも気づいてなかった。でも、その時はめっちゃ気づいたし、もう嫌だったし、その先生のことはもうずっと許せない。

インタビュアー：将来のことだからもっと考えてほしいんだ。戻ってきたばっかだからわからんじゃん。高校とかどうなるかとか。

Iさん：そう、その先生は、他の子たちの中学校の子たちにも何回も色々聞いたんやけど。みんなやっぱ好きなんよ。みんなめっちゃ好きで、『〇〇先生、〇〇先生』みたいな、『楽しかった。最高やった』みたいな感じなんやけど。私は完全にもう、トラウマというか、もう無理。もうマジで無理あの人って感じ。頑張ったけど、残り数ヶ月。

インタビュアー：そうなんや。みんなに嫌われたとかないよね。余計になんかショックにならん？自分だけこの人嫌いみたいな。自分だけこんなひどい扱いされた。

Iさん：そう。気持ち悪すぎ。

インタビュアー：うん、きついね。

(Iさんのインタビューデータより)

この語りでは、先生がいじめに対応してくれなかったことから、学校生活を楽しく友人と過ごすことができず、先生にも頼ることすらできない状態にあったことが分かる。担任の先生というのは、頼りにできる大きな存在であるべきであり、子どもにとって困りごとや相談事を気軽に相談できる相手であるべきだと考える。耐えるしかないという状況に追い込んでしまっている教育環境に大きな課題を感じる。

このように、教員や指導する支援者が適切に対応してくれないことで、さらに子どもたちが嫌な思いをしてしまっている現状がある。この嫌な思いや経験が、子どもの存在意義、つまり自分が大事にされていないと感じたり、ルーツがあることで消極的になったりと、希望を失ってしまうことにもつながる。周りとは違うからという理由で、子どもが個性や文化を捨ててしまっている状態であり、捨てざるをえない環境になってしまっていることに懸念を感じる。ルーツを知ることは自分の存在を受け入れることにも繋がる。ルーツを含めて自分という存在があるのであり、ルーツを無視することはできない。そのため、ルーツや文化について学び、知る機会を幼少期から得られることで互いに理解し合える関係になると考える。学校の教員や支援者は子どもたちが自分の意見を言えるような機会と雰囲気を作り、相談で

きる場を設けることが何より重要である。

また、次の語りは、仲良くしていた友人からある日突然距離を置かれ、関わらなくなってしまった事例であり、その原因がその日本人の友人の親からの影響があるのではないかと語っている。子どもの人間関係には教師だけでなく親も影響を及ぼしていることが分かる。

Iさん：私が1番小学校の時のことで悲しいのは、すごい楽しかったんやけど、私が勝手に1人すごい思い入れのある友達の女の子がいて、その子はご家庭が忙しいとかもあったと思うんやけど。今は仕事が忙しいと思うんやけど、私がこうあげてた愛と同じものをもらえてなかったっていうか。そこは、その子がそういうロシア人の壁を感じていたのか、そういうご家庭の方で、なんかそういうのがあったのか。あの子はロシア人やから、何があったんかわからんけど、その子とは、その子のこと1番好きなのに、いつも1番遊べていないっていう思い出しかなくて。私が卒業というか、引っ越す時も来てくれなかったし、一緒にみんなお別れするパーティーみたいなやつも来てなかったし、小学校の時もなんか遊ぶ時にその子いなかったとかあったし。なんかわからんけど、1番好きだった子なんやけど。1番ね。ていうのはある。

インタビュアー：悲しいね。

Iさん：それはそういうのがあったのかなってたまに思い出す。そういうやっぱあったんかなって親とかになんか言われてたんかな。わからん。

インタビュアー：でもなんかさ、小学生の頃ってめっちゃ親に左右されるもん。結構親なんか外国人怖いみたいも多いしね。

Iさん：そうそうそう。だからね。

(Iさんのインタビューデータより)

異文化や見た目の違いから生じるいじめや差別への対応は大きな課題であり、教員の知識・理解が重要であると同時に、いじめや差別を許さない学校全体としての方針や多様性に寛容で自由な雰囲気を作っていくこと、そして、家庭やコミュニティ、各種専門家と連携し、個々の事例に合わせた対応を、その都度ともに考えていくことが必要だと考えられる。

さらに、学校だけでなく企業でも、差別的な発言を受けるために働きたくても働けないと言う声がある。このような状況で、「周りの外国人の友人は、そのような思いをしてまで働かなければならないのが心苦しく思う」「受け入れてもらえないのが浮き彫りになっている」と語っていた(G)。

仕事とか面接とか、そういう方向に行くと話はちょっと変わってくるかもしれん。ただでさえ、一応外国にルーツ持っとるやん。人と違うやん。で、ここ富山で田舎やん。外国にルーツ持っとるってだけじゃなくて、イスラム教っていう宗教で、色々日本人とは違うところがある、プラス見た目もスカーフつけとって、人と違うじゃん。そういう辺りは今まで、今までっていうか就活の時に、相手側が色々入手してきて、そこらへん突っ込まれたことは必ずあった。今入ったところは、ありがたいことにそこまで嫌な突っ込み方されん

くて、受け入れてくれる体制だったから、本当にありがたいことに、受け入れてくれとるっていうのはあるんだけど、今まで落とされてきたその会社さんたちはもう、「え、その宗教って、こうせんなんいけんがですよ、ああせんなんいけんがですよ」とか、「え、外国人なんですか」とか「そのスカーフって取っちゃダメなんですか、取らなきゃいけない時とかどうするんですか」って、いや取らなきゃいけないとかないですって、私思いながら言ってたんだけど、そういうのをすごいネチネチ聞かれた記憶はある。ま、仕方ないけど。私もわかるからね。人と違う人がおったら、はたから見たら、「えっ、何この人」って、ちょっと身構えてしまうんだらうなってるのはわかるから、あれだけど、でもやっぱり、日本は民族として今までずっと貫いてきたから、私みたいにだいたい特殊な人は受け入れにくいやらうなっているのは感じる。特に田舎とか。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：宗教によって、差別を経験したという話でしたよね。就活をしてた時とか。

Aさん：今まで我慢できとったけど、まあ就活も言うて仕方ないなとは思ってたけど、それが続いてしんどくなったことはあった。

インタビュアー：そういう時、しんどくなって、誰かに相談とか、誰かに話したいと思うこととかもあったと思うんですけど、そういう時は誰に話してましたか？

Aさん：友達とか家族にも話したりはした。一応将来に関することだから、このまま働けんだら、家の収入…なんていうの。貢献できんって言たらちょっと違うけど、助けになってあげれんってのもあるから、働きたい、働かんなんのに働けんっていうのは辛かったなと思う。私、例えばデザインで求人とか来とる中で私はやっとして、正直その専門学校の中では、私結構出来とる方だったと思う、ちょっと自信過剰かもしれないけど、でも先生にも「それぐらいデザインできるなら大丈夫」って言われてきたし、面接で落としてきたところが、「デザインしっかりできてる、素晴らしい」ってすごい褒めてくれたの覚えとるん。でも落としたから、おいって思いながら。でも自分の実力を評価してくれとるんに、日本人と違う部分が障害。障害っていうか、壁になってしまとるっていうか。それが悔しかったなと思う。デザインできるんに、我ながらいい感じにやっとして、すごい褒められてきた方だから、その面接の方もいいですねって言とられたんに、外国人でイスラム教でとか、そういう見た目とか、そういうの色々言われて落とされていくのは辛かった。バイトでもそういうことが多かった。どっかのお店のスタッフとか、そういうのも行っただけで落とされた。まあ、さすがに接客で、こういう見た目はなっているのは私もわかったから、例えばスーパーの裏方とか、そういうのも私やろうと思って面接も受けた。でも、それも落とされたね。社員同士のあれなんかな、こういう人は嫌だとかかな。知らんけど。でも、理由もなんも教えてくれんだ。聞いたんに、何1つ教えてくれんだ。すごいしっかりしてますねとか褒めてくれるけど、なんかそれってみんなに褒めとるんかな？ダメでしっかりしてない人にも、しっかりしてますねって言うんかな。やっぱりそういうのがあると、どうしてもじゃあ、やっぱ見た目が違うからそうなの？って思っちゃうことも

あるね。

インタビュアー：ほんと、そうじゃないかもしれないけど、その理由を考えた時に、結局それなんかなって思ってしまうね。事実は知らんけど、そうなんだろうなって思ってしまうよね。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：それで、あなたにとって最悪の仕事は何ですか？

Kさん：嫌な仕事だとコンビニの店員かなと思います。

インタビュアー：外国人として、日本のコンビニエンスストアで働くときに戸惑ったことはありますか？

Kさん：もちろんありますよ。例えば、遅番のとき、変なことを言いたがる変な客が来ます。そして、怖がらせたりする人もいます。そのとき、非常に戸惑い、何をすべきか分からなくなります。

インタビュアー：では、職場で言語によって戸惑いを感じたことはありますか？

Kさん：たくさんありました。

(Yさんのインタビューデータより)

Iさん：今の仕事なんやけど。一般社員で、最初の方は電話対応とかしてたんやけど。電話がほんとに苦手で、まず自分の名前を言う時点で、それまでは綺麗な日本語で話してるから、相手は日本人だと思うやん。急にその、名前を言うってなった時に、もうすぐ変わるから、やっぱ日本人じゃないから変わるんよ。

インタビュアー：なんか変わってくださって言われる、態度が？

Iさん：その、態度には出さない人が多いんだけど、信用とかもすぐなくなるし、特に日本はさ、外国人は外国人であれだけど、女性はもう全然、信用ないというか、あ、女か。みたいな感じやから。それで、プラス外国人って言ったら、外国人のみたいな感じになるから、ほんとに嫌い。電話。

(Iさんのインタビューデータより)

日本に幼少期から住んでいて日本語が流暢な人は、これからも日本に住み続けたいと答えていた。しかし、日本の国籍を取得したいとは思っておらず、日本人にもなりたくないと答えていた(D)。学校だけでなく職場や地域全体で、同化を強いるのではなく、多様性に寛容になり、個性を尊重し、差別を許さない意識を醸成していく必要がある。

④ 頼りになる存在としての大人(教師)に対するニーズ

続いて検討したいのは、頼りになる大人の存在の大きさである。

本当に勉強したくなかったことです。ついていけないことがわかりました。そこには行きたくなかったし、勉強したくありませんでした。私のやりたいことは勉強じゃなかった。答えそんなに簡単じゃないです。仮に、あの外国人指導員の先生がもっと長くいてくれたら、もっと頑張ってたかもしれないです。

(Dさんのインタビューデータより)

また、中学校教師とのいい思い出があり中学時代の経験が良かったというインタビューーや、特別支援学校に通っていた人で当時の先生と最近ジンギスカンを一緒に食べたほどの仲だと答えてくれていたインタビューーもいた(B)。頼りになる教師として、高校などで「宗教儀式を理解してくれる先生」を例に挙げてくれた人もいた(C)。

周りとは違う文化や習慣を理解し受け入れようという姿勢を見せて行動に移してくれる教員が、子どもにとって「頼りになる先生」であり、その存在が困難を乗り越え、有意義な学校生活を送るために必要なのだと考える。

インタビュアー：こういったところを見て、この先生が頑張ってくれとるなって思ったこととか、具体的にありますか？

Aさん：まず、保護者会での話し方っていうか、しっかり受け止めてくれてるなっていう先生だって私も感じてたから。で、[個人名・妹2]とそれについて話すと、「まあそうだね、あの先生はすごい頑張ってくれとるけど、まあ、子どもたちが言うこと聞かんよね」みたいなこと言ってたから、なんか蔑ろにはされてないんだなっていうのはすごい感じた。しっかり、そのいじめる人、いじめられた[個人名・妹2]を、話し合いの場を設けて、そこでしっかり仲直りするまで、しっかり仲直りしようねっていうか。それ解決するかどうかは別としても、そういう場を設けてしっかりね、対応してたっていうのはある。

(Aさんのインタビューデータより)

私をたくさんサポートしてくれた先生の1人は、理解のある先生でした。彼女の名前は[個人名]先生で、私に長い間日本語を教えてくれました。(中略)彼女の教え方はとても違って、生徒のレベルに合わせて説明してくれました。例えば、生徒が先生に何かを話したとしても、大体の先生は生徒の言うことをきちんと理解してくれませんでした。彼女はすべてを理解し、とても興味を持ってくれました。単語も英語に訳す方法も日本語に訳す方法も理解していて、とても穏やかに愛情を持って説明してくれました。決して怒ったり、なぜできないのかとがっかりさせたりすることはありませんでした。とても簡単です。彼女はとても協力的で、とてもよく説明してくれたので、一緒に勉強するのがとても楽しかったです。

(Gさんのインタビューデータより)

他方で、頼りになる教師に関する質問に、「いない」と即答していたインタビューーもいたことを付け加えておきたい(A)。また、驚きの事例がある。5歳の時に日本に親子で来日し、日本の学校の入学が4月だとは知らず、学校の先生が家庭訪問して子どもの様子を見ていたが、コミュニケーションがうまく図れなかったことが要因で、その家族は日本の学校の入学が9月だと思い込んでいたケースである。インタビューーは、「通訳者の通訳がよくなかった」と答えていた。

さらに、親や友人の存在についての語りもある。

インタビューー：あなたの両親は勉強についてどうでしたか？勉強に対してとても厳しかったですか、それとも甘かったですか？

Gさん：いいえ、親は勉強に対してそこまで厳格ではなく、むしろ協力的でした。なぜなら、私たち子供たち全員が非常に責任ある態度で勉強に取り組んでいることを知っていたからです。それで、もし私たちが家庭教師や何かが必要な場合は、彼らは私たちを助けてくれました。彼らは私たちが成績を非常に気にしていることを知っていたので、それほど厳しくはなく、常に協力的な方法で私たちをサポートしてくれました。

(Gさんのインタビューデータより)

インタビューー：学校で困った時に助けてくれたのは誰ですか？

Iさん：学校で困った時。1番は親じゃね。(中略)私の親は、なんか不満なことあったら、すぐ校長とか保育園の園長とか。いつもそこにすぐ行くから、問題はすぐ解決してたの。すごい覚えてるのが、保育所の話やけど。すごい可愛がられてた子供やから、多分ちょっと保育所の先生に引っ張られただけで。多分ね、すぐちくったんやろうね。手を引っ張るの覚えとるんやけど、先生が私を引っ張るのがーって、私は行きたがらんみたいな、どういうシチュエーションだったか覚えてない。それを言ったんよ、親が園長先生に。そして次の日その人、その女の人が、私の膝について「ごめんね、そんなことはもうしないよ」みたいな感じで、その時、なんかすごかったよね。申し訳ないし、なんか嬉しいし。でもすごかったね、あれは。対応してくれるのがすごいよね。素晴らしい。対応してくれないところもあるだろうからね。

インタビューー：でも親もさ、すぐなんか助けてくれるん。頼りやすくなるよね。なんかあった時、言ったら助けてくれるんやってなるから。

Iさん：そう。ま、幸いそういう親だったから。もっと家庭状況難しい人とは親も精一杯だから、そういうのもできないところも多いと思う。そういう子は、いじめとかには遭いやすいやろうね。外国人で。

(Iさんのインタビューデータより)

インタビューー：学校で困った時に助けてくれたのは誰ですか？

Aさん：友達。

インタビューー：どんなことに困っている時に、どんな風に助けてくれましたか？

Aさん：差別を受けたり嫌な思いをした時に、それを忘れられるような居場所があったって
いうか。友達いたら、そういうのが気にならんかった。心のよりどころがあったかなっ
ていう意味では。たまに愚痴も聞いてくれるし。

(Aさんのインタビューデータより)

学校に限らず、生きていく上で頼りになる信頼できる人が一人でもいれば、心の支えにな
り、困難な時期を乗り越えられるという声もあった。教員はもちろん、友人関係、地域やコミ
ュニティ、家族・親族、カウンセラーや弁護士といった専門家、様々な方面に理解者や頼れる
人がいることが求められる。

一方、親に対しては遠慮して頼れないというケースもある。

インタビュアー：じゃ、あなたが問題を抱えたときに相談者として最も信頼できるのは誰
ですか？

Jさん：先生と友達。

インタビュアー：親とあんまり相談をしてない？

Jさん：そうですね。自分のことは自分でしなさいって基本そう言われてるんで、自分で解
決するようにと、言われます。

インタビュアー：そう言われているから、意識して親と相談しないことにしています？

Jさん：意識してというか、自分で解決できるなって思っちゃうから。自分で解決できる年
齢だし。

インタビュアー：自分で解決できないときもあると思いますが、そういう時も親じゃな
くて友達か先生と相談する感じですか？

Jさん：そうですね。

インタビュアー：それは、親に自分のことを自分で解決しなさいって言われたからですか？

Jさん：じゃなくて、普通に親には迷惑かけたくない。心配かけたくない。

(Jさんのインタビューデータより)

さらに、親が原因でストレスに感じていることや勉強について何も教えてもらえなかった
と語っている事例もある。

義理のお父さんはすぐに怒り出す人で、日本での生活に慣れるための努力もしなくて、す
ぐにストレスを感じてしまうので、それが私に大きな影響を与えていると思います。それ
が問題です。

(Kさんのインタビューデータより)

教育面では家族はとても適当で、幼い頃から誰も勉強について何も教えてくれませんでした。

(Yさんのインタビューデータより)

⑤ キャリア(アップ・チェンジ)に関わるニーズ

現在働いているインタビューーからは、キャリア(キャリアアップ・キャリアチェンジ)に関わるニーズの声があり、次のように語られている。

インタビューー：将来、仕事を変えるつもりはありますか？

Aさん：正直、結婚したらもう仕事しなくなると思うけど。でも、今のこの仕事を続けていくって段階だとしたら、確かに変えたいとは思う。今のやつ、ずっと続けたいとは正直思わない。

インタビューー：何ですか？

Aさん：やっぱりちょっとね、わかる人がおったらいいよなっていう。同じ外国にルーツがある人がおると、ちょっと頼もしいとか、心強いとかある。多少ね。今の会社、私以外全員もうバリバリの日本人だから、外国に全くルーツないから、そういう人がおる環境だとちょっと、お互いそういうところがあるから、そういう話聞いたりもして、切磋琢磨とかできるのかなとか思ったり。あと今、私デザインで入社しようとして、ことごとく落とされて、今デザインもやりながら総合職をやっとるから、その総合職が私全く合わんから、自分でも合わんと思っと思って。だから、デザインだけをなんかメインにした仕事がしたいなって思う。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビューー：たくさんの講座を受講されているとおっしゃっていましたが、その中の一つにライティング講座がありますが、これに関して何かやったことはありますか？

Gさん：はい、もちろん出版しましたし、将来も出版したいと思っています。パキスタンで何冊か本を出版していましたが、将来的にはここ日本でも出版したいと思っています。

インタビューー：もっと本を出版する予定はありますか？

Gさん：はい、もちろん日本でも本を出版したいので、現在日本語を勉強中です。

(Gさんのインタビューデータより)

インタビューー：現在はお父様の会社で働いていますが、将来的には別のところで働く予定はありますか？

Gさん：はい、将来的には自分のビジネスを始めるつもりで、今取り組んでいるのは神様の御心なので、ぜひ自分のビジネスを始めたいと思っています。

インタビューー：どのような事業をやりたいのか、もう少し詳しく教えてくださいませんか？

Gさん：はい、私はファッションデザインがとても好きで、今そのコースのいくつかを受講していて、パキスタン文化を普及するために良いブランドを立ち上げたいです。私はこれを日本でも促進するよう努力しています。パキスタンでもやります。

(Gさんのインタビューデータより)

Gさんにインタビューを行った調査員は、このGさんの語りに触発され、後述するようなムスリム女性が宗教的な理由から職場で働けない問題（cf. 4.1.4.2. ②パキスタンルーツの場合）を解決するために、ファッションビジネスを立ち上げたいと語っていた（2023年2月25日の事業反省会で）。

しかし、次のように、日本でのキャリアに関するステップアップについて困難を抱えている事例もある。

インタビュアー：今よりもステップアップすることを望んでいますか？

Aさん：多分キャリア的なことかな。わかんないけど、なんとも。いいえでもないけど、ステップアップできるならやりたいよ。例えば英語学ぶとか。学べる時間があるならもちろんって思うけど、まあ、ないことわかってるから。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：外国人は日本人より仕事を見つけるのが難しいと思う？

Aさん：うん、わかる。それは分かる。

インタビュアー：外国人は日本人と同じ仕事をしていても給料が安いと思う？昇進できない職業だってあるからね。外人だからってあんまり。

Aさん：そうね。私ハーフで、国籍日本だから、なんとも言えんけど確かに安いかな。給料上がりはせんのではない。そうなんだろうなってぐらい。外国人は昇進の機会は少ない、これはそう。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：外国人は日本人と同じ仕事をしていても給料が安いと思う。外国人は日本人に比べて昇進の機会が少ないと。

Iさん：あ、これもうね、事例ある。もうなんかすごい。なんかめっちゃできるロシア人女性が知り合いに居るんだけど、国籍どうしてたかな。日本にしてたかな。そこ大事だよな。正直覚えてないんだ。でもその人は、多分日本じゃない。ロシアのままなんやけど。めっちゃ仕事できるし、会社でも認められとるんやけど。なんかある日、もうごめんな。正直にこれ以上はあげられないみたいな感じで言われて、その、すごい認められて仕事できるんやけど、ごめんなこれ以上は無理だみたいな感じで言われて。もう現実だよな。東京なんだけど、それ。

(Iさんのインタビューデータより)

⑥ 新しい学びの場に関わるニーズ

富山県には学べる場の選択肢がないことが、次のように語られている。

インタビュアー：親と自分では、子どもへの教育方針は同じ？それとも違う？妹たちでもいいけど。

Aさん：自分にもし子どもができたなら、お母さんが2人に対してしてるのと、ちょっと違ってくると思う。ママに関しては、ちょっと。パパは日本人らしくみたいな感じでやってきてくれたけど、今もう外国人の人口も増えとるし、外国人にとってやりやすいような場所、インターナショナルスクールとかかな。そういうのも存在私もわかるし。ママは、パパのそのやり方を引き継いで、日本で日本人と同じようにやっていこうって、ママ思っとるかもしんないけど、私は合う人には合うだろうけど、合わん人には合わんと思っとるね。例えば、[個人名・妹2]とか。だからそういうのに、難しいけど、柔軟に対応できたらなと思ったり。半々だな。日本だけでは勉強させたくないなって思ったり。もっと、グローバルって言っちゃあれだけど、もっと幅広く学んでほしいなって思ったりする。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：あなた自身の状況に基づいて新しい選択肢を与えるとしたら、どの学位を学びたいですか、またどの学位を取得したいですか？

Yさん：大学卒業後、大学院試験を受けたいです。そうすれば、知識体系を豊かにすることができます。

インタビュアー：大学に行かなかった理由は何ですか？

Yさん：というのは、日本に来てから、日本語があまり上手ではなかったのが少し大変でした。

(中略)

Yさん：一番の問題は、自分に向いている、やりたい仕事が見つからないことです。

(Yさんのインタビューデータより)

インターナショナルスクールなど多様な文化と多様な個性を受け入れる様々な教育機関があれば、一人ひとりの興味・関心や適性に応じた学びの中で、自身に向いていることややりたいことが見つかり、その人の本来持っている力が社会で発揮されるのではないだろうか。

また、Gさんは日本もしくは富山県でデジタルマーケティングやファイナンスのコースを受講でしたいというが、検索しても全くヒットしないと困っている。ただし、実際には学びの場がないわけではなく、その情報が入手できていないのが現状である。

インタビュアー：あなたあるいはご主人は将来的に勉強を続ける予定はありますか？

Gさん：デジタルマーケティングやファイナンスのコースを受講するかもしれません。私はビジネスをやりたいと思うので、さらに勉強するか何かのコースを受講する時は、同じこ

とを行うと思います。

インタビュアー：これらのコースは日本またはパキスタンで受講しますか。

Gさん：日本でオンラインで受けるかもしれないです。

インタビュアー：日本にこれらのコースが利用できる教育機関がある場合、ここ日本でこれらのコースを受講しますか？

Gさん：はい、もちろん、ここにそのような教育機関があれば必ずやりますが、私たちもたくさんの検索と努力をしましたが、現在ここにはそのような教育機関はありません。このコースはオンラインで行うことを考えています。

(Gさんのインタビューデータより)

⑦ 職場における良好な人間関係に関するニーズ

職場において、自分の強みやこれまで身につけてきたことが正当に評価されないことを悩んでいる語りがある。

インタビュアー：現在の仕事に満足していますか？

Dさん：良くないと思う点、改善できる点はある。(中略)もう一つ悪い点は、約束したのに給料が決して上がらないこと、そして私の仕事を評価していないことだと思います。私はそう感じています。

(Dさんのインタビューデータより)

インタビュアー：仕事をする上で困っていることはなんですか？

Aさん：自分が浮いているんじゃないかっていうこと、たまにそういうのがあるのと、お客さんとか業者さんが来て、その人の対応とかすることもあるから、そういう時に、えっ、ってなったり、2度見されたり。あ、やっぱり私違うんだなって、なんか自覚する時はある。私がどう見えとるか私自身わかんないから、勝手に馴染んでるって思うけど、やっぱり私違うんだなっていうのを時たま気付かされる時はある。あと入社。入社早々の時は結構みんなに警戒されとったんかなって感じてた。

(Aさんのインタビューデータより)

日本語でのコミュニケーションで不自由はあったけど。なんか、やっぱ日本人は日本人と話したいのよ。だから、すごい、大学の時とかめっちゃ気にしてたんやけど。高校もそうやけど。もうそれで1回泣いたこともあるぐらいなんやけど。まあ、こんなこと言わない方がいいかな。超はずい。なんか、やっぱこう、数人おると、私のこと誰も見てくれんがね。みんな日本人の方見るん。なんか、それは、この間友達と話してたんやけど、日本人の子と。その子は、その、似たような経験をしたのは、ちょうど、社会人最初の方で、やっぱお客さんはこう、先輩の方を見るんだって。その、新人じゃなくて、その案件は、新

人の私の友達が担当してたから、なんか本当、やる気なくなるって言ってたな。その、私が担当してるんなら、そっちばっかでいいの。みたいな、自分でやってくれよ、みたいな。結局、それが、私がその、話す時に、みんな日本人の方見るから、やっぱ気にしてたんだ。今は結構。なんか、まあ、そもそも、もう話す場がないし、なんか自分がどっかそういうのすごい責任持つこととかもないから、別にそんな日本人の方見てても全然気にせんがやけど。昔はだからめっちゃそういうの気にしてたんで、なんか理由も多分あんまわかってなかったんだろね。なんか今になってなんか考えてみたら、まあ当たり前だし、なんか吹っ切れたけど。そんな時はなんかわかるんやけど、わからんみたいな状況やったから。ちょっと辛かったよね。

(Iさんのインタビューデータより)

日本人に合わせようと努力をして馴染もうと行動するが、馴染んでいると思っているのは結局本人だけであることを突きつけられる場面があったり、周りからやはり「外国人」であることを再認識させられるという事例がある。また、Iさんは、日本人は日本人相手の方が信頼感を持つと感じて人間関係に不安を抱えている。このように、評価や人間関係で悩みがあると答える者は、日本の職場で仕事上困難を感じる人が多いと考えられるが、そこに頼りにできる人がいないと、さらに困難を強く感じる事が推測される。職場はもちろん職場以外にも気軽に悩み事を話したり問題解決をサポートしてくれたりするような窓口を設けて欲しいと語る者もいた(C)。

インタビュアー：親のわからないところを質問できる場も、そういう時間とか、そういう機会がもっとあった方がよかったかなって思いますか？

Cさん：思います。その時もなんか、集団でそれぞれ通訳の人がいてって感じだったんで、やっぱ個人でちょっと相談したいなっていうのもありました。

(Cさんのインタビューデータより：再掲)

⑧ 親の理解を求めるニーズ

親の日本語習得が進まないことから、外国ルーツの子どもが代わりに書類を読まなければならなかったり、親の代わりに子どもがサインしたり、親が子どもに学校を休ませて役所に連れて行って通訳をさせたり、子どもが学校に行きたいと思っても親の手伝いをしなければならなかったりといった実態については、ヤングケアラーの問題としてよく知られている。子どもが親に頼られる側となっていることについては、本インタビューでも次のように語られていた。

インタビュアー：通訳に行かされたことがあります？よくありますか？

Jさん：よくあります。今も。市役所行く時とか、学校の書類の手続きとかしないといけな

い時とか。親は文字が書けないのと、あまり難しい言葉がわかんないっていうのもあって、その通訳だとか。自分が代わりに書いたりとか。

インタビュアー：自分と関係ないことでも行かされたことはよくありました？

Jさん：あ、全然あります。

インタビュアー：わざわざ学校休んで市役所とか行ったりすることもあります？

Jさん：ありますね。

インタビュアー：その時になんか困る時ってありますか？

Jさん：やっぱり学校休むってなったら、その日大事な授業とかあったりしたら、困るっちゃ困ります。

インタビュアー：そのような時は、そっちを優先したんですか？

Jさん：いや、今しないといけない書類がどれだけ大事かにもよります。例えば、お母さんのビザの延長だとか、そういうとても大事なことにに関しては全然学校休んでました。

(Jさんのインタビューデータより)

とても日本語が上手で、学校で一番仲のいい友達はブラジルの人です。他の友人から聞いた話ですが、その一番仲のいい友人は進学を考えているが両親が行かせようとしていないということを聞きました。

(Fさんのインタビューデータより)

また、親(保護者)の理解が進まないことなどから、第一志望の学校に通えなかったり、大学へは行かず専門学校や短期大学で終えたりしているケースもあった(A,B)。

⑨ 日本のルールや日本社会についてのニーズ

日本の独特なルールや参政権など社会に関することについても、次のように語られている。

インタビュアー：日本社会の習慣で1番煩わしいものはなんですか？うざいやつはなんですか？

Iさん：日本社会だろ。うざいと思うことは。やっぱ、しょうがないと思うねん。ずっと、日本人しかおらんかったから。慣れてないから。仕事を始めて気づいたんだけど、外国人に対する扱いは違うよね。仕事でも。ま、仕事の話じゃないか、これは。

インタビュアー：でも、全然、仕事ってか、日本に居っていいと思う。

Iさん：別に悪いことしようとしてないんだけど、なんかやっぱ信用はないし。しょうがないと思う。本当にこういうの。なんか、別に日本を全く責めてない。正直、なんかそういう、日本は日本を大事にして、日本人を大事にしてるのはめっちゃいいと思う。ロシアも今すごい、なんか海外のものみたいな感じやけど。全然そういうのやめて、ロシアの物とかもっと使ってほしいし、もっとそっちで発展してほしい。日本は日本でそういうのめっ

ちがいいと思うねん。だけど、やっぱ、そういう場面になると気になるよね、みたいな。慣れてるけど、結構、わかつとるけど。

インタビュアー：でも、悲しいよね。

(Iさんのインタビューデータより)

これが習慣かどうかは分かりませんが、多くの日本人はルールを作ります。たくさんのルール、そしてそれらの中には役に立たないものもあります。日本人でさえルールについて文句を言いますが、それでも彼らは従わなければなりません。なぜなら、彼らはそれを行う方法が1つしかないと考えているからです。

(Kさんのインタビューデータより)

日本社会には私が気に入らないルールがいくつかあります。

(Yさんのインタビューデータより)

インタビュアー：外国人にも選挙権があるべきだと思いますか。

Kさん：私はそう思います。その人がここに住んでいるのなら、ここに住むと決めているのなら、選挙権を与えるべきです。

(Kさんのインタビューより)

インタビュアー：外国人は日本でも選挙できる権利を持った方がいいと思うか。

Bさん：一応、永住権を持ってちゃんとしとれば、むしろいいんじゃないですか。外国の目線から人を選んで。

(Bさんのインタビューより)

(日本で)外国人に選挙権が与えられ、(外国人の)投票が増えれば、彼ら(外国人)は日本に行き、誰でも(自分にとって都合のいい人を)リーダーに選ぶことができます。

(Yさんのインタビューデータより)

日本にはルールが多いことや意味のないルールが設けられていることについて、日本人自身も理解していない上に不満を言っているのが、理解し難いと語られている。また、日本で外国人の参政権が認められていないことについては、賛否両論ある。Yさんは、日本人のマインドがグローバル的でないために閉鎖的になってしまっていることが指摘できる一方で、日本人同士が関係性を重視して警戒心を強く持つのは悪いことではなく、尊敬すべきことであり、伝統を壊さないような姿勢は見習うべきであると語っている。しかし、受け入れてほしいという気持ちもあるという。

4.1.4.2. ルーツによるニーズの特徴

インタビュー調査では、部分的ではあるが、出身地域別の課題も窺えた。ここではフィリピンルーツ、パキスタンルーツ、ブラジルルーツ、ロシアルーツについて概観する。

① フィリピンルーツの場合

フィリピンルーツの場合の特徴として、家族関係の複雑さが挙げられる。その複雑さは個々のケースで異なるが、「お父さんが多い」「複雑な家族関係」「日本とフィリピンの頻繁な行き来」「親戚の宗教に取り込まれる」「父母が喧嘩」といったことが調査員との間で多く語られ、家族のあり方やサポート、家庭における子どもの状況などは、固定的な家族像を当てはめて考えてはいけないことがわかる。典型的な声としては、次のような語りがあった。

インタビュアー：お母さんが〔個人名〕ね。お父さんのこと聞いてもいい？やだ？

Hさん：大丈夫。お父さんの名前分かりません。

インタビュアー：あ、名前は大丈夫。ありがとう。そしたらお父さんは日本に来たの？

Hさん：来てません。ずっとフィリピン。

インタビュアー：もしかして、うちもそうだけど、別れた？お父さんとお母さん。いつ？

Hさん：はい。いつかは分かりません。

インタビュアー：あー、分からないんだ。そうなんだ。じゃあ子供の時だ。うちもそう。私も2歳の時、お父さんとお母さん別れた。じゃあなんか赤ちゃんの時この辺。じゃあ一緒に住んでない？

Hさん：はい。

インタビュアー：なるほど。じゃあお父さんもわからんね。お父さんフィリピン人ね。(中略)大阪の時はお母さんのハズバンド。そのハズバンド日本人？

Hさん：はい。

インタビュアー：大変だったね。理解理解。あー、それで富山に来たのお母さん。で、〔個人名〕(Hさん)と弟がフィリピンから来た。

Hさん：でも、あ、お母さん、ここ1人で住んでんの日本に。この時6歳。

インタビュアー：〔個人名〕(Hさん)が6歳から15歳の時、フィリピンにいたよね。

Hさん：はい。

インタビュアー：お母さん日本にいたよね。お母さん。She lived alone?

Hさん：僕の弟のお父さん。

インタビュアー：待って待って。3人目のパパ。お父さん3人。

Hさん：僕のね、弟の。

インタビュアー：弟のお父さん。ブラジル人なの。すごいな。これちょっと確認していい。お母さん。最初アットファーストでしょ。フィリピン人の人と結婚して、次、日本人と結

婚して、次、ブラジル人と結婚した？

Hさん：あ、結婚じゃない。

インタビュアー：結婚じゃないのね。あー、了解了解。

Hさん：僕のお父さんは結婚して、このお父さん結婚してる。フィリピン人じゃないの。お父さん。

インタビュアー：あなたのお父さん、フィリピン人じゃない？

Hさん：フィリピン人です。えっと、僕のお父さんは、お母さんは結婚してない。

インタビュアー：そういうことね。最初ね。日本人と結婚したんだ。ブラジル人は結婚してない？

Hさん：はい、今は。

インタビュアー：ブラジル人のお父さんはどこにいるの？富山にいるの？

Hさん：はい。

インタビュアー：一緒に住んでる？あ、住んでないんだ。

Hさん：仕事。

インタビュアー：あ、仕事で富山にいるんだ。(後略)

いっぱいおるねお父さん。私もお父さん2人おる。ちなみにフィリピンのお父さんと日本人のお父さん。けどもうどっちも別れてる。だから今はお母さん1人。すごいな。色々あるね。

(Hさんのインタビューデータより)

インタビュアー：お父さんとお母さんどっちが日本人ですか？

Jさん：義理のお父さんが日本人ですね。(後略)

インタビュアー：さっき義理のお父さんのお話をしたけど、今のお父さんは？

Jさん：今のお父さんは、ブラジル人です。(後略)

インタビュアー：今、兄弟とか何人いますか？

Jさん：私含めて4人です。

インタビュアー：全部日本にいるんですか？

Jさん：いや、私と1個下は日本にいて、もう2人はフィリピンに、お母さんの実家のところにいます。

インタビュアー：この3人の兄弟は、日本とフィリピンのハーフ？

Jさん：じゃなくて、1個下は日本とフィリピンで、下から2番目の子は今のお父さんの子。ブラジルと日本のハーフ。あ、ブラジル、日本、フィリピン。今のお父さんがブラジルと日本のハーフだから。

インタビュアー：なるほど。じゃあ、今一緒に住んどる妹さんは〔個人名〕と同じ父と母で、もっと下の2人の子はブラジル人のお父さんの子供ってことですか？

Jさん：で、弟は別のお父さんの子供です。フィリピン人の父、一番下の子は。

インタビュアー：お母さんはいつの配偶者ですか。

Jさん：下から2番目の子が生まれて 3、4年経った後ぐらいの配偶者。一応、今のお父さんと別れたけど、また一緒に戻ったってこと。

インタビュアー：あーそういうこと、じゃ、離れてその間の配偶者と作った子供？

Jさん：その子供が一番下の弟。

インタビュアー：今のブラジル人のお父さんとお母さんは結婚している状態ですか？

Jさん：結婚はしてないです。事実婚。

インタビュアー：あー、はい。でも、一緒に住んでいます？

Jさん：一緒には住んでないです。お母さんは仕事で別の県で働いてるんで、お父さんと今の妹と3人暮らし。

(Jさんのインタビューデータより)

② パキスタンルーツの場合

パキスタンルーツの場合は、宗教を学校や職場に持ち込むことの難しさや、どのような対処方法があるかという話題で、調査員との話が広がっており、宗教に対する寛容な態度が学校や職場などの日本社会に求められていることが窺える。また、エスニック・コミュニティが大きいと、コミュニティ内での権力闘争による大人の人間関係が子どもたちの考え方や人間関係に影響していることが分かった。結果的にこのことが子どもの学習意欲やキャリアにも影響を及ぼしていることが推測される。一方で、コミュニティが居心地の良い場所となっていて、自分らしく生きられる場となっているという語りもある。このため、コミュニティという観点からのサポートも重要であると考えられる。

典型的な声としては、次のような語りがあった。

(問題の)二つ目は、仕事場での服装についてです。私自身も以前働いていて、同じ問題を経験している友人がたくさんいます。富山でイスラム教徒の女の子が仕事に採用されるのは非常に難しいです。なぜなら、スカーフを着用するからです。会社側に訴えたと、スカーフは制服の一部ではないので受け入れられないと言われます。イスラム教徒が増えてるので、女の子が働きたいけど制服の問題で働けないことが(会社側がルールを変えるなどして配慮して)減っていったらいいと思っています。

(Gさんのインタビューデータより)

もちろん文化や宗教が違えば、イスラム教徒の女の子の服装も違うので、しっかりと服を着ないといけないなど、意見の衝突もあります。私が入学した当初は学校からブルカを反対されて、それはその後よかったのですが、最も難しかったのが仕事に就くことでした。定められた制服のみ着ることを命じられたりと、私の友達の多くも、仕事が大変だと感じています。制服がよかったとしても、帽子をかぶってはどうか？と言われたりスカーフを取らなければならなかったりと問題があった。父の会社で働き始める前は、しばらく食品工場で働いていました。仕事を始める前に、ベーコンや豚肉には触れられないことを伝えたら、「大丈夫ですよ」と承認してくれたのですが、(その後)一緒にいた別の外国人

に、「(工場で作っている)弁当の中の食べ物に豚肉が入っている」と言われたんです。(私が事前をお願いしていたことが)重視されなかったので、そこで仕事を辞めました。豚肉を鶏肉だと言われたり、作業をスムーズにさせるために効率だけを考えていて嘘をつかれていたので、とてもがっかりして、父の会社に入社しました。そこまで嘘と言われるとは思ってもよらなかったです。

(Gさんのインタビューデータより)

インタビュアー：パキスタンコミュニティの人は、人の足の引っ張り合いみたいなものばかりしているという意見に同意しますか？

Aさん：引っ張り合いしてる場所はあるなとは思う。でも日本で暮らすって言う中では、日本ではこうした方がいいみたいなことは、一応、お互い情報の共有はしてるなとは思う。例えば、宗教上これはダメだよっていうのを、噂でも流れてきたりするわけだし、ダメだよっていうのをお互い言い合ったり、そこらへんは助け合ってるなとは思う。ただ、私も本当に関わり少ないからそういう一面があるなって思うので言うと、ここで働く、稼ぎを得るっていうことに関しては、もうちょっと助け合ってもいいんじゃない？って思ったりもする。足引っ張り合ったり、あまり健全ではない競い合いがある気がする。奪い合うっていうまでじゃないけどね。相手より上へ上へっていう、ちょっと醜いって思ったりする、そういうのは。人によっちゃ、嘘をついたりズルをしたりする人もいたりね、仕事で。男の人たちでだったり、しっかり稼いでる人同士協力するかと思ったら、その協力してたうちの1人が裏切ったりとか。そういうのがあったりはするなと思う。働くことに関してとか、収入、稼ぎに関しては、足引っ張り合ってる場所も結構見える気がする。生活に関しては、助け合ってると思うけどね。例えば、面白いところあるよっていうのは、すぐに広まるから、みんな。

(Aさんのインタビューデータより)

インタビュアー：あなたは富山県のパキスタンのコミュニティについてどう感じていますか？コミュニティがあるのはあなたにとっていいことですか？

Zさん：そうですね。私達はパキスタンにいるように感じる事が出来ます。(関わるのが)日本人だけではないので楽ですね。

(Zさんのインタビューデータより)

インタビュアー：[個人名・妹1] はなんでそんな生き生きしてないと思う？日本人の子たちが集まってるようなところだったら、あんまり楽しそうにしてない理由はなんだと思う？

Aさん：さっき言ったように、いじめとかもあったし、トラウマじゃないけど、それでちょっと、あんまり日本人に関しては、日本人ってくくっちゃダメだけど、身近な日本人がクラスメイトやん。[個人名・妹1]にとってクラスメイトに、あんまいい思い出ないから、だから生き生きしてないんだと思う。その分パキスタン人たちの集まりに行くときは、そ

ういう悩みを、別の学校の子たちやから、お互いわからんからこそ、そういう悩みを、打ち明け合ったりすることもあったり、「そういうことを忘れて楽しもうぜ」みたいな感じで楽しんでたり。例えば、パキスタンに住んでるいこと話してる時も、すごい盛り上がってるっていう感じがする。

(Aさんのインタビューデータより)

③ ブラジルルーツの場合

図表4-2対象者のプロフィールの最終学歴にもある通り、ブラジルにルーツがあるインタビューー3名は、日本の高校に通っておらず、その内2名は中卒であった。インタビューーの1名はそれで満足していると語っており、他の2名については教育や学歴に満足しているかについてインタビュアーも質問していない。このように、インタビュアーがインタビューーの進学状況を問題視せず深掘りしなかったことは、ブラジルルーツのピアインタビューの特徴である。他のバックグラウンドを持つ調査員との話し合いでその特徴がわかった際、インタビュアーである調査員は「もっと深く聞き出せればよかった」などと述べていた。また、進学しようとする人が少なく、親も早く働いて欲しいという要望が多いとも述べていた。インタビューーの一人は、次のように学歴について満足していると語っているが、自身の学びについてすっかり諦めてしまっているからではないかと考察できる。

インタビュアー：学歴に満足していますか？

Kさん：はい、満足です。

(Kさんのインタビューデータより)

④ ロシアルーツの場合

ロシアにルーツを持つインタビューーからのデータは一つしかないが、ロシアと日本での教育内容の違いに疑問を抱えていることが次の語りから分かる。また、現代の世界情勢に関わる教師からの発言に傷つけられたりするケースや、そのことによって心身ともにダメージを受け、自身を見失ってしまうケースが見受けられる。

Iさん：私が自分から勉強すればいいんだけど、苦手だから、ロシアの歴史とか、勉強すれば、また色々、もっと、ロシアにこう、愛国心を持ってるというか、そういうのがあると思うけど、そういうの、やらんからね、やっぱ、全然違うと思う日本で勉強した歴史と、結構さ、こういうのを録音していいかわからんけど、アメリカの歴史を日本では教えとるやん、ロシアの逆やん。だから、そりゃネガティブが多いよね、そういうのは普通に聞くの辛かったし。

インタビュアー：1つの出来事に対してもさ、国によって全然捉え方とか違うからさ、なんかいろんな国から見たその1つの歴史を見てどう考えるか、みたいな、どう伝えるかって大事だよな。

(Iさんのインタビューデータより)

これは大学の話になるけど、ロシアとウクライナ問題があるじゃない。みんなウクライナをすごい応援するし、そっちが正しいとしか思わんからか、それをすごいバーッ言うてるから、色んな場面でそういう話が飛び交ってたから、みんな私がかawaiiそうだと思うのよ。そういう状況になってロシアの人で、かawaiiそうだねって、それを言うてくるわけよ。うちの先生とかもウクライナ軍に援助してるのね。アメリカに援助してないんだけど、結局は。その先生は正しいと思ってね、援助してるわけで、それを私に言うてくるの。「私はちゃんとしましたからね、安心してください」みたいな。それが多分、小中高の段階で来たら、結構ダメージでかかったと思う。大学ってさ、そんな関わらんやん。小中高とかやったら、みんな結構敏感やし、言うてくる子は言うてきたんやろうね。でも、日本にいてロシアに帰れとか言われた経験は確かない。ロシアの保育所に通ってた時に、そういう歴史の社会、あの社会の話になった時に、スパイだみたいな、そういうこと言われて覚えてるけど、日本で言われたことは確かにない。妹とかはあるみたいやけど。

(Iさんのインタビューデータより)

Iさん：なんかそういうの追ってるとさ、悲しくなるから、政治とか。なんかロシア関わらず、今世界で起きてる政治とかね、日本の政治とか、なんでもちょっと追ってるのが普通に心つらいから。

インタビュアー：わかる。なんかメンタルヘルス保つのむずくない？

Iさん：私がそこを見てても、なんか自分に悪影響だけ出てね。なんか他の人になんかよくできん。なんか影響与えられるわけじゃないから、関わらなくていいと思うね。

インタビュアー：ね、なんか知っといた方がいいんだろうけど、ずっと追いつけるのむずいもんね。私もなんか頑張ってさ、全部追おうと思っとった時期あったけど、無理。

(Iさんのインタビューデータより)

その他、ロシアコミュニティについては、ロシアルーツではないインタビューイから次のような肯定的な評価が見られた。

彼らは素晴らしい起業家で仕事の仕方を非常によく知っているので、たくさんのお金を稼いでいます。みんなとても裕福で、両親は常に良い仕事に就いています。彼らのほとんどは自分のビジネスを経営しています。彼らは従業員ではありません。彼らのほとんどは常にオーナーである。

(Kさんのインタビューデータより)

4.1.4.3.インタビュー調査を終えて

インタビューを実践することは、多くの調査員にとって初めての経験であった。緊張して正確にインタビューができるか、スムーズにできるか不安だと言う声が多くあった。しかし、日本女子大学の清水睦美教授に富山県高岡市まで来ていただき、実際に調査員の前でゼミ生でもあるペルー・ルーツのタイペ・マリエラさんへのインタビューを実演してくださったおかげで、インタビューの仕方や方法についてイメージすることができた。例えば、相手との間合いや話の聞き方、内容の深掘り方、広げ方、さらに相手を傷つけず、嫌な気持ちにさせない質問の仕方、質問内容も学ぶことができた。その後、調査員同士でもインタビューの練習を行い、それまであまり深く話せなかった調査員とも打ち解けることができた。

インタビューでは、インタビューイの話を尊重し、話を妨げないように注意して調査を行った。貴重な話の内容を聞き逃さないように、インタビューイが伝えたいことを全て聞き取る気持ちで、一人ひとりの声を拾い、一人ひとりの大事な意見に耳を傾けながらインタビュー調査を行うことができた。

インタビューの中には、日本での暮らしは経済的にはそれほど厳しくないと言う声もあった。しかし、実際に厳しくさせてしまっているのは、やはり言語といったコミュニケーション問題が大きい。伝えたいことも伝えられず、意思疎通ができなければ、気持ちを共有できず、それが誤解などに発展していくと考えられる。インタビュー調査では、親(保護者)が日本語を使えず、問題が生じ、解決に繋がらないまま時間だけが過ぎ去っていった事例もあった。それらを少しでも改善させるには互いの思いやり、相手を理解しようとする気持ちが非常に重要であるとする。インタビューでは、言語だけでなく、いじめや差別に関する語が多くあり、文化・習慣が違うこと、見た目といった容姿が違うこと、世界情勢に関する事で嫌な思いをしてしまったり、前向きに考えられなくなったりといった多くのケースを目の当たりにした。自身のルーツを隠そうと、幼少期に周りに合わせようと無意識に前髪を作ったり髪色を変えたりと、日本人を真似たり、日本人のように自身を変えようとしていた事例もあった。実際、私自身も今でもルーツがあることを言わないようにしているが、やはりそれは、周りとの対応が違ってくるのではないかと、嫌われるのではないかと考えてしまうからである。これらは日本の教育環境も含め、大きく文化が影響しているのではないかと考える。「間違ったことを言ったらどうしよう」「まわりと一緒にではないといけない」などと思い込んでしまっている、あるいはそう思い込ませてしまっている環境が、ルーツなど個性を消してしまっている、捨てさせてしまっている要因なのではないかと考える。自身の気持ちを発信できる環境があれば、その子／人の価値がさらに見出され、そして、認められることで、その子／人の自信にもつながるはずである。

他にも、インタビューからは、親子間や教師と生徒間の認識のギャップが引き起こす問題も聞かれた。また、多言語での情報があれば、さらにその存在を知る方法があれば、違う選択肢があったかもしれないと思うことがあるという語りもあった。来日して間もない人だけでなく、日本に何年も住んでいるが、まだ就職や進学できていない人もいた。富山県教育機関が「日本語対応のみ」であるため、進学を諦めていたり、外国の通信教育で学ぼうとしてい

るという人もいた。日本に来て何年も何もできていない現状に「時間を無駄にしている」と語ったインタビューもいた。富山県では、学びたい・仕事したいと思っていてもなかなかできない現状にある。

今回のインタビュー調査を通して、知っていることの常識を覆させられる事例が多々あった。自分とは関係ないと思っていても確実に何かしら繋がりや関係性があることが分かった。今後は、一見自分とは関係なさそうなことであっても自分ごととして捉え、全ての人々にとって暮らしやすく心地よい世界になるためにどうすればよいか考えていきたい。そして、私たち当事者の声が反映され、より良い社会を形作っていくために行動していきたい。

(プロジェクトコーディネーター 白鳥イルサハニーフ)

4.2.量的調査(アンケート)

4.2.1.本アンケート調査の特色

今回のアンケート調査は、主に以下の3点を明らかにするために行った。

- ① 外国ルーツの方の「学び」に対するニーズ
- ② ①と同様の「学び」のニーズを持つ人の有無
- ③ 外国ルーツの人を取り巻く富山県全体の「学び」の環境

通常のアンケート調査では、当事者ではない調査者が、理論的な根拠および自らの観察結果と推測に基づき、アンケート項目を設定し、調査を行い、その結果を客観的に分析するものが多いが、本プロジェクトでは、10代から30代の外国ルーツを持つ調査員を中心に、当事者自身がアンケート調査をデザイン・実施・分析することが特徴である。

調査員たちは、「学び」について自分が悩んでいることまたは悩んでいたこと、期待していることを共有したうえ、ディスカッションを通して自己分析を行った。そして、自己分析の結果を踏まえ、専門家のアドバイスのもと、自分の感じたものを論理的に考察・分析するための理論知識を増やした。2023年4月から9月の間、14回の勉強会と話し合いを重ね、アンケートの項目の吟味から、アンケート配布先の選定まで、当事者が中心として実施した。また、アンケート回収後、6回にわたってアンケート結果について議論を重ね、分析を深めた。その分析結果を提言書の形でとりまとめ、12月28日に富山県知事をはじめ、自治体の関係者に直に提言した。

また、調査員同士の話し合いや先行研究をリサーチする過程で、調査員たちがより多様な視点から立体的に自分自身を見ることができ、青少年をはじめとする外国ルーツの方々がおかれている環境を客観視できるよう調査員の成長を感じることができた。また、調査員同士に深い絆ができ、新たな社会ネットワークが構築された。これも本アンケート調査の価値の一つではないかと感じた。

(アレッセ高岡 理事 水田佳歩)

4.2.2.アンケート調査の概要

量的調査は、外国にルーツを持つ人に限らず、一定年齢以上の全ての富山県民を対象にアンケートを行った。

2023年4月7日に富山県庁に赴き、県知事に本調査に関する協力を仰いだところ、県で毎年実施されている「県政世論調査」を活用させていただけることになった。このことによって、偏りのないサンプルデータを入手できるようになった一方で、県政世論調査に掲載可能な設問数は限られること¹、多言語化されておらず、やさしい日本語や漢字へのルビといった配慮

¹ 富山県との交渉により、7問掲載していただくことになった。最大限盛り込めるようご協力いただき、感謝申し上げます。

もないため、外国にルーツを持つ人をはじめ、読み書きが苦手な県民の声を拾うのは難しいと考えられたことから、別途、多言語(やさしい日本語を含む)でより多くの情報を得るための「詳細アンケート」を実施することにした。

量的調査①「詳細アンケート」と量的調査②「県政世論調査」の概要は、以下のとおりである。

4.2.2.1.量的調査①「詳細アンケート」について

- 調査対象：13歳以上の富山県民(有意抽出法)
一部、富山県外・日本国外に引っ越した人も含む
- 調査期間：2023年8月下旬～10月6日
- 調査方法：郵送調査(Googleフォームによる回答を含む)
日本語、英語、中国語、ポルトガル語、ウルドゥ語、ロシア語の言語選択可
- 配布・回答協力者：県庁、高岡・射水・富山市役所、高校(定時制・私立)、大学、高専、フリースクール、日本語学校、地域日本語教室、地域各種支援団体、派遣会社、児童相談所、社会福祉協議会、公民館(コミュニティセンター)、県内小中学校(教職員のみ)、モスク、コンビニ、こども食堂、県内各種イベント会場等 489箇所
- 回収数(率)：1,393人(11.6%)
※うちGoogleフォームの回答回収(n=1,123)(全体回収の80.6%)

詳細アンケートの調査票(日本語)は巻末に参考資料として添付する²。

4.2.2.2.量的調査②「県政世論調査」について

- 調査対象：富山県内に居住する満18歳以上の男女4,000人(層化副次無作為抽出法)
- 調査期間：2023年8月7日～9月7日
- 調査方法：郵送調査(WEBによる回答を含む)
日本語のみ
- 回収数(率)：1,990人(49.8%)(10月1日時点)
※うちWEB回収 451(全回収数の22.7%)

県政世論調査に組み込んでいただいた本プロジェクトの質問項目(7問)は巻末に参考資料として添付する。

² なお、日本語版の詳細アンケートの調査票(冊子)は、回答者に外国につながりがあるかどうかを尋ねる設問【F0】が抜けていることが印刷発注後に判明し、設問のスタンプを押して【F0】を補うことで対応した。そのため、日本語版では【F0】の設問の位置が他言語の調査票とは異なる。

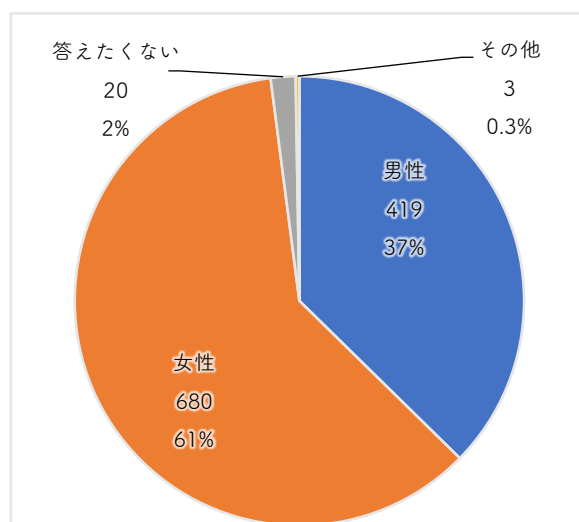
4.2.3.アンケート調査の結果

4.2.3.1.詳細アンケート

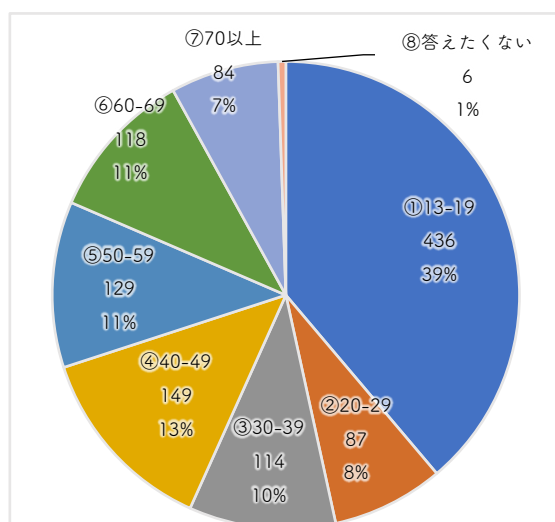
4.2.3.1.1.回答者の属性

まず、回答者全体の属性を以下に示す。以下、詳細アンケートに関する図表タイトルには「[詳]」を記す。

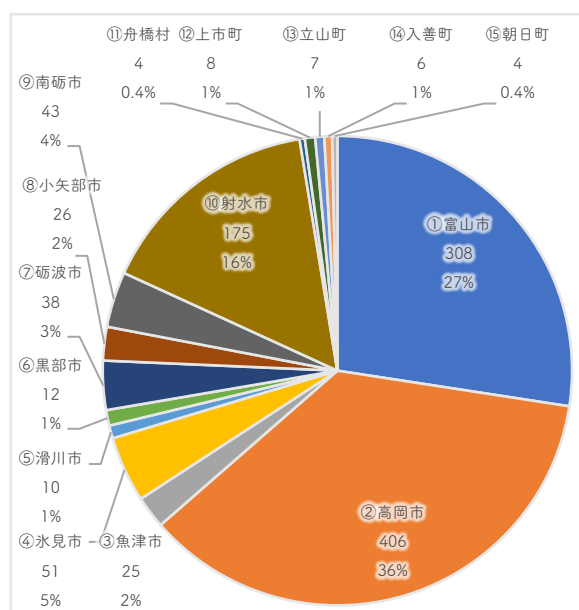
回答者の性別は女性が約6割、男性が4割で(図表4-3)、10代が多く回答している(図表4-4)。居住地は高岡市・富山市・射水市の3市で約8割の回答を得ている(図表4-5)。図表4-6の職業/立場を見ると、36%が「学生」と回答しており、その学校種を尋ねたところ、10代が多かったこともあり、「高等学校」と回答した人が最も多い。学生以外の回答者の最終学歴で最も多いのは「大学」で全体の4割を占め、「高等学校」「短期大学」が続いている。



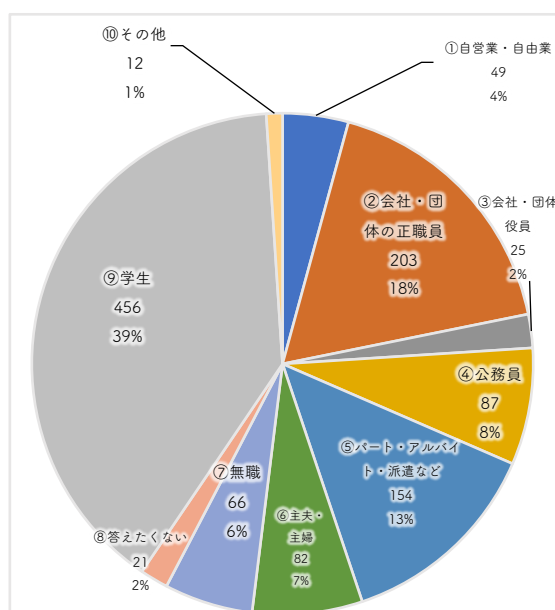
図表 4-3 [詳] フェイス—回答者の性別・全体



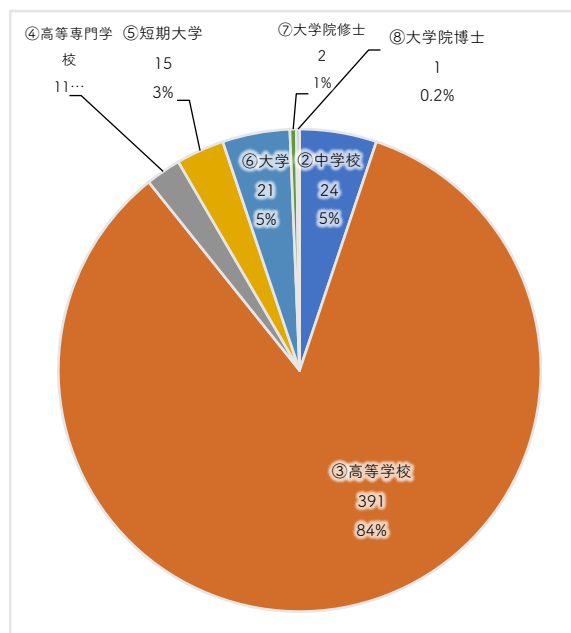
図表 4-4 [詳] フェイス—回答者の年代・全体



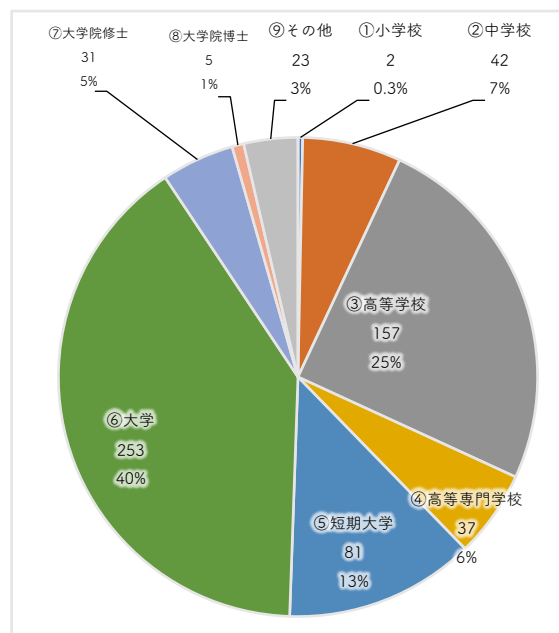
図表 4-5 [詳] フェイス—回答者の居住地・全体



図表 4-6 [詳] フェイス—回答者の職業/立場・全体



図表 4-7 【詳】 フェイス「学生」の学校種

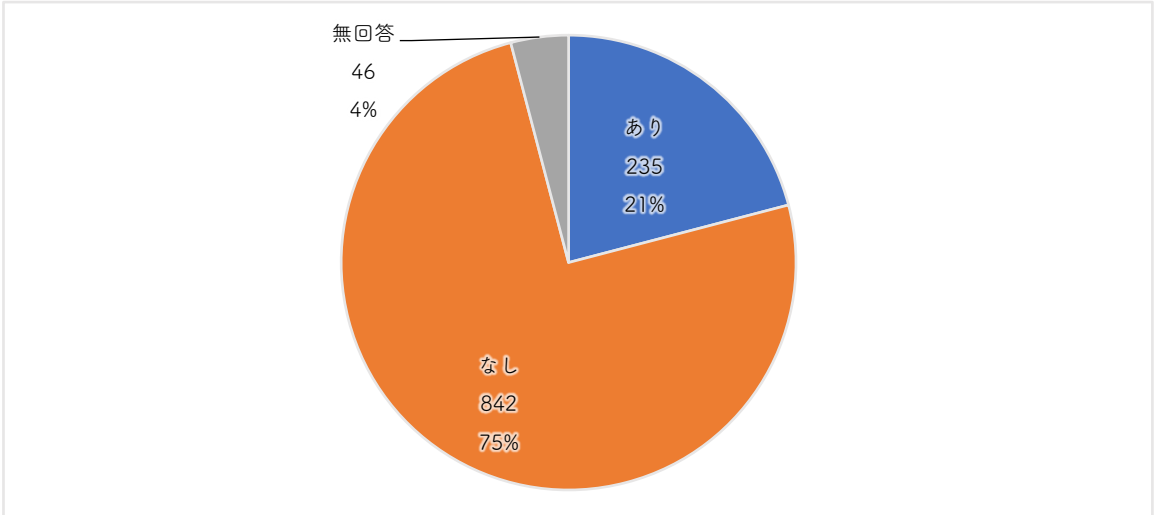


図表 4-8 【詳】 フェイス「学生」以外の最終学歴

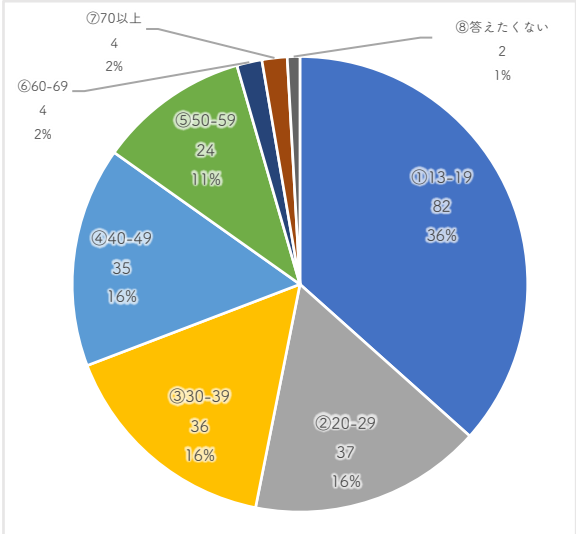
次に、回答者の属性をルーツ別(外国ルーツ／非外国ルーツ)に示す。本詳細アンケート調査票では、「【F0】あなたや両親は外国につながりがありますか。(例：外国で生まれた、外国に数年間住んでいた、外国籍など)」という質問項目を立てており、本調査では、基本的にこれに「①はい」と回答したものを「外国ルーツ」、「②いいえ」と回答したものを「非外国ルーツ」とする。ただし、「②いいえ」と回答したもの、または「無回答」であっても、一部他の設問に対する回答から「外国ルーツ」と判断したものもある(47回答)³。

図表4-9を見ると、回答者の75%が外国にルーツが無い(非外国ルーツ)と回答している。図表4-10～4-21は、回答者のルーツ(外国ルーツ／非外国ルーツ)ごとに、年代別、性別、男女それぞれの職業/立場別、「学生」以外の最終学歴を示したものである。外国ルーツ・非外国ルーツともに回答者の約4割を10代が占め(図表4-10、4-11)、男女比は概ね6：4となっている(図表4-12、4-13)。また、外国ルーツと非外国ルーツの違いに目を向けると、外国ルーツは全体的に高齢者の割合が小さいこと(図表4-10、4-11)、外国ルーツの女性は公務員、主婦、無職が少ないこと(図表4-14、4-15)、同じく男性は公務員と無職が少ない一方で、会社・団体の正職員が多く、自営業・自由業が次いで多い。図表4-20と図表4-21は、職業/立場で「学生」以外を選択した人の最終学歴であるが、外国ルーツの女性に小学校が2名いる。中学校の人でも外国ルーツ・非外国ルーツ、男女ともに一定数いる。

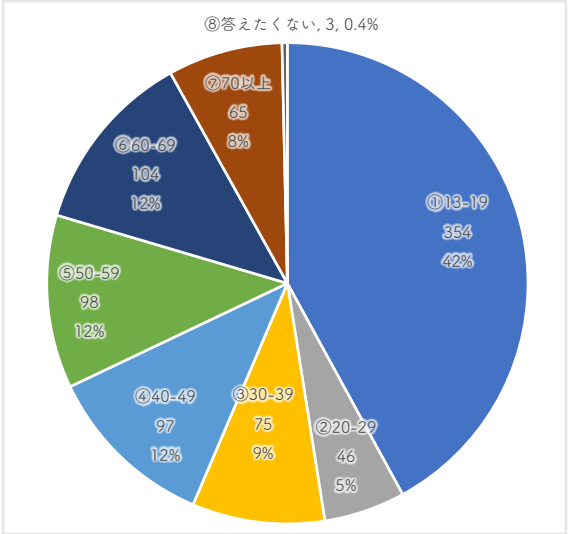
³ 【F0】の設問「あなたや両親は外国につながりがありますか。(例：外国で生まれた、外国に数年間住んでいた、外国籍など)」自体が、外国語に翻訳されると分かりづらかったようで、外国語で回答し、居住歴から外国生まれ・外国育ちであることが分かるにもかかわらず、【F0】で「いいえ」とする回答がいくつか見られた。そこで、本調査では、回答者が外国にルーツを持つ(つながりがある)かを、【F0】だけでなく、居住歴(今回は、18歳以下で2年以上の外国居住歴を持つ場合「外国ルーツ」とする)や自由回答などでの記述、回答言語(英語、中国語、ポルトガル語、ウルドゥー語、ロシア語で回答している場合「外国ルーツ」とする)の情報も合わせて総合的に判断した。



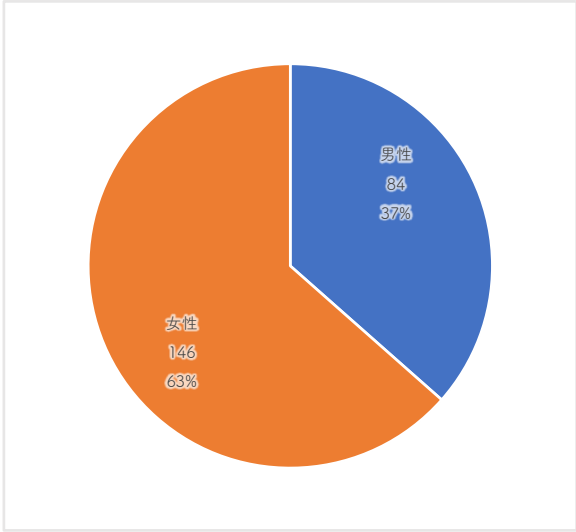
図表 4-9 〔詳〕 フェイス—回答者の外国ルーツの有無・全体



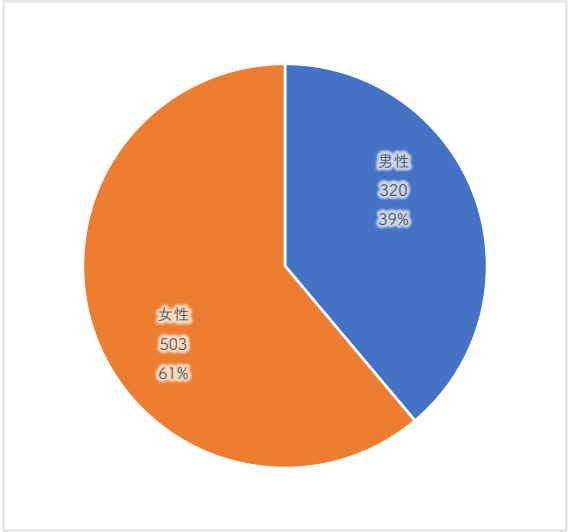
図表 4-10 〔詳〕 フェイス—外国ルーツ・年代別



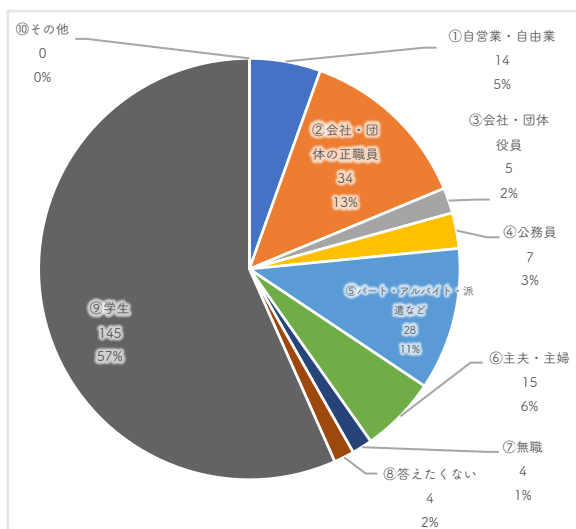
図表 4-11 〔詳〕 フェイス—非外国ルーツ・年代別



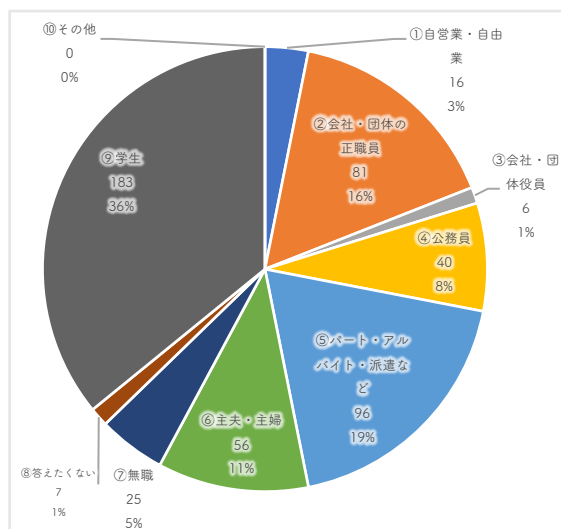
図表 4-12 〔詳〕 フェイス—外国ルーツ・性別



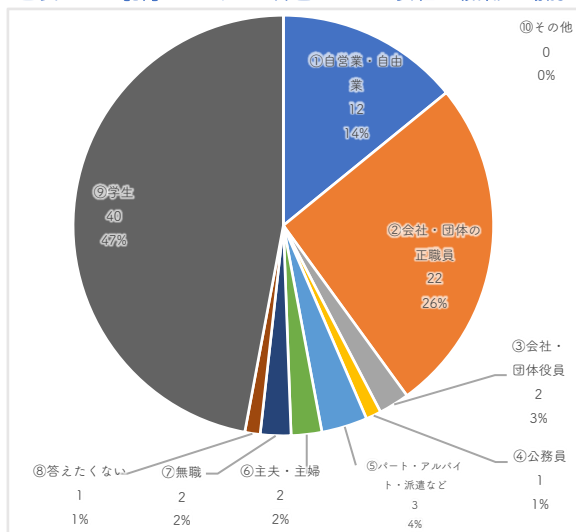
図表 4-13 〔詳〕 フェイス—非外国ルーツ・性別



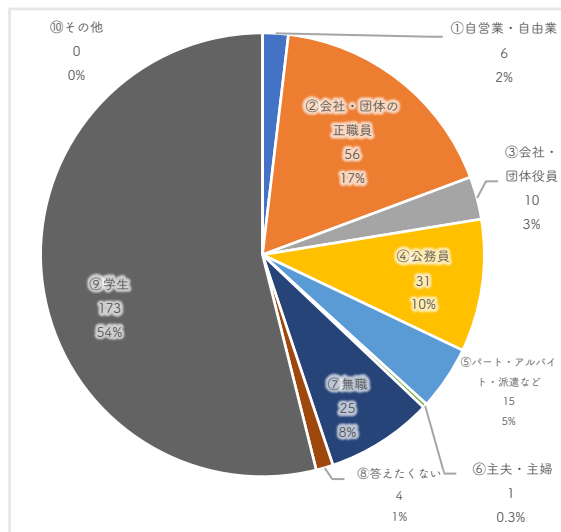
図表 4-14 [詳] フェイスー外国ルーツ・女性・職業/立場別



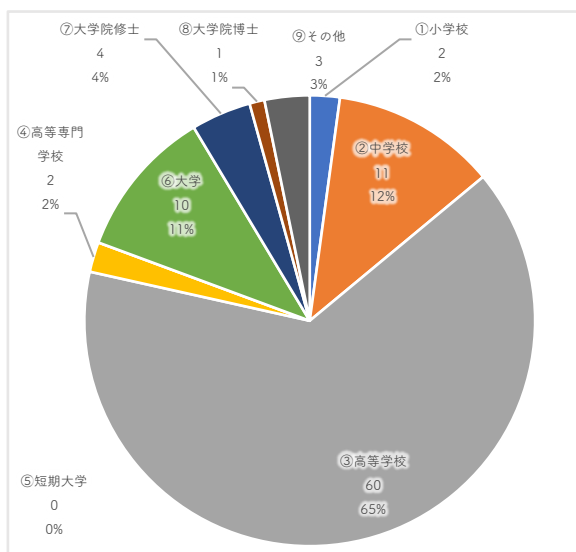
図表 4-15 [詳] フェイスー非外国ルーツ・女性・職業/立場別



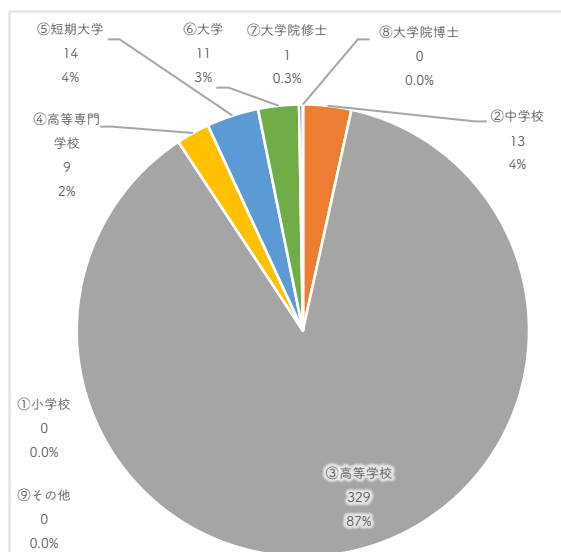
図表 4-16 [詳] フェイスー外国ルーツ・男性・職業/立場別



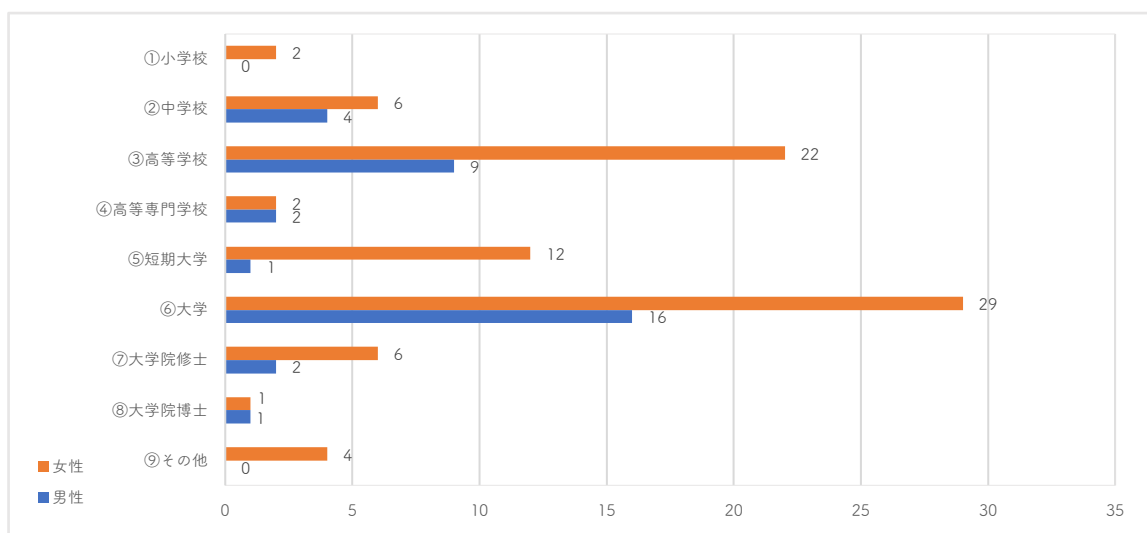
図表 4-17 [詳] フェイスー非外国ルーツ・男性・職業/立場別



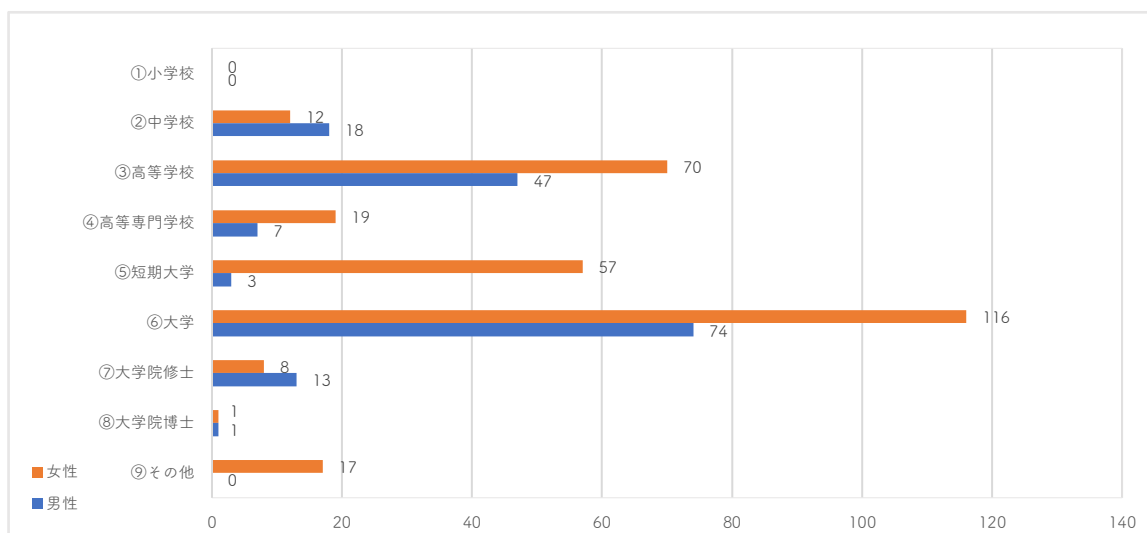
図表 4-18 [詳] フェイスー外国ルーツ・「学生」・学校種別



図表 4-19 [詳] フェイスー非外国ルーツ・「学生」・学校種別



図表 4-20 [詳] フェイスー外国ルーツ・「学生」以外・最終学歴・性別

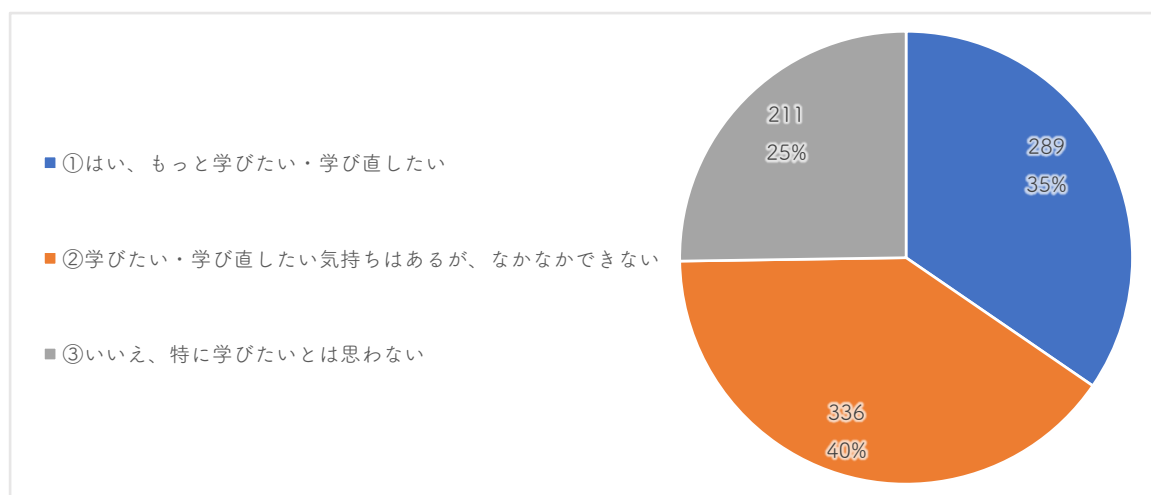


図表 4-21 [詳] フェイスー非外国ルーツ・「学生」以外・最終学歴・性別

4.2.3.1.2.学びの希望について

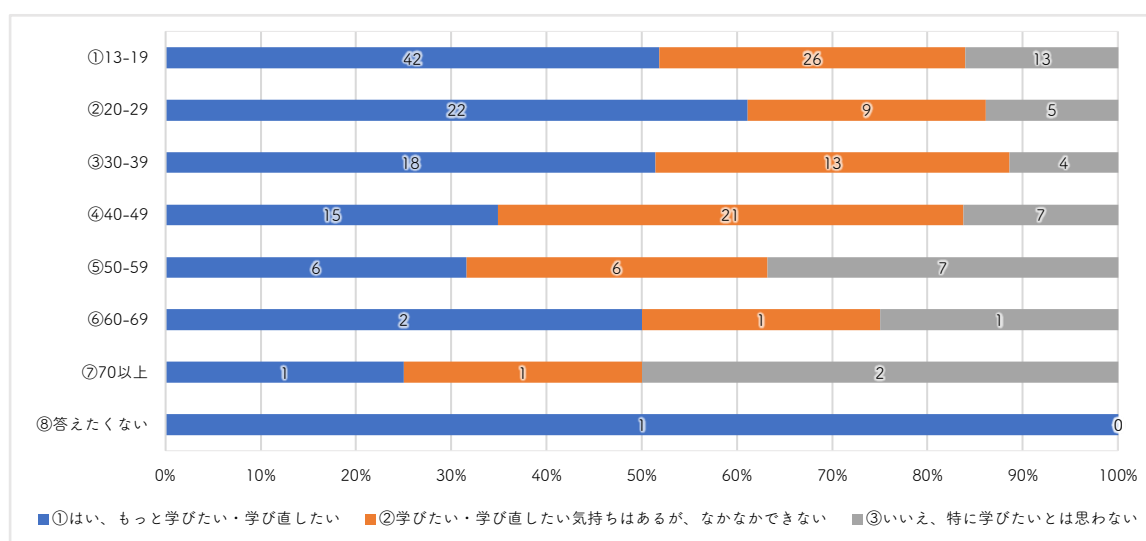
4.2.3.1.2.1.学びの希望の有無

【問1】は「あなたはもっと学びたい・学び直したいという気持ちがありますか」と直接的に学びの希望の有無について尋ねるものである。回答の選択肢は「①はい、もっと学びたい・学び直したい」「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」「③いいえ、特に学びたいとは思わない」である。回答者全体の結果は図4-22のとおりで、①と②を合わせれば、県民の75%、つまり4人中3人は「学びたい」という意欲を持っていることが分かる。



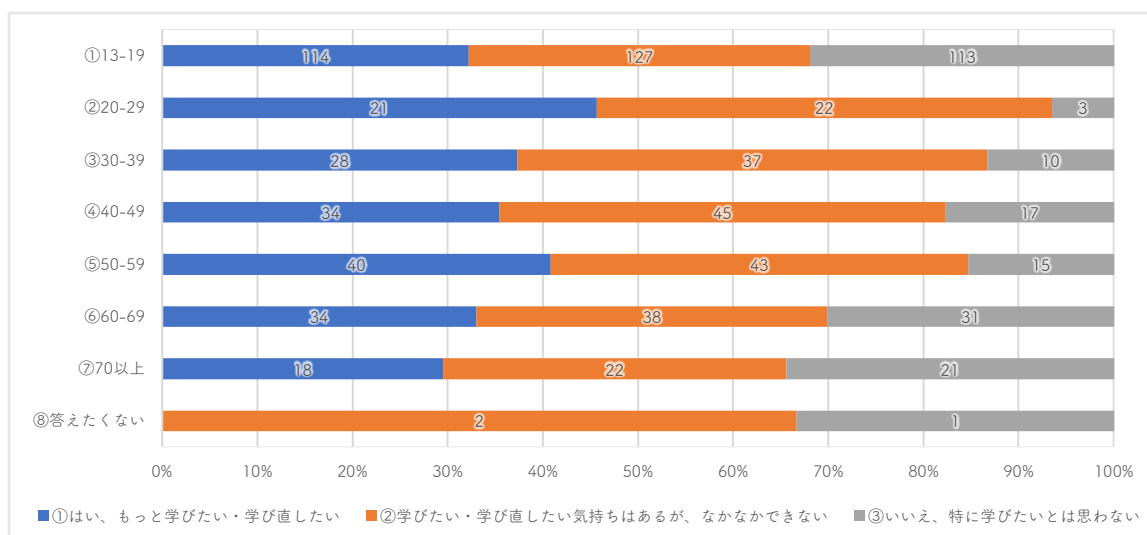
図表 4-22 [詳] 学びの希望の有無—全体

以下の図表4-23と図表4-24は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれ年代別に各回答の割合を示した帯グラフである⁴。図4-23と図4-24を比べて見ると、10代においては外国ルーツの学びの意欲が非外国ルーツに比べて高いことが分かる。また、20～40代という働き盛りの世代では、ルーツにかかわらず学びたいという回答が(①と②を合わせて)8割を超えている。特に、非外国ルーツは 20代で9割を超え、50代も高い。働く世代の学び・学び直しのニーズは非常に高いと言える。



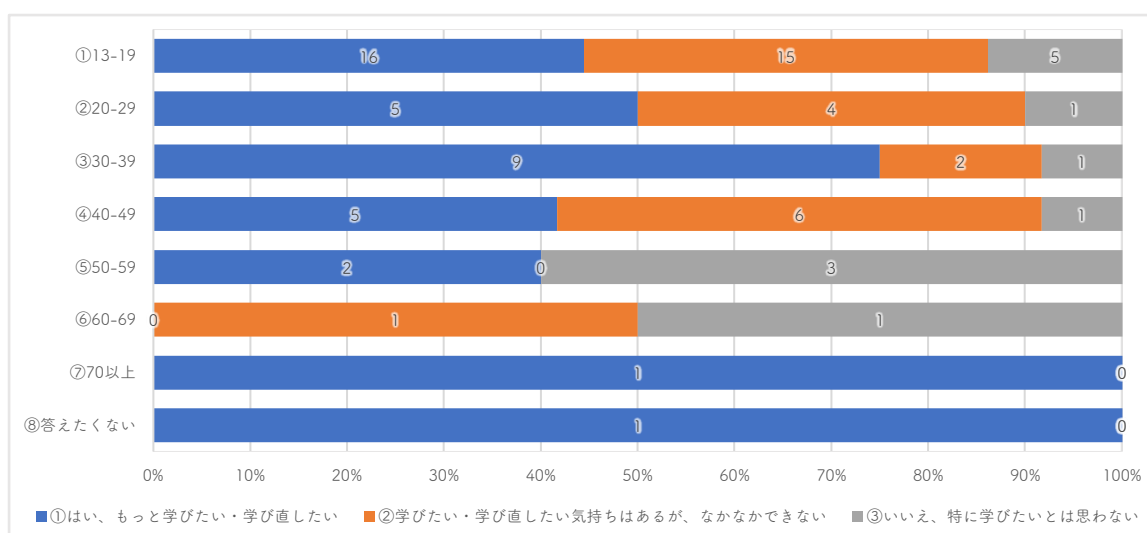
図表 4-23 [詳] 学びの希望の有無—外国ルーツ・年代別

⁴ 以下、回答者の属性であるルーツ別や性別、年代別等により回答を比較することを目的とするグラフにおいては、比較のポイントが分かりやすいよう、各属性の「その他」や無回答等による「不明」の回答者のデータを除く場合がある。また、回答選択肢の「その他」や「無回答」についても、回答数が0の場合などは省略してグラフに示さないことがある。そのため、グラフ中のルーツ別、性別・年代別等の回答の合計が全体の回答数と異なることがある。



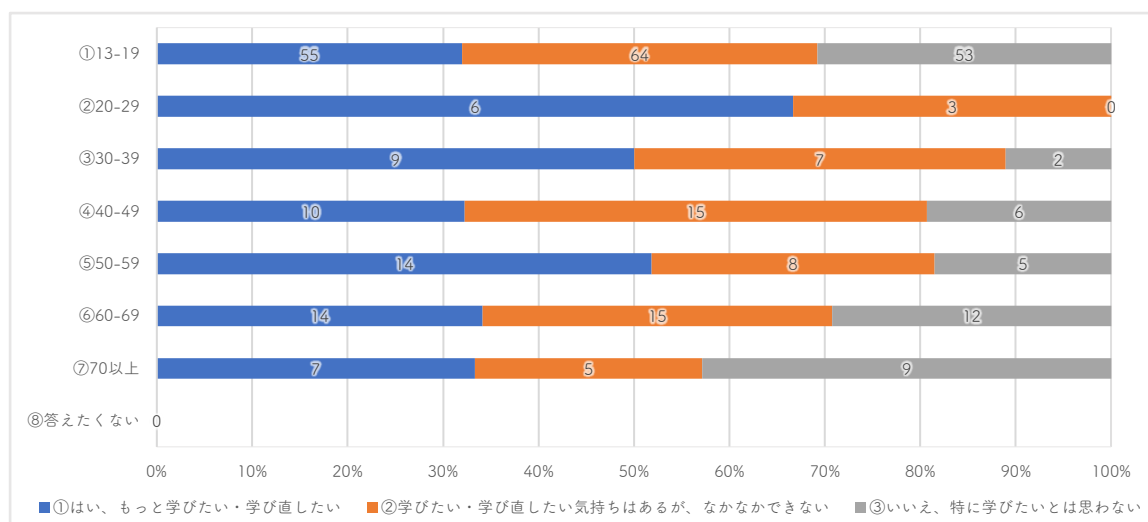
図表 4-24 [詳] 学びの希望の有無—非外国ルーツ・年代別

図表4-25～4-28は、図表4-23と図表4-24をさらに性別で分けて見た場合の学びの希望の有無である。図表4-25～4-28を見ると、「①もっと学びたい・学び直したい」という回答は外国ルーツの30代男性、非外国ルーツの20代男性、外国ルーツの10代・20代女性で占める割合が高い⁵。同じ外国ルーツでも、女性は「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」の方が多く、男女で30代の状況(学べる環境にあるか否か)が違ってくる。また、非外国ルーツの女性は、どの年代でも「①もっと学びたい・学び直したい」より「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」の割合が大きく、女性の学びの環境整備が求められる。また、男女ともに非外国ルーツの10代は「③特に学び直したいとは思わない」という回答の割合が他の年代に比べて大きく、外国ルーツの10代との差は大きい。

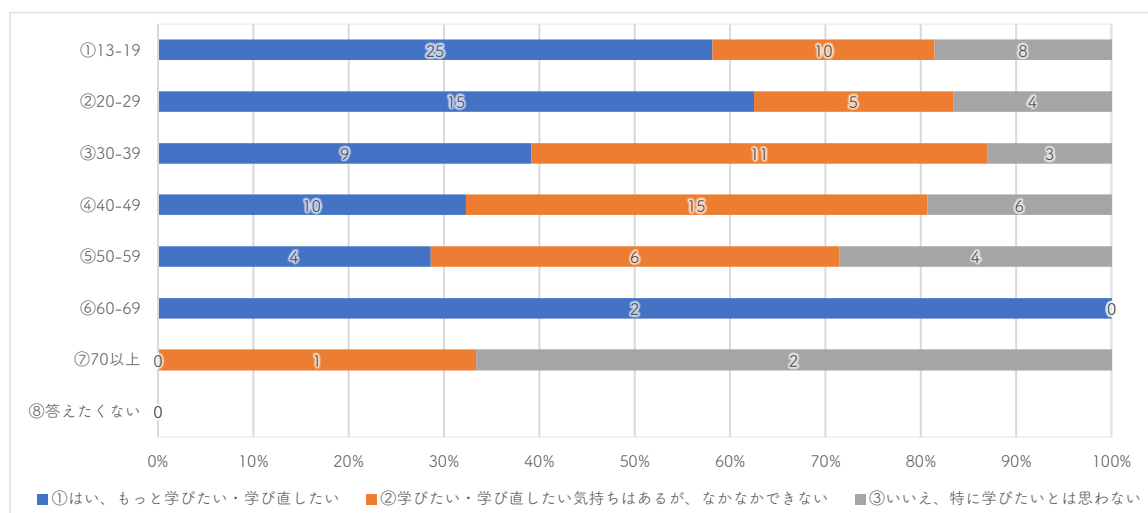


図表 4-25 [詳] 学びの希望の有無—外国ルーツ・男性・年代別

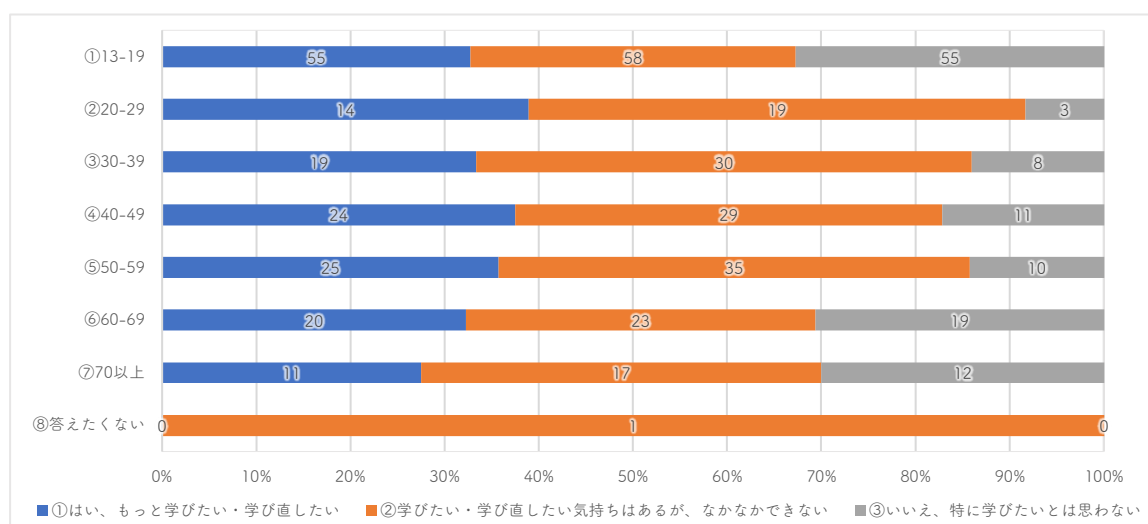
⁵ 外国ルーツの回答者を男女別かつ年代別に分けた場合のそれぞれの回答数は少ないため、割合を比較するのは適当ではないかもしれないが、ここでは非外国ルーツとの比較のための参考値として言及しておく。



図表 4-26 [詳] 学びの希望の有無—非外国ルーツ・男性・年代別



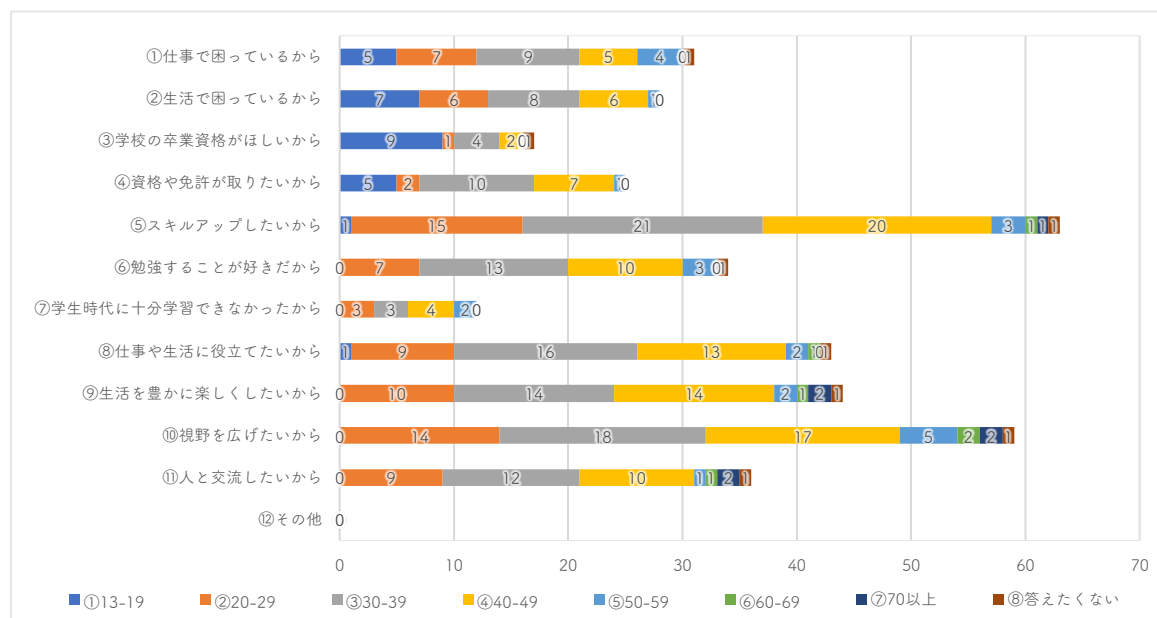
図表 4-27 [詳] 学びの希望の有無—外国ルーツ・女性・年代別



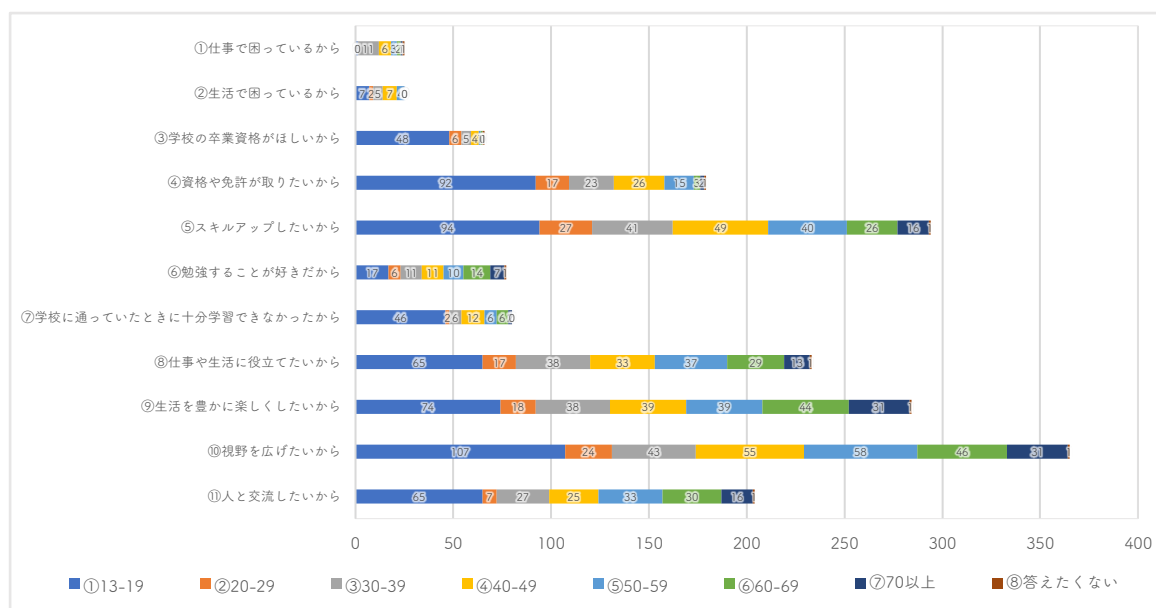
図表 4-28 [詳] 学びの希望の有無—非外国ルーツ・女性・年代別

4.2.3.1.2.1.1. 学びを希望する理由

【問1】で「①もっと学びたい・学び直したい」「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と回答した人に対しては、その理由を尋ねている(複数回答可)。図表4-29と図表4-30は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの学びたい理由を年代別で積み上げたグラフである。図表4-29と図表4-30を見ると、全体的に、「10.視野を広げたいから」「9.生活を豊かに・楽しくしたいから」「11.学びを通じて色々な人と交流したいから」のように、教養や交流を求める回答や、「8.仕事や生活に役立てたいから」「5.スキルアップしたいから」のように実利を求める回答が多いが、外国ルーツ(特に20～40代)は「5.スキルアップしたいから」の回答が最も多く、非外国ルーツは「10.視野を広げたいから」が最も多い。10や9、11のような教養や交流を求める回答は、非外国ルーツは10代の回答も少なくないが、外国ルーツの10代においては0であり、この「実利を求める外国ルーツ」と「教養を求める非外国ルーツ」のコントラストは若い世代において顕著である。その他、全体として回答数が取り立てて多いわけではないが、外国ルーツと非外国ルーツで異なるものとして、外国ルーツの方が「1.仕事で困っているから」「2.生活で困っているから」といった日々の困り感を解消するために学びを求める傾向と「6.勉強することが好きだから」という学びそのものに肯定的な態度を持っている傾向があるということがある。また、外国ルーツ・非外国ルーツともに「5.学校の卒業資格がほしいから」という学歴を求めるニーズや「7.学生時代に十分学習できなかったから」という学び直しのニーズが一定数ある。



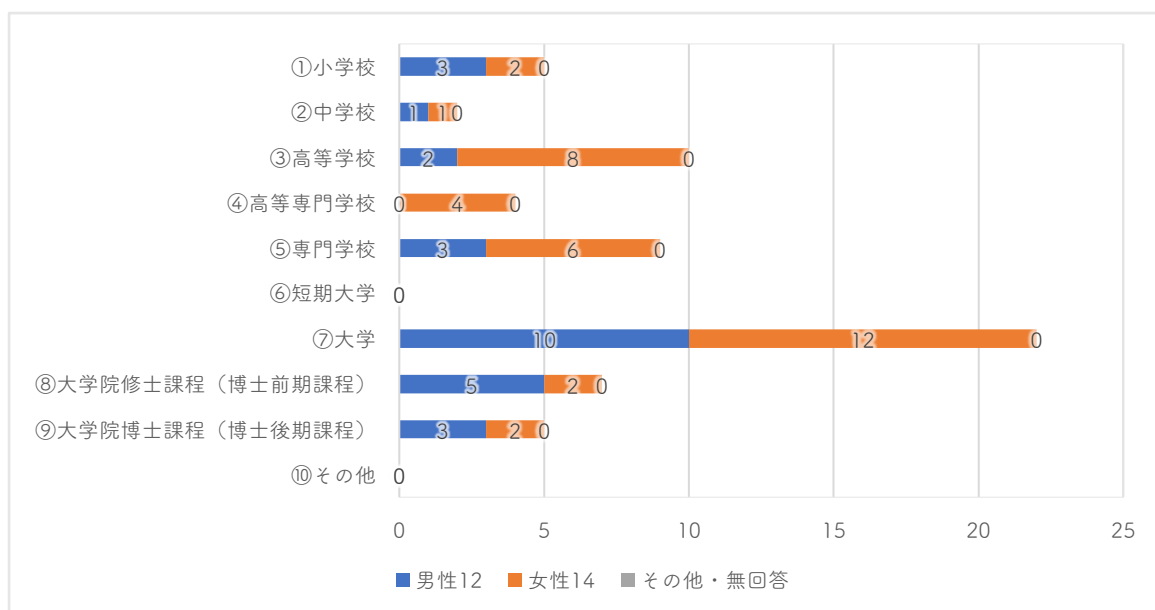
図表 4-29 [詳] 学びたい理由—外国ルーツ・年代別



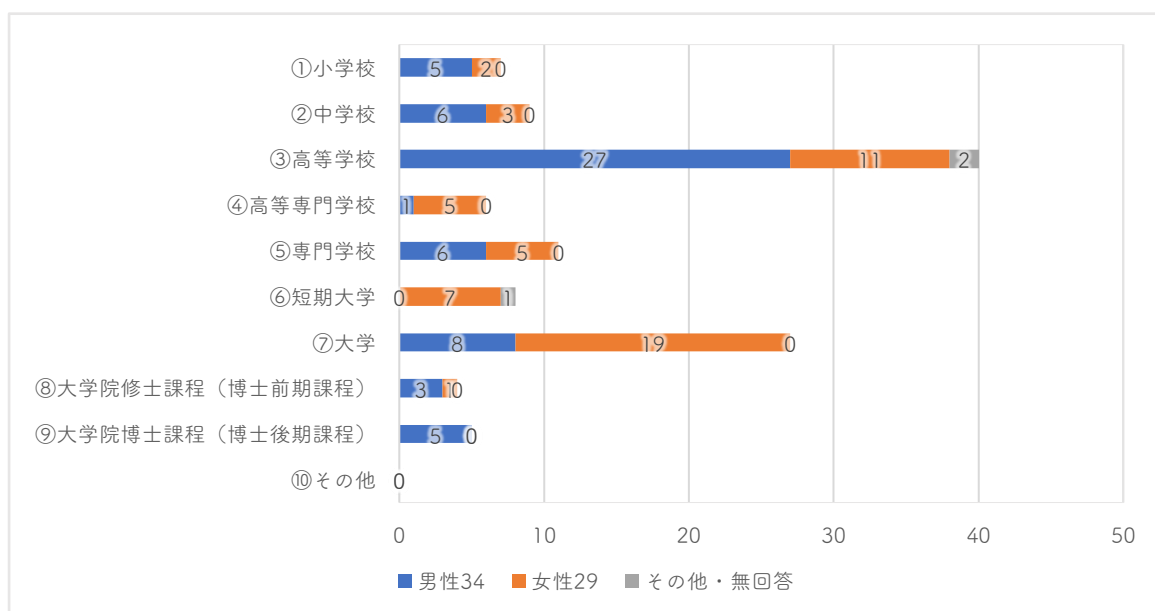
図表 4-30 [詳] 学びたい理由—非外国ルーツ・年代別

学びたい理由で「③学校の卒業資格がほしいから」と回答した人に対しては、ほしい卒業(修了)資格の学校種について尋ねている(複数回答可)。図表4-31は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれのほしい卒業資格を性別で積み上げたグラフである。図表4-31と図表4-32を見ると、外国ルーツ・非外国ルーツともに、「1.小学校」「2.中学校」という回答が一定数認められる⁶。義務教育の卒業資格を得ていない県民がいることが窺われ、夜間中学など学齢を超過しても義務教育を受けられる場が求められる。また、非外国ルーツは「5.高等学校」という回答が最も多いのに対し、外国ルーツは「7.大学」が最も多く、「8.大学院修士」「9.大学院博士」も(外国ルーツ・非外国ルーツの全体の回答者数の違いを考えると)非外国ルーツに比べて目立つ。すなわち、外国ルーツの方が高い学歴を求めていることが窺える。これについては、外国ルーツの方が非外国ルーツよりも承認欲求が高い、あるいは現実に承認欲求が満たされていないこととの表れではないかと考えられる。そのほか、図表4-31と図表4-32に見られる違いとしては、「6.短期大学」を選択しているのがほぼ非外国ルーツの女性のみで、外国ルーツの回答は0名であったことが挙げられる。外国ルーツに「6.短期大学」の回答がなかったことの原因については、外国人コミュニティにおいて、短期大学の存在があまり知られていない可能性などが考えられる。

⁶ 図表4-20、4-21では全回答者のうち最終学歴「小学校」は外国ルーツの女性2名のみであるが、図表4-31、4-32においてそれ以上の人数の人がほしい卒業資格として「小学校」「中学校」を挙げている。その理由については、小学校すら卒業していない人がいる可能性や、形式卒業者が実質的に小学校や中学校の学習内容を修了したいという意味でこれらを選択した可能性などが考えられる。

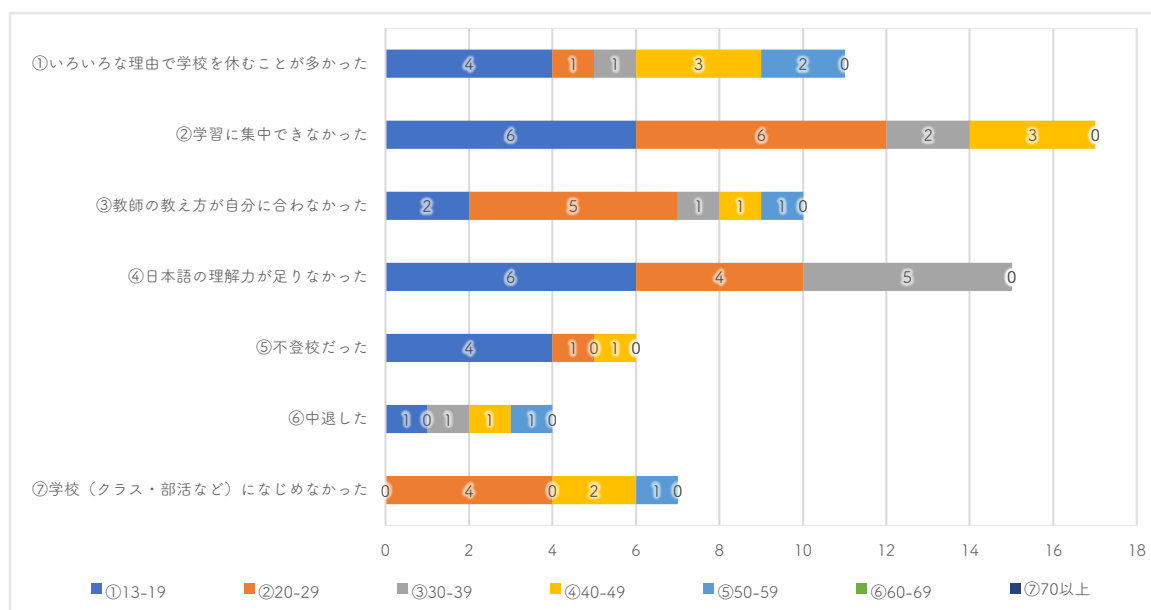


図表 4-31 〔詳〕 ほしい卒業資格—外国ルート・性別

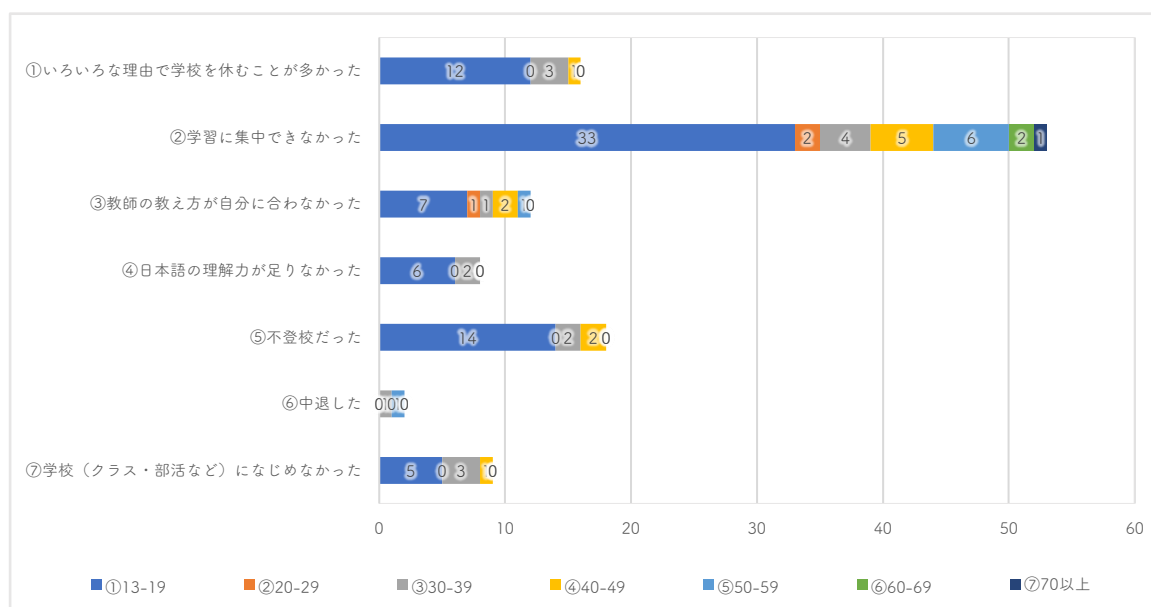


図表 4-32 〔詳〕 ほしい卒業資格—非外国ルート・性別

さらに、学びたい理由で「7.学校に通っていたときに十分に学習できなかったから」と回答した人に対しては、学習できなかった理由について尋ねている(複数回答可)。図表4-33と図表4-34は、外国ルート／非外国ルートそれぞれの学べなかった理由を年代別で積み上げたグラフである。図表4-33と図表4-34を見ると、「2.学習に集中できなかった」の回答数が最も多いのは外国ルート・非外国ルート共通であるが、非外国ルートがこの回答に集中しているのに比べると、外国ルートは他の選択肢にも分散している。外国ルートと非外国ルートの大きな違いは「4.日本語の理解力が足りなかった」という選択肢であり、外国ルートでは2番目に多い回答となっている。



図表 4-33 [詳] 学生時代に十分学べなかった理由—外国ルーツ・年代別



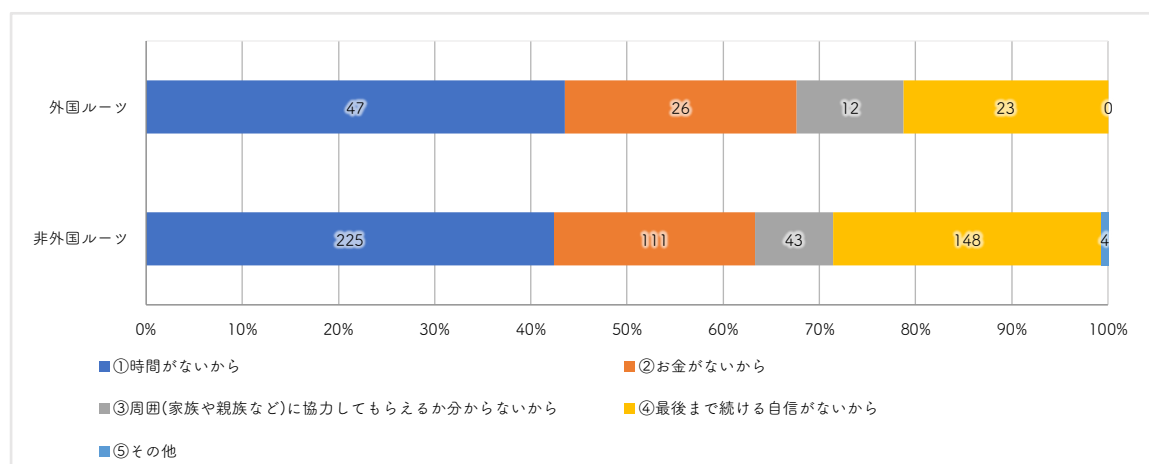
図表 4-34 [詳] 学生時代に十分学べなかった理由—非外国ルーツ・年代別

学生時代に十分学べなかった理由として、「1.いろいろな理由で学校を休むことが多かった」「2.学習に集中できなかった」「3.教師の教え方が自分に合わなかった」「6.中退した」を選択した人には、その詳細について自由記述で訊いている。いくつか印象的だったものをピックアップすると、外国ルーツの回答には、「家庭の事情で母国に帰ることが多かった」「唯一白人ハーフのいる私のクラスで差別教育をした」「おそらくADHDで、学校が嫌いでした」「みんなのレベルに追いつけなかった」「13才からバイト(?)を始めて、家に着くのが23時過ぎだったので、朝は起きなくていつも遅刻／不登校」「教師の教え方以前に人格に問題のある先生に当たりすぎた。嫌いな人から教えられても何も頭に入らない」などといった記述があり、児童労働など、学生時代非常に厳しい状況にあったことが窺える。非外国ルーツの回答には、「学習する時に喜びや達成感を味わえなかった」「優秀な姉や兄たちと比較してばかりの親に対す

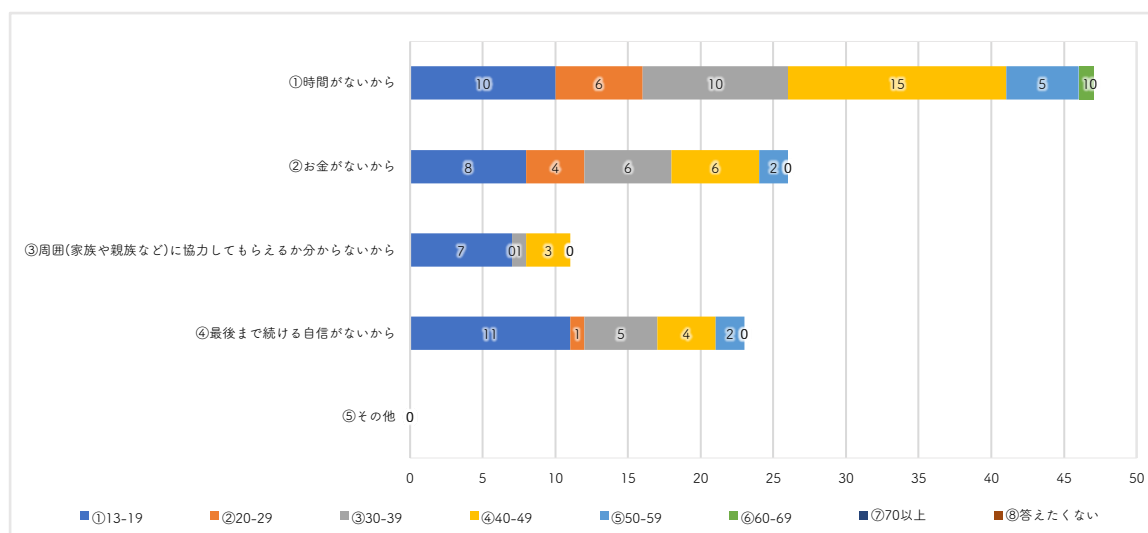
る反抗心の方がとてもとても大きかった」「やりたいことが見つからなかった」「いじめがあり、集中できなかった」「集団生活になじめなかった」「理解力があまり良くなく、興味が湧かず、聞き流すことが多かった」「家庭内環境が悪く、学業に専念できなかった」「先生の教え方に不公平を感じた。学校よりもバイトやバンドが楽しかった」「漢字がわからん。言葉の意味がわからん」「勉強の仕方がわからなかった」「5年生の時に入った先生が授業内容を下ネタで表すのが不快で、授業中に寝ようになり、教室にも行かなくなった」などといった記述が見られた。

4.2.3.1.2.1.2. 学びを希望しているができない理由

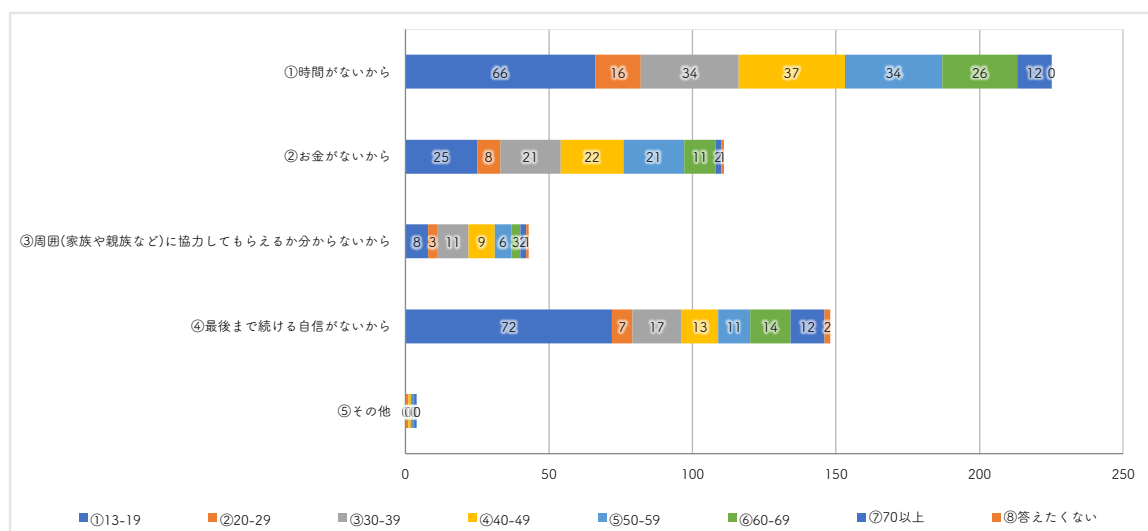
【問1】で「学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と回答した人に対しては、実際に学ぶこと・学び直すことが難しい理由について尋ねている(複数回答可)。図表4-35は、ルート別の回答に占める各選択肢の割合を示した帯グラフ、図表4-36と図表4-37は、外国ルート／非外国ルートそれぞれの年代別の積み上げグラフである。図表4-36と図表4-37を見ると、外国ルート・非外国ルート共通して学ぶことが難しい理由として「時間がないから」を挙げている人が多く、全体の回答者数の年代別の割合を考えると、外国ルートでは30～40代、非外国ルートでは30～50代の働き盛りの世代に多いと言える。次に多いのは外国ルート・非外国ルートともに「最後まで続ける自信がないから」で、この回答は両者10代で最も多く、特に非外国ルートの10代においてこの傾向が顕著である。心理的サポートが必要とされていることが分かる。



図表 4-35 [詳] 学びたくてもできない理由—ルート別



図表 4-36 [詳] 学びたくてもできない理由—外国ルーツ・年代別

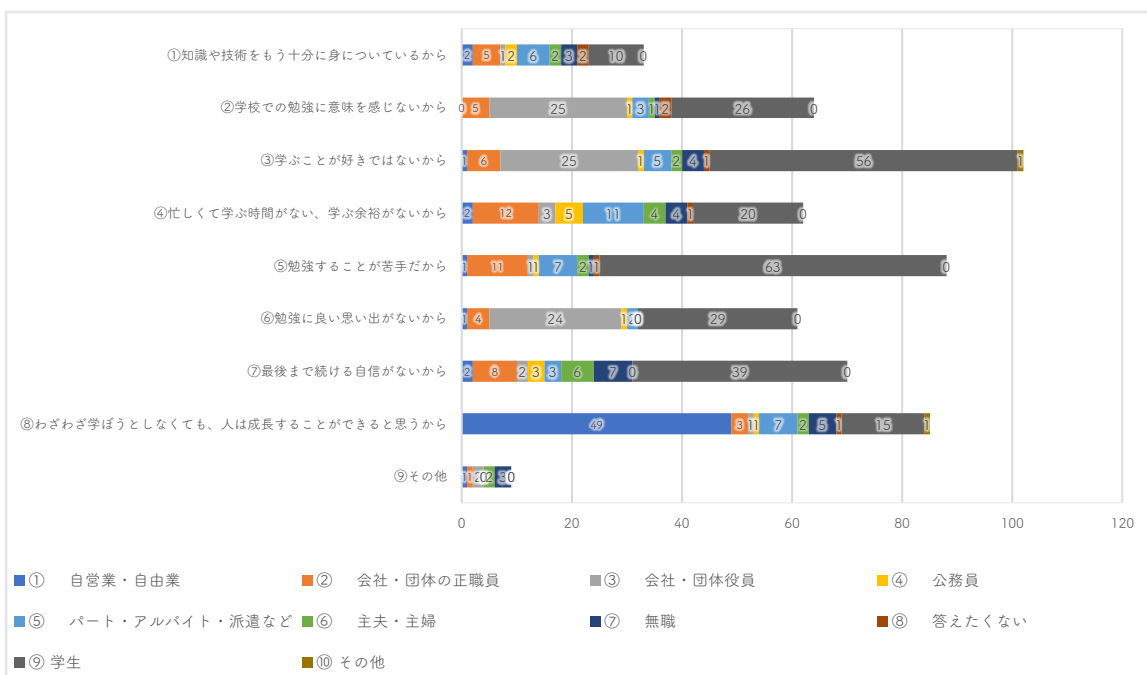


図表 4-37 [詳] 学びたくてもできない理由—非外国ルーツ・年代別

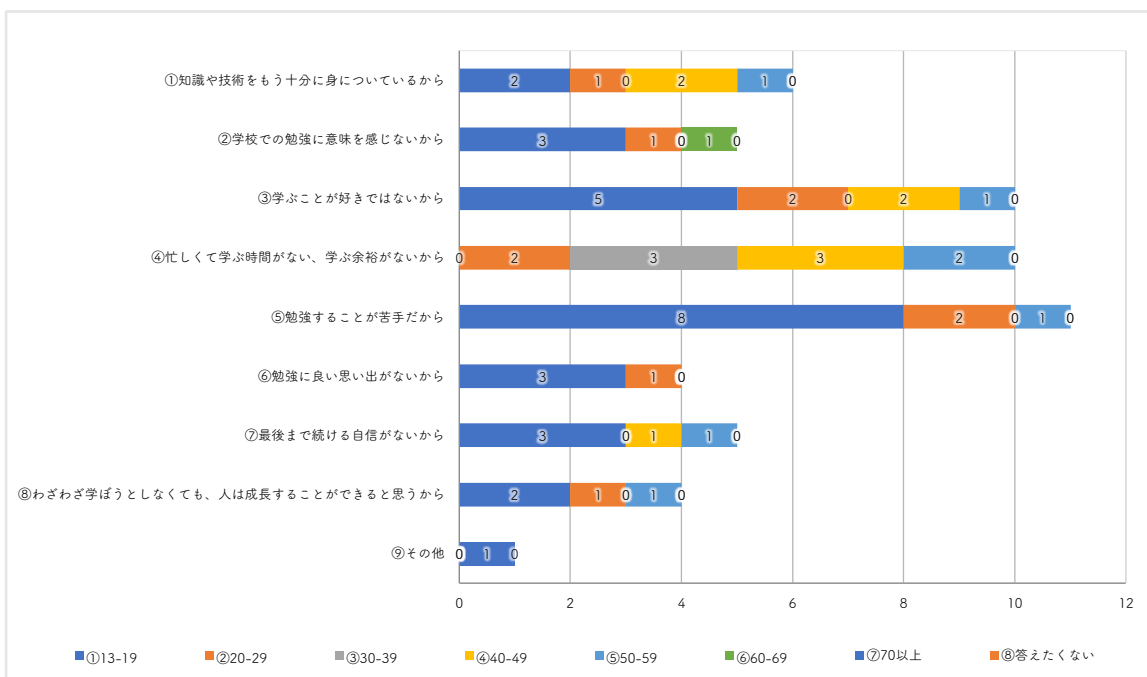
4.2.3.1.2.1.3. 学びを希望しない理由

【問1】で「③いいえ、特に学びたいとは思わない」と回答した人に対しては、その理由を尋ねている(複数回答可)。図表4-38は、学びたくない理由ごとの回答者数を職業/立場別で積み上げたグラフである。図表4-38を見ると、全体的な回答数は分散しているが、職業/立場別に見ると、最も多い「3.学ぶことが好きではないから」や2番目に多い「5.勉強することが苦手だから」は「学生」の回答が多く、3番目に多い「わざわざ学ぼうとしなくても、人は成長することができると思うから」は「自営業・自由業」の回答が多い。

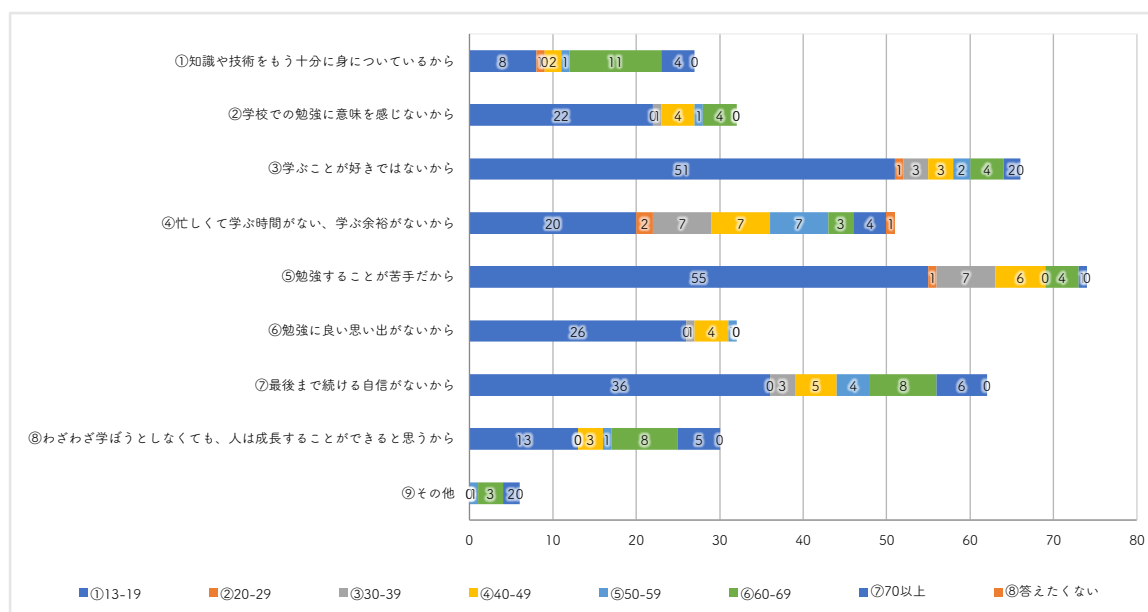
図表4-39と図表4-40は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの年代別の積み上げグラフである。図表4-39と図表4-40を比べると、「7.最後まで続ける自信がないから」の回答数が外国ルーツに比べて非外国ルーツにおいて目立つ。「4.忙しくて学ぶ時間がない、学ぶ余裕がないから」は30代・40代に多い回答であるが、非外国ルーツは10代においても一定数回答者がいるのに対し、外国ルーツの10代の回答者は0である。



図表 4-38 [詳] 学びたくない理由—全体・職業/立場別



図表 4-39 [詳] 学びたくない理由—外国ルーツ・年代別



図表 4-40 [詳] 学びたくない理由—非外国ルーツ・年代別

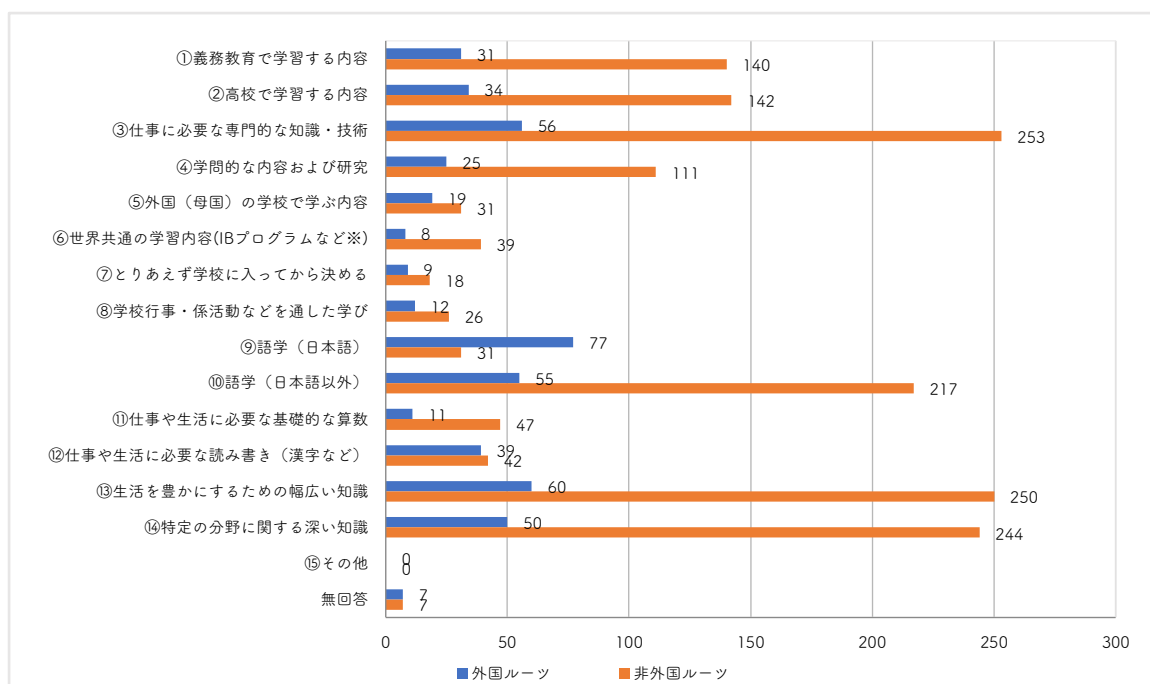
4.2.3.1.2.2.学びたい内容

【問1】で「①もっと学びたい・学び直したい」「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と回答した人に対しては、学びたい内容を尋ねている(複数回答可)。図表4-41は、ルーツ別の各選択肢の回答数を示した集合グラフ、図表4-42と図表4-43は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの年代別の積み上げグラフである。

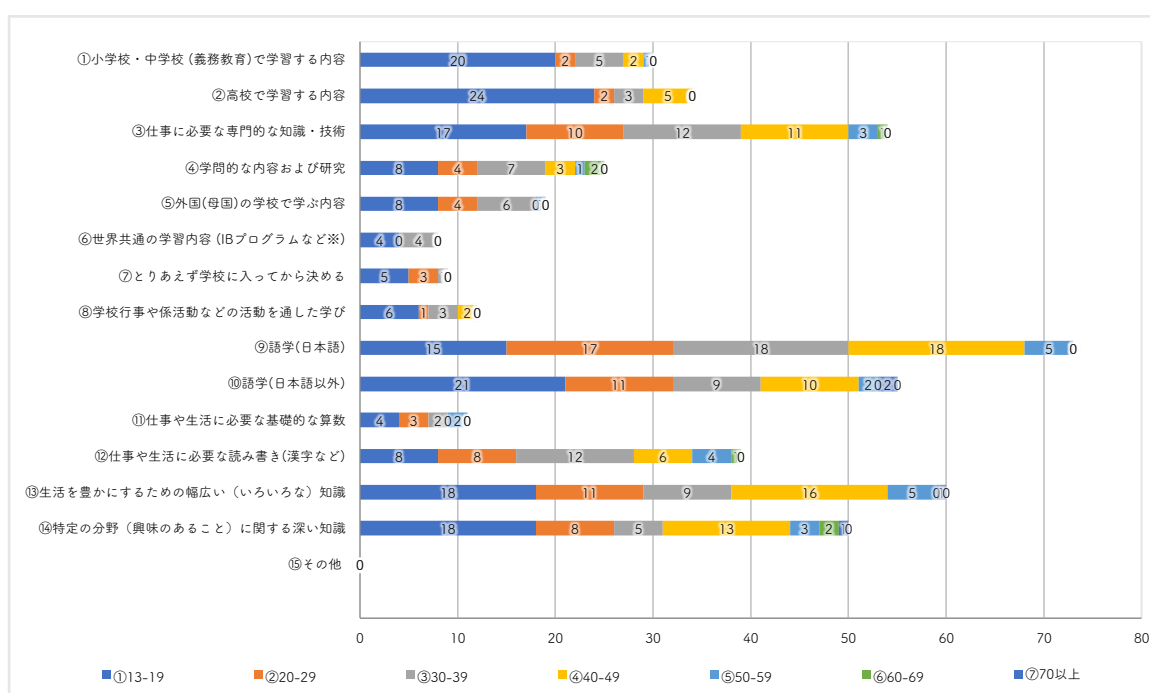
図4-42と図4-43を見ると、「3.仕事に必要な専門的な知識・技術」や、「13.生活を豊かにするための幅広い知識」、「14.特定の分野に関する深い知識」、そして「10.語学(日本語以外)」は、20～40代を中心に、外国ルーツ・非外国ルーツに共通して回答が多く、仕事関係に必要なスキルアップに関するもの、教養を広げたり深めたりするような内容、語学(日本語以外)についての県民のニーズは高い。その他の外国ルーツ・非外国ルーツの共通点としては、10代の若い世代で「1.義務教育で学習する内容」「2.高校で学習する内容」の回答が多く見られることがある。2の回答が多いのは、回答者に高校生が多いことが影響している可能性があるが、1については、中学生以下の回答を除いても外国ルーツ25名、非外国ルーツ134名おり、高校生以上の少なくない回答者が小中学校での学び(学び直し)を求めていることが分かる。一方、外国ルーツ／非外国ルーツの違いとしては、外国ルーツの「9.語学(日本語)」「12.仕事や生活に必要な読み書き(漢字など)」のニーズが非外国ルーツに比べて高く、幅広い年代に求められていることが挙げられる。

その他、「6.世界共通の学習内容(IBプログラム⁷)」については想定よりも外国ルーツの回答者のニーズは小さかった。しかし、外国ルーツ8名、非外国ルーツ39名と一定数いることは確かである。

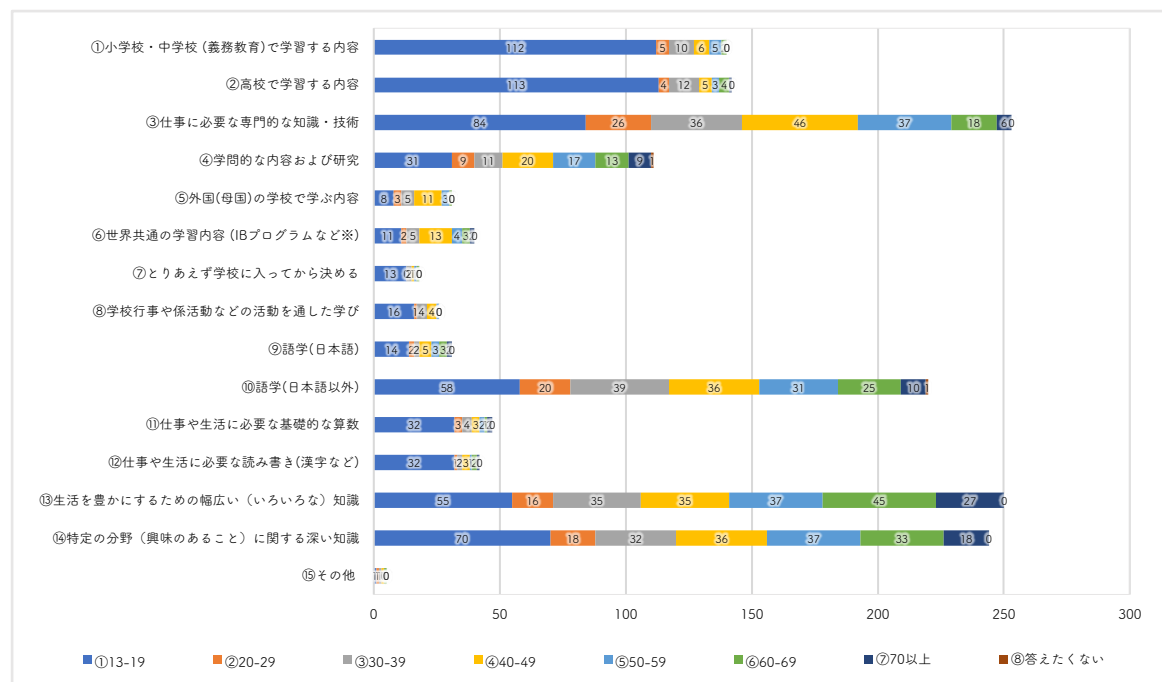
⁷ 国際バカロレア(IB: International Baccalaureate)は、スイスのジュネーブに本部を置く国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラムである。IBのディプロマ・プログラム(DP)では大学入学資格(国際バカロレア資格)を取ることができ、世界の多くの大学(100カ国以上)の入学資格として認められている。



図表 4-41 [詳] 学びたい内容—ルーツ別



図表 4-42 [詳] 学びたい内容—外国ルーツ・年代別



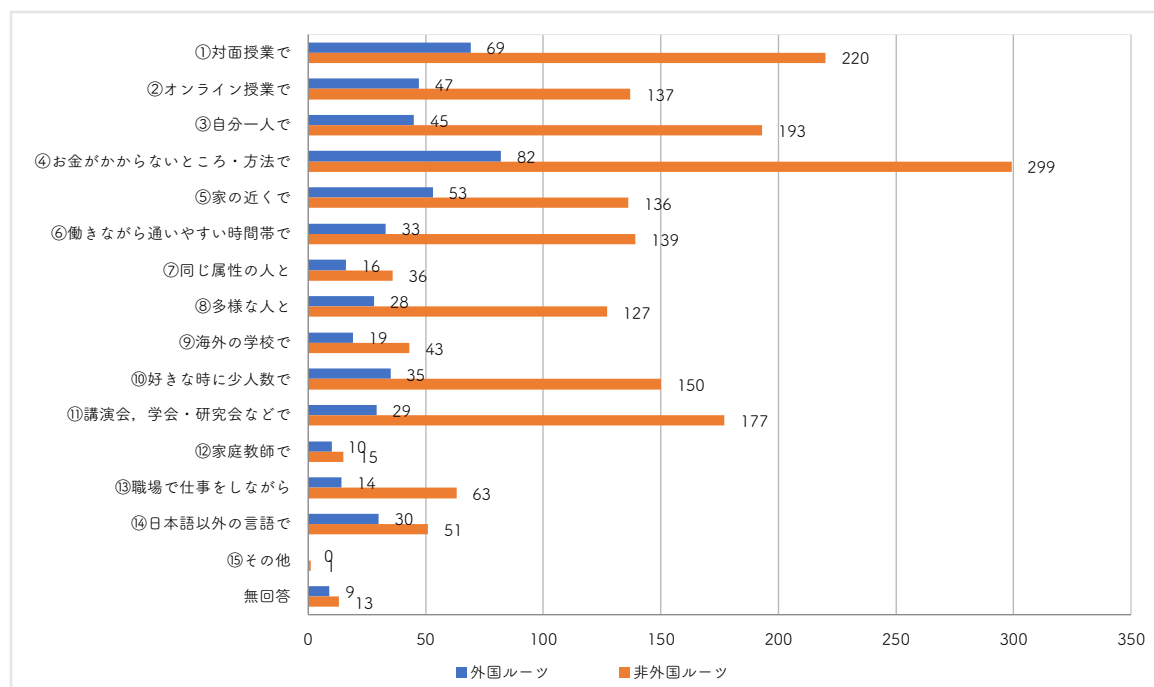
図表 4-43 [詳] 学びたい内容—非外国ルーツ・年代別

4.2.3.1.2.3.学びたい場・方法

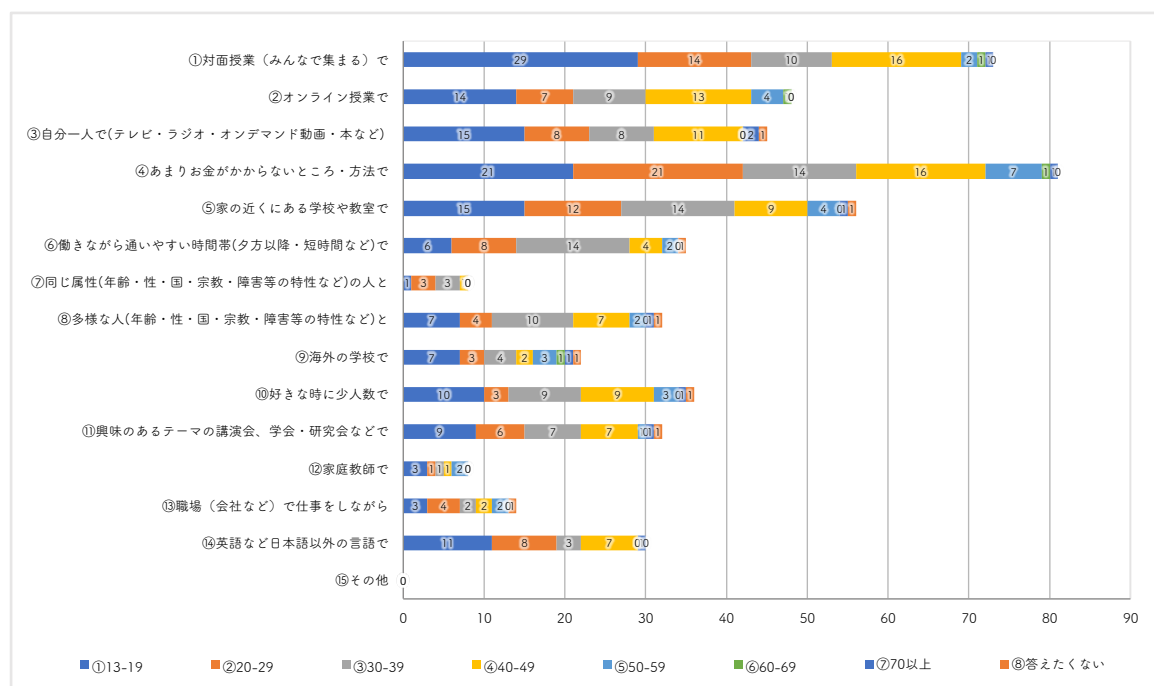
【問1】で「①もっと学びたい・学び直したい」「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と回答した人に対しては、学びたい場・方法も尋ねている(複数回答可)。図表4-44は、ルーツ別の各選択肢の回答数を示した集合グラフ、図表4-45と図表4-46は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの年代別の積み上げグラフ、図表4-47と図表4-48は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの性別の集合グラフである。

図表4-44を見ると、外国ルーツ・非外国ルーツに共通して回答者が最も多いのは「4.お金がかからないところ・方法」である。広い年代に回答者が見られるが(図表4-45、4-46)、特に女性の回答が多いことが分かる(図表4-47、4-48)。また、「1.対面授業で」の回答も外国ルーツ・非外国ルーツに共通して2番目に多い。ただし、「2.オンライン授業で」との対比で見ると、外国ルーツの女性は他の属性に比べて1と2の回答数が拮抗していて、対面授業にこだわっているわけではないことが分かる(図表4-47、4-48)。なお、年代で特に対面／オンラインどちらかに偏るという傾向は見られなかった(図表4-45、4-46)。3番目に多い回答は、外国ルーツは「5.家の近くで」であり、非外国ルーツは「3.自分一人で」となっている。その他、非外国ルーツで「11.興味のあるテーマの講演会、学会・研究会などで」が多いこと(図表4-44)や「8.多様な人と」を選んだ回答者は外国ルーツ・非外国ルーツ共通で女性が多いこと(図表4-47、4-48)などが分かる。また、「7.同じ属性(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)の人」と「8.多様な人(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)」を比べると、外国ルーツ・非外国ルーツともに多様な人との学びを求めていることが分かる(図表4-44)。ただし、外国ルーツの男性は7と8の回答が拮抗している(図表4-47)。一方、図表4-45と図表4-46で10代の回答を比べると、外国ルーツの10代は「7.同じ属性と」を選んだ回答者は1人しかおらず、外国ルーツの若い世代には自分

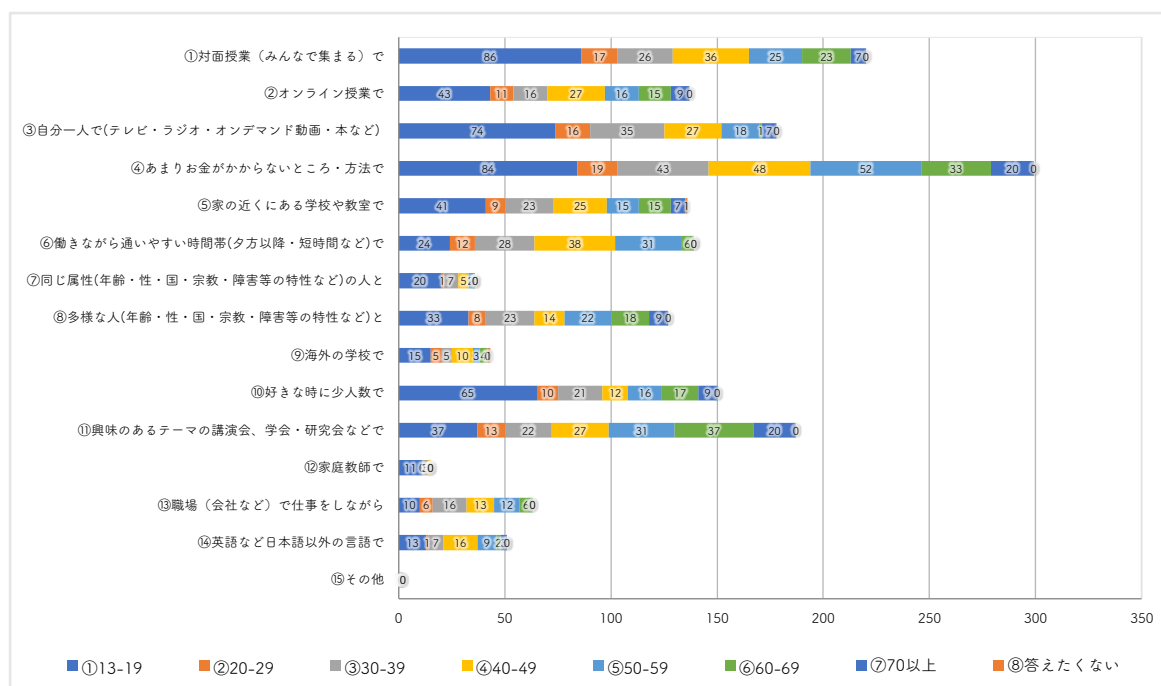
と同じ属性の人同士で学ぶことがあまり求められていないことが分かる。さらに、選択肢の中で最も回答が少なかったのは、外国ルーツ・非外国ルーツともに「12.家庭教師で」であった。すなわち、マンツーマンでの指導はあまり求められていない。なお、「14.日本語以外の言語で」については、当初外国ルーツの人のニーズと想定して選択肢に組み込んでいたが、実際には非外国ルーツの人の回答もそれなりに見られる。



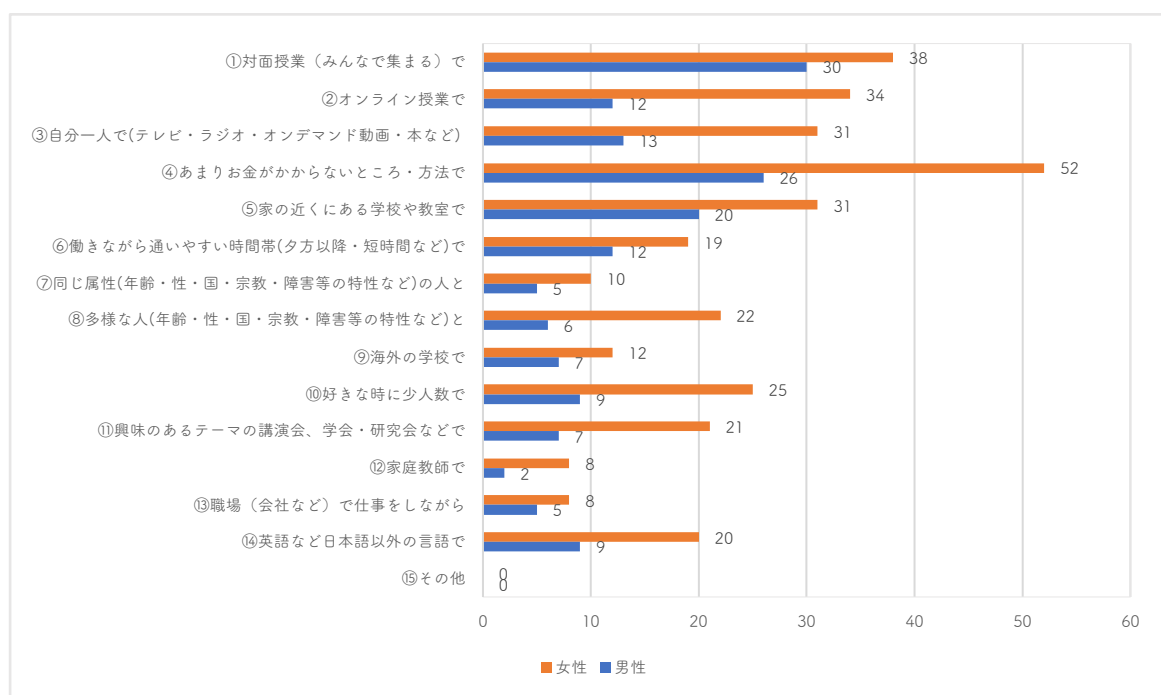
図表 4-44 [詳] 学びたい場・方法—ルーツ別



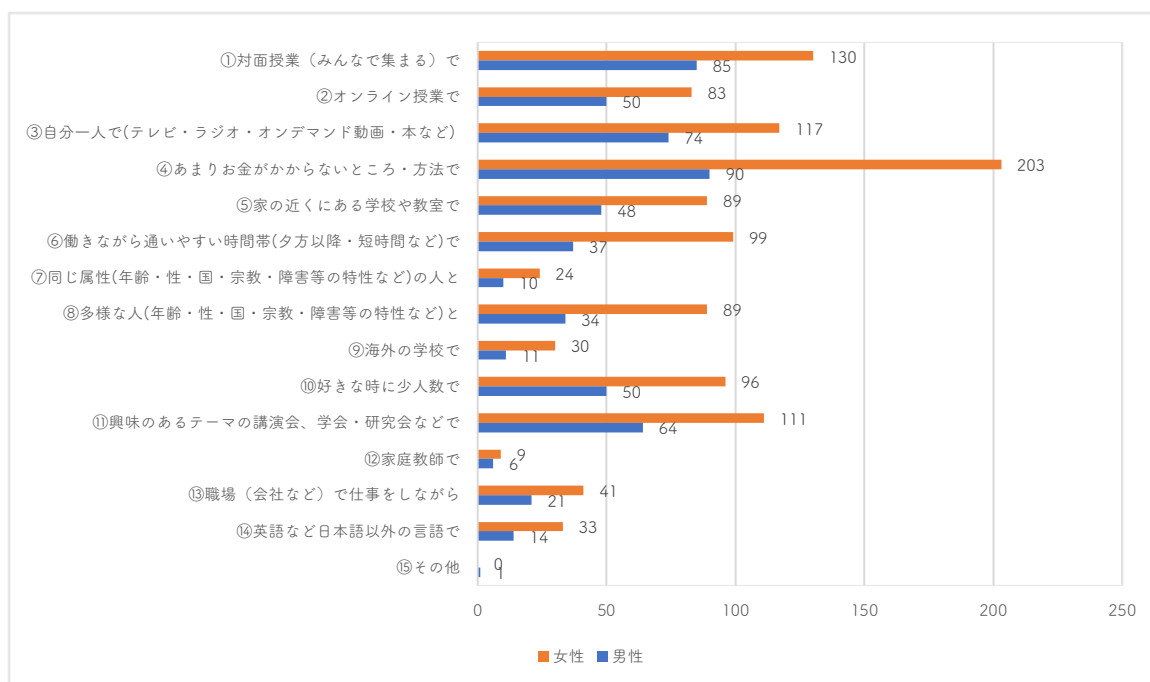
図表 4-45 [詳] 学びたい場・方法—外国ルーツ・年代別



図表 4-46 [詳] 学びたい場・方法—非外国ルーツ・年代別



図表 4-47 [詳] 学びたい場・方法—外国ルーツ・性別



図表 4-48 【詳】 学びたい場・方法—非外国ルーツ・性別

学びたい場・方法として「1.対面授業で」「2.オンライン授業で」「5.家の近くにある学校や教室で」「12.家庭教師で」と回答した人に対しては、どのような人(性格、出身国、話す言語、教え方、教員経験など)に教えてほしいかを自由記述で尋ねている。図表4-49、4-50、4-51はそれぞれ、外国ルーツ、非外国ルーツ、ルーツ不明者の記述で、同じような回答をまとめた上でリストアップしたものである。

図表4-49を見ると、外国ルーツの回答者は、多言語に堪能であることや個性・多様性を尊重してくれる人、生徒の抱えている困難を理解して助けてくれるような心の広い人を求めていると考えられる。一方、図表4-50を見ると、非外国ルーツの回答者は、優しさや熱心さを求める点では外国ルーツの回答者が教師に求めているものと共通であるが、信頼できる人であることなども重視されている。

I want to be taught by a teacher who knows both Japanese and English and have a lot of knowledge (日本語と英語の両方ができ、知識が豊富な先生に教えてもらいたい)

Patient and know the subject well (忍耐強く、そのテーマをよく知っている)

Any that is open to students' individuality and that has passion towards teaching (生徒の個性を尊重し、教えることに情熱を持っている人)

Uma pessoa mente aberta, que entenda a dificuldade do aluno e tenta ajudá-lo nesse quesito. Qualquer país de origem contato que ensine japonês. (学生の困難を理解し、この点で彼らを助けようとする、心の広い人。出身国を問わず日本語を教えてくれる人)

Pequeno grupo (小さな集団)

Que conheça outro país (experiência com cultura e valores, visão além da cultura japonesa) (異国を知る(文化や価値観の体験、日本文化を超えたビジョン))

経験豊富な先生に習いたいです。真面目な人、親身な人
ネイティブの英語スピーカーがいいです！！
優しい性格、海外出身、英語か母国語、実際に対話で教えてくれる教え方、ベテラン
教員経験以外で社会的に働いた経験がある人
1人1人にちゃんと教えてくれる人
温かく見守って欲しいけど、課題などやらないとダメな事はしっかり伝えて欲しい。
宗教に対する知識が十分にあり、普通の生徒と同じように優しく接して欲しい
熱心で面白い人、経験がある人、日本語で、わかりやすい教え方、楽しい人、聞き上手な人
いろんな国の先生から学びたいです。
おしゃべりでフレンドリーな人です。他の国籍の方でも教えてほしいです。実践、シナリオに元図いた応用を交えた詳細な説明をしてほしい
辛抱強く励ましてくれるのがベストです。また、会話スキルに焦点を当ててクラスだと嬉しいです。
外国人差別がない人

図表 4-49 [詳] どのような人に教えてほしいか—外国ルーツの回答

優しい人
興味を持たせるような授業をしてほしい
真剣に分かるまで教えてくれる人
専門分野の知識のある方、専門家
出身国にはこだわらないけど、日本語で分かりやすく
わかりやすい人
少しのミスで叱りつけない人
声が聞き取りやすい人
親身になってくれる人
しっかりと向き合ってくれる人
自分の分からないところを気づいて教えてくれる人
博識で寄り添ってくれる人
日本語を話せる外国籍もしくはユニークな人
教員経験のある塾講師や高校教師
聴覚障害者にわかりやすく教える人
多角的視点を持つ方
直接人と喋るのが苦手だから
英語を話せる日本人
信頼できる人です
日本人で日本語

図表 4-50 [詳] どのような人に教えてほしいか—非外国ルーツの回答

職員経験のある人。性格に問題が無い人(暴言・暴力等)
会計士、ネイティブスピーカー
不明点などについて自分自身から質問がしやすく、わかりやすく回答してくださる人
教え方が上手で話が面白い人、つまらない授業をしない人
人間性がある人
市町村単位で、図書館や公民館などで興味のある課題について学べる機会がと良い、年齢や性別などを間違わない方

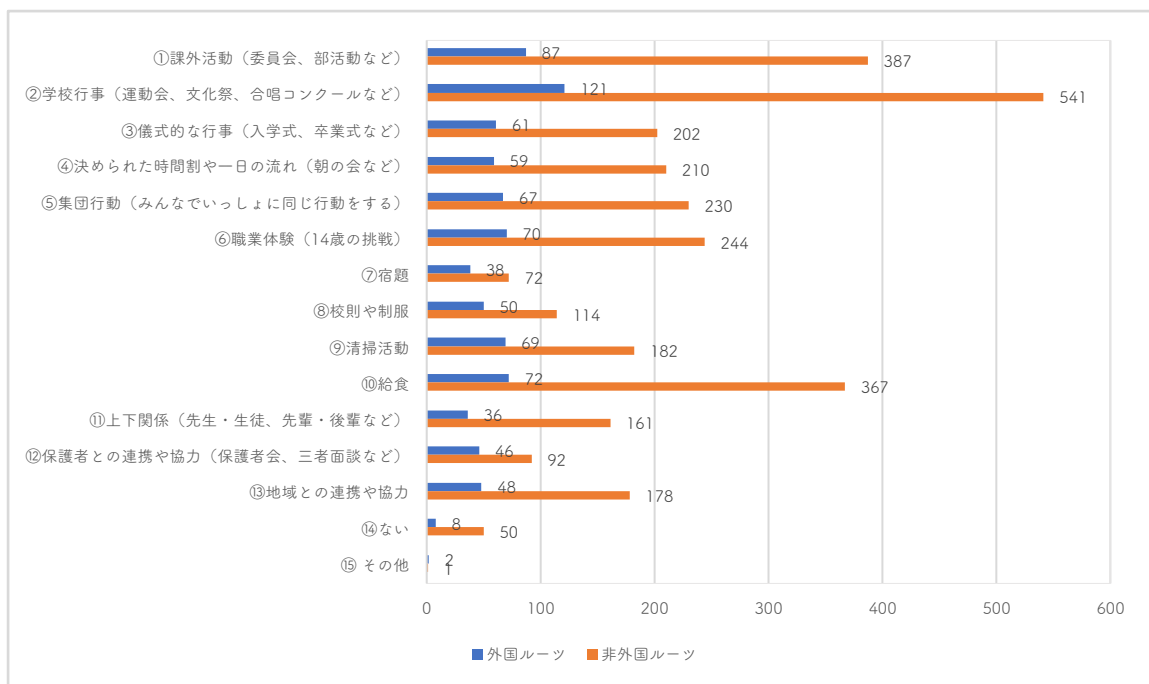
図表 4-51 [詳] どのような人に教えてほしいか—ルーツ不明者の回答

4.2.3.1.3.日本の学校生活についての評価

4.2.3.1.3.1.日本の学校生活で良いと思うところ

本アンケートでは、日本の学校生活に関して、どのような点が良いと思うか(【問2】)、あるいは良くない(改善してほしい)と思うか(【問3】)を尋ねている(複数回答可)。

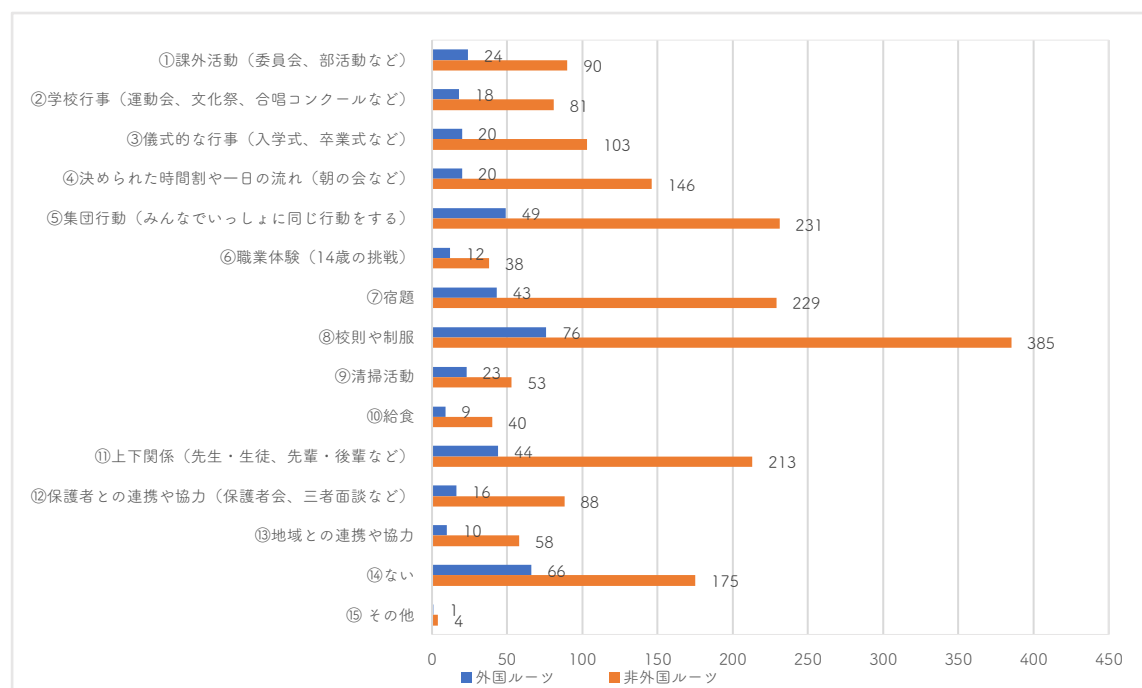
日本の学校生活で良いと思うところについての回答をルーツ別にまとめたものが、図表4-52である。図表4-52を見ると、「2.学校行事」や「1.課外活動(部活など)」、「10.給食」が、外国ルーツ・非外国ルーツに共通して高い評価を得ている。



図表 4-52 [詳] 日本の学校生活の良いところ—ルーツ別

4.2.3.1.3.2.日本の学校生活で良くないと思うところ

日本の学校生活で良くない(改善してほしい)と思うところについての回答(複数回答可)をルーツ別にまとめたものが、図表4-53である。図表4-53を見ると、外国ルーツ・非外国ルーツに共通して「8.校則や制服」「5.集団行動」が多い。その他、「7.宿題」「11.上下関係」も共通して多い。一方、良くないところが「ない」と回答している人も少なくなく、外国ルーツの回答では選択肢の中で2番目に多い。



図表 4-53 [詳] 日本の学校生活の良くないところ—ルーツ別

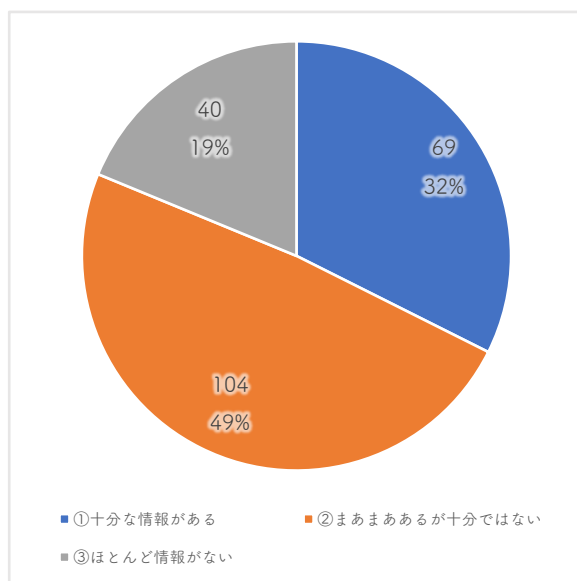
4.2.3.1.4.学びや進路に関する情報の入手について

4.2.3.1.4.1.情報が十分に得られているかについて

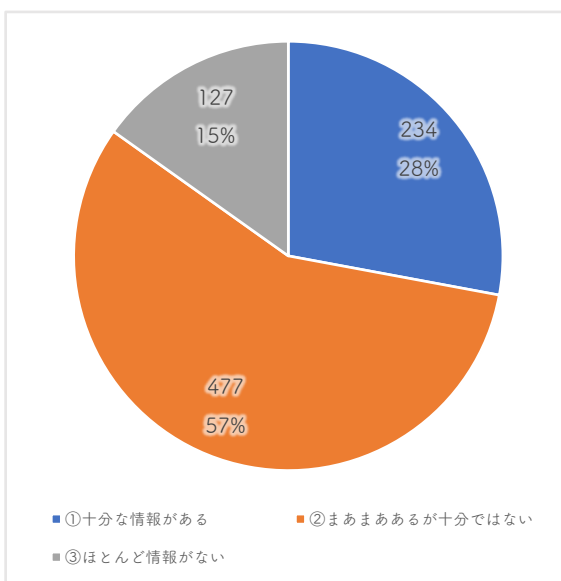
【問4】は「あなたは、学びや進路(学校を卒業したあとの進学や就職)について、十分な情報がありますか。または、過去、進路を選ぶときに十分な情報がありましたか」と、情報の入手状況について尋ねるものである。回答の選択肢は「①はい、十分な情報がある(十分な情報があった)」「②まあまあ情報があるが、十分ではない(まあまあ情報があったが、十分ではなかった)」「③いいえ、ほとんど情報がない(ほとんど情報がなかった)」である。図表4-54は外国ルーツの回答結果、図表4-55は非外国ルーツの回答結果、図表4-56と図表4-57は外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれ年代別に各回答の割合を示した帯グラフである。

図表4-54と図表4-55を見ると、外国ルーツ・非外国ルーツともに「②まあまあ情報があるが、十分ではない」「③ほとんど情報がない」合わせて8割を超えている。意外にも、非外国ルーツの方が「②十分ではない」という回答の割合が高く、「①十分な情報がある」の割合が低い。図表4-56と図表4-57を見ると、外国ルーツの10代と非外国ルーツの10～20代は4割弱が「①十分な情報がある」と答えているものの、全体的に、ルーツや世代に関係なく情報は不足してい

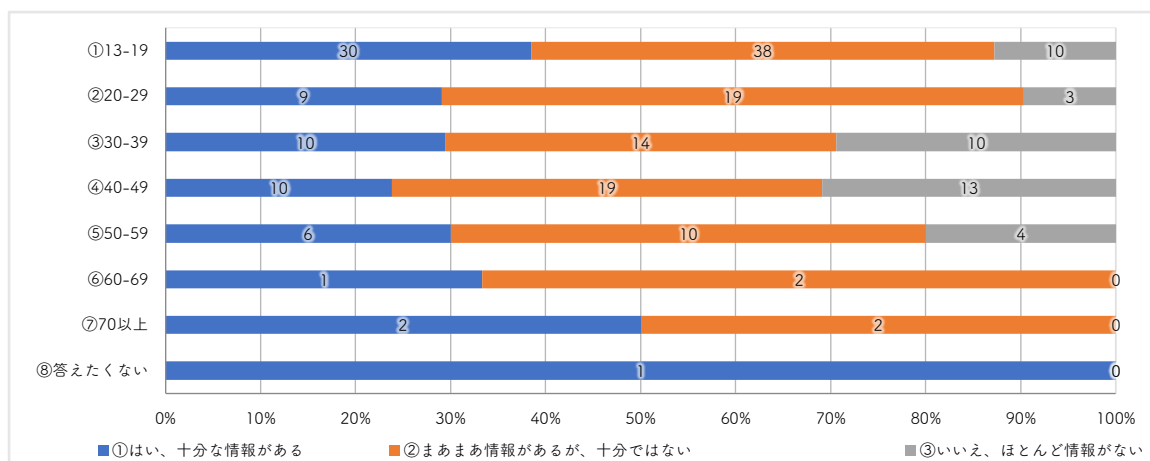
ると言ってよい。特に、外国ルーツの30～40代は約3割が「③ほとんど情報がない」と回答している。



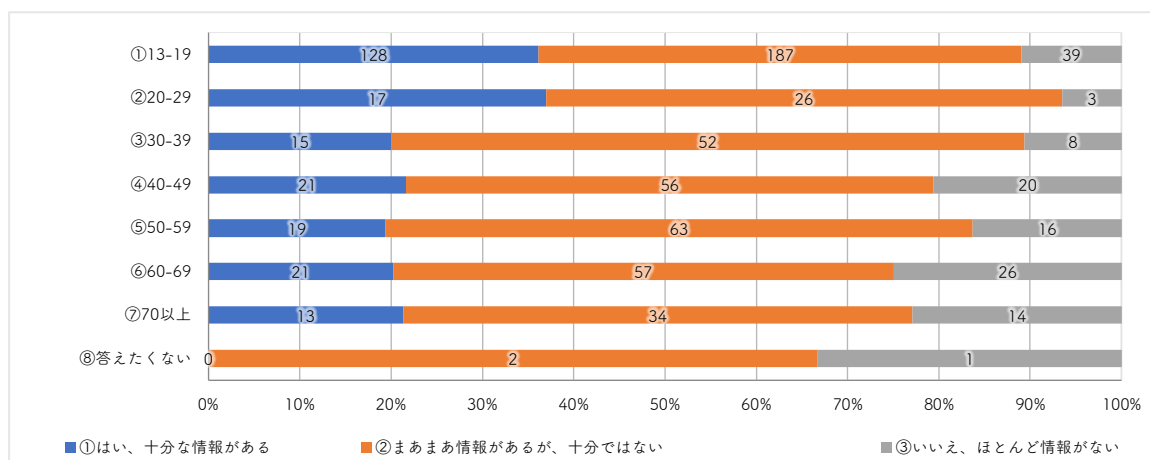
図表 4-54 [詳] 情報量の十分さ—外国ルーツ



図表 4-55 [詳] 情報量の十分さ—非外国ルーツ



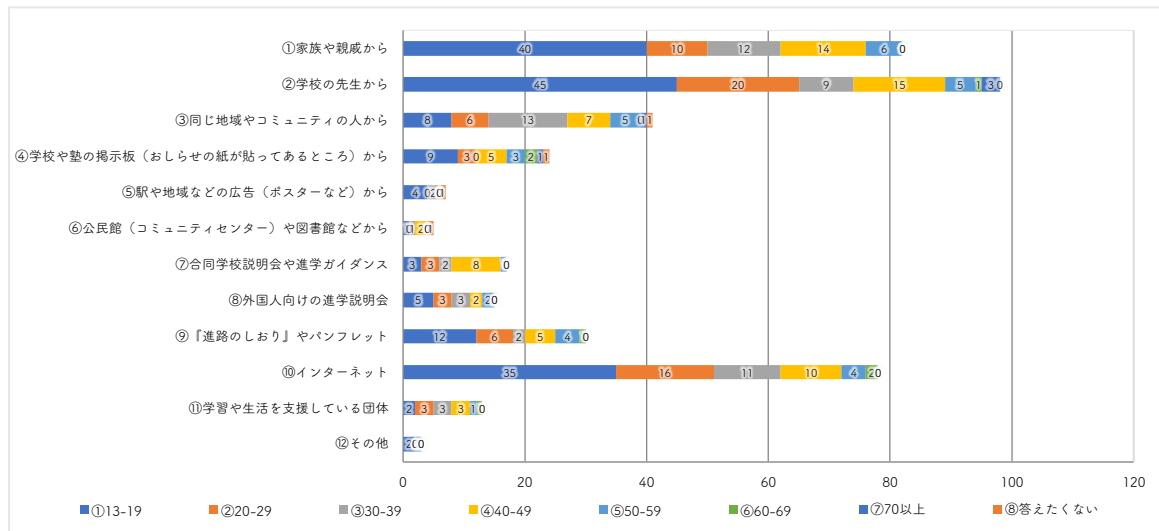
図表 4-56 [詳] 情報量の十分さ—外国ルーツ・年代別



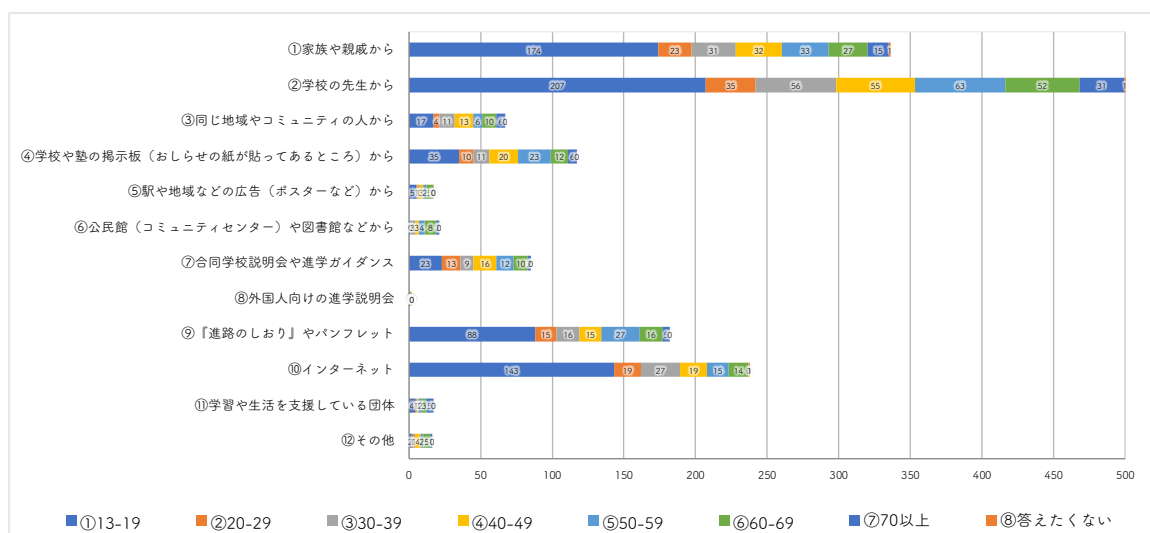
図表 4-57 [詳] 情報量の十分さ—非外国ルーツ・年代別

4.2.3.1.4.2.情報の入手元について

【問4】で「①十分な情報がある(十分な情報があった)」 「②まあまあ情報があるが、十分ではない(まあまあ情報があったが、十分ではなかった)」と回答した人に対しては、その情報を誰から／どこで得たかを尋ねている(複数回答可)。図表4-58と図表4-59は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの情報の入手元に関する年代別積み上げグラフである。図表4-58と図表4-59を見ると、外国ルーツ・非外国ルーツともに幅広い年齢層で「2.学校の先生から」「1.家族や親戚から」の回答が多く、特に非外国ルーツの20代以上の回答はこの2つに偏っている。また、「10.インターネット」も外国ルーツ・非外国ルーツともに回答が多いが、年代別の内訳を見ると、非外国ルーツの場合は10代が中心なのに対して、外国ルーツは20代以上も回答者が少なくない。外国ルーツの人にとって、インターネットは翻訳しやすいというメリットがあるため、幅広い年代で活用されているのではないだろうか。4番目に回答が多いのは、外国ルーツの場合は「3.同じ地域やコミュニティの人から」で、全年代で回答が見られ、非外国ルーツの場合は「9.『進路のしおり』やパンフレット」で若い人を中心に回答が多い。書籍やパンフレットは日本語のみで書かれていることが多い一方で、同じ言語コミュニティの人からの口コミであれば日本語が分からなくても情報を得ることができる。3の回答が多いことは、外国人コミュニティ内の口コミの影響の大きさを示していると言える。このように、言語の壁の有無が外国ルーツと非外国ルーツの情報の入手手段の違いに表れていると考えられる。その他、「8.外国人向けの進学説明会」や「11.学習や生活を支援している団体」は、非外国ルーツに比べると外国ルーツの回答が目立つが、全体の回答数としては多くない。周知不足が原因として指摘できるかもしれない。



図表 4-58 [詳] 情報の入手元—外国ルーツ・年代別



図表 4-59 【詳】 情報の入手元—非外国ルーツ・年代別

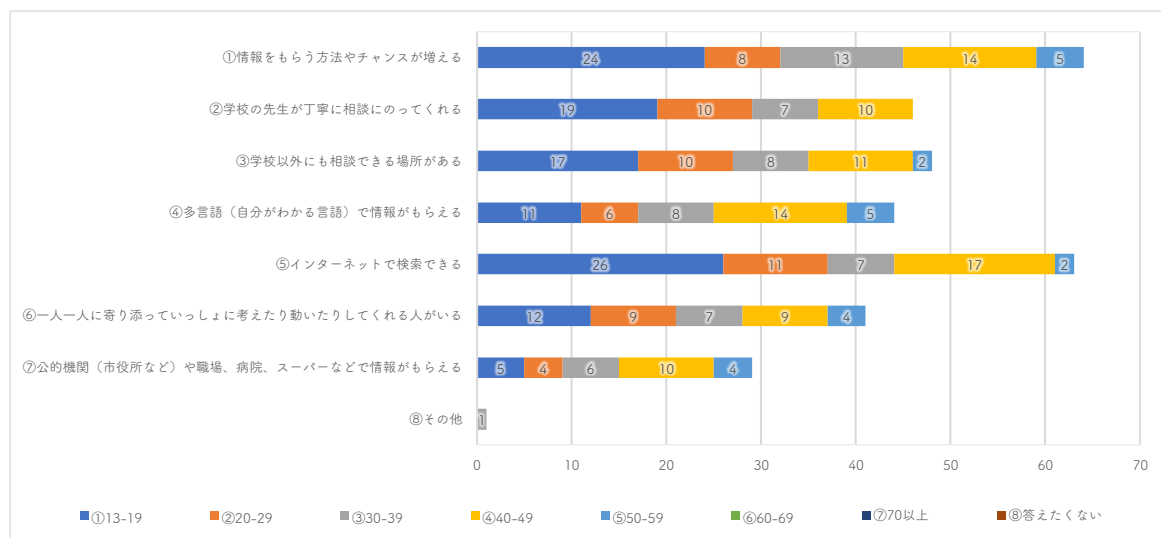
4.2.3.1.4.3. より良い情報源のあり方について

【問4】で「②まあまあ情報があるが、十分ではない(十分な情報があった)」「③ほとんど情報がない(ほとんど情報がなかった)」と回答した人に対しては、どうすれば情報を得やすいと思うかを尋ねている(複数回答可)。図表4-60と図表4-61は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの情報を得やすいと思う方法に関する年代別積み上げグラフ、図表4-62と図表4-63は外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれ男女別に各回答を選んだ割合を示した帯グラフである。

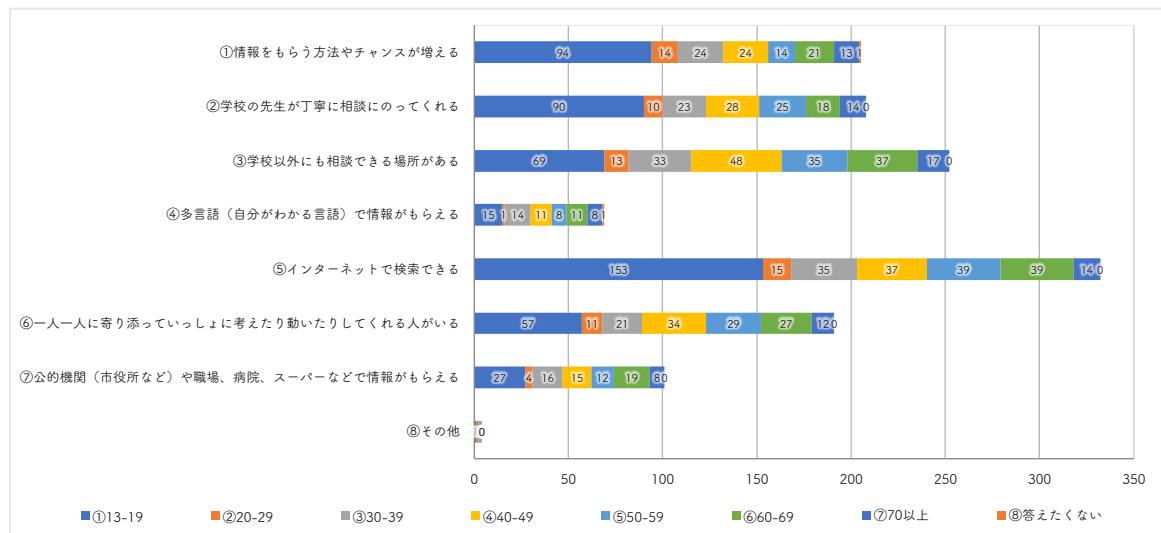
図表4-60と図表4-61を見ると、非外国ルーツで最も回答が多いのは「5.インターネットで検索できる」で、10代の回答の中では飛び抜けて回答数が多い。2番目に多いのは「3.学校以外にも相談できる場所がある」で40代の回答の中では最も回答数が多い。一方、外国ルーツで最も回答が多いのは「1.情報をもらう方法やチャンスが増える」、2番目が「5.インターネットで検索できる」で、いずれも幅広い世代で支持されている。外国ルーツの場合は、日頃から情報を得る機会自体が少ないと感じていることが窺える。また、「4.多言語(自分がわかる言語)で情報がもらえる」は、外国ルーツの回答が一定数(5番目に多い)あるが、10代の回答は意外とあまり多くなかった⁸。

図表4-62と図表4-63で男女の違いを見ると、外国ルーツ・非外国ルーツに共通して、男性の方が「1.情報をもらう方法やチャンスが増える」を選んだ割合が大きく、女性の方が「3.学校以外にも相談ができる場所がある」を選んだ割合が大きい。外国ルーツの特徴として、女性の方が「4.多言語(自分がわかる言語)で情報がもらえる」を選んだ割合が大きいこと、非外国ルーツの特徴として、男性の方が「5.インターネットで検索できる」を選んだ割合が大きく、女性の方が「2.学校の先生が丁寧に相談に乗ってくれる」を選んだ割合が大きいことが挙げられる。

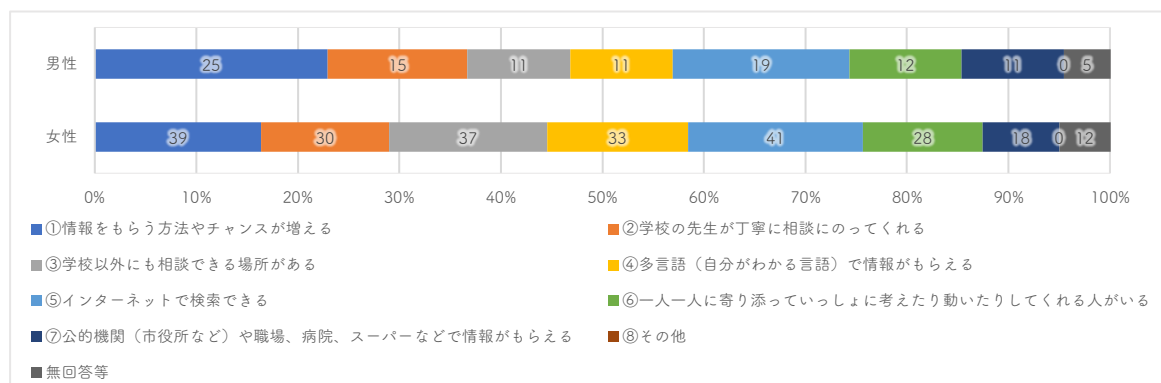
⁸ 非外国ルーツでも「4.多言語(自分がわかる言語)で情報がもらえる」の回答が69あった。これについては、回答者が「多言語(自分がわかる言語)」を「やさしい日本語」「わかりやすい表現」という意味で捉えた可能性や、【F0】で外国にルーツがないと回答したが、実際には得意な言語が日本語以外である(本調査では「外国にルーツがある」と捉えている)人であった可能性、もしくは本設問に対して自分のことではなく一般論として答えた可能性などが考えられる。



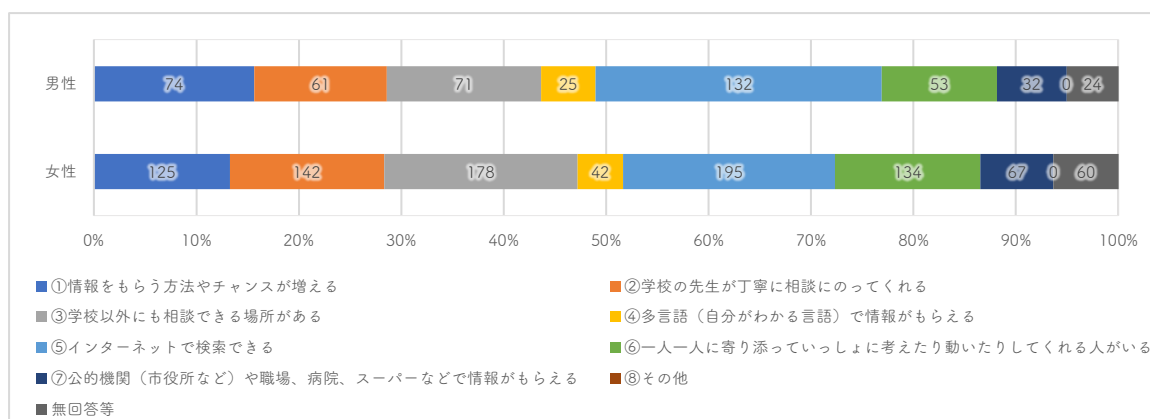
図表 4-60 [詳] 求められる情報源—外国ルーツ・年代別



図表 4-61 [詳] 求められる情報源—非外国ルーツ・年代別



図表 4-62 [詳] 求められる情報源—外国ルーツ・性別



図表 4-63 [詳] 求められる情報源—非外国ルーツ・性別

4.2.3.1.5.自由記述について

4.2.3.1.5.1.人生の夢や目標について

【問5】では回答者の今後の人生の目標や叶えたい夢について尋ねている。図表4-64は外国ルーツ、図表4-65は非外国ルーツ、図表4-66はルーツ不明者の回答である。ここでは、回答をそのまま列挙する(ただし、ほとんど同じ内容の回答は一つの回答で代表させている)。

日本の高校へ行く
日本語を勉強して日本の大学に行きたいです。
パキスタン人の子供のために英語、日本語とウルドゥー語を学べるような学校が日本にあってほしいです。日本の学校に行っているパキスタンの子供は、自分の国の言葉または英語を学ぶ機会がありませんので、この2つの言語忘れていきます。
日本語を早く習得し、流暢にコミュニケーションが取れるようになり、日本の大学の学習環境に適応できるようになり、クラスメイトと友好的な関係を築くことであり、夢は適切な仕事を見つけて頻繁に中国に戻り、家に帰り、家族に会って、欲しいものを手に入れることです。
大学で勉強
祖国や日本で人々を豊かにし、幸せに暮らせる産業を作りたい
正式な仕事を探す
商社/輸出入貿易
日本での就職
健康になって旅行しましょう
ソフトウェア工学、IT工学
私は良いリーダーであり学習者になりたいです
将来は自分のビジネスを持ちたいです
異文化についてもっと学び、体験し、より多くの人々と出会いたいです。自分とは異なる可能性のある他者を理解し、受け入れるためには、できるだけ多くの異なる人々や文化に自分自身をさらすことが重要だと思います。

私も将来的には結婚して家庭を持ちたいと思っています。
生活するのに十分な収入を得る
自由に税金を払えて、旅行に余裕があり、楽しく働きたい場所で働きたい。
自分の人生を生きてお金を稼ぎ、それを将来のために使いたいです
安定して楽しい仕事を見つける
世界中のどこにいても良い仕事に就くために、もっと勉強したいです
私は日本に住んで、優秀な大実業家になりたいです
日本語を学ぶ
研究分野でキャリアを築く
独立して事業を営む
歴史家になってヨーロッパに移住したい
私たちの子供たちにはインターナショナルスクールが必要です
私は、アメリカに戻る機会はありません、今後もありませんので、死ぬまで日本に居られる安定した仕事に就きたいと思っています。
私は言語に興味があり、日本語を学ぶのが好きですが、残念ながら定期的に話せる日本人の友達がいません。 私は教師兼翻訳者になりたいので、母国(フィリピン)で日本語を教えたり話したりできるくらい流暢にスキルを向上させるために最善を尽くしています。
私は今のキャリア(ネイル技術)を向上させたいと考えており、将来的にはスキルを教えるためにネイルスクールを組織するかもしれません。将来自由な時間があれば、インテリアデザインや栄養学の勉強にも興味があります。日本には絶対に残りたくないの、モザンビークかカナダへの移住を考えています。夫のビジネスをサポートしたいので、その成功を祈っています。ビーチに大きな家を建てて、愛する夫と美しい家族を築きたいです。
家と職場の近くで日本語を学びたい
私は高収入で、興味深く、国際的な仕事がしたいです。 また、もっと旅行するのも良いでしょう。
自分のビジネスを持ちたい
仕事を順調に続け、趣味を追求してください。
日本語を勉強して日本の大学に行きたいです。
海外に住んで教育を受けてIT分野で働きたい
残りの人生を楽しむための強力な経済的クッションを持ち、必要なときに適切な医療を受けたいと考えています。ありきたりですが、50歳になった私にとって今はこんな感じです。
私は生活や仕事で自由にコミュニケーションがとれるように、また漢字の読み書きができるように日本語を学びたいと思っています。
私の人生の目標は、ここ日本に住んで子供たちに教えることでした。 しかし、滞在許可すら拒否されるため、ここにずっと住むことは不可能です。
日本で子どもたちを教育する
税金を自由に支払え、旅行に行く余裕があり、仕事を楽しめる場所で働きたい

私は成長したい、さまざまな人とコミュニケーションを取りたい、たくさん旅行したい、たくさんお金を稼ぎたいです
子供達や自分の道を見つけるのが難しい人たちを助け、自己認識に対処する、家を建てる フリーランサーになる
休日を企画するためのクリエイティブチームの結成。目標は子供たちを教育することですが、夢は個人的なものです。私は子供を育てて自分のために生きることを夢見ています:) お金を稼ぎ、たくさん旅行し、家を建て、子供たちを教育します。
体育教師
日本語を学ぶことで社内でのコミュニケーション、レストランでの注文、電話応対、相手の言っていることが理解できるようになる
料理
プロになって教えられるようになりたい
富山地域で、より地域とのつながりができるように
英語か日本語を話し、接客や他の外国人のサポートなど、自分の持ち物を活かして給料の高い仕事を見つけたいです
母国に帰りたいです
日本語を学び、今も受け続けている高等教育コースを卒業します。
日本に住む外国人としての自分を安定させ、言語を習得し、家族とよく会う
自分のビジネスを持ち、そのビジネスに必要なライセンスを取得し、現在勤務している航空会社に所属しています。kaigo
より良い仕事を見つけるために日本語を学び、興味のあるコースを受講してください。自分の家を所有しましょう。
日本語を学び、日本で家族と仲良く暮らせること
私たちの子供たちにはインターナショナルスクールが必要です
日本に外国人のためのインターナショナルスクールを見ることができることが夢です。
ムスリムの子どもたちが5教科や保健体育、家庭科、芸術等の科目とともにイスラム教についての基礎知識を学ぶことや集団で礼拝を捧げることができる学校を設立すること。

図表 4-64 [詳] 人生の夢や目標について—外国ルーツの回答

イラストレーターになりたい
将来的には海外で生活がしたい。日本語教師とか
日本を外国人にとって過ごし安い国にしたい
病院で看護師になりたい！
志望校に合格してスペックを上げたい
今は世界(日本含め)を少しでもいい場所にしたい。
バイトで人の役に立てるよう頑張りたい
お父さんが働いている仕事で頑張りたい
就職したい多分

ハリウッドスター
楽しく幸せに生きていきたい
色んな国を回りながら絵を描きたい
日本で自分のスキルを活かした仕事につく
お金を稼いで好きなことをしたい
声優
I want to live by myself, for myself, truly. (自立して自分自身で人生を歩みたい、切実に。)
自分の好きなことにたくさん挑戦したい
自分にとってやり甲斐があり、次の世代のみなさんのお役にも立てるような仕事
幸せだと思える人生をおくこと
安定した収入を得られる
自分のやりたいことが出来る様にたくさん勉強する。
誕生日にはありがとうを言いましょう。それをこれからも続けたい。世界中の人が自分の誕生日にありがとうを言うことが夢。
私の息子は、ADHDで、ディスレクシアです。色々な支援を受けながら学校に行っていますが、進路や将来のことへの不安が大きいです。そういった支援が必要な児童に適切な教育がいきわたるようにしたいと思っています。
保育士免許の取得
やりがいのある職場につきたい
海外で助産師として働きたい。
裕福な家庭
公務員職につくこと、海外の国を見て回ること
不登校の子など悩んでいる子を助ける仕事をしたい
大学で合格し、美術を学びたい
空港で働きたい
アジア圏で幅広く活動したい。語学を活かして。
将来父親のように大学で工学を学ぶか、教室でダンサーになりたい
海外で青年海外協力隊として働くか、もしくは日本語教師として働きたい
東京で美容整形外科の開業医になりたい
水族館で学芸員、もしくは飼育員として働きたい
海外と繋がる仕事
世界中の観光地巡り
ミシガン大学へ行く
動物を助けたい
日本語教師になること
大学で自分の学びたい分野を学ぶこと
薬剤師

自営業をしたい
家で働けるように稼ぎたい
会社ではなくどこかの店員として働く
退職後、大学などへ聴講に行きたい
もう少し語学を鍛え、どこへ行っても生活に馴染めるようにしたい
介護福祉士になる
日本の高校へ行く
世界を視野に入れた教育に携わりたいです。
日本で医者になりたい
退職し時間があれば、海外で日本語教師を再び目指したい。あるいは県内で機会があれば考えたい。
ヴァイオリンを弾けるようになりたい。神秘的な場所やリラックスできる場所にたくさん行きたい。
自分で勉強をがんばって他の人の役に立ちたいです。
教育が大事だから学びたいです。
パキスタン人の子供が日本人の子どもと一緒に学びやすいところが欲しいです。
自分の日本語力を高めて日本にいる外国人を助けたいです。
教育は重要なので、できるだけ多くのことを学びたいのです。
日本でいる外国人のために無料で勉強できるような学校を作りたいです
パキスタン人の子供のために英語、日本語とウルドゥー語を学べるような学校が日本にあってほしいです。日本の学校に行っているパキスタンの子供自分の国の言葉または英語を学ぶ機会あまりないのでこの2つの言語忘れていきます。
私の夢は医者になることです
いい教育を受けていい仕事に就きたいです。
良い教育を受けて良き市民になりたいです
日本で専門学校(短期大学)学びたい
ロシア語学校で子ども達に少なくとも1年間レッスンを教えたい
早く引退し、営業をしたいです。
わたしは平和で満足した生活を送りたいです。自分の農場を持ち、日本にいる間に日本語を流暢に話せるようになりたいです。
仕事ができるように日本語を上達させたいし、もっと多くの日本人とコミュニケーションをとって日本での生活を楽しみたい、たくさんの人と話せば良い経験になると思うから。
私は成功者になり、完璧な人生を送りたいです。できるだけ多くの知識と自信を獲得したいです。社会に顕著な貢献をしたいです。
引退する時までにはたくさんのお金を貯めること。
自分のコーヒーショップとビーチリゾートを開きたいです、ビジネスオーナーとして成功したい、家族と一緒に他の国を旅行したい。

私の人生の目標の一つは、家族に良いライフスタイルを提供すること。
私はフィリピンに自分の家とビジネスを持ちたいと思っていました。ここ日本での契約が満了したら、人事担当者としてのキャリアを追求したいと思っています。一流企業の一員になることが私の最終的な目標の一つです。ここ日本で、労働法や言語や心理学に関連することについて学び、知識を広げる機会があれば、喜んでその機会を利用したい。
SSW(スクールソーシャルワーカー)になりたい。
経済的に独立し、家族に豊かな生活を提供すること。
次の世代の子が学習するに困らないようサポートする。
生きている間健康で生活を送る様にとだけ思っています。楽しく、笑う事が多くあれば良いだなと思います。
学校に行って卒業して、高等教育を受けないといけない、みたいな社会的な流れから外れてでもいいから、自分が自分でいられる人たちと自分が自分でいられる場所でゆっくり暮らしたい。
今のところは結婚したいです。そして、働きながら何らかの方法でキャリアと生活で使える知識とスキルを身につけたいです。今はオンラインでプログラミングを勉強しているため、そのスキルと日本語の知識を活かすことができる仕事がしたいです。
海外の大学で学ぶこと。
ファッションが好きなのでロンドンかパリでのんびり暮らしたい。

図表 4-65 [詳] 人生の夢や目標について—非外国ルーツの回答

今の職場で働きながら資格を取りたい
語学(英語)を学び、海外の方と気楽に話したり、職場では海外の方はいないが入社されたら、英語を使いながらサポートできたりしたい
作品(美術関係の)を残せたら良いと思っている。
外国人の日本語習得サポート
自分のスキルを活かせるを仕事をしたい。
知識を広めたい。
お金を彫金して家族に送金すること
鵜飼等
仕事をやめて時間ができたら、漢字検定や英検にチャレンジしたい。
家業を続ける。微力ながら人のために働く。
ボランティア活動を長く続ける
賞与があるところに転勤して、家の建て直したい
剎岳に登る、子供の成長を見守り、友達によりそうこと
自分が取得したいと思った資格に挑戦し取得できるようにしたい
健康で楽しく
死ぬまでに元気で自分のことは自分できるように体力をつける
今日一日楽しく生活すること。そして、明日も楽しく生活できる日であります

知らないことが多いが、知りたいと思ったことを知る機会があれば利用したいです
社会の困っている人の役に立ちたいです。
好奇心を失わず、知性を高めたいと思っています。
就職して家族を持ちたい
美容師資格を持っているので、人を綺麗に出来る仕事を手伝いたいです。
全ての人が幸せと実感する共生社会の実現、持続可能な地球環境の実現、戦争のない平和な世界の実現

図表 4-66 【詳】 人生の夢や目標について—ルーツ不明者の回答の回答

4.2.3.1.5.2.その他

調査票の最後(【問6】)の自由記述では、学校の教師に関するコメントや言語に関するコメント、富山県にはない学校を求めるコメントなどが印象的であった。いくつかピックアップして図表4-67に列挙する。

態度が悪かったり何かとケチをつけたりする、めんどくさかったり理不尽な先生。
中学時代にあなたには絶対に無理と言われオープンキャンパスの案内さえ教えてもらえなかったことがいまだに悪い思い出として覚えています。
保健体育の授業は重要だけど教科書を開いて読んで先生が20人以上の前で説明する、これは明らかに分かってない人が出沒する
特別支援学校は生徒が少ないので、なかなか他の人の意見が聞けない。
集団生活を送りながらも、1人1人に目が行き届くような余裕が教員にあるような制度になるというのではないかと(教員の働き方改善)。また私はカウンセラーや保健室の先生など心理的な支援をよく受けていたが、初めて行く際はハードルが高く行くまでが大変であった(自殺寸前の人しかいっちゃいけないような印象があった)。そうした機関をより近く、より気軽に頼れるような雰囲気作りができれば、さまざまな困りごとが小さいうちに改善できるケースも増えると思う。勉強もついていくのに大変な時期もあり放課後などに先生に聞きに行っていたが、職員室の空気や仕事中に申し訳ないという思いで行きづらかった。集団での補習や追加課題ではなく、1対1で何が分からないのかから丁寧に教えてもらえるような時間があるとより勉強で躓くケースを防げると思う(現状塾や家庭教師に頼らなければならない)。
日本の教育は先生が楽に教えやすくする事を主体に出来上がってる気がする。みんなと一緒に最上主義はやめてほしい。
社会で必要な知識を学ばせてもらいたい。身だしなみ(化粧)やマナー、社会人では求められるのに、学校では一切教えてくれない。また、社会で経験した失敗談や成功話など、経験者の話。歴史を踏まえた世界の現状のこと。お金のこと。
日本は大変だからあまり好きではない。誰も日本語を教えくれなかった。子ども達は子ども達で頑張っているから応援している。
先生の生徒へのひいき・えこひいきが酷かった、特に体育教師。

もし私の街にインターナショナルスクールができれば、私たち全員にとって素晴らしいことになるでしょう。
英語と日本語両方を学べるようなインターナショナルスクールを作って欲しいです。
外国人のために国際学校を作って欲しいです。
イスラム教徒用の給食があれば、大変助かる。家族は楽になり、子供たちは喜ぶと思う。以前に富山県に要望を出した際は、人数が少ないためと拒否されたが、現在はイスラム教徒の学生が増えてきていると思う。
国際的な学校とイスラム教の勉強ができるような所が欲しいです。
LGBTQの人だけの学校
射水市では学校で行われているような、学校内での外国人に対する追加のサポートはありません。私たちのものでもこのようなものが本当に欲しいです。子供にさらに詳しく説明したり、子供と相談したりできるコーディネーター。
受験にそったものではなくもっと多様な自分の興味があることを学べる学校があればよい大人が通える学費や時間の負担が少ない学校。
不登校の子のサポートが不十分学校以外にも低料金で過ごせる場所がたくさんあるといい学校が、どの子にとっても学びが楽しいと想える場所になっていきますように。学べる場所も子ども自身が選択できるようになっていきますように。
いろいろなことを自分で選択できる学校や昔からの古い校則や習慣がない学校が良い。
自由な学校(体験からいろいろなことを学ぶ)や答えが一つではない学校になってほしいです。
勉強以外でも活躍の場面が多い学校があると、居場所を無くす子供が減るのではないか。
世界中のさまざまな学校制度には賛否両論があると思います。日本の学校は生徒を社会に貢献する人材に育てるのに効果的だと思います。日本の学校のカリキュラムはアメリカに比べて非常に良く、進んでいると思います。しかし、日本の学校生活が緊密で非常にストレスフルになる可能性があり、子供の生活が学校中心であることはそれほど良いことではないと思います。アメリカでは、学校生活と日常生活が分離されているため、生徒は他のことをしたり、学校の科目と無関係であったり、学校が提供できるものとは異なる興味に没頭したりする時間が与えられます。子どもたちは自分の個性を表現する機会が増え、発言したり自分の考えを共有したりすることをあまり恐れなくなりますが、これは日本の学生が苦勞していることだと思います。
学校での良い思い出はあまりなく、いじめにも遭ったが、諦めたことを後悔している、もっと勉強して工場以外でも働けばよかった。
それぞれのニーズに合った細かな支援。気持ちに寄り添ってくれる学校。
学校に行かなくなった子供達の次の進学先(小学→中学、中学→高校)の情報地域を地元の既存の学校(市立県立)だけではなく、県外の情報も取り入れてほしい。
障害を理由に、学校側でその夢は諦めなさいと言われた思い出がある。少しはサポートする姿勢があればそれだけで嬉しいが、学校側からも言われると挑戦する意欲がなくなる。
うちの子どもたちは小学校での画一的な教育が合わず学校に行かないことを選びました。富山県内に同じような子どもが何人いるのか知りたいです。

図表 4-67 [詳] 自由記述

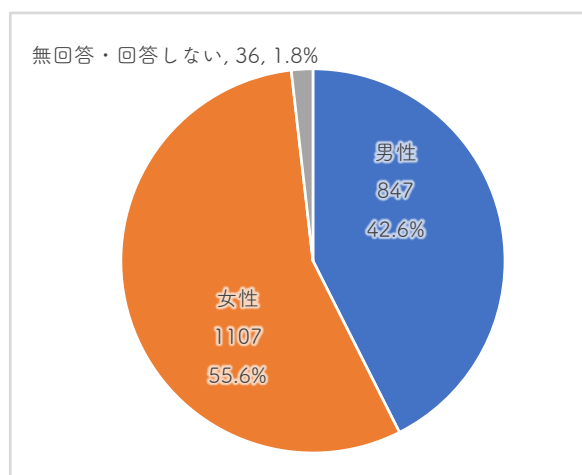
4.2.3.2. 県政世論調査

以下、県政世論調査に関する図表タイトルには〔県〕を記す。

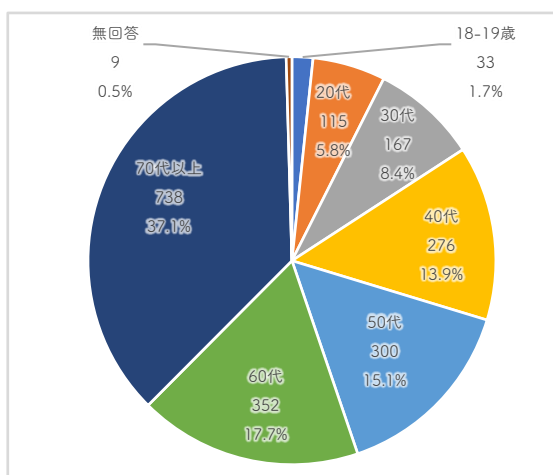
4.2.3.2.1. 回答者の属性

県政世論調査の回答者の属性は、図表4-68～4-71の通りである。詳細アンケートと異なり、70代以上の回答者が多く、10代の回答者が少ない(詳細アンケートは13歳以上を対象としているが、県政世論調査は18歳以上を対象としていることも、県政世論調査の10代の回答者が少ない要因である)。

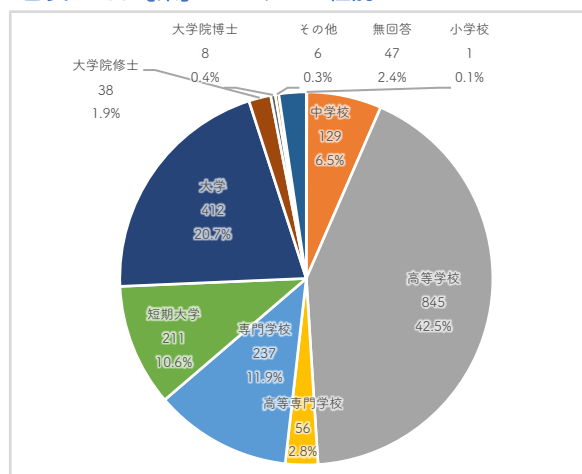
最終学歴は高卒が4割を占め、小卒・中卒も割合は小さいながら一定数いる。図表4-71は最終学歴が小卒・中卒(義務教育以下)である回答を取り出し、年代別・性別にグラフにしたものである。図表4-71を見ると、最終学歴が義務教育以下であるケースは、終戦前後に学齢期を過ごした人に多く、特に女性に多いことが分かる。とはいえ、高齢層だけでなく、20代を除き全ての年代に小卒・中卒者が見られる。



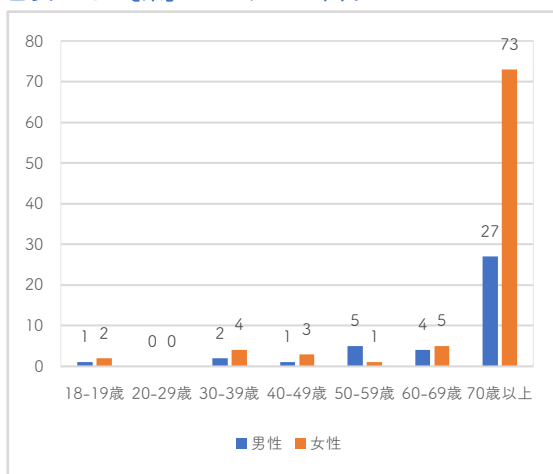
図表 4-68 〔県〕 フェイス―性別



図表 4-69 〔県〕 フェイス―年代



図表 4-70 〔県〕 フェイス―最終学歴



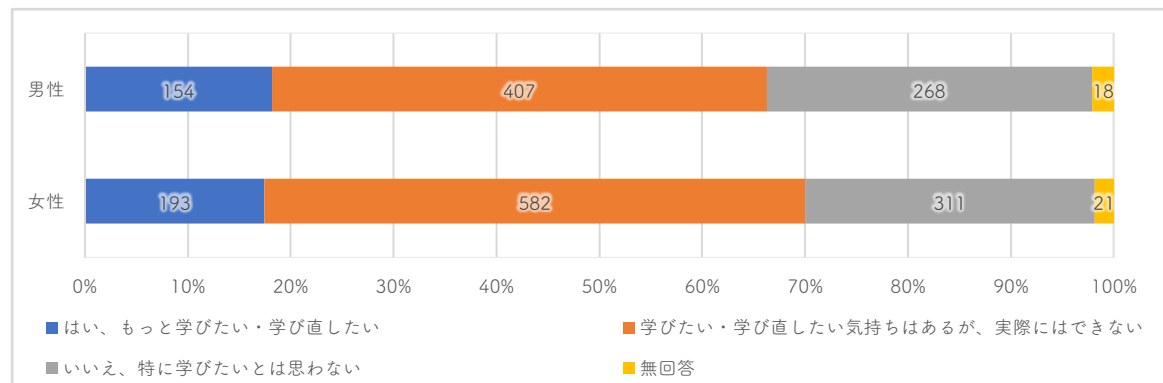
図表 4-71 〔県〕 フェイス―最終学歴が義務教育以下、性別・年代別

4.2.3.2.2.学びの希望について

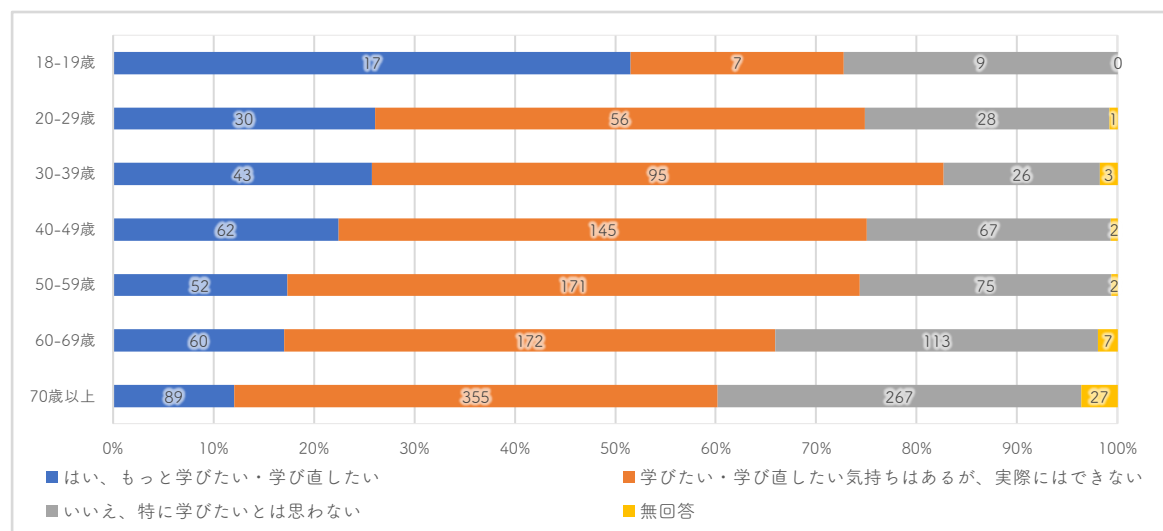
4.2.3.2.2.1.学びの希望の有無

図表4-72～4-74は、「あなたはもっと学びたい・学び直したいという気持ちがありますか」という質問に対する回答について、性別、年代別、学歴別に各選択肢の割合を示したものである。

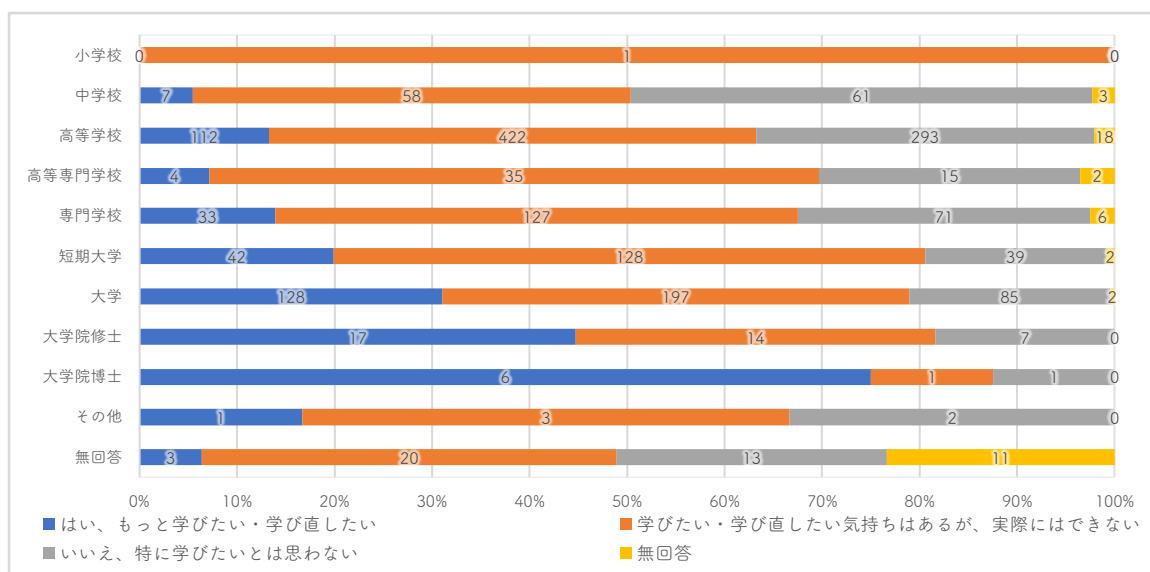
図表4-72を見ると、意欲そのものに男女差は見られないが、「学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない」という回答、すなわち、学べる状況にない人の女性の割合が若干大きい。年代別に見ると(図表4-73)、若い世代ほど積極的に学びたい・学び直したいと思っていることが分かる。ただし、働く世代、特に30代では、学びたいけれど学べないという消極的な状況にある割合が大きい。また、最終学歴別に見ると(図表4-74)、学びたいけれど学べない状況にある人の割合が、大学院卒以外のいずれの最終学歴においても40～60%と高い割合にあることが分かる。一方、学歴が高いほど学びの意欲を持っており、かつ、実際に学びが可能な状況にあることも分かる。このことは、逆に考えれば、学びの機会が与えられることによって学びの意欲は持ち続けることができるということを示しているのかもしれない。



図表 4-72 [県] 学びの希望の有無—性別



図表 4-73 [県] 学びの希望の有無—年代別

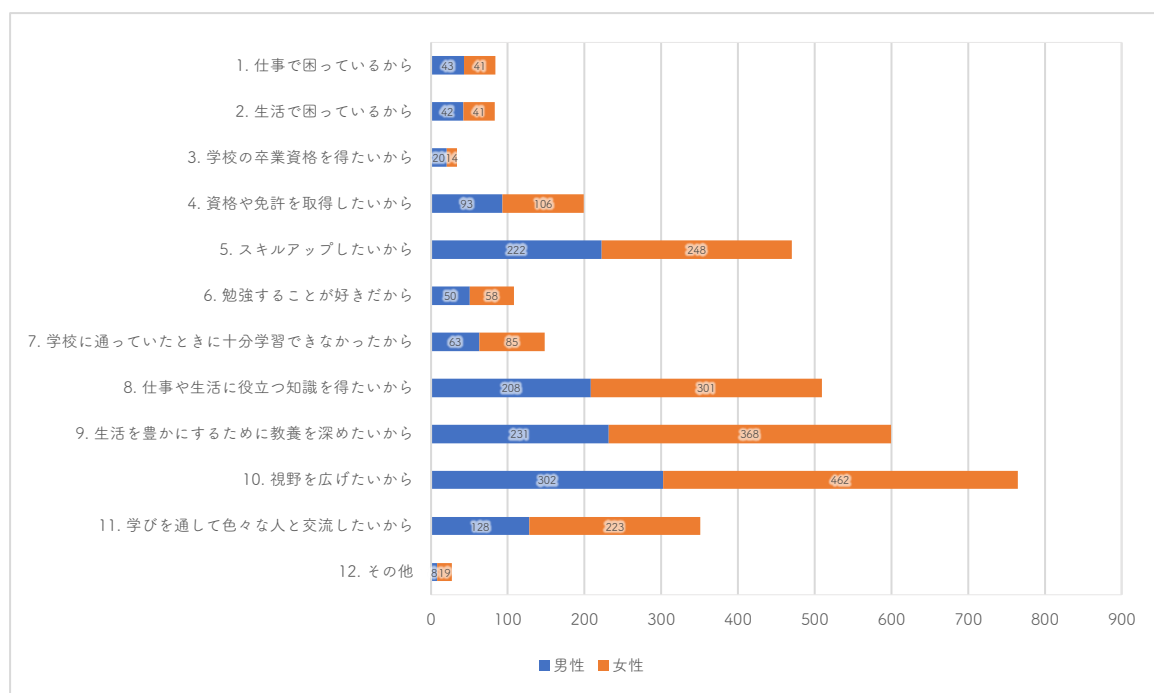


図表 4-74 【県】 学びの希望の有無・学歴別

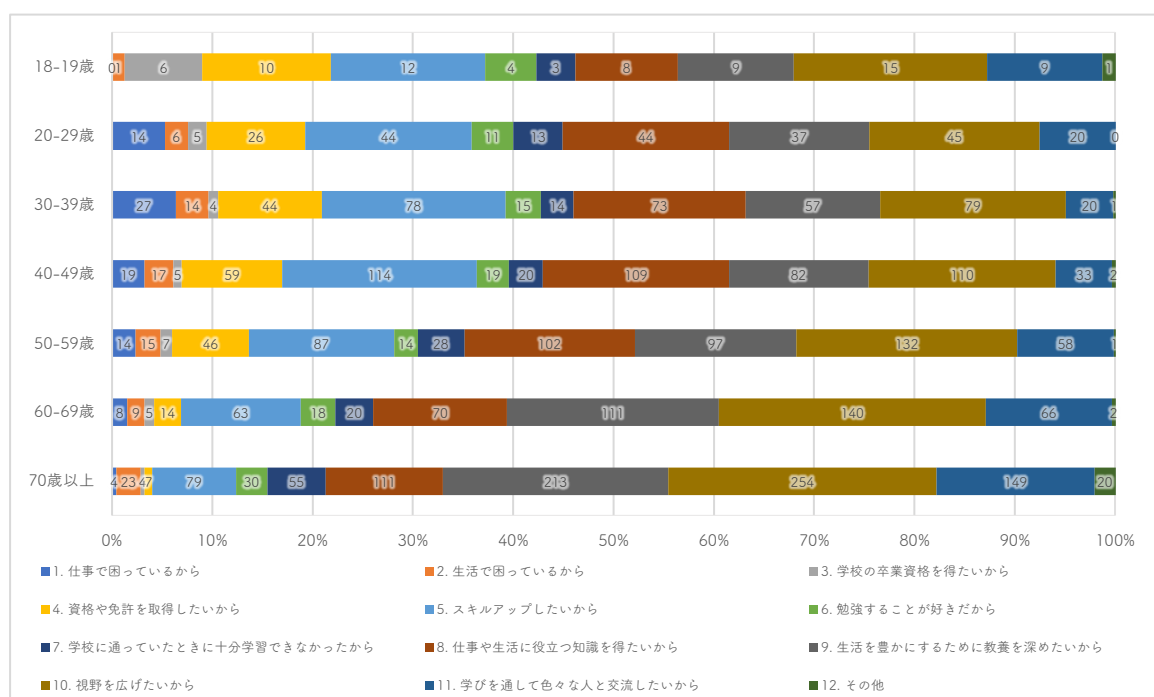
4.2.3.2.2.1.1. 学びを希望する理由

次に、学びたい・学び直したいという回答者にその理由を尋ねたところ(複数回答可)、その結果は図表4-75～4-77のようになった。図表4-75は、各選択肢の男女それぞれの回答数を積み上げて示したものであり、図表4-76と4-77は、年代ごと・学歴ごとの全回答数に占める各選択肢の回答数の割合を示したものである。

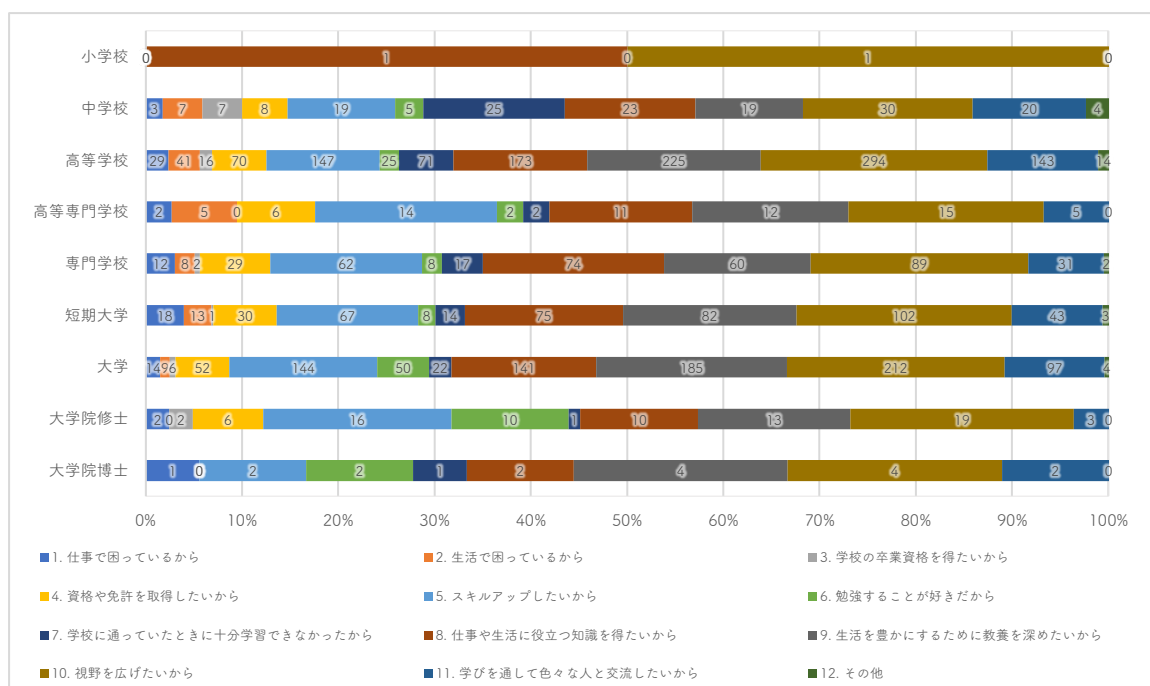
図表4-75を見ると、全体的に、「10.視野を広げたいから」「9.生活を豊かにするために教養を深めたいから」「11.学びを通じて色々な人と交流したいから」のように、学びによって人生を豊かにしたいという理由が男女ともに非常に多い。また、「8.仕事や生活に役立つ知識を得たいから」「5.スキルアップしたいから」「4.資格や免許を取得したいから」のように実利やスキル/キャリアアップを求めて学びたいという回答も男女ともに多い。一方で、回答数としては取り立てて多いわけではないが、「7.学校に通っていたときに十分学習できなかったから」のような学び直しのニーズや、「1.仕事で困っているから」「2.生活で困っているから」のように困り感を抱えて学びを求めるニーズも少なからず見られる。年代別に見ると(図表4-76)、4や5のようなキャリアアップ志向は若い世代で見られ、9や10のような教養を求める傾向は高い年代で強いことが分かる。また、学歴別に見ると(図表4-77)、中卒者において7のような学び直しのニーズや「3.学校の卒業資格を得たいから」というニーズの割合が高い。



図表 4-75 [県] 学びたい理由一性別

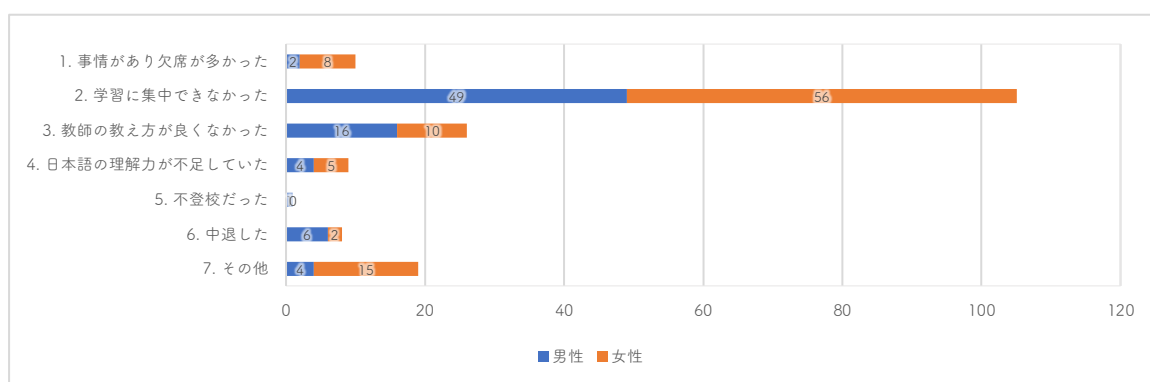


図表 4-76 [県] 学びたい理由一年代別



図表 4-77 〔県〕 学びたい理由—学歴別

学びたい・学び直したい理由として「7.学校に通っていたときに十分学習できなかったから」と回答した人に、学習できなかった理由を訊いたところ(複数回答可)、男女ともに「2.学習に集中できなかった」を挙げた人が最も多かった(図表4-78)。生徒が学習に集中できるような広い意味での環境整備やサポートが求められる。次いで多いのは「3.教師の教え方が良くなかった」であり、教師によって生徒の学びが大きく左右されることが分かる。教員の質の向上も求められる。

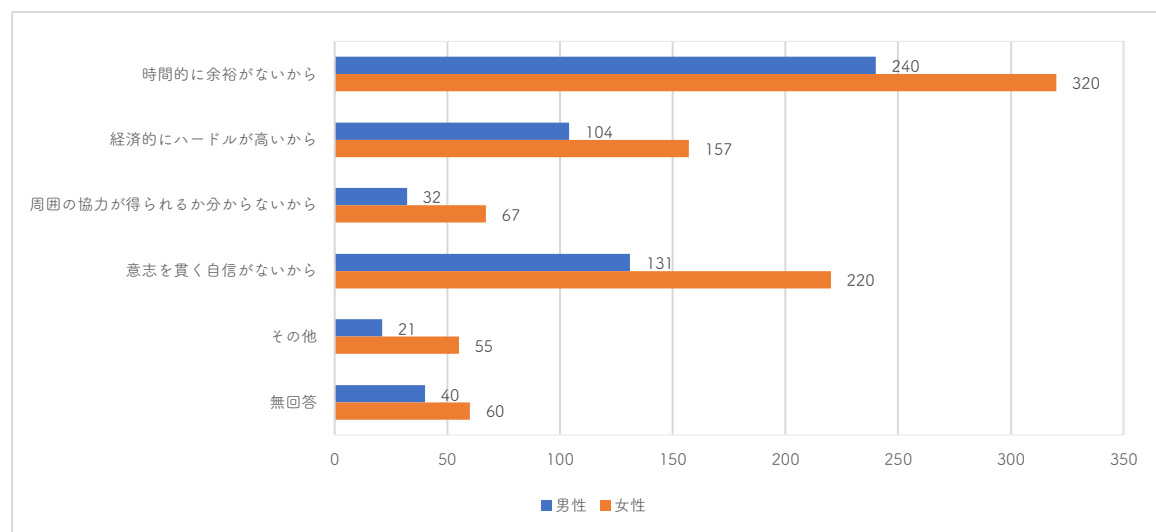


図表 4-78 〔県〕 学生時代に十分学べなかった理由—性別

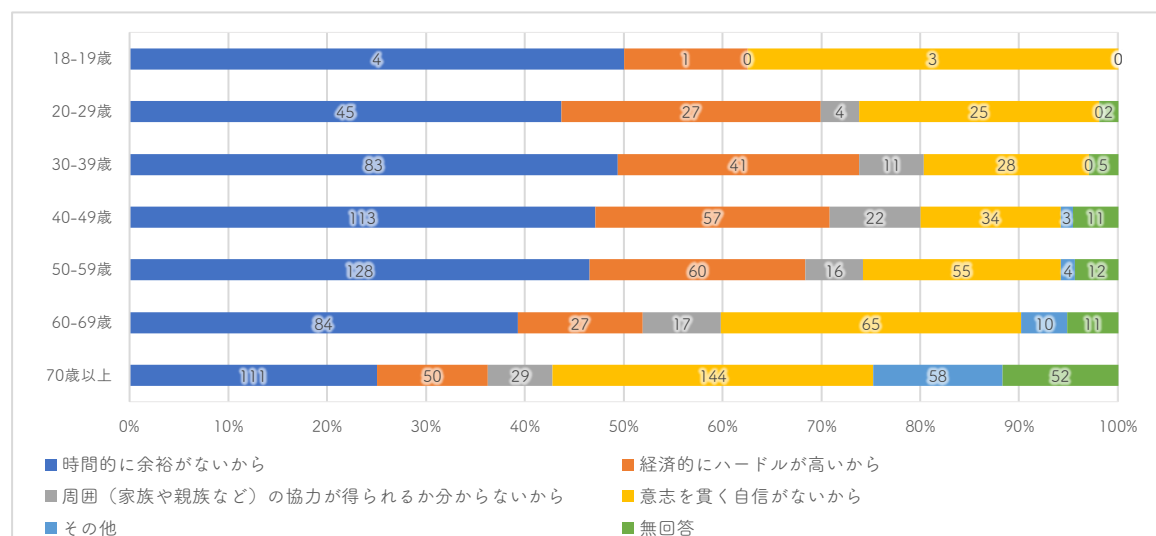
4.2.3.2.2.1.2. 学びを希望しているができない理由

「学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない」と回答した人にその理由を尋ねた結果(複数回答可)が、図表4-79と図表4-80である。図表4-79は、各選択肢の性別の集合グラフであり、図表4-80は、世代ごとの各選択肢の割合を示した帯グラフである。図表4-79を見ると、男女ともに「時間がないから」と答えた人が最も多く、次いで多いのが「意志を貫く

自信がないから」である。年代別の図表4-80を見ると、「時間的がないから」は70代を除く全ての年代で最も回答が多い。長時間労働は正等働き方改革を並行させつつ学びの環境整備を行う必要があるだろう。一方、70代では「時間がないから」よりも「意志を貫く自信がないから」の方が多い。「意志を貫く自信がないから」という回答は10代や60代も多く、高齢層と若年層で心のサポートが必要であることが分かる。その他、20～50代では経済的サポート、20代以上は周囲の理解・協力が必要であることも分かる。



図表 4-79 [県] 学びたくてもできない理由—性別



図表 4-80 [県] 学びたくてもできない理由—年代別

4.2.3.2.2.2.学びたい内容

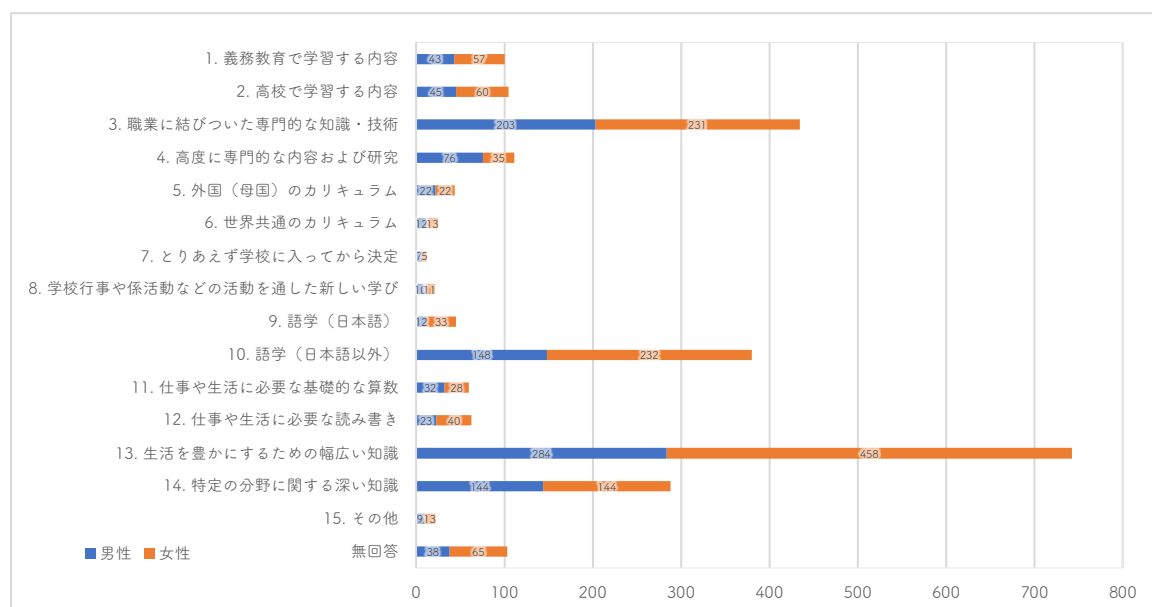
「学びたい・学び直したい」という回答者にどんなことを学びたいか尋ねた結果(複数回答可)は、図表4-81と図表4-82の通りである。図表4-81は各選択肢の性別の積み上げグラフであり、図表4-82は世代ごとの各選択肢の割合を示した帯グラフである。

図表4-81を見ると、男女ともに教養を求める「13.生活を豊かにするための幅広い知識」、仕

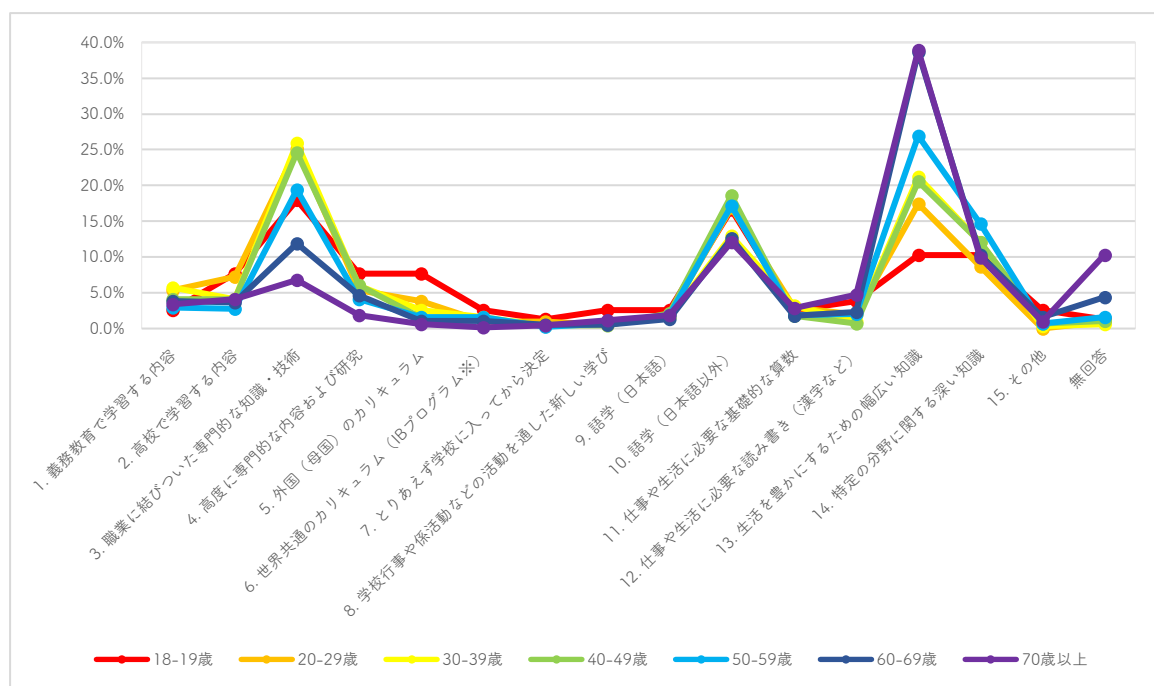
事上のスキルアップを求める「3.職業に結びついた専門的な知識・技術」、そして「10.語学(日本語以外)」の回答が多い。男女差としては、男性が「4.高度に専門的な内容および研究」「14.特定の分野に関する深い知識」を求める傾向がある一方、女性は13や10のような汎用性のある幅広い知識を求める傾向がある。図表4-82を見ると、「13.生活を豊かにするための幅広い知識」と回答した人は高い年代に多く、生涯教育のニーズが高いこと、「3.職業に結びついた専門的な知識・技術」と回答した人は10～50代と広く働く世代に多く、リススキングのニーズが高いことが分かる。また、「10.語学(日本語以外)」と回答した人は年代にかかわらず多く、ニーズが高い。

全体から見て回答数が取り立てて多いわけではないが気になる回答として、「1.義務教育で学習する内容」がある。1と回答した人は全世代に5%程度、男女の偏りはなく、合わせて100名と少なからずいる。この傾向は「2.高校で学習する内容」も同様であり、小中高の学習に関する学び直しのニーズは確実にあることが分かる。

また、10代など若い世代は「5.外国のカリキュラム」や「6.世界共通のカリキュラム(IBプログラムなど)」を望む声が他の世代に比べて多く、若年層をターゲットにした国際的な学校があれば、若者の県外流出を少なからず防ぐことができるかもしれない。



図表 4-81 〔県〕 学びたい内容一性別



図表 4-82 [県] 学びたい内容—年代別

4.2.3.2.2.3. 学びたい場・方法

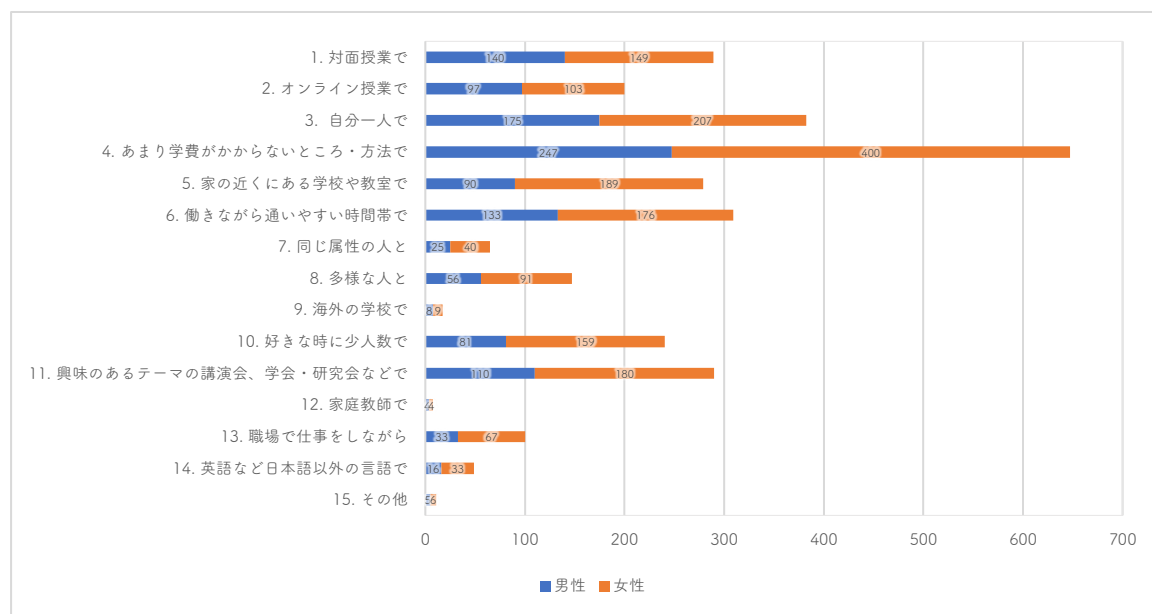
「学びたい・学び直したい」という回答者にどんな場や方法で学びたいか尋ねた結果(複数回答可)は、図表4-83と図表4-84の通りである。図表4-83は各選択肢の性別の積み上げグラフであり、図表4-84は世代ごとの各選択肢の割合を示した帯グラフである。

図表4-83を見ると、圧倒的に回答が多いのは「4.あまり学費がかからないところ・方法で」である。次に「3.自分一人で」、「6.働きながら通いやすい時間帯で」「11.興味のあるテーマの講演会、学会・研究会などで」「1.対面授業で」「5.家の近くにある学校や教室で」が続く。世代別の図表4-84を見ると、4の学費のかからないところを求めるのは全世代共通であり、6の働きながら通いやすい時間帯を求めるのは20～50代の働き盛りの世代、11の講演会などを求めるのは、70・60代の高齢者層である。また、20～40代の比較的若い働く世代(特に30代)は「3.自分一人で(TV/ラジオ/本/動画等)」「13.職場で仕事をしながら」と答える割合が高く、学ぶために別途学校に行くというよりは、今ある環境の中でうまく学ぶ機会を確保したいと考えている様子が窺える。

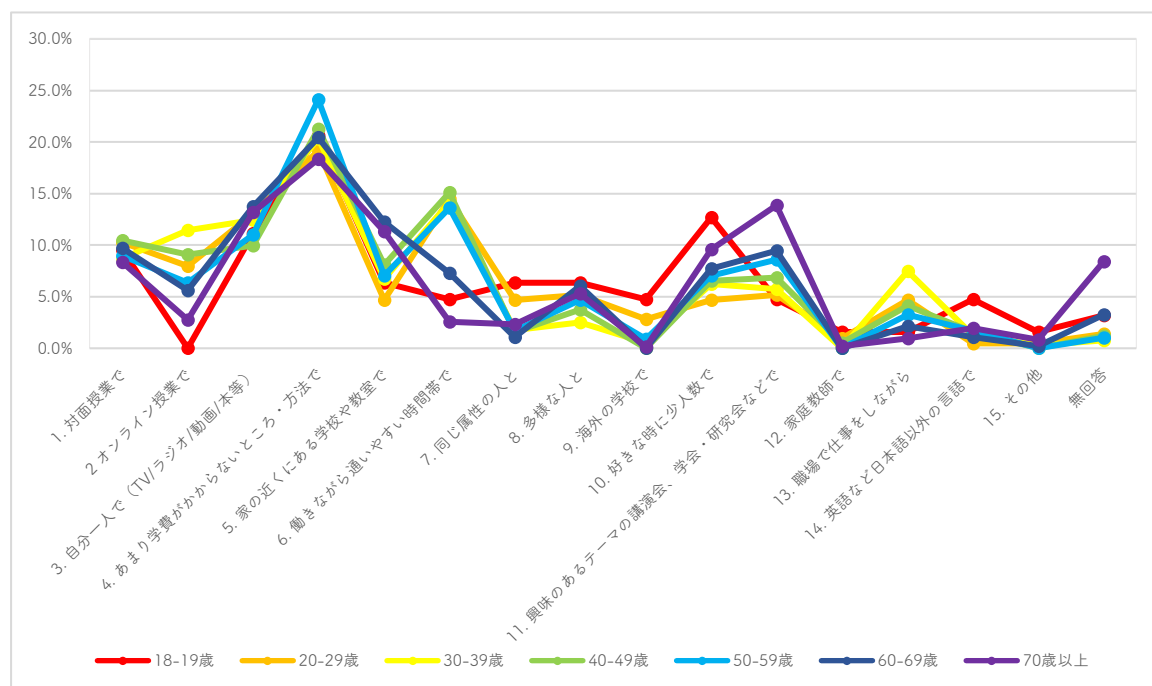
全体から見て回答数が多いわけではないが、「9.海外の学校で」「14.英語など日本語以外の言語で」を選んだ割合は10代で高く、若い世代は他の世代に比べて世界に目を向けている傾向がある。

授業形式(対面／オンライン)については、30代は対面よりオンラインを好むが、それ以外の世代は対面の方を好む傾向にある。特に、10代と70代はオンラインを選ぶ割合が小さい。10代と70代については、「10.好きな時に少人数で」学ぶスタイルを好むことも共通であり、プライベートな勉強会や少人数制のクラスで時間帯の選択が比較的自由的な学校を求めているようである。

図表4-83の「7.同じ属性の人(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)」と「学びたいとする回答」と「8.多様な人(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)」と「学びたいとする回答を比べると、8の回答数が7の回答数の2倍以上となっているが、世代ごとの各回答の割合を比べると(図表4-84)、40代以上の比較的高い年齢層が際立って多様な人との学びを求めており、10～20代の若い世代は多様な人との学びと同じ属性の人との学びを選ぶ割合が拮抗している。



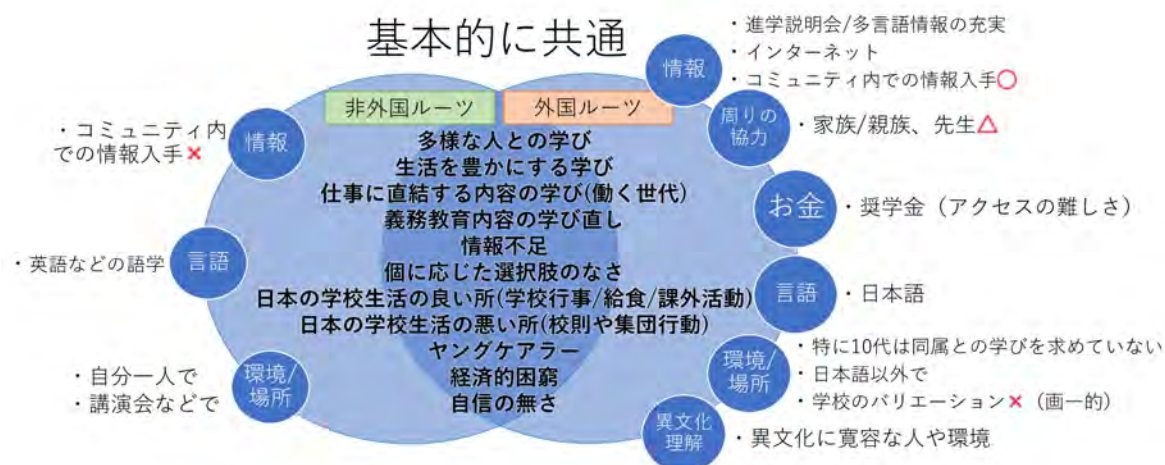
図表 4-83 [県] 学びたい場・方法—性別



図表 4-84 [県] 学びたい場・方法—年代別

4.3.質的・量的調査のまとめ及び総合的考察

本節では、4.1質的調査および4.2量的調査の結果をまとめる。次の図4-85は分析結果を図式化したものである。中央のベン図の重なりは、外国ルーツと非外国ルーツの共通点を示している。2つの円それぞれの周りにある小さな円は、外国ルーツ／非外国ルーツそれぞれの特有のニーズを表す。図表4-85が表すように、全体として外国ルーツと非外国ルーツのニーズや課題は共通している一方で、個人要因や環境要因による独特のニーズもある。



図表 4-85 質的・量的調査のまとめ

また、本プロジェクトでは、富山の教育の現状に関して、調査員が勉強会を行ったり、インタビューやニーズ対応の内容に加えて個人の経験も踏まえて議論を重ねてきた。以下、そこで浮かび上がってきた論点も含めて、総合的に考察していく。

4.3.1.提言の方向性

詳細アンケートの結果から、富山県民の4人中3人が「もっと学びたい・学び直したい」と思っており、富山県における学びのニーズは非常に大きいこと、そしてニーズの内容や課題は外国ルーツ・非外国ルーツで共通部分が多いことが明らかになった。また、学び続けられる機会が得られること(学べる環境にあること)で学びの意欲を持ち続けられるという側面もデータから見てきたことから、富山県において様々な学びのニーズを満たすような学びの場を整備し、あらゆる人のそこへのアクセスを促進することは、県民のウェルビーイングの向上に直結すると言える。

どのような学びの場を求めるのかという問いにおいては、全体として「多様な人とともに学びたい」という声が圧倒的に多かった。逆に、同じ属性の人同士での学びやマンツーマンでの

指導はあまり求められておらず、学校現場で行われている取り出し指導のあり方⁹には再考の余地があるだろう。調査・分析を進めてきた調査員も、本報告書6章において学びの場でのD&I(ダイバーシティ&インクルージョン)の必要性・重要性を訴えている。その中で秋山も述べているように、「(外国に)ルーツを持つ人にとって過ごしやすい柔軟で寛容な環境は、ルーツを持たない人にとっても優しい環境になる」であろう。

以上のことから、提言全体の方向性として、多様な学びの選択肢を整備してそれらに連続性を持たせつつ、富山県において寛容で柔軟なインクルーシブ教育システムを構築するということを掲げたい。

4.3.2.富山県にはない学びの場を求める声

質的調査・量的調査双方から、日本語の壁が学びを阻んでいるという外国ルーツの人々の現状が明らかになり、日本語を学べる場を整備すべきだという直接的な声もあった。実際、ニーズ対応においてある調査員は、滞日歴の浅い外国ルーツの若者が県立高校へ受験相談に行くのに通訳として随伴したが、日本語力を理由に事実上の受験拒否に遭う場面に遭遇し、大きなショックを受けた。特に学齢超過で来日した若者にとっては、日本語を学ぶ場がほぼないのが現状である。

2章でも述べているように、他の都道府県では、学齢超過の外国ルーツの若者たちの学ぶ場の一つの選択肢として夜間中学があるが、富山県にはない。最終学歴が小卒の回答者は詳細アンケートにおいても県政世論調査にも見られ、「小学校・中学校(義務教育)で学習する内容」を学びたい・学び直したいとする回答も外国ルーツ／非外国ルーツにかかわらず少なくなく、形式卒業者等の学び直しの場合という意味でも、夜間中学のような学びの場のニーズは小さくない。

また、多様な言語・文化環境の学校を求めるニーズも様々な形で見られた。外国ルーツの人からは、民族学校や宗教学校、インターナショナルスクールのニーズが自由記述やインタビューでの語りにおいて見られた。また、学びたい内容としての「語学(日本語以外)」のニーズは外国ルーツだけでなく非外国ルーツからも非常に多く見られた。学びたい方法を「日本語以外の言語で」とするニーズについても、回答があったのは外国ルーツではなかった。これらのことから、外国ルーツ・非外国ルーツの人が様々な言語の双方向イマージョンプログラムでともに学ぶといったニーズが、富山県内にはあると言ってよいだろう。さらに、外国のカリキュラムや世界共通のカリキュラム(IBプログラム等)のニーズも外国ルーツ・非外国ルーツ双方に少なからず見られた。なお、本調査において、外国ルーツの若い(10～20代)女性の学びの希望は、外国ルーツの男性と比べても非外国ルーツの女性と比べても高かったが、先述の宗教学校のうち「イスラム教の学校がほしい」という具体的な声もあったことから、若いイスラム教徒の女性がイスラムの教義に従った学校生活を送りやすいよう、女子校を作る(復活させる)ということを考えても良いかもしれない。

外国ルーツは特に10代の学びの意欲が高く、求める学歴も大卒・大学院卒と高い。しかし、

⁹ 散在地域である県内の小中学校では、取り出し指導はマンツーマンであることが多い。

質的調査では、学びたいことを学べる高等教育機関が少ないという不満も語られている。また、非外国ルーツの場合は、20～40代という働き盛りの世代の学びの意欲が高く、スキルアップのニーズが大きい。富山県において仕事に必要な専門的知識や語学等が学べる専門学校や大学・大学院等が充実することが求められる。

なお、外国ルーツの人の日本語の学びは、初期のサバイバル段階だけでなく読み書きなどのレベルでも求められており、また家の近くで学びたいという声も多いことから、地域日本語教室のような学びの場が県内各地にできたり、職場でも日々日本語が学べる体制が整備されたりすることが望まれる。

以上、新しい学びの場を作るということを提言したい。

4.3.3.既存の学校の変革を求める声

外国ルーツのインタビューからは、いじめや差別などにより既存の学校にうまく適応できなかった経験が多く語られていた。日本の学校の良くないところとしては、校則・制服、集団行動を挙げる人が多く、画一的で柔軟性がない既存の学校からの脱皮が求められている。日本の学校の良くないところとして校則・制服、集団行動を挙げるのは外国ルーツだけでなく非外国ルーツにも共通しており、むしろ今現在学校に通っている非外国ルーツの10代・学生(主に高校生)は、他の属性の回答者に比べて、学びの意欲の低さや「学ぶことが好きじゃない・苦手」とする回答の多さが目立つ。すなわち、今の学校教育に不適合を起こしているのは非外国ルーツの若者も同様である。

それでは学校はどのような学びの場として変化するべきであろうか。質的調査での語りや調査員同士の話し合いから、まず、個性や違いが否定されるのではなく尊重されるようになることが重要である。そして、学びの場において個々人の特性やペース、目標・課題に応じた指導がなされることが求められる。さらに、量的調査では、学びたくても学べない理由として「時間がない」「自信がない」が最も多かったことから、柔軟な学びの場・方法、そして、一人ひとりに寄り添った心のサポートが必要とされている。言葉の壁を取り除くためには、もっとICT¹⁰の活用が進められるべきである。ただし、本報告書6章で小川が「高校に通訳機を設置するといったような従来の対策では何も変わらないと思います。必要なのは人と人のつながりです」と語っているように、言葉が分からなくてもコミュニケーションをとろうとし、どうすればともに生活できるかを考えて行動に移すような教育活動が求められる。

以上のことから、今ある学校を、寛容で自由な学校、多様な個性を活かして他者とともに課題解決する学校へと変革することを提言したい。

4.3.4.教員に対する要望

質的調査では、頼りになる存在としての大人、特に教師の影響の大きさ(良くも悪くも)についての語りが多く見られた。量的調査でも、学生時代に十分学べなかった理由として、教師

¹⁰ Information and Communication Technology(情報通信技術)の略で、通信技術を活用したコミュニケーションを指す。

の教え方が自分に合わなかったことを挙げている人は少なくない。どのような人に教えてほしいかという問いに対しては、外国ルーツの回答者から、多言語・多文化に通じ、個性や多様性を尊重して寄り添い助けてくれる人に教えてほしいという記述が多く寄せられた。

調査員の勉強会の中でも、最も話が白熱したのは、学校や教師に対する不満や理想の教育についてである。外国ルーツの子どもの置かれた状況や悩み、思いについて、教員が「分かっていない」「分かってくれない」という意見は多くの調査員の共通見解であった。「先生は忙しい」ということは皆理解しつつも、現役教員は外国ルーツの子どものについて研修などで学ぶべきである、教員になる前の段階(教員養成の段階)ですべての教員志望の学生が基礎知識として知っておくべきであるという意見が出た。そもそも現場の教員自体に多様性がないという指摘もあった。ある教員志望の調査員は、自身が教員になることで外国ルーツの児童生徒が自信や勇気をもらえるのではないかと語っており、現場で外国ルーツの教員を積極的に育成し、増やすような取り組みも求められる。

以上のことから、多様な個性を持つ教員を増やし、多様な子どもへの理解を深めてより良い教育を実現するための教員の資質を向上するため、教員養成・採用・研修等のシステムを整備することを提言したい。

4.3.5.入試等評価のあり方への疑問

調査やニーズ対応を通して、学びたくても学べないという状況にある若者たちが富山にはたくさんいるということに気付かされた。量的調査において、学びたい・学び直したい理由として「仕事で困っているから」「生活で困っているから」という回答が特に外国ルーツには少なくなかったが、この回答者にとって、学びとは決して贅沢品などではなく、生きていくために必要なものである。すなわち、彼らへの教育は保障されなければならないだろう。小学校や中学校といった義務教育だけでなく、高校教育も然りである。しかしながら、夢や目標を書く欄に「日本の高校へ行く」と書いた回答者もいるほど、富山県での高校進学はハードルが高いのが現状である。本来、学校に行くのは夢を叶えたり目標を達成したりするための手段ではないだろうか。日本に住んでいるにもかかわらず、その人の夢や目標となるほど日本の学校へ行くことのハードルが高いという状況は、本末転倒である。最も大きな壁は、質的調査でGさんやZさんらが語る「日本語の壁」である。「日本語がうまく話せないから」という一面のみでその人の価値が不当に低く測られ、学びの機会を奪われているのである。そしてその日本語を学ぶ機会すら十分に得られず、「日本語を学ぶこと」が夢や目標として挙げられる始末である。調査員の勉強会でも、他の都道府県では、高校入試や大学入試で様々な工夫がなされ、日本語の壁を低くしたり、母語の力を活用できたり、言語的文化的多様性を積極的に評価して特別枠を設けたりしていることを学び、その必要性を議論してきた。それは、恩情や思いやりなどではない。若者たちの人権(=教育を受ける権利)を守るための基本的な環境整備である。

以上のことから、富山県でも、生徒の個性を多様な観点から評価して学校に入りやすくするよう提言したい。

4.3.6.経済的な壁の存在

量的調査では、外国ルーツ・非外国ルーツともに「お金のかからないところ・方法で」学びたいというニーズが最も多く、質的調査でも、経済的支援に関するニーズが非常に多く語られた。これは、単に節約したいというだけでなく、「学びたいけど学べない」理由として「お金がないから」という回答が少なくなかったことから(外国ルーツでは2番目に多い)、学びの継続を阻む深刻な要因の一つであることが分かる。

質的調査では、奨学金が進学を阻む経済的な壁を乗り越える唯一の方法として、その情報へのアクセスの難しさ(言葉の壁など)が語られることが多かった。しかし、勉強会では、奨学金の受給資格に国籍や在留資格の制限があることや、日本の学費(制服等学用品費を含め)がそもそも高いこと、特に富山県では公立の高校・大学に進学することが難しいことなどを学び、外国ルーツ生徒のための奨学金制度の必要性や、公立高校での受け入れの重要性・授業料の無償化を拡大することの有効性などについても話した。

以上のことから、経済格差が富山県民の学びの格差にならないよう、公立教育機関の充実を含む各種経済的支援制度の整備を提言したい。

4.3.7.就労段階での学び(就職・スキルアップ・キャリアチェンジ等)の困難さ

本調査は13歳以上の全県民(県政世論調査は18歳以上)を対象として行ったため、学齢期や高校生・大学生だけでなく、多くの働く世代や高齢者層の声も拾っているが、働き盛りの世代の学びの意欲が(特に非外国ルーツは)高く、スキルアップのニーズが大きいことが分かった。しかし一方で、「学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」という回答も(特に女性に)多く、できない理由として最も多い理由が「時間がない」であることから、学ぶ場を作るだけでなく、働く場で「働く」と「学ぶ」を両立できるような環境・体制を作ることも求められる。非正規雇用の人でもキャリア・アップ／チェンジできるような経済的・時間的サポートや、会社で日本語が勉強できるなど、今いる職場でキャリアアップできるような仕組みなどがあるといいだろう。

一方で、質的調査からは、「学ぶ」(それまでの学んできたことや学歴など)が実際の職場での「働く」と結びついておらず、就職に苦労したり、就職できても自分の力が活かせなかったり差別に遭っていたりしている現実も浮かび上がってきた。調査を通して、富山県の企業や組織が、外国ルーツの人の個性を尊重し、積極的に活かそうという姿勢にはないことが見てきたのである。どんなに学んで知識を身につけスキルアップしても、その力を活かす場がなければ意味がない。

以上のことから、富山県の企業や組織には、多様な個性をポジティブに捉えて尊重し、企業や組織の成長や問題解決に積極的に活かすような環境整備を行うことを提言したい。

4.3.8.情報の不足

量的調査では、学びや進路についての情報が「十分ではない」「ない」を合わせると外国ルーツ・非外国ルーツともに8割を超えていた。意外にも非外国ルーツの方が外国ルーツより足りないとする回答の割合が高かったのであるが、これは外国ルーツの方が情報を得ているということを意味しないだろう。前述したように、実際に質的調査では、外国ルーツのインタビューから奨学金に関する情報を得るのが難しかったということが多く語られていた。奨学金については、経済的困窮とも相俟って外国ルーツの人々に強く意識されたのであろうが、例えば、量的調査のほしい卒業資格を問うた設問で外国ルーツの「短期大学」の回答が0であったことは、そもそも外国ルーツの人々の間で短期大学が認識されていないからであると考えられる。すなわち、情報の存在自体が認識されていない深刻な段階にある可能性がある。

情報の入手手段については、もっと多様化されること(方法やチャンスが増えること)、インターネット等ICTがもっと有効に活用できるようになることが求められている。また、外国ルーツの場合は多言語での情報入手も求められており、インターネットが多く利用されているのも、翻訳しやすいことが一因としてあるだろう。なお、多言語の情報提供の希望については、量的調査では10代での回答者は少なく、質的調査では「奨学金制度の親への説明のために必要」といったコメントがあった。

調査員の勉強会では、情報を多言語で提供してくれるだけでなく、その人に合わせて寄り添い複雑な日本語での手続きを手伝ってくれるような「AIコンシェルジュ」といったアイデアや、やさしい日本語の活用といったアイデアも出ていた。

以上のことから、多言語化ややさしい日本語の活用、情報提供方法の多様化、AI等を活用したサポートの仕組みを整え、情報格差をなくすことを提言したい。

4.3.9.家族やコミュニティの影響

質的調査では、親の影響やエスニック・コミュニティの影響の大きさについての語りが複数見られた。また、量的調査からは、同じ言語コミュニティ内の口コミの影響も大きいことが窺えた。これらの影響は、良い影響の場合もあれば、悪い影響の場合もある。いずれにせよ、その影響力の大きさから、外国ルーツの(もちろん非外国ルーツも)人の学びを支えるには、その家庭、そして、家族が属するエスニック・コミュニティが安定し活性化していることが重要であると考えられる。そして、地域におけるエスニックコミュニティが安定し活性化するためには、エスニック・コミュニティを取り巻く日本(地域)社会との繋がりを強め、双方に支え合う関係性を築くことが求められる。

すなわち、多様な県民が学び続けるため、家庭、エスニック・コミュニティ、地域社会等各レイヤー内で、そして各レイヤー間で、互いに支え合う地域のコミュニティづくりをすることを提言したい。

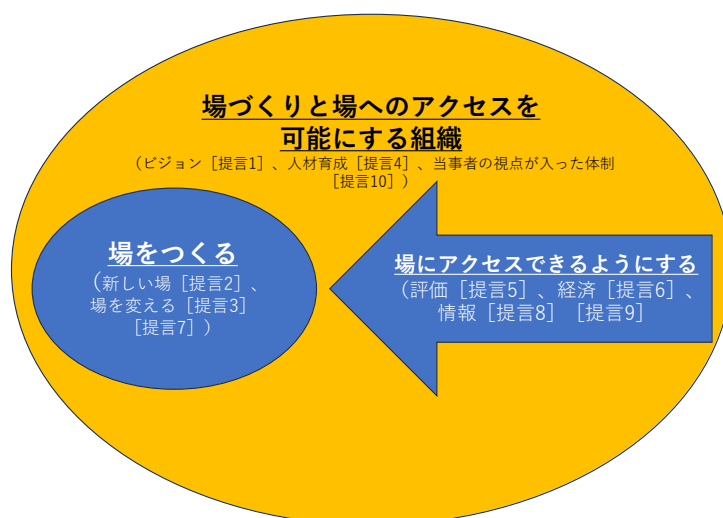
以上、調査の結果を踏まえ、総合的に分析・考察してきた。次章では、その考察内容を基にまとめた10の提言を示す。

5.提言

4章で示した調査結果を基に、外国ルーツ調査員が勉強会で分析・考察を重ね、2023年10月21日に実施した進捗報告会での参加者とのディスカッションも踏まえつつ、富山県に必要な「学びの選択肢創造」の内容を10の提言にまとめた。2023年12月28日、外国ルーツ調査員および調査補助員8名はアレッセ高岡の役員4名とともに富山県庁に赴き、富山県国際課、富山県教育委員会小中学校課・県立学校課同席のもと、新田八朗県知事に提言書を手交した。以下、提言書に記載した10の提言を引用する。

提言1	多様な学びの選択肢を整備して連続性を持たせ、寛容で柔軟な「富山型“多文化”インクルーシブ教育システム」を構築する
提言2	多様なニーズに対応できる新しい学びの場をつくる
提言3	今ある学校を変えるー「誰ひとり取り残さない」寛容で自由な学校・多様な個性を活かして他者と共に課題解決する学校へー
提言4	多様な個性を持つ教員を増やし、教員の多様な子どもへの理解・資質を向上する制度を整備する
提言5	生徒の個性を多様な観点から評価して学校に入りやすくする
提言6	経済格差が学びの格差にならないようにする
提言7	富山県の組織や企業が多様な個性を尊重し積極的に活かせる環境を整備する
提言8	情報格差をなくす
提言9	多様な県民が学び続けるため互いに支え合う地域のコミュニティづくりを進める
提言10	外国ルーツの当事者の声を教育に反映し、フィードバックする循環型の仕組みをつくる

図表 5-1 提言一覧



図表 5-2 10の提言の位置付け

提言1

多様な学びの選択肢を整備して連続性を持たせ、寛容で柔軟な
「富山型“多文化”インクルーシブ教育システム」を構築する

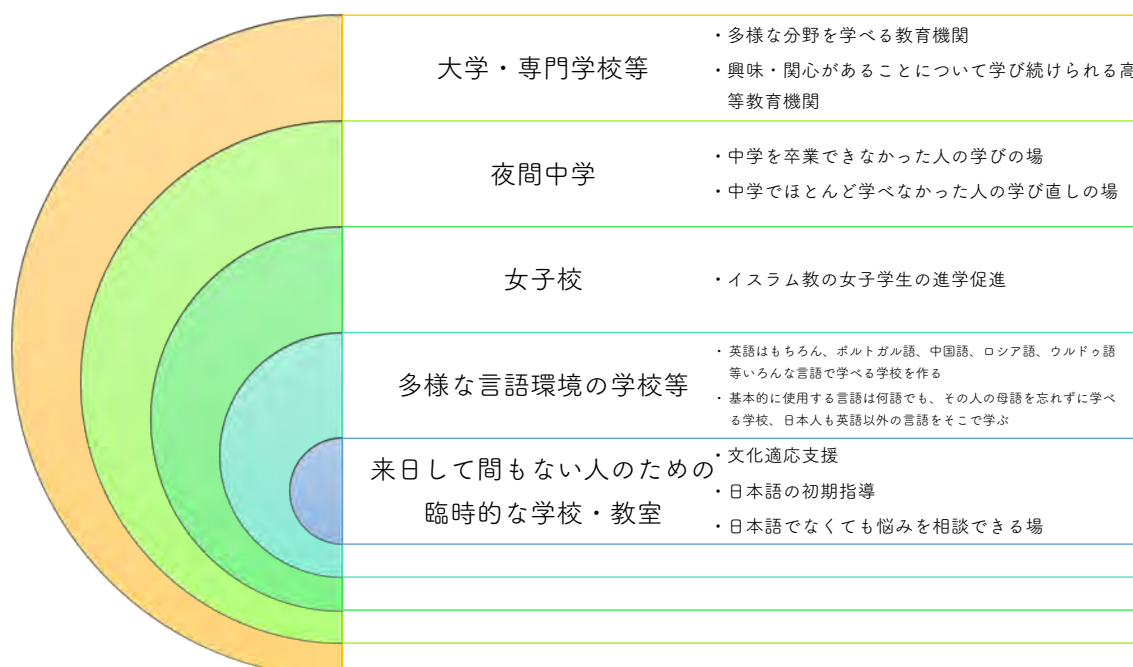
「第3期富山県教育振興基本計画」には、重点的・優先的に取り組む重要テーマの一つとして「外国人児童生徒教育の推進」が挙げられていますが、その方向性は「学齢期の子どもの就学促進」と「教員等の指導力向上のための研修推進」の2つしかなく、学齢期を過ぎた子どもの教育保障(または学齢期前の外国にルーツを持つ幼児教育の推進)や現行の教育支援システムのあり方を見直そうといった視線は見当たりません。また、小中学校に話を限ったとしても、富山県には、外国人集住地域の取り組みを部分的または縮小して行っていると思われる取り組みしかなく、富山県の地域特性を踏まえた独自の支援が考えられ、実行された形跡はありません。一方、「インクルーシブ教育」については、本来「国籍や人種、言語、性差、経済状況、宗教、障害の有無にかかわらず全ての子どもが共に学び合う教育」のことであるはずですが(参考：UNESCO “Inclusion in education” <https://www.unesco.org/en/inclusion-education>)、当計画では特別支援教育の文脈でしか語られていません。しかしながら、ここで掲げられている「連続性のある多様な学びの場を整備」という考え方や方向性は非常に重要で、障害のある子どもに対してだけでなく、国籍や人種、言語、宗教が異なる子どもにも当然適用すべきものであると考えます。

本提言書では、以下提言2～提言9で様々な学びの選択肢案を示します。これらを個別バラバラに用意するのではなく、幼保・小・中・高・大学等高等教育、社会人のリスキニングやリカレント教育、生涯教育も視野に入れつつ、縦横の連続性のある“富山らしい”“富山発”の「富山型“多文化”インクルーシブ教育システム」を構築することを提案します。



提言2

新しい学びの場を作る



外国にルーツを持つ人に特有の選択肢としては、来日して間もない人のための臨時的な学校・教室(プレクラス)や日本語以外の言語を母語とする人が母語を維持し母語を活かして教科等学べるような学校・教室を作ることが求められます。学校の設立が難しい場合は、地域の学習支援教室や家庭教師のような形でよいでしょう¹。日本人でも語学を習得したいというニーズは高いので、このような場で外国ルーツの有無にかかわらず共に学び合う形も考えられます。また、夜間中学や(かつては富山県にもあった)女子校は、日本人のニーズも考えられますが、義務教育が保障されていない外国人の子どもやイスラム教徒の女性の教育保障には、特に重要な機能を果たすと考えられます。そして、大学や専門学校等の高等教育機関の選択肢が少ないことも富山県の課題です。富山で学び続けたくても、学びたい学問分野や博士後期課程がないために県外に出ざるをえません。県内の高等教育機関を増やすことも求められます。なお、学びの場を設置した場合には、実際にそこに継続的に通うことができるよう、交通機関の充実や雪の時期の道路整備なども合わせて考える必要があります。

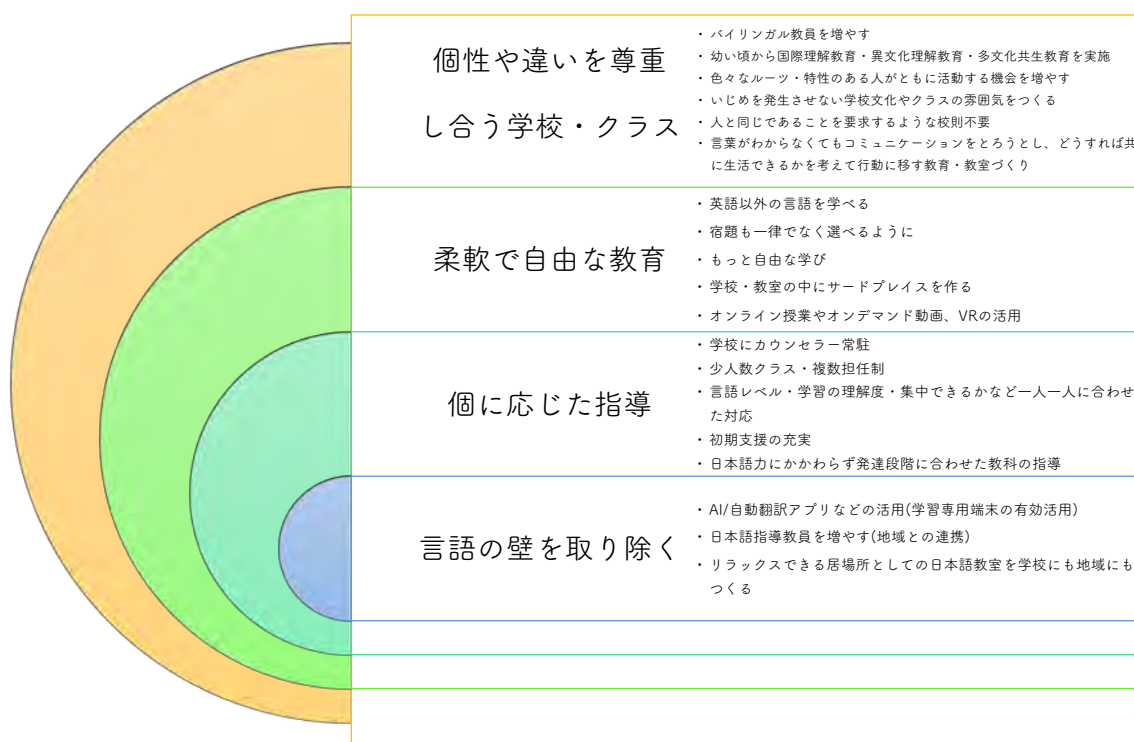
¹ ただし、本量的調査の結果によると、家庭教師のニーズは高くなかった。この結果については、さらなる調査・分析を行い、マンツーマン指導やアウトリーチの手法などについて考察する必要がある。

提言3

今ある学校を変える

－「誰ひとり取り残さない」寛容で自由な学校、

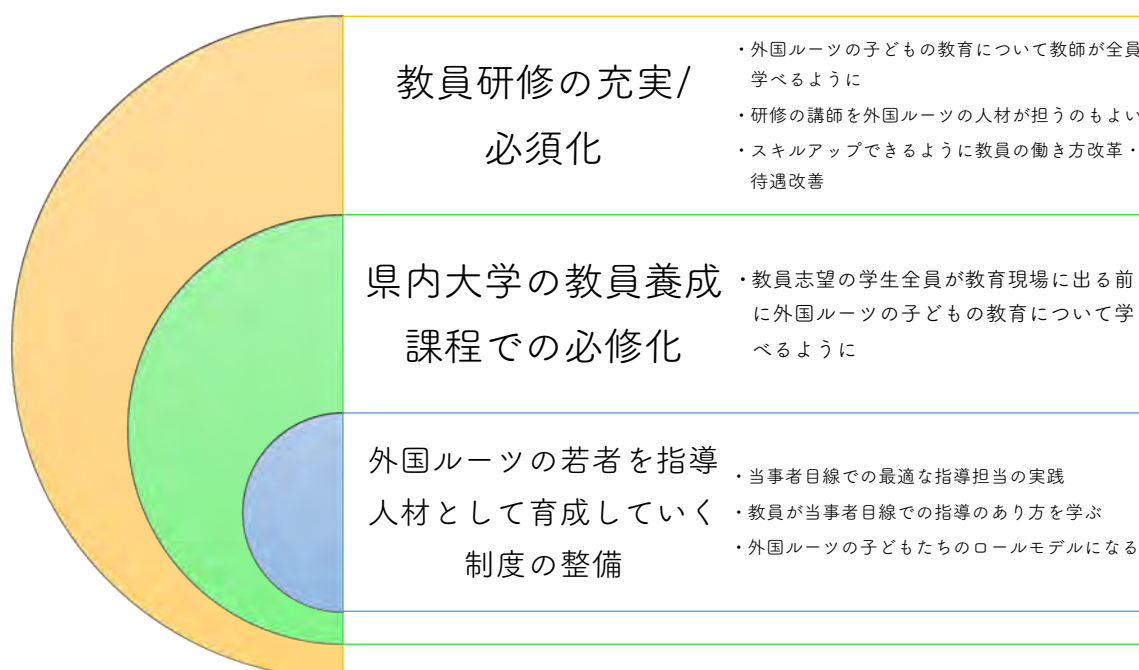
多様な個性を活かして他者と共に課題解決する学校へ－



外国にルーツを持つ人のため特有のサポートとして、言語の壁を取り除くための機器の活用や人員の配置、日本語教室の設置(学校内外)などがありますが、個に応じた指導や、柔軟で自由な教育、個性や違いを尊重し合う学校やクラスづくりは、全ての子どもにとって有益とされていることです。これらが実現されている教育現場では、全く日本語が分からない子どもがクラスに入ってきて、周りの子どもがその子と何とかコミュニケーションをとろうと工夫し、それを受けて外国ルーツの子どもも何とかそれに応えようと日本語を覚えるでしょう。子ども同士のそのような関わり合い自体が、外国ルーツの子どもにとっても日本人の子どもにとっても大きな学びであり成長を促すものであると考えられます。なお、このような教育現場においては、教職員の多様性も重要だと考えます。地域のボランティアや外国人コミュニティ、日本語教師など、外部との連携を進めることが求められます。

提言4

多様な個性を持つ教員を増やし、
教員の多様な子どもへの理解・資質を
向上する制度を整備する

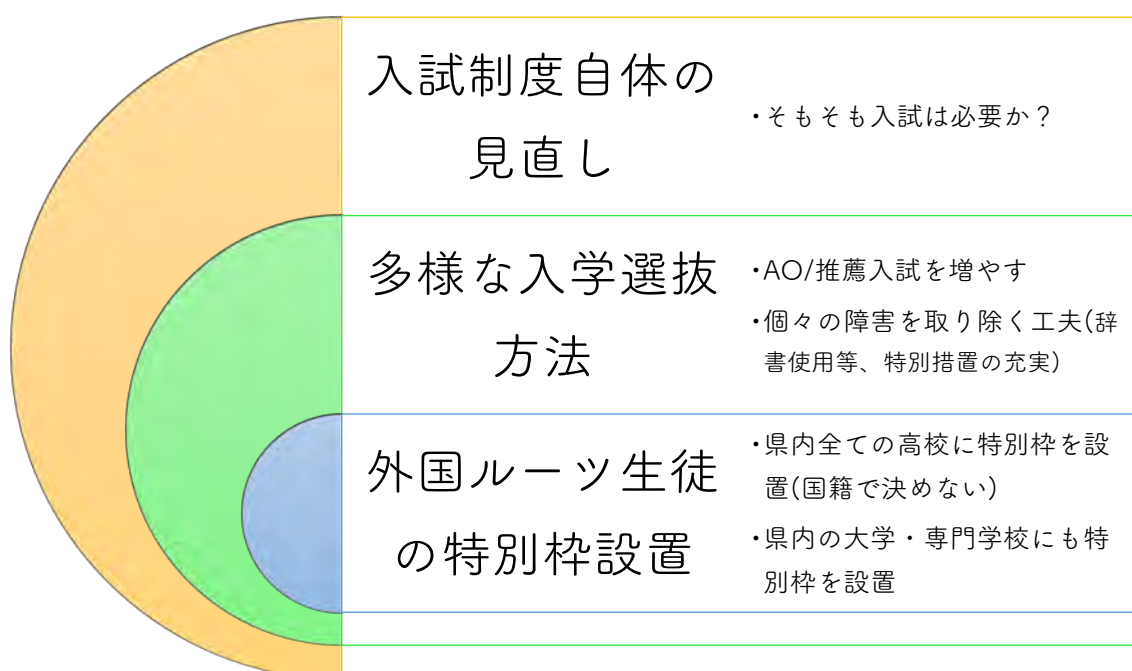


子どもにとって・学生にとって、教師の影響力は絶大です。教員の態度や対応が外国にルーツを持つ子どもに直接的に与える影響も大きいですし、教員の態度や対応を見ている周りの子ども・学生への間接的な影響も計り知れません。全ての先生が外国にルーツを持つ子ども・学生に適切な教育を施すことができるよう、教員研修を充実させることが必要です。また、今やいつこの学校に外国にルーツを持つ子どもが転入してきてもおかしくありません。いつでも受け入れられるウェルカムな体制を整えておくため、全ての教員が研修を受けることが大切です。また、教員養成の課程で基本的な知識を身につけておくことも求められます。さらに、当事者目線で支援のあるべき姿を考えるため、当事者である外国ルーツの若者が教員や相談員などの形で支援に関わったり教員研修の指導者となったりするのが理想的です。そのために、まずは外国ルーツの支援者・指導者の育成を行う制度が求められます。

提言5

生徒の個性を多様な観点から評価して

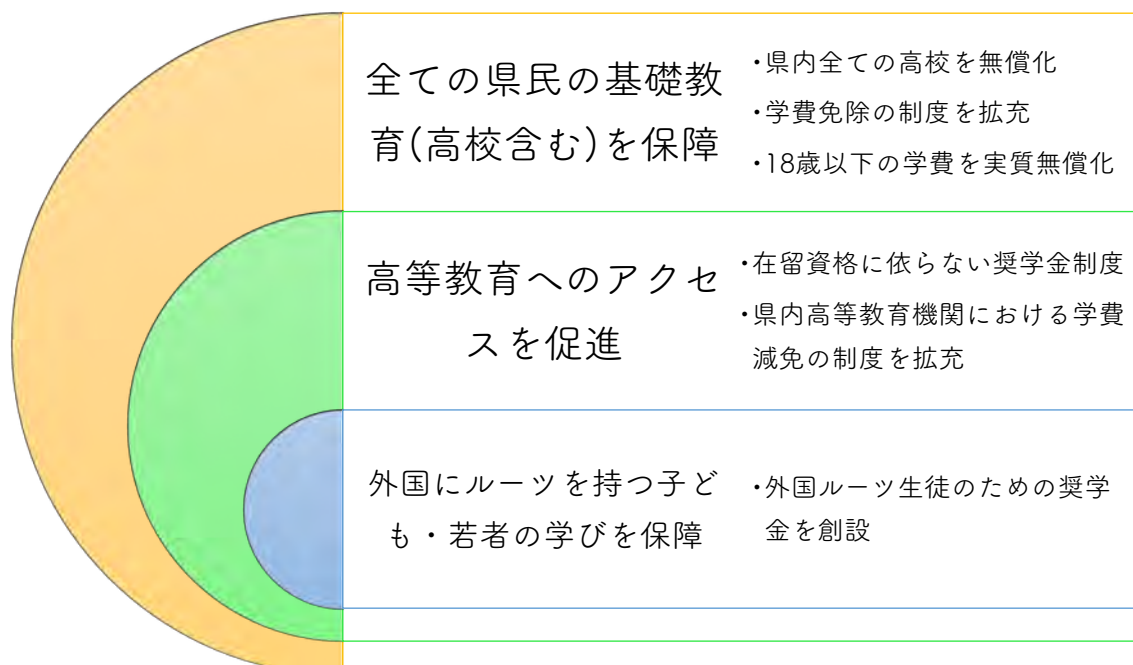
学校に入りやすくする



現状として、高校や大学などへの進学のための入試の突破は、日本語を母語としない生徒にとって非常に困難です。日本語というフィルターのみで外国にルーツを持つ子どもの学びの機会が絶たれており、本来持っている力を発揮することも伸ばすこともできずにいるのは、富山県において大きな損失です。日本語のハンディキャップを補うような試験方法、日本語のフィルターをかけずにその生徒の能力と可能性を見極めるような多様な評価指標・評価基準による選抜制度が求められます。そもそも入試というものが本当に必要なのか、考え直してもいいかもしれません。これらのことは、高校だけでなく、県内の高等教育機関も同様です。また、特別枠を設置する場合は、特定の学校のみには設けるのは望ましくありません。生徒が日本語ではなく自分の興味・関心や適性に応じて学校選びができるようすることが大切です。そして、入学後に個に応じたサポートを保障することも重要です。

提言6

経済格差が学びの格差にならないようにする



現実問題として、富山県における日本語指導が必要な生徒の受け入れ先は私立高校に偏っており、学びの継続には私立高校に進学・通学できるだけの経済力が求められています。また、高校卒業後も経済的理由から高等教育を断念するケースが少なくありません。ニーズ調査からは、働く中で学びを求めながらも経済的な理由により踏み出せない人々が、日本人も含め多くいることが見えてきました。

少なくとも高校を含む基礎教育については全ての県民に対し無償化または学費免除の制度を拡充するなどしてほしいです。また、日本語力等の壁により中学卒業後に専門学校や母語等での教育が受けられる通信教育等を選択する生徒もいますが、日本の小中高以外の教育機関であっても18歳以下であれば学び続けられるような経済的サポートが求められます。高等教育へのアクセスを促進するような(在留資格の種類に依らない)経済的サポートも重要です²。

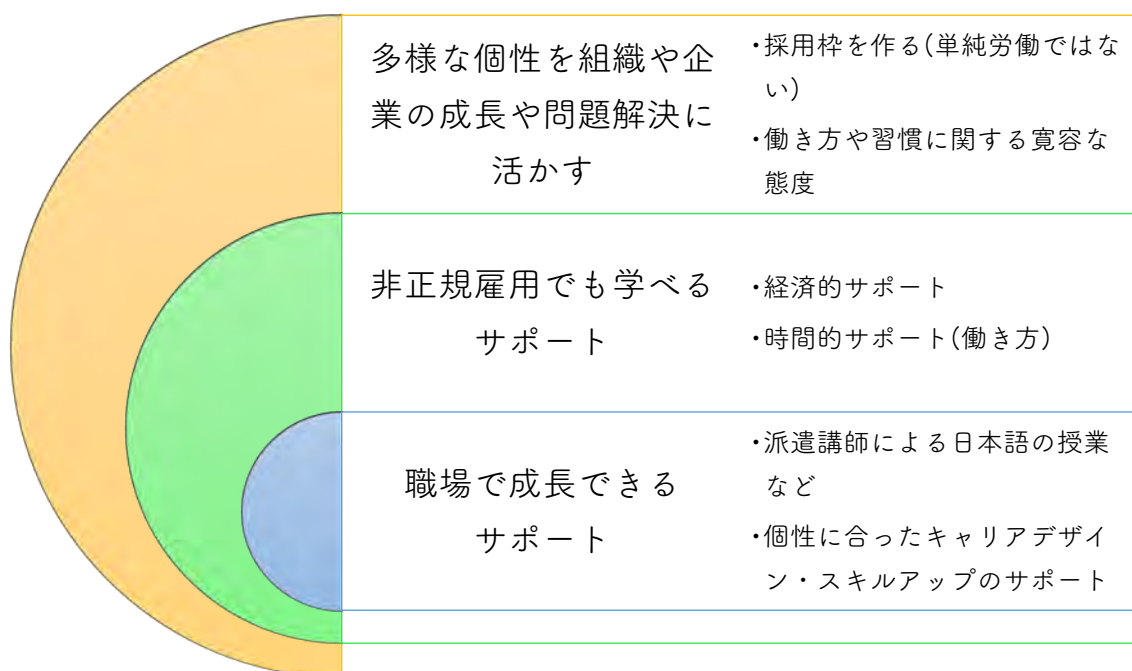
また、富山県として外国にルーツを持つ子どもの可能性を積極的に評価し、その学びを促進するための取り組みとして、外国にルーツを持つ生徒を対象とした奨学金の創設を希望します。

² 2024年2月19日富山県の新田八朗知事は令和6年度当初予算についての記者会見で、年収910万円の未満の多子世帯やひとり親世帯を対象に私立高校の授業料や入学料を実質無償化し、県立と私立の負担の格差を是正することを発表した(2024年2月20日付北日本新聞「私立高 授業料無償化 入学料含み全国初」)。このことによって、現状として私立高校に進学することが多い外国ルーツの生徒の多くは学びの継続が容易になるであろう。しかしながら、この施策は日本語指導が必要な生徒の進学先を特定の私立高校(現時点で日本語指導が必要な生徒を受け入れている私立高校)に集中させることを加速する可能性があり、そうすると、2章でも議論したように、日本語力という一面的な指標のみで進学先が定まり、今まで以上に個々の生徒の興味・関心にあった学校選びができなくなってしまう危険性を孕んでいる。そのため、広く公立(県立)高校としての受け入れ体制の整備も今後並行して進めていくべきである。

提言7

富山県の組織や企業が多様な個性を尊重し

積極的に活かせる環境を整備する

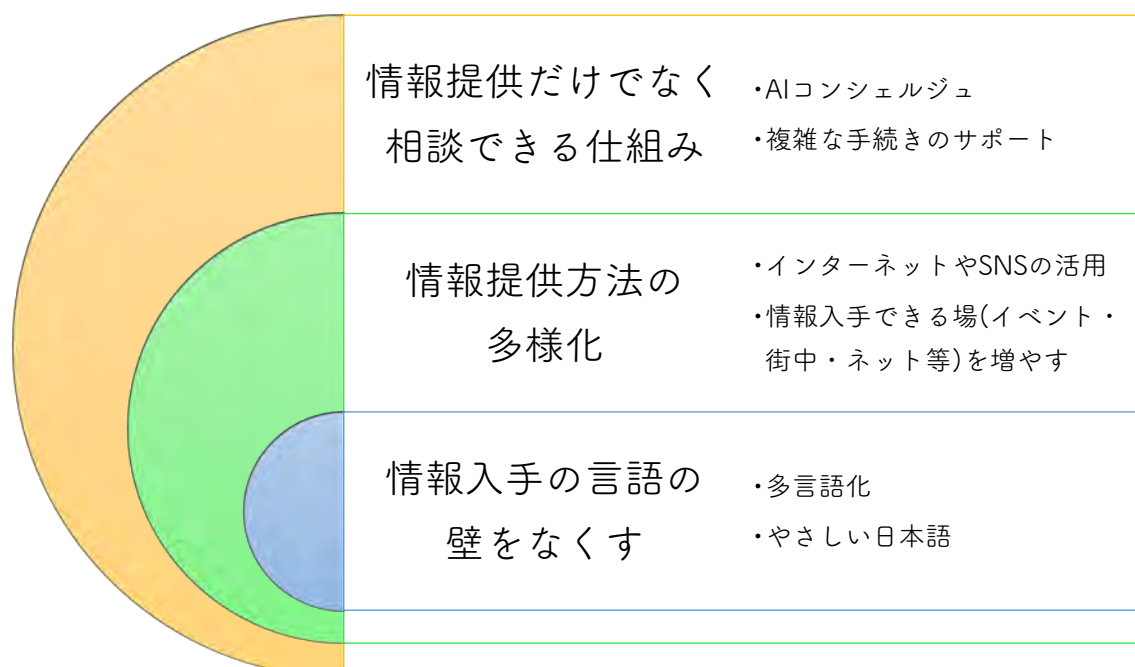


富山県として、多様な個性をポジティブに捉え、組織や企業の成長や問題解決に多様な人材の個性を活かそうという風土を醸成することが求められます。そのためには、外国にルーツを持ち、富山県の学校で学んできた人たち対象の採用枠を作ること、その強みを活かすために寛容で柔軟な職場環境を構築することが大切です。富山県には率先してそれを実行してほしいですし、県内企業にも働きかけを行ってほしいです。

また、ニーズ調査によると、多くの人が学ぶ意欲があっても時間的・経済的に学ぶことができません。リスキングの費用や時間のサポートは大企業の正規職員には比較的与えられていますが、非正規雇用で働いている人にはほぼありません。非正規雇用でも学びたい人が学べる・学び直せるようなサポートを行う必要があります。さらに、働きながら成長を感じられるような学びの機会を職場に作ることも求められます。

提言8

情報格差をなくす



ニーズ調査においても、多くの県民が学びに関する情報が十分に得られていないと答えています。外国にルーツを持つ人は、そこに言語の壁があったり情報を得る機会が限られていたりして、情報格差が生まれています。

そこで、まずは言語の壁を取り除くため、多言語化したりやさしい日本語にしたりすることが求められます。やさしい日本語は日本人にもニーズがあると予想されます。そして、情報が入手できる機会を増やすこと。特にインターネットやSNSは今や立派な社会インフラであり、いつでもどこでもアクセスできる上に翻訳AIなどを使った多言語化も可能なことから、情報媒体として重視すべきです。

また、情報を入手するだけでなく、それを理解したり処理したり手続きをしたりする上でのハードルも高いです。入手した情報を正しく理解する、処理する、手続きを進めるプロセスに寄り添ってくれるようなサポートが求められています。

提言9

多様な県民が学び続けるため互いに支え合う

地域のコミュニティづくりを進める



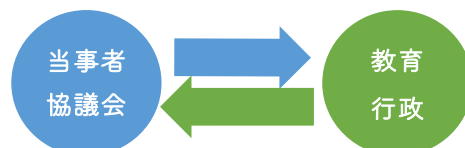
人の学ぶ意欲は、自己肯定感や社会への信頼感がベースになっていると考えます。学校や家庭、地域、コミュニティの中で、他者と関わりながら互いに興味・関心を持ち、尊重し合う経験を通して「自分はできる」「誰かの役に立ちたい」という思いを持つこと。その思いは学びのエネルギーとなって、その人を学びの継続や学び直しといった行動へと駆り立てるでしょう。多様な県民一人一人の学びを促進するためには、互いに興味・関心を持ち、信頼し合い、尊重し合うコミュニティが必要です。そのコミュニティが複数あったり範囲が大きかったりすればするほど、自己肯定感や社会への信頼感は強まると考えられます。

そして、自分が属するコミュニティの力を活性化することやその力を活用するということはその人の学びを促進するアドバンテージともなります。コミュニティづくりは間接的なようで実は人の「学び」を支え、前に進めていく重要な要素だと考えます。

提言10

外国ルーツの当事者の声を教育に反映し、 フィードバックする循環型の仕組みをつくる

今回の調査や調査員の勉強会の中では外国ルーツの子どもの「いじめ」の経験を訴える声が多く聞かれました。学校では「いじめ」の早期発見のためのアンケート調査なども行われていますが、それは外国にルーツを持つ子どもたちの声を漏れなく拾えるようになっているのでしょうか。言葉の壁で、声を上げること自体を諦めている子どもがいるのではないのでしょうか。定期的に面談をしてやさしい日本語で困っていることを聞き出す、多言語でのアンケート調査を実施するなどの工夫が求められます。



子どもの親の声も重要です。外国ルーツの子どもの親は、子ども以上に日本語が分からず、日本の学校や教育システムについても疎いケースが少なくありません。不安定な雇用形態で働く方も多く、日本社会の中で親は子どもに頼らざるをえず、結果的に多くのヤングケアラーを生み出してしまう状況にあります。親世代のSOSの声を丁寧に拾い、日本語力をつけキャリアアップできるよう、親世代の学び・学び直しの環境を整備する必要があります。外国にルーツを持ち、日本で教育を受けた経験のある人は、外国語だけでなく日本語もでき、外国の文化や習慣だけでなく日本での生活や学校についてもよく理解しています。そういった人たちを、外国にルーツを持つ子どもたちをサポートする人材として、育成したり積極的に学びの場において採用したりしていく仕組みが求められます。

当事者である外国ルーツの若者の声を、富山県の教育をより良いものにするために(または富山県の教育の課題を解決するために)活かしてください。

もちろん、日本語教育、特別支援教育、生活困窮支援など、色々なジャンルの専門家の意見も大切です。当事者と様々な立場の教育関係者・専門家が共に富山の教育のあり方を考えるような協議会を立ち上げてほしいです。そこで検討した内容を実行に移し、そして、その進行状況や効果の検証結果などをフィードバックしてもらい、それを踏まえてさらにより良い教育のあり方を共に継続的に考える、「富山型“多文化”インクルーシブ教育」の構築を道づける仕組みを作っていただきたいです。

「富山型“多文化”インクルーシブ教育」の実現過程には、当事者が主体的に関われるよう、外国にルーツを持つ若者によるプロジェクト実施を、富山県で支援していただきたいです。

6.調査員の振り返り

6.1.勉強会や調査員とのやりとりから

本事業に加わった調査員や調査補助員と約一年間関わってきた。中には事業に興味を持ち途中から参加してくれた調査員や調査補助員もいたが、調査の進行状況が分からない中でも調査に取り組んでくれていたことに、まずは、感謝の気持ちでいっぱいである。そんな調査員、調査補助員も含め富山の教育環境や生活状況について、本調査をサポートしてくださった大学の先生方にご教示をいただき、勉強会を通して当事者である声も聞きながら調査を進めてきた。はじめは、調査員との連絡の手段としてLINEを用いて連絡事項を伝えていたが、そこでなかなか話し出せないでいるとか、反応しづらい雰囲気とかがあった。しかし、徐々に「タメ口で話すか」「絵文字を使うか」など「どのようにしたら反応しやすいか」の改良を重ね、終盤には気軽に話せるようになっていたと感じる。連絡手段としてどのツールを使うかも話し合いで決め、最終決定は調査員全員がなるべく参加した勉強会でするようにしていた。

勉強会を通して、富山県の教育状況や学校の受け入れ体制の現状(入試制度)、外国にルーツを持つ子どもやその保護者がいた時の対処法など、他県と比較して客観的に見た時に、より富山県の置かれている現状に唖然とした。例えば、富山県は通訳機器を4台指定の学校に配布しているが、これで対策していると提示していることに、果たしてそれで対応が完全にできているのかと、富山県に問いかけたい。このような現状になってしまっているのは、今ある日本語指導が必要な生徒の置かれている現状を全く知らないのだと改めて痛感させられる。このことは調査員が話し合いの中でも「私たちでどうにかしていかなければならない」「富山県の偉い人には任せられない」「何言っても動かない」と述べており、6章の6.2「調査員として」でもそれぞれの体験と行政への不満を述べている。

調査員はこの事業を通して、はじめは青木理事長に誘われたから、国際関係に興味があったら、自分の研究と重なる部分があるからと参加していたが、一年の事業を振り返った際に、「参加して良かった」「今まで知らなかったことをもっと知れた」「自分のこととして考えることができた」「同じ環境に置かれている人をもっと助けたいと思いが強くなった」「双方の理解が深まった」「深刻さを改めて実感した」などと述べていた。筆者自身も調査員とのやり取りから第三者の視点からの意見を聞くことで新たな視点を持つことができた。調査員からもやって良かったと聞いたことに、何より成果を感じる。

このような活動ができたのは、そもそも青木理事長を含めアレッセの理事方々のおかげで、今回のようなニーズ調査を含め、調査員の交流ができたことに感謝しなければならない。このような活動をしている団体があるからこそ、当事者の声が生かされるのであり、その声が生かされる場をもっと設けて欲しいと心から願っている。

(プロジェクトコーディネーター 白鳥イルサハニーフ)

6.2.調査員の振り返り

6.2.1.自分と社会を考え直すきっかけになった調査

今回のプロジェクトに調査員として参加した結果、自分の住む地域や自分が関わっているコミュニティの在り方を自分事として真剣に考えられるようになったことが、私にとって大きな実りだったといえる。外国にルーツを持つ人が自分のルーツに自信や誇りを持って生きられる社会の実現のために、自分にできることをやりたいと思うようになった。

そのきっかけはインタビュー調査や、ほかの調査員との勉強会を通して、富山県内に住む外国にルーツを持つ人を取り巻く環境や課題について学んだことだった。ルーツがあることが原因で、学校に馴染めなかったり問題を抱えたりするという話がよく聞かれたが、自分も高校生まではルーツがあることを仲の良い友人にも言わずに過ごしたことを思い出した。そのような行動をとった理由は「ルーツは言わない方がいい」と親に言われたからであるが、そもそも「ルーツがあることをオープンにすると問題が発生するかもしれない」と親に思わせてしまう学校や社会の方を改善すべきではないかと気づいたのである。ルーツについて周りの人に言わずに過ごしていた時の自分の思いも振り返りながら、これから富山県で大人になっていく子どもたちには「ルーツを話せない」という悲しい思いをしてほしくないと思った。ルーツを隠すような経験をした自分だからこそ、ルーツがあることを隠さずに自身のルーツに自信や誇りを持って生活できる社会を実現するために、自分の住む地域やコミュニティの中で行動していく必要があると思う。すぐに大きな変化をもたらすことは難しいとしても、多文化共生に対するポジティブな意見を発信するなど、できることから取り組んでいければと考えている。

またインタビュー調査では、ルーツを持つ子どもにとって、困ったときに少し話ができる“伴走者”のような存在が重要となることを改めて認識した。社会人として生活する自分が、支える側の存在になればという思いも強まった。

このように「自分にできることをしていこう」という思いが強まるなか、富山県知事への提言書提出を迎えたが、自治体職員をはじめとする当事者意識及び問題意識も低いような人たちにその問題解決の重要性を伝え、自分たちの思いを実現することの難しさを改めて感じる結果となった。ただ、これをネガティブに捉えるのではなく、ある意味スタートラインだったと捉えるべきだと考えている。思いを実現する難しさを知った上で今後どうすべきか検討をしていくことで、実現に繋げることができるのではないだろうか。

私は、ルーツを持つ人にとって過ごしやすい柔軟で寛容な環境は、ルーツを持たない人にとっても優しい環境になると信じている。どんな人でも、生きていく上では何かしらの助けが必要となる立場になる可能性がある。そのような時、いろいろな考え方や生き方を受け入れられる柔軟で寛容な環境があれば、その人はより快適に暮らすことが可能になると思う。ルーツを持つ人だけでなく、多くの人にとって住みやすい社会の実現のために、今回のプロジェクトでできた繋がりを生かしながら、ルーツを持っている自分だからこそできることを身の回りから積極的に取り組んでいきたいと考えている。

(調査員 秋山多菜)

6.2.2.Promovendo uma Sociedade Inclusiva: Estratégias e Desafios

A inclusão de estudantes estrangeiros em escolas japonesas, mais em específico na região de Toyama, é um tema de extrema importância que reflete os valores da diversidade e da igualdade.

Permitam-me abordar essa questão com base nas entrevistas realizadas e nas minhas próprias experiências.

O Japão é conhecido por sua rica herança cultural, tecnológica e uma sociedade profundamente enraizada em tradições. Nessas últimas décadas o Japão tem recebido um número crescente de imigrantes e consequentemente o aumento de estudantes estrangeiros nas escolas japonesas. A inclusão desses estudantes estrangeiros nas escolas é uma oportunidade para que o país enriqueça sua própria diversidade e aprendizado intercultural. É uma chance de promover a compreensão mútua e a tolerância, à medida que os estudantes japoneses e estrangeiros compartilham suas experiências e perspectivas.

No entanto, a inclusão de estudantes estrangeiros em escolas japonesas não está isenta de desafios, pois, existem barreiras linguísticas, diferenças culturais e a adaptação a um novo ambiente. Portanto, é essencial que as escolas e a comunidade japonesa promovam a inclusão de maneira eficaz para superar esses obstáculos.

Isso significa garantir que haja apoio adequado para o aprendizado do idioma japonês, programas de orientação para auxiliar na adaptação e promover um ambiente escolar inclusivo, onde a diversidade cultural seja respeitada e valorizada.

Acredito que a colaboração entre escolas, famílias e a comunidade é essencial para apoiar o sucesso dos estudantes estrangeiros, pois o trabalho em conjunto ajuda a garantir que esses alunos se sintam aceitos, motivados e capacitados a atingir seu potencial.

Para finalizar, peço o apoio de todos os presentes para abraçar essa oportunidade e trabalharmos juntos para um futuro mais diversificado e próspero. Obrigado.

Douglas Sawaki Oliveira

日本語：

インクルーシブな社会の推進：戦略と挑戦

日本の学校、特に富山地域における外国人生徒の受入れは、多様性と平等の価値観を反映する極めて重要なテーマです。今回実施したインタビューと私自身の経験に基づいて、このテーマについて取り上げます。

日本は豊かな文化的・技術的遺産と伝統に深く根差した社会で知られています。ここ数十年、日本への移民の受入れは増加しており、その結果、日本の学校に通う外国人学生も増加しています。こうした外国人生徒を受入れることは、この国にとって、自国の多様性と異文化間学習を豊かにする機会となります。日本人学生と外国人学生とがそれぞれの経験や視点を共有し、相互理解と寛容を促進する良い機会となります。

しかし、日本の学校で外国人生徒を受入れるには、言語の壁、文化の違い、新しい環境への適応など、いろいろな問題があります。したがって、これらの障害を克服するには、日本の学校と日本人コミュニティが、互いを認めあうインクルージョンを効果的に促進することが不可欠です。

それはすなわち、日本語学習に対する適切なサポート、適応を支援する指導プログラムを保障し、文化的多様性が尊重され評価される包摂的な学校環境を促進することを意味します。

私は、学校、家庭、地域社会が協力し合うことが、外国人学生の成功を支援するために不可欠であると信じています。三者が協力することで、外国人学生本人が日本人社会に受け入れられていると感じ、モチベーションを高め、持っている潜在能力を発揮できると思うからです。

最後に、このような機会を手に入れるため、皆様のご支援をお願いします。そして、より多様で豊かな未来に向けて、共に歩んで行きましょう。ありがとうございました。

(調査員 ドウグラス・佐脇・オリベイラ)

6.2.4.プロジェクトに参加して感じたこと

私は小学校や中学校で今まで自分が感じてきたこと、経験してきたことを活かして何か人の役に立ちたいと思い、このプロジェクトに参加しました。

自分はイギリスと日本にルーツを持っています。生まれ育ちは日本、教育もずっと日本で受けてきました。小学校では足が速いと「だって、ハーフだもんね～」と言われて、「ハーフってモデルみたいでいいな～」と言われて、モヤモヤした気持ちになることがよくありました。

私達はまず勉強会で海外ルーツの子供たちが置かれている現状やその周りの問題を学びました。自分たちにとっては自分のことを外から見るようでした。勉強会では大学の先生が様々な問題は、つながっていることを分かりやすく、詳しく教えて下さりとても貴重な機会となりました。

その中で海外ルーツの子どもの多くが学びの機会を失ってしまったり、自己肯定感・自己有用感が育まれにくくなっている事実を学びました。学校での先生からの対応や高校受験、友達との関係だけでなく、海外ルーツの子供の多くは家でも2つかそれ以上の言語と文化とがある環境におかれています。これは広い視野を持つことができたり柔軟になれたりするという意味ではものすごくプラスなことです。しかし、同時にとてもストレスがかかることもあります。

調査ではニーズなどを把握するためアンケートとインタビューを行いました。インタビューでは、日本では日本語が使えないと進学も就職も出来ないという日本語の壁の高さに苦しめられている人が多いことを痛感しました。

特に十代は母国語では十分な学力があったとしても親の都合などによる急な来日で日本語が出来ない人も多いです。これにより、本来進学できるはずだった人も教育を受けるチャンスを逃してしまい、貴重な十代後半の時間を無為に過ぎるを得なくなった人もいます。

これは本人にとってはなすすべもなく、将来への思いもとても不安だろうと思います。この事は日本社会にとっても、大きなロスになるのではないのでしょうか。

このような現状を理解した上でそこに必要なサポートをする仕組みが必要です。富山県は他県と比べても入試制度等の対応が大きく遅れています。高校に通訳機を設置するといったような従来の対策では何も変わらないと思います。必要なのは人と人のつながりです。今回の提言も踏まえ、少しでも早く誰も取り残さないような丁寧な仕組みづくりをしてほしいと思っています。さらに、私達は県や国の政治が何かしてくれるのを待つのでなく、個人のレベルでお互いを知ろうと、理解し合い、違いは恐れるのではなくて尊重し合うことが大切だと思います。

私はこのプロジェクトから多くの学びや発見、気づきを得ることができました。自分のこれからの進学や進路にも今回学んだことを活かしていきたいです。また、今後も現状を学び続けて、自分に出来ることを少しずつでもしていきたいです。

(調査員 小川花)

6.2.5.You don't have to lose your identity to fit in

It was a delightful experience to be involved in a project that has broadened my understanding of the education system in Toyama and has empowered me to contemplate solutions rather than just discussing problems. As an individual with diverse cultural roots, I encountered numerous challenges during my schooling in Japan, with the predominant issue revolving around the language barrier. Engaging in discussions with project members and conducting interviews revealed that many others are grappling with similar difficulties. Regrettably, Toyama lacks adequate resources to assist foreign individuals in mastering the Japanese language from the outset.

Upon my arrival in Japan as a junior high school student, I entered school with no prior knowledge of Japanese, making it extremely hard to comprehend the classroom instruction. However, after a few months, my school initiated specialized Japanese language classes that significantly enhanced my language proficiency. I attribute my current proficiency in Japanese to the invaluable support offered through those classes. During a group discussion within the project, I was appalled to discover that certain influential figures, such as the members of education committee, perceive supplementary Japanese language classes for foreign students as a waste expenditure of time and resources. Contrary to this viewpoint, my personal linguistic development underscores the essential role of such classes in facilitating the integration of foreign students into the educational system.

I firmly advocate for the establishment of more resources to help foreign students in acquiring proficiency in Japanese. Numerous foreign peers from my high school in Toyama harbored aspirations of pursuing further education in Japan but were compelled to revise their plans due to language barriers, ultimately opting to pursue opportunities in Europe. Proficiency in Japanese is not solely advantageous for academic success among foreign students; it is also imperative for the adult expatriate community, as most employment opportunities necessitate fluency in the Japanese language. In essence, fostering language skills among foreign individuals is essential for their academic and professional advancement in Japan.

The most common thing I've heard in Japan, in schools and workplaces is that everyone has to live the same way, regardless of their appearance, or Nationality everyone should follow the same rules in a same way. Doesn't matter if you are a foreigner or Japanese but you all should follow the same rules. For example, when I was a junior high school student, I used to wear a long -sleeved undershirt during my gym class to avoid showing as much skin as possible for religious reasons. Because my summer gym clothes were short-sleeved. I was not very aware of the Japanese school rules for clothing at that time. But my gym teacher told me that this kind of clothing is against the school rules and does not count as good etiquette at school, so I should wear winter clothes even during summer.

During Ramadan (the month of fasting) it is challenging to participate in physical activities due to fasting. It's important for educators, like gym teachers, to be understanding and accommodating of students' religious practices. But instead of having that support My gym teacher wanted me to perform at the same level as their peers.

I apologised to my gym teacher in advance that it would be helpful if she doesn't let me do heavier exercise, like shuttle run. But instead, I was warned that everyone was working hard and if I didn't do it then my grades would become zero, so I had no other choice but to do what she said. The other reason was I didn't want my teachers or anyone else to think that I was slacking off because of my religion.

She even told me "It's ok if you'll drink some water, no one will see you." But she didn't realize how important religion was to me. I still don't understand these things, and I don't understand why people with different beliefs have to be the same as others. Maybe it's because of the lack of understanding.

In conclusion while it is essential for all members of a community to follow certain rules and guidelines for the sake of order and harmony, it is equally important to acknowledge and respect the cultural and religious practices of all individuals. By promoting a culture of understanding and acceptance, we can create a more inclusive and harmonious society where everyone can feel valued and appreciated for who they are.

As Japan faces challenges such as labor shortage and a declining population, there are higher chances more and more foreigners will reside in Japan. By promoting language learning, both Japanese residents and foreign residents can engage in cross-cultural exchange, allowing for a deeper appreciation and understanding of each other's backgrounds and traditions. All this is possible through communication.

Communication is key to breaking down barriers and building bridges between communities. By promoting open dialogue and mutual respect, individuals can learn to appreciate and celebrate differences rather than fear or discriminate against them. Embracing diversity not only enriches society but also creates a sense of unity and belonging among its members.

Ultimately, creating a community where individuals can take pride in their identities and cultural heritage without the need to conform or change themselves is essential for fostering a sense of belonging and acceptance. By promoting understanding and empathy through effective communication, we can build a more inclusive and harmonious society where all individuals are valued and respected for who they are.

Isha Rahat

日本語：

周囲に溶け込むために自分のアイデンティティを失う必要はない

自分から富山の教育システムについての知識が深まり、ただ問題について話すだけでなく、私に解決策を考える機会を与えてくれたプロジェクトに参加できて本当にうれしかったです。私自身も外国人なので、日本の学生時代には多くの辛い事に直面してきました。主な問題として、常に言葉の壁がありました。このプロジェクトの他のメンバーとディスカッションをしたり、人々からのインタビューを受けたりすることで、同じ壁を経験した人がたくさんいることに気づきました。高校時代の友人で、同じ言語の問題を抱えて、日本から引っ越した人もいました。

富山には外国人の日本語初級学習をサポートしてくれるところがあまりありません。私が初めて日本に来たのは中学生の時、日本語の知識がまったくない状態で公立の中学校に通いました。単語さえ理解できないときは、授業に集中するのが本当に大変でした。でも、数か月後、学校が特別に日本語の初級クラスを設けて勉強させてくれて、私の日本語スキルを向上させることができました。今日私が日本語を話せるのは、そのおかげだと言えます。

このプロジェクトのグループディスカッションで、一部のエリートグループ(教育委員会等)が外国人生徒をサポートするために特別に日本語の授業時間を設けるのは時間とお金の無駄だと考えていることを知り、ショックを受けました。それらのクラスは、本当に少ないです。外国人生徒のために、日本語学習をサポートする場所がもっとあるべきだと強く信じています。

ここ富山には高校時代の外国人の友達がたくさんいます。彼らは日本が好きで、ここでさらに勉強したいと思っていましたが、言葉の壁に直面して、彼らは目標を変更し、ヨーロッパに移住しました。日本語スキルを持つことは、生徒が良い成績を取るために重要であるだけでなく、一般の外国人も同様だと考えています。ほとんどの仕事で日本語を話すスキルが必要とされるため、ここで働くためにもとても重要です。

今まで日本で暮らして来た中で1番多く聞いたことは学校や社会でみんなと同じ行動にしないと行けないという言葉です。伝統的な日本人に習って、外国人でもみんな同じやり方で暮らさなければならないという雰囲気があります。

たとえば私が中学生の時に宗教的な理由で出来るだけ肌を見せないようにしていました。そこで、体育の夏のための服装は半袖で半ズボンだったため、私は長袖の下着を着ていました。すると体育の先生に長袖の服装は学校のマナー的にダメなので宗教の問題だったら冬服にしてくださいと指導されました。

また、断食の時期に体育の先生に体力を使う運動、例えばシャトルランなどの時に先生に説明して（参加できないことを）謝っていました。しかし、みんなが一生懸命やっている中で、やらなかったら成績がゼロになるよと注意され、私は走ることにしました。なぜかと言うと成績をゼロにしたくない、というのも一つの理由ですが、先生やみんなに宗教を理由としてサボっていると言われたくなかったからです。そして、走った後、先生に「水でも飲めば？誰も見ていないよ」と言われたけれども、宗教が私にとってどれほどの存在なのかを理解して

くれていなかったです。

私はこれらのことを今でも理解できません。生き方が違う人でもみんなと一緒にしないといけない理由が分かりません。多分それはお互いのことを本当には理解していないからです。

日本は労働力不足や人口減少などの問題を抱えているため、今後ますます多くの外国人が日本に居住する可能性が高くなります。しかし、両方のコミュニティの言語や文化が共存するためには、というメッセージで締めくりたいと思います。日本語を学ぶことで日本文化を学び、日本人に自国の文化を教えることができます。理解はコミュニケーションを通じて生まれ、それは言葉の壁がなければ可能です。人と違うことが誰も傷つけないのなら、人と違うことは犯罪ではないはずです。

そして、人の違いは恐れるものではありません。みんなを同じにするのではなく、自分を変えずに自分に誇りを持てるコミュニティで生きたいです。

コミュニケーションによる理解によってのみ可能となる、お互いを理解し、感謝し合うコミュニティになればどんなに素晴らしいことか。

(調査員 イシャ・ラハット)

おわりに

「外国人散在地域における多様な学びの選択肢創造プロジェクト」は2023年度、休眠預金を活用する、資金分配団体(公財)日本国際交流センター「外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業」の一つとして採択された。

本事業は、外国人散在地域である富山県において、外国にルーツをもつ青少年の学びの選択肢を増やすため、専門家の支援のもと、当事者である外国ルーツ青少年が主体となってニーズ調査を実施し、その結果を踏まえて県へ提言を行うものである。

外国にルーツを持つ青少年による調査チームを中心に、調査内容の企画・立案から調査対象の選択について、専門家の支援を受けつつも、自分達で実施したものである。本調査を通して得られた課題は、調査員自身が感じていた問題を客観的に見直すきっかけになるとともに、解決に向けてどのような行動が必要か改めて考え直すことでより地域に積極的に関わりを持つものとなった。特に、知事への提言などを通して、行政や周囲の人をどのように巻き込み、動かすのかを学ぶ良いきっかけとなり、彼らの成長を強く感じる事ができた。

本事業の一員として、外国ルーツ青少年の成長に立ち会い、伴走できたことを誇りに思う。そして、彼らの更なる成長と今回の成果を実行へとつなげていくため、引き続き取り組んでまいりたい。

(NPO法人アレッセ高岡 理事 水田佳歩)

謝辞

本事業にあたって、移民の子どもに関する研究の専門家の日本女子大学教授 清水睦美先生、多言語多文化共生および日本語研究の専門家である上越教育大学准教授 原瑞穂先生、富山大学准教授 志賀文哉先生、(公財)日本国際交流センターの皆様には重要なご示教と貴重なご支援をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。

参考資料

I 詳細アンケート調査票

日本語、英語、中国語、ポルトガル語、ウルドゥー語、ロシア語の6言語で作成した。

ねんど ほうじん たかおか
2023年度NPO法人アレッセ高岡

がいこくじんさんざいちいき
外国人散在地域における

たよう まな せんたくしそうそう
多様な学びの選択肢創造プロジェクト



とやまけん こくせき げんご ぶんが しゅうきょう かちかん せいかく ひとひと す
富山県にはいろんな国籍・言語・文化・宗教・価値観・性格の人々が住んでいます。

わたし たよう けんみん とやまけん まな
私たちは多様な県民が富山県で学ぶことをあきらめないですむように、たくさんの方の声を

き ていげん かんが いが きょうりよく ねが
聞いて提言をしようと 考えています。以下のアンケートに、ご協力よろしくお願い

します。なお、このアンケートで得た情報は、個人が特定されないよう処理（誰のことが
わからないようにする）した上で、本プロジェクトの目的以外には使用しません。

こた ひと なか ちゅうせん めいさま えんぶん としよ
アンケートに答えてくださった人の中から抽選で10名様に、1,000円分の図書カードを

としよ ひと さいご
プレゼントします！図書カードがほしい人は、アンケートの最後にあるQRコードから

おうほ
応募してください。

こた ひと
スマホやパソコンでアンケートに答えたい人は、こちらからどうぞ。

ようし ないよう おな
(この用紙と内容は同じです)



<https://forms.gle/72Lz2d8994k4v719>

がっ にち
かいとうしめまりび
回答締切日は **9月23日** (土曜日)です。



◆あなたのことについて教えてください。あてはまるものに○をつけてください。

【F1】 あなたの性別をお答えください。

- ① 男性 ② 女性 ③ その他 ④ 答えたくない

【F2】 あなたは今、何歳ですか。

- ① 13～19歳 ② 20～29歳 ③ 30～39歳 ④ 40～49歳
⑤ 50～59歳 ⑥ 60～69歳 ⑦ 70歳以上 ⑧ 答えたくない

【F3】 今どこに住んでいますか。

- ① 富山市 ② 高岡市 ③ 魚津市 ④ 氷見市
⑤ 滑川市 ⑥ 黒部市 ⑦ 砺波市 ⑧ 小矢部市
⑨ 南砺市 ⑩ 射水市 ⑪ 舟橋村 ⑫ 上市町
⑬ 立山町 ⑭ 入善町 ⑮ 朝日町

【F4】 あなたは、これまでどこに住んでいましたか。

〈例1〉または〈例2〉のように書いてください(書きやすいほうでどちらか1つ)。



(ここに書いてください)

れい
〈例2〉

(0) ~ (3) 歳	ばしよ 場所 (おおさかふとよなかし)
(3) ~ (10) 歳	ばしよ 場所 (フィリピン)
(10) 歳 ~ 現在	ばしよ 場所 (とやまけんいみずし 富山県射水市)

か
(ここに書いてください)

() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ () 歳	ばしよ 場所 ()
() ~ いま	ばしよ 場所 ()

- 【F5】 あなたの職業・立場は次の中のどれですか。
- | | | |
|-----------|------------------|-----------|
| ① 自営業・自由業 | ② 会社・団体の正職員 | ③ 会社・団体役員 |
| ④ 公務員 | ⑤ パート・アルバイト・派遣など | ⑥ 主夫・主婦 |
| ⑦ 無職 | ⑧ 答えたくない | |
- ⑨ 学生 →どの学校に行っていますか？○をつけてください：
- しょうがっこう ちゅうがっこう こうとうがっこう こうとうせんもんがっこう たんきだいがく
小学校 ・ 中学校 ・ 高等学校 ・ 高等専門学校 ・ 短期大学
- だいがく だいがくいんしゅうし かてい はくし げんきかてい だいがくいんはくし かてい はくしこうきかてい
大学 ・ 大学院修士課程(博士前期課程) ・ 大学院博士課程(博士後期課程)
- ⑩ その他()

- 【F6】 F5で「⑨学生」以外を選んだ人にききます。
- あなたの最終学歴(最後に卒業した学校)を教えてください。
- | | | |
|-------------------|----------|-------------------|
| ① 中学校 | ② 高等学校 | ③ 高等専門学校 |
| ④ 短期大学 | ⑤ 大学 | ⑥ 大学院修士課程(博士前期課程) |
| ⑦ 大学院博士課程(博士後期課程) | ⑧ その他() | |

◆あなたの^{まな}学びについての^{かんが}考^{けいけん}えや^{おし}経験を教えてください。

【問1】 ^{まな}あなたはもっと^{まな}学びたい・^{なお}学び直したいという^{きも}気持ちがありますか。
^{つぎ}次の中から当てはまるものを1つ選んでください。

- ① はい、もっと^{まな}学びたい・^{なお}学び直したい →【問1-a】【問1-b】【問1-c】へ
② ^{まな}学びたい・^{なお}学び直したい^{きも}気持ちはあるが、なかなかできない →【問1-b】【問1-c】【問1-4】へ
③ いいえ、特に^{まな}学びたいとは思わない →【問1-e】へ

【問1-a】 ^{まな}【問1】で「①もっと^{まな}学びたい・^{なお}学び直したい」「②^{まな}学びたい・^{なお}学び直したい^{きも}気持ちはあるが、なかなかできない」と答えた人^{こた}にききます。
^{まな}あなたが^{まな}学びたい・^{なお}学び直したい^{りゆう}理由は何ですか。
^{つぎ}次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① ^{しごと}仕事で困っているから
(^{くわ}詳しく教えてください:)
② ^{せいかつ}生活で困っているから
(^{くわ}詳しく教えてください:)
③ ^{がっこう}学校の^{そつぎょう}卒業資格がほしいから →【問1-a-ア】へ
④ ^{しかく}資格や^{めんきょ}免許を取りたいから
⑤ ^すスキルアップしたいから
⑥ ^{べんきょう}勉強することが好きだから
⑦ ^{がっこう}学校に通っていたときに十分に^{じゅうぶん}学習できなかったから →【問1-a-イ】へ
⑧ ^{しごと}仕事や^{せいかつ}生活に役立つことを知りたいから
⑨ ^{せいかつ}生活を豊かに・^{めた}楽しくするためにいろいろなことを知りたいから
⑩ ^{しや}視野を広げたいから・^し知らないことを知りたいから
⑪ ^{まな}学びを通していろいろな人と^{こうりゆう}交流したいから
⑫ その他()

「①～②、④～⑥、⑧～⑫」を選んだ人は→【問1-b】へ

【問1-a-ア】 ^{がっこう}【問1-a】で「③学校の^{そつぎょう}卒業資格がほしいから」と答えた人^{こた}にききます。
^{がっこう}どの学校種の^{そつぎょう}卒業・^{しゅうりょう}修了資格がほしいですか。
^{つぎ}次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 小学校 (しょうがっこう) ② 中学校 (ちゅうがっこう) ③ 高等学校 (こうとうがっこう)
 ④ 高等専門学校 (こうとうせんもんがっこう) ⑤ 専門学校 (せんもんがっこう) ⑥ 短期大学 (たんきだいがく)
 ⑦ 大学 (だいがく) ⑧ 大学院修士課程(博士前期課程) (だいがくいんしゅうしかてい はくしぜんきかてい)
 ⑨ 大学院博士課程(博士後期課程) (だいがくいんはくしかてい はくしこうきかてい) ⑩ その他(ほか)

【問1-a-イ】 [問1-a]で「⑦学校に通っていたときに十分に学習できなかったから」と答えた人にききます。

学習できなかったのはどうしてですか。

次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① いろいろな理由で学校を休むことが多かった (理由を教えてください：)
 ② 学習に集中できなかった (理由を教えてください：)
 ③ 教師の教え方が自分に合わなかった (どのような教え方でしたか：)
 ④ 日本語の理解力が足りなかった
 ⑤ 不登校だった(ほとんど学校に行っていない)
 ⑥ 中退した(理由を教えてください)
 ⑦ 学校(クラス・部活など)になじめなかった
 ⑧ その他()

【問1-b】 [問1]で「①もっと学びたい・学び直したい」「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と答えた人にききます。

どんなことを学びたい・学び直したいと思いますか。

次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 小学校・中学校(義務教育)で学習する内容
 ② 高校で学習する内容
 ③ 仕事に必要な専門的な知識・技術
 ④ 学問的な内容および研究
 ⑤ 外国(母国)の学校で学ぶ内容
 ⑥ 世界共通の学習内容 (IBプログラムなど※)
 ⑦ とりあえず学校に入ってから決める

※「IBプログラム」ってなんですか？
 国際バカロレア (IB: International Baccalaureate) は、国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラムです。IB のディプロマ・プログラム (DP) では大学入学資格 (国際バカロレア資格) を取ることができ、世界の多くの大学 (100か国以上) の入学資格として認められています。

- ⑧ 学校行事や係活動などの活動を通した学び
 ⑨ 語学(日本語)
 ⑩ 語学(日本語以外)
 ⑪ 仕事や生活に必要な基礎的な算数
 ⑫ 仕事や生活に必要な読み書き(漢字など)
 ⑬ 生活を豊かにするための幅広い(いろいろな)知識
 ⑭ 特定の分野(興味のあること)に関する深い知識
 ⑮ その他()

【問1-c】

「①もっと学びたい・学び直したい」「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と答えた人にききます。
 どのようなところや方法で学びたい・学び直したいですか。
 次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 対面授業(みんなで集まる)で →【問1-c-ア】へ
 ② オンライン授業で →【問1-c-ア】へ
 ③ 自分一人で(テレビ・ラジオ・オンデマンド動画・本など)
 ④ あまりお金がかからないところ・方法で
 ⑤ 家の近くにある学校や教室で →【問1-c-ア】へ
 ⑥ 働きながら通いやすい時間帯(夕方以降・短時間など)で
 ⑦ 同じ属性(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)の人と
 ⑧ 多様な人(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)と
 ⑨ 海外の学校で
 ⑩ 好きな時に少人数で
 ⑪ 興味のあるテーマの講演会、学会・研究会などで
 ⑫ 家庭教師で →【問1-c-ア】へ
 ⑬ 職場(会社など)で仕事をしながら
 ⑭ 英語など日本語以外の言語で
 ⑮ その他()

「③～④、⑥～⑪、⑭～⑮」を選んだ人は→【問1-d】へ

【問1-c-ア】 [問1-c]で「①対面授業で」「②オンライン授業で」「⑤家の近くにある学校や教室で」「⑫家庭教師で」と答えた人にききます。
 どのような人(性格、出身国、話す言語、教え方、教員経験など)に教えてほしいですか。

(ここに書いてください)

【問1-d】 [問1]で「②学びたい・学び直したい気持ちはあるが、なかなかできない」と答えた人にききます。
 なかなか学ぶ・学び直すことができないのはどうしてですか。
 次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 時間がないから
- ② お金がないから
- ③ 周囲(家族や親族など)に協力してもらえないから
- ④ 最後まで続ける自信がないから
- ⑤ その他()

【問1-e】 [問1]で「③いいえ、特に学びたいとは思わない」と答えた人にききます。
 学びたくない・学び直したくないのはどうしてですか。
 次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 知識や技術をもう十分に身につけているから
- ② 学校での勉強に意味を感じないから
- ③ 学ぶことが好きではないから
- ④ 忙しくて学ぶ時間がない、学ぶ余裕がないから
- ⑤ 勉強することが苦手だから
- ⑥ 勉強に良い思い出がないから
- ⑦ 最後まで続ける自信がないから
- ⑧ わざわざ学ぼうとしなくても、人は成長すると思うから
- ⑨ その他()

【問2】

(日本の)学校生活で、良いと思うところを教えてください。

(昔の自分の学校生活の経験から思うことを書いてもいいです。)

次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 課外活動(委員会、部活動など)
- ② 学校行事(運動会、文化祭、合唱コンクールなど)
- ③ 儀式的な行事(入学式、卒業式など)
- ④ 決められた時間割や一日の流れ(朝の会など)
- ⑤ 集団行動(みんなでいっしょに同じ行動をする)
- ⑥ 職業体験(14歳の挑戦)
- ⑦ 宿題
- ⑧ 校則や制服
- ⑨ 清掃活動
- ⑩ 給食
- ⑪ 上下関係(先生・生徒、先輩・後輩など)
- ⑫ 保護者との連携や協力(保護者会、三者面談など)
- ⑬ 地域との連携や協力
- ⑭ ない
- ⑮ その他()

【問3】

(日本の)学校生活で、良くない(改善してほしい)と思うところを教えてください。

(昔の自分の学校生活の経験から思うことを書いてもいいです。)

次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 課外活動(委員会、部活動など)
- ② 学校行事(運動会、文化祭、合唱コンクールなど)
- ③ 儀式的な行事(入学式、卒業式など)
- ④ 決められた時間割や一日の流れ(朝の会など)
- ⑤ 集団行動(みんなでいっしょに同じ行動をする)
- ⑥ 職業体験(14歳の挑戦)
- ⑦ 宿題
- ⑧ 校則や制服
- ⑨ 清掃活動
- ⑩ 給食

- ⑪ 上下関係(先生・生徒、先輩・後輩など)
 ⑫ 保護者との連携や協力(保護者会、三者面談など)
 ⑬ 地域との連携や協力
 ⑭ ない
 ⑮ その他()

【問4】

あなたは、学びや進路(学校を卒業したあとの進学や就職)について、十分な情報が
 ありますか。または、過去、進路を選ぶときに十分な情報がありましたか。
 次の中から当てはまるものを1つ選んでください。

- ① はい、十分な情報がある(十分な情報があった) →【問4-a】へ
 ② まあまあ情報があるが、十分ではない(まあまあ情報があったが、十分では
 なかった) →【問4-a】へ
 ③ いいえ、ほとんど情報がない(ほとんど情報がなかった) →【問4-b】へ

【問4-a】

[問4]で「①はい、十分な情報がある(十分な情報があった)」 「②まあまあ情報があるが、十分ではない(まあまあ情報があったが、十分ではなかった)」と答えた
 人にききます。

誰から、どこで情報をもらいましたか。
 次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 家族や親戚から
 ② 学校の先生から
 ③ 同じ地域やコミュニティの人から
 ④ 学校や塾の掲示板(おしらせの紙が貼ってあるところ)から
 ⑤ 駅や地域などの広告(ポスターなど)から
 ⑥ 公民館(コミュニティセンター)や図書館などから
 ⑦ 合同学校説明会や進学ガイダンス
 ⑧ 外国人向けの進学説明会
 ⑨ 『進路のしおり』やパンフレット
 ⑩ インターネット
 ⑪ 学習や生活を支援している団体
 ⑫ その他()

【問4-b】

【問4】で「③いいえ、ほとんど情報がない(ほとんど情報がなかった)」と答えた人にききます。

どうすれば情報をもらいやすいと思いますか。

次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

- ① 情報をもらう方法やチャンスが増える
- ② 学校の先生が丁寧に相談にのってくれる
- ③ 学校以外にも相談できる場所がある
- ④ 多言語(自分がわかる言語)で情報がもらえる
- ⑤ インターネットで検索できる
- ⑥ 一人一人に寄り添っていっしょに考えたり動いたりしてくれる人がいる
- ⑦ 公的機関(市役所など)や職場、病院、スーパーなどで情報がもらえる
- ⑧ その他()

【問5】

あなたのこれからの人生の目標や叶えたい夢について教えてください。

(どこで、何をしたいか)

(ここに書いてください)

【問6】

これまでの質問以外に、意見や感想などありましたら自由に書いてください。
学生時代の良い・悪い思い出や、「こんな学校・サポートがあったらいいな」と思うことなどでもよいです。

(ここに書いてください)

【F0】あなたや両親は外国に つながりがありますか。

(例：外国で生まれた、外国に数年間住んでいた、外国籍 など)

- ① はい ・ ② いいえ

だれ ↓ (誰が：) (どの国・地域：)

- ◆ 図書カードがほしい人は、下の QR コードからお申し込みください。当選者の発表は図書カードの発送をもってかえさせていただきます。

あなたの「アンケート回答番号」は、です！

- ※ この番号は図書カードプレゼントのための抽選にのみ使います。アンケートの内容との関係
をわからないようにして扱います。
- ※ 応募は一人一回でお願いします。応募するときにはあなたの「アンケート回答番号」を入力してください。

申し込み締め切り： 2023 年 09 月 23 日（土曜日）	図書カード申し込み QR コード 
--	--

ご協力ありがとうございました。

本プロジェクトでは今年度中にみなさんの答えをまとめて富山県に提言書を出す予定です。

10月21日（土）には調査進捗報告会をします。その時に、調査の結果をもとにどんな提言をするかみんなで話し合いたいと思っています。日時や場所など9月以降にアレッセのHPに申し込みサイトを作りますので、ぜひご参加ください。お待ちしております！

NPO 法人アレッセ高岡 学びの選択肢ニーズ調査 調査員一同



【お問い合わせ先】

NPO 法人アレッセ高岡

〒933-0928 富山県高岡市守山町35 ニッセンビル 402

Email: info@alece.org TEL: 080-8885-6823

本事業は休眠預金を活用した日本国際交流センター（JCIE）
「外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業」の助成を受けて実施しています。

II 令和5年度県政世論調査に掲載していただいた本プロジェクトの設問

項目：学びたい意欲・関心、学び直しについて

ねらい・施策への反映方針：地域の実情を踏まえたインクルージョン教育を実現する場の創造や体制の整備、地域におけるサポートのネットワークの強化

設問：

文部科学省の調査結果によると、不登校児童生徒数や日本語指導が必要な児童生徒数が過去最多を更新しており、学校教育に馴染めない児童生徒の支援についての議論が求められています。また、リカレント教育や時代の変化による教育の多様化も注目されています。

こうしたなか、富山県では、すべての人々が学びを断念することなく、キャリアアップやキャリアアチェンジの道を拓くために、学びの選択肢のあり方について検討したいと思います。

問1 あなたはもっと学びたい・学び直したいという気持ちがありますか。次の中から当てはまるものを1つ選んでください。

1. はい、もっと学びたい・学び直したい
2. 学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない
3. いいえ、特に学びたいとは思わない

問1-1 問1で「1. もっと学びたい・学び直したい」「2. 学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない」と回答した方にお尋ねする。

あなたが学びたい・学び直したい理由は何ですか。

次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

1. 仕事で困っているから
2. 生活で困っているから
3. 学校の卒業資格を得たいから
4. 資格や免許を取得したいから
5. スキルアップしたいから
6. 勉強することが好きだから
7. 学校に通っていたときに十分学習できなかったから
8. 仕事や生活に役立つ知識を得たいから
9. 生活を豊かにするために教養を深めたいから
10. 視野を広げたいから
11. 学びを通して色々な人と交流したいから
12. その他()

問1-1-1 問1-1で「7. 学校に通っていたときに十分学習できなかったから」と回答した方にお尋ねします。学習できなかった原因は何ですか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

1. 事情があり欠席が多かった
2. 学習に集中できなかった
3. 教師の教え方が良くなかった
4. 日本語の理解力が不足していた
5. 不登校だった
6. 中退した
7. その他()

問1－2 問1で「1. もっと学びたい・学び直したい」「2. 学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない」と回答したい方にお尋ねします。どんなことを学びたい・学び直したいと思いますか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

1. 義務教育(小学校・中学校)で学習する内容
2. 高校で学習する内容
3. 職業に結びついた専門的な知識・技術
4. 高度に専門的な内容および研究
5. 外国(母国)のカリキュラム
6. 世界共通のカリキュラム(IBプログラム※)
7. とりあえず学校に入ってから決定
8. 学校行事や係活動などの活動を通した新しい学び
9. 語学(日本語)
10. 語学(日本語以外)
11. 仕事や生活に必要な基礎的な算数
12. 仕事や生活に必要な読み書き(漢字など)
13. 生活を豊かにするための幅広い知識
14. 特定の分野に関する深い知識
15. その他()

※＜IBプログラムについて＞

国際バカロレア(IB: International Baccalaureate)は、ジュネーブに本部がある国際バカロレア機構が提供する国際的な教育プログラムです。IBのディプロマ・プログラム(DP)では国際的に通用する大学入学資格(国際バカロレア資格)を取得することが可能で、海外の多くの大学(100ヵ国以上20,000校以上)で入学資格として認められています。

問1－3 問1で「1. もっと学びたい・学び直したい」「2. 学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない」と回答した方にお尋ねします。どのような環境や方法で学びたい・学び直したいですか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

1. 対面授業で
2. オンライン授業で
3. 自分一人で(テレビ・ラジオ・オンデマンド動画・本など)
4. あまり学費がかからないところ・方法で
5. 家の近くにある学校や教室で
6. 働きながら通いやすい時間帯(夕方以降・短時間など)で
7. 同じ属性(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)の人と
8. 多様な人(年齢・性・国・宗教・障害等の特性など)と
9. 海外の学校で
10. 好きな時に少人数で
11. 興味のあるテーマの講演会、学会・研究会などで
12. 家庭教師で
13. 職場で仕事をしながら
14. 英語など日本語以外の言語で
15. その他()

問1-4 問1で「2. 学びたい・学び直したい気持ちはあるが、実際にはできない」と回答した方にお尋ねします。実際に学ぶ・学び直すことができないのはなぜですか。次の中から当てはまるものをすべて選んでください。

1. 時間的に余裕がないから
2. 経済的にハードルが高いから
3. 周囲(家族や親族など)の協力が得られるか分からないから
4. 意志を貫く自信がないから
5. その他()

問2 あなたの最終学歴を教えてください。次の中から当てはまるものを1つ選んでください。

1. 小学校
2. 中学校
3. 高等学校
4. 高等専門学校
5. 専門学校
6. 短期大学
7. 大学
8. 修士課程(博士前期課程)
9. 博士課程(博士後期課程)
- その他()

III 外国ルーツの若者インタビューリスト

本調査では、清水睦美ほか(2021)の「移民第二世代インタビューリスト」をベースに本プロジェクト調査員がアレンジしたリストを用いてインタビューを行った。なお、漢字が苦手な調査員もいたことから、読み仮名を振っている。

【参考文献】

- 清水睦美・児島明・角替弘規・額賀美紗子・三浦綾希子・坪田光平(2021)『世界人権問題叢書103 日本社会の移民第二世代 ―エスニシティ間比較でとらえる「ニューカマー」の子どもたちの今』明石書店

がいくわかも 外国ルーツの若者インタビュー

★：4択—とてもある/まあある/あまりない/まったくない

●フェイス(きほんてきじこう 基本的事項)

1. 氏名(しめい)
2. 年齢(ねんれい)
3. 性別(せいべつ)
4. 最終学歴(さいしゅうがくれき)
5. 現在の職場(仕事)(げんざい しよくば しごと)
6. 現在の在留資格(履歴)(げんざい ざいりゅうしかく りれき)

●いどうこくせき 移動・国籍

7. 来日年(来日年数)／日本生まれ(らいにちとし らいにちねんすう にほん)
8. 移動歴(いどうれき) 日本国内／母国や海外(にほんこくない ぼこく かいがい)
9. 国籍(こくせき) 現在／過去／将来(げんざい か こと しょうらい)

10. 通名使用(いつから／理由)

●出身家族

11. 父 動向(学歴・移動歴・国籍・ビザ・家庭で主に使う言語)

日本語レベル 聞く：①上級・②中級・③初心者に近い

話す：①上級・②中級・③初心者に近い

読む：①上級・②中級・③初心者に近い

書く：①上級・②中級・③初心者に近い

12. 母 動向(学歴・移動歴・国籍・ビザ・家庭で主に使う言語)

日本語レベル 聞く：①上級・②中級・③初心者に近い

話す：①上級・②中級・③初心者に近い

読む：①上級・②中級・③初心者に近い

書く：①上級・②中級・③初心者に近い

13. 兄弟姉妹一人数・動向(今の生活に影響を与えている兄弟姉妹について)

14. あなたの両親は今も婚姻関係にありますか？(離婚や死別の場合：何歳の時)

15. あなたは両親と、どのくらいの割合で会いますか？

16. ★あなたの両親は、今のあなたの様子に満足していると思いますか？

17. ★あなたの両親は、日本に来て良かったと思っていますか？

18. 今、出身家族の中で、一番問題を抱えているのは誰ですか？それはどのような問題ですか？

● 宗教

19. 現在の宗教

20. ★現在の宗教は、あなたにとって身近ですか？

<とても身近、まあ身近と答えた場合>

21. 宗教による差別を経験したことがありますか？(どのような差別？具体的に)

22. ★信仰している宗教を隠したいと思ったことはありますか？

23. ★実際に宗教を隠す行為をしたことがありますか？(どのような行為をしたのか？

具体的に)

● 母国とのつながり

24. 母国の家族や親戚との連絡は頻繁ですか？

毎日／週 1／月 1／年 1／ほとんどない

25. ★母国の家族や親戚の呼び寄せをするつもりはありますか？

26. 親と自分と比較すると、母国とのつながり方に違いがありますか？(どのように)

27. 母国に長期滞在したことはありますか？(いつ、どのような形で、なぜ)

28. ★母国のイメージはいいですか？

29. ★母国での政治に参加したいと思いませんか？(投票など)

● 在日の同国人コミュニティ

30. 日本に住む(国名)コミュニティについて、どのように感じますか？

31. 自分の周囲の(国名)コミュニティについては、どのように感じますか？
32. (国名)コミュニティの人は、人の足の引っ張り合いばかりしているという意見に同意しますか？
33. 他の外国人コミュニティで、うまくやっていると思うのは、どの国の人ですか？／上手くいってないと思うのは？(理由)

● 言語・国籍

34. ★日本語に不自由を感じる時がありますか？
35. 今、自分の日本語に不安を感じますか？感じるとしたらどのような時ですか？
36. 具体的な日本語レベル 聞く：①上級・②中級・③初心者に近い
話す：①上級・②中級・③初心者に近い
読む：①上級・②中級・③初心者に近い
書く：①上級・②中級・③初心者に近い
37. 日本語を習得するために、特別なこと(学校以外)をした経験がありますか？
—いつ、どこで、誰から？
38. 具体的な母国語レベル 聞く：①上級・②中級・③初心者に近い
話す：①上級・②中級・③初心者に近い
読む：①上級・②中級・③初心者に近い
書く：①上級・②中級・③初心者に近い
39. 母国語は、どのように学習しましたか？

40. 母国語と日本語以外に習得している言語はありますか？

41. 日本社会の習慣で一番煩わしいものは何ですか？

●学歴

42. 今の自分に最も影響を与えたと感じられる学校や先生(理由)

43. 退学している場合—退学の理由

44. 学校で困った時に、助けてくれたのは誰ですか？

①担任の先生、担任以外の学校の先生、友達、両親、きょうだい、地域のボランティア

②どんなことに困っているときに、どんなふうに助けてくれましたか？

45. 日本の学校で、外国人であることについて、どのようにふるまってきましたか？それ

は学校段階で違いがありますか？

46. ★あなたは、学校に通っていた時に、両親とよくぶつかりましたか？(ぶつかった

理由)

47. ぶつかったことが多かったのは、いつの時期ですか？

48. ★あなたは、今の学歴について、満足していますか？

49. 最終学歴のところで、もし、十分なお金があれば、今の学歴以上のものを望みましたか？

50. あなたは学校で以下のことを経験しましたか？

・差別

・人間関係のトラブル

・家にお金^{いえかね}がなくて、やりたいことをできない感じ^{かん}

51. あなたが学校^{がっこう}でもう少し^{すこ}うまくやることができるようになるには、どのような援助^{えんじょ}が

必要^{ひつよう}だったと思いますか？

52. 学校以外^{がっこういがい}で、勉強^{べんきょう}をみてもらった経験^{けいけん}がありますか？

①いつ、どこで(塾^{じゅく}／地域^{ちいき}のボランティア教室^{きょうしつ}／協会^{きょうかい}など)、どんなふうに

53. 学校以外^{がっこういがい}で勉強^{べんきょう}をみてもらった人^{ひと}とは、今^{いま}もつながっていますか？(どのようなつながり？)

54. 学校^{がっこう}が終わった後^{あと}に、もしくは学校以外^{がっこういがい}で、キャリアアップのために、勉強^{べんきょう}する

機会^{きかい}をもった経験^{けいけん}がありますか？

①いつ、どこで(通信教育^{つうしんきょういく}／専門学校^{せんもんがっこう}／大学院^{だいがくいん}など)、なにを、どんな風^{ふう}に

●仕事^{しごと}歴^{れき}

55. 初職^{しとしよく}(雇用形態^{こようけいだい}・賃金^{ちんぎん}・探し方^{さがしかた}・仕事^{しごと}の内容^{ないよう}・現場^{げんば}の様子^{ようす})

56. 仕事^{しごと}歴^{れき}(継続^{けいぞく}年数^{ねんすう})

57. 現在の仕事^{げんざいのしごと}(雇用形態^{こようけいだい}・賃金^{ちんぎん}・探し方^{さがしかた}・仕事^{しごと}の内容^{ないよう}・現場^{げんば}の様子^{ようす})

58. 職場^{しよくば}の雰囲気^{ふんいき}として、最^もも良^よかった仕事^{しごと}はどれですか／悪^{わる}かったのは？(理由^{りゆう})

59. 今^{いま}の仕事^{しごと}に満足^{まんぞく}していますか？

60. 今^{いま}の仕事^{しごと}をするうえで困^{こま}っていることはありますか？

61. 将来^{しょうらい}、仕事^{しごと}を変^かえるつもりはありますか？(理由^{りゆう})

62. 日本^{にほん}以外^{いがい}で、働^{はたら}くつもりはありますか？

63. 母国^{ぼこく}へ送金^{そうきん}をしていますか？

① 一回^{かい}、送金額^{そうきんがく}

② 頻度^{ひんど} 1ヶ月^{げつ}／1年^{ねん}／帰省^{きせい}の時^{とき}／友人^{ゆうじん}に預ける^{あず}

64. 母国^{ぼこく}への送金額^{そうきんがく}を、今後^{こんご}増やすつもりはありますか？

● 経験^{けいけん}

65. 小中学校^{しょうちゅうがっこう}時代のあなたを思い出した時^{とき}、以下^{い か}のようなことがありましたか？

① 学校^{がっこう}は楽しかった^{たの}

② 先生^{せんせい}はよく面倒^{めんどう}を見てくれた^み

③ 忘れ物^{わす もの}が多かった^{おほ}

④ 遅刻^{ちこく}が多かった^{おほ}

⑤ 学校^{がっこう}での成績^{せいせき}が気になった^き

⑥ 親^{おや}は教育熱心^{きょういくねっしん}だった

⑦ 通訳^{つうやく}に駆り出された^{か だ}

⑧ いじめられた

⑨ いじめた

⑩ 小学校^{しょうがっこう}の時^{とき}、先生^{せんせい}が好きだった^す

⑪ 中学校^{ちゅうがっこう}の時^{とき}、先生^{せんせい}が好きだった^す

⑫ 小学校^{しょうがっこう}の時^{とき}、学校^{がっこう}の友達^{ともだち}が多かった^{おほ}

⑬ 中学校^{ちゅうがっこう}の時^{とき}、学校^{がっこう}の友達^{ともだち}が多かった^{おほ}

⑭ 部活^{ぶかつ}が楽しかった^{たの}

66. 高校^{こうこう}時代^{じだい}は、小中学校^{しょうちゅうがっこう}と比較^{ひかく}すると、どのような印象^{いんしょう}でしたか？

67. いじめられた^{とき}時の、いじめの^{りゆう}理由は何ですか？

68. いじめた^{とき}時の、いじめの^{りゆう}理由は何ですか？

69. 「学校が^{たの}楽しい」と感じるのは、どんな^{とき}時でしたか？

70. 学校との^{にほんじん}日本人の^{ともだち}友達とは、どのようなつきあいでしたか？(今もつながっていますか？)

71. あなたは自己^{じこしょうかい}紹介するとき、自分^{じぶん}を〇〇人と呼びますか？

—例^{れい}を出さずに^き聞く

—言葉^みが見つからない^{とき}時には、以下^{いか}の^{ていあん}提案^{ていあん}をする

(〇〇人、^{にほんじん}日本人、^{ざいにち}在日〇〇人、^{にっけいじん}日系人、ハーフ、ダブル、クォーターなど)

72. 今、あなたが^{かか}抱えている^{もっと}最も^{おお}大きな^{もんだい}問題は何ですか？

73. あなたが^{もんだい}問題を^{かか}抱えた^{とき}時に、^{そうだんやく}相談役として^{もっと}最も^{しんらい}信頼できるのは^{だれ}誰ですか？

(例)親・きょうだい・^{しんせき}親戚・^{がっこう}学校の^{せんせい}先生・^{きょうしつ}ボランティア^{せんせい}教室の先生・^{きんじょ}近所の^し知り^あ合いの

^{にほんじん}日本人・^{ぎょうせいきかん}行政機関^{ひと}の人・その他^た

74. ★^{にほんじん}日本人で^{そうだん}相談できる^{ひと}人はいますか？—それはだれですか？

75. 今後^{こんごしんばい}心配になることが^{よそう}予想される^{もんだい}問題は何ですか？

76. あなたの^{きょうだいしまい}兄弟姉妹^{なか}の中で、^{もっと}最も^{せいこう}成功していると思う^{おも}人は^{だれ}誰ですか？(理由^{りゆう})

●世代間(親世代と自分の世代の比較)

77. 親の世代と比較して、家族の生活^{かぞく}状態は、^よ良く／^{わる}悪くなっていますか？

78. 親と自分の^{あいだ}間で、日本社会^{にほんしゃかい}に対する^{たい}見方は、^{みかた}変わっていると思いますか？

一どのような^{てん}点で

79. 親^{おや}と自分^{じぶん}の間^{あいだ}で、同国人^{どうこくじん}に対する^{たい}見方^{みかた}は、変^かわっていると思^{おも}いますか？

80. 親^{おや}と自分^{じぶん}では、子供^{こども}への教育^{きょういく}方針^{ほうしん}は、同^{おな}じ／違^{ちが}う？一どのように^{ちが}う？

81. ★親^{おや}のもつ文化^{ぶんか}は、あなた^{この}の好^{この}みにあいますか？

82. ★親^{おや}が日本^{にほん}に移^い動^{どう}した理^り由^{ゆう}について、詳^{くわ}しく知^しっていますか？

83. ★あなた^{にほん}は、日本^すに住^すむことにな^{おや}った親^{いどう}の移^り動^{ゆう}の理^{きんせい}由^いに、賛^{さん}成^{せい}ですか？

●将来^{しょうらい} 自分^{じぶん}の将来^{しょうらい}について考^{かん}えていること^{おし}を教^{おし}えてください。

84. 就^つきたい仕^し事^{ごと}

85. (未婚^{みこん}の場合^{ばあい})結^け婚^{こん}の年^{ねん}齢^{れい}、パ^ぱート^{パート}ナ^{ナー}ーのイ^イメ^メー^ジ

86. 将^{しょう}来^{らい}の居^き住^{じゅう}地^ち

87. 今^{いま}よりもス^ステッ^ップア^アッ^ップするこ^{のぞ}とを望^{のぞ}んでいま^{いま}すか？

88. ス^ステッ^ップア^アッ^ップするた^{けいざいてきえんじょ}めには経^{けい}済^{ざい}的^{てき}援^{えん}助^{じょ}は必^{ひつ}要^{よう}ですか？

●★感^{かん}じていること

89. あなた^{じんせい}の人^{なか}生^いの中^かで、以^{だい}下^じのこ^{だい}とはどのく^{だい}らい大^{だい}事^じですか？

○ お金^{かね}持^もちにな^{なる}

○ 同^{どう}国^{こく}人^{じん}と強^{つよ}い友^{ゆう}情^{じょう}を持^もつ

○ 日^に本^{ほん}人^{じん}と強^{つよ}い友^{ゆう}情^{じょう}を持^もつ

○ 安^{あん}定^{てい}した仕^し事^{ごと}を見^みつ^{つける}ける

- ^{りょうしん}両親や^し知り^あ合^{ちか}いの^す近くに^す住む
- コミュニティから^で出る
- ^{こども}子供をもつこと
- ^{じぶん}自分の^{たの}楽しみの^{じかん}ために^{つか}時間を使うこと
- ^{じぶん}自分の^{りょうしん}両親から^{はな}離れること
- ^{じぶん}自分の^{しごと}仕事の^{ぶんや}分野で^{せんもんか}専門家になること
- いい^{きょういく}教育^うを受けること

90. あなたは、^{にほん}日本にある^{い か いけん}以下の^{ていどきんせい}意見に、どの^{ていどきんせい}程度賛成ですか？

- ^{がいこくじん}外国人は、^{にほんじん}日本人より^{しごと}仕事^みを見つけるのが^{むずか}難しい^{おも}と思う。
- ^{がいこくじん}外国人は、^{にほんじん}日本人と同じ^{おな}仕事^{しごと}をしていても^{きゅうりょう}給料^{やす}が安い^{おも}と思う。
- ^{がいこくじん}外国人は、^{にほんじん}日本人に^{しょうしん}比べて、^{きかい}昇進^{すく}の^{おも}機会が^{すく}少ない^{おも}と思う。
- ^{にほん}日本で^{せいかつ}生活^{ぼこく}するためには、^{せいかつ}母国^すの^す生活スタイル^{おも}を^す捨てる^{おも}なければならない^{おも}と思う。
- ^{じぶん}自分の^{おや}親は、^{ぼこく}母国^{かえ}に^{ほう}帰^{しあわ}った^{おも}方が^{おも}幸せ^{おも}だ^{おも}と思う。
- ^{にほん}日本に^くずっと^{おも}暮^{おも}ら^{おも}したい^{おも}と思う。
- ^{にほん}できれば、^{にほん}日本でも、^{ぼこく}母国でも^{だいさん}ない、^{くに}第三^{おも}の^{おも}国^{おも}に行きたい^{おも}と思う。
- ^{にほん}日本に^す住^{がいこくじん}む^ふ外国人^{ほう}は、^{おも}もっと^{おも}増^{おも}えた^{おも}方が^{おも}いい^{おも}と思う。
- ^{がいこくじん}外国人は、^{にほん}日本でも^{せんきょ}選挙^{けんり}を^{ほう}できる^{おも}権利^{おも}をもった^{おも}方が^{おも}いい^{おも}と思う。

IV 調査協力承諾書等

調査の説明書・協力承諾書は、日本語のほか、英語、中国語、ポルトガル語でも作成した。

2023年度 アレッセ高岡

「外国人散在地域における多様な学びの選択肢創造プロジェクト」
調査に関する説明書

1. 調査の概要・目的
この調査は、富山県に住む多様な人々の学びの選択肢を創造することを目指して、現状やニーズの把握を目的に実施するものです。

2. 調査協力について
この調査への参加は協力者の自由意思によるものであり、調査への参加をいつでも拒否・撤回できます。また、拒否・撤回によって協力者が不利な扱いを受けることはありません。

3. 調査の方法
この調査では、複数の国や文化、言語等にまたがるあなたのこれまでの生活や学びの経験についてインタビューを通してお答えいただきます。インタビューの結果は誰が答えたかわからないようにした上で、一部は数字で処理します。インタビューの所要時間はおおよそ60〜120分程度と見込んでいます。

4. 調査期間・規模
この調査の実施は、2023年6月1日から2024年2月29日までです。富山県内在住の30名程度の方に調査へのご協力をいただく予定です。なお、詳細な研究のため、この期間終了後も引き続きデータの分析を行うことがあります。

5. データの管理
収集したデータと個人情報には十分な注意を払い、富山県における教育体制整備および学術的な研究以外の目的には使いません。

6. 調査結果の公開
調査によって得られたデータは、報告書や研究発表・学術論文に使用されたり、ウェブ上で公開されたりすることがあります。調査結果を公開する場合は、協力者のプライバシーに十分配慮し、協力者が特定されないようにします。

7. 調査に関する資金源
この調査は、(公財)日本国際交流センター「外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業」として、(一財)日本民間公益活動連携機構による休職預金を活用した助成を受けて実施しています。

8. 調査実施責任者・お問い合わせ先
青木由香 (NPO アレッセ高岡 理事長)
Email: info@alece.org TEL: 080-8885-6823 (事務局)
住所: 〒933-0928 富山県高岡市守山町 35 ニッセンビル 402

調査協力承諾書

NPO アレッセ高岡 理事長 宛

事業名：外国人散在地域における多様な学びの選択肢創造プロジェクト

説明内容：(□の中にご自分で「✓」をつけてください)
1. ☐ 調査の概要・目的
2. ☐ この調査へ参加しなくても不利益な対応を受けないこと・いつでも撤回することができること
3. ☐ この調査の方法
4. ☐ この調査の期間・規模
5. ☐ データの管理・個人情報の保護について
6. ☐ 調査結果の公開・プライバシーの配慮について
7. ☐ 資金源
8. ☐ 責任者・問い合わせ先

上記の内容について、私が説明しました。

説明年月日：____年____月____日
説明した調査者署名：_____

私は、上記の内容を理解した上で、自らの意思にもとづいて、調査への協力およびデータの取り扱いについて承諾します。

同意年月日：____年____月____日
協力者署名：_____
保護者署名：_____

V 調査検討会議・勉強会・報告会等

年月日	勉強会の概要	場 所
2023年4月26日	外部専門家の指導、調査の目的・内容・進め方のアウトラインを作成	オンライン
2023年4月28日	外部専門家の指導、2つの量的調査(県政世論調査用コンパクト版・詳細版)の内容を検討	オンライン
2023年5月3日	キックオフ(調査員の顔合わせ及び事務連絡)、県政世論調査用アンケート項目案を検討	西織ビル4F
2023年5月21日	多様性とは、外国ルーツを持つ子どものおかれる環境と現在の支援体制について	西織ビル4F
2023年6月3日	外部専門家による講義「外国ルーツの子どものおかれる環境と日本の学校教育」 質的調査についての勉強会： 模擬インタビューおよび振り返り インタビュー実習	高岡市男女平等推進センター会議室C
2023年6月18日	県政世論調査用アンケート項目の見直し	オンライン
2023年6月23日	量的調査詳細版アンケート内容を検討、質的調査の留意事項、スケジュールの共有、研究協力承諾書とプロジェクト説明書の作成	オンライン
2023年6月27日	量的調査詳細版アンケート内容を検討、質的調査のインタビューメモ、文字起こし方法について検討	オンライン
2023年7月9日	日本国際交流センター担当者と調査員との顔合わせ、外部専門家の指導「量的調査の詳細版アンケート課題確認、考察、アンケート項目を再検討」質的調査：「インタビュー実習の振り返り、インタビューの進め方の確認、調査員からの質問受付」	西織ビル1F
2023年7月15日	外部専門家の指導、2つの量的調査の異同点を明確、詳細版量的調査の対象、内容、スケジュールを共有	オンライン
2023年7月17日	調査員同士で詳細版量的調査のスケジュール、内容、進め方を確認、共有	オンライン
2023年7月22日	可児市国際交流協会の各務眞弓氏から可児市の取り組みを聞き、本プロジェクトについて説明、詳細版アンケート内容について相談し、細部修正を行う	オンライン
2023年7月30日	詳細版アンケートの再確認、プロジェクトの進捗状況と今後のスケジュール確認、調査進捗報告会の実施に向ける準備、高校進学会についての相談	オンライン
2023年8月13日	インタビュー調査の報告およびニーズ対応の検討、ア	西織ビル1F

	ンケート多言語版の作成と配置場所について	
2023年9月10日	インタビュー調査の報告およびニーズ対応の検討、詳細版アンケートの配置場所と配布担当者、部数	西織ビル1F
2023年10月14日	外部専門家の指導のもと、インタビュー調査で感じたことを共有、外部専門家による講義「インタビュー結果から考えられること」、グループディスカッション「困った経験やその経験から考えられる必要な支援」、調査進捗報告会で報告する内容の整理	西織ビル4F
2023年10月21日	調査進捗報告会 プロジェクトの概要 量的調査についての報告 質的調査についての報告 グループディスカッション 全体共有とまとめ	高岡市男女平等推進センター会議室
2023年10月21日	調査進捗報告会後の振り返りミーティング	高岡市男女平等推進センター会議室
2023年11月19日	他の調査員のインタビュー調査の内容を読んで、共通点や比較、気づきなどの共有、進捗報告会のグループディスカッションの振り返り、今後のスケジュール確認と共有	西織ビル1F
2023年11月25日	量的調査(詳細アンケート)データ分析、質的調査データとも照らし合わせ共通部分などの分析・共有	西織ビル3F
2023年12月3日	詳細版アンケート調査についての集計進捗報告、現段階での集計結果の共有、集計データから気づいたことの共有、富山県で学ぶ・学び直すことができるためにどうすれば良いかについてディスカッション	西織ビル1F
2023年12月17日	調査から見えた問題点とそれの改善案の整理	西織ビル4F
2023年12月23日	提言書についての最終確認、提言書提出当日の流れ等の確認	オンライン
2024年1月28日	事業報告会発表の役割分担、アンケート集計データ(グラフ)の属性ごとのデータを比較・分析・共有	西織ビル4F
2024年2月18日	事業報告会＋多文化交流会事前打ち合わせ	オンライン
2024年2月25日	事業報告会＋多文化交流会	西織ビル1F
2024年2月25日	事業報告会＋多文化交流会後一年の振り返り、調査員の今後の夢・希望・計画についてのミーティング	西織ビル1F

VI ニーズ対応

ニーズ対応の内容	対応者
アレッセ学習支援教室への支援者としての参加	白鳥、ドウグラス、王、熊谷
学習支援を必要とする人への教室紹介	イシャ
高校進学説明会・相談会への通訳・スタッフとしての参加	白鳥、小川、熊谷
進学相談の受付・情報提供	白鳥
オープンハイスクールの付き添い・通訳	白鳥
堀岡地域で行われている学習支援教室に支援者として参加	ウスマン
高校での個別入試相談への随伴・通訳	白鳥、イシャ

VII 活動写真

事業打ち合わせ・調査員勉強会・調査検討会議・振り返り

2023年5月21日



2023年6月3日



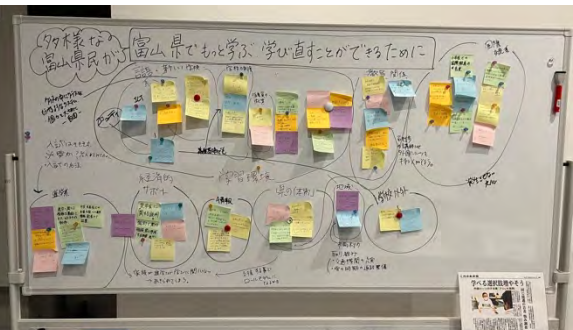
2023年7月9日



2023年10月14日



2023年12月3日



2024年1月28日



2024年2月25日



2023年10月21日 事業進捗報告会



2023年12月28日 提言書提出(県庁にて)



2024年2月25日 事業報告会 & 多文化交流会



VIII 指導者・調査員名簿

調査・分析指導（外部専門家）

- 志賀文哉（富山大学 准教授）
- 清水睦美（日本女子大学 教授）
- 原瑞穂（上越教育大学 准教授）

調査員

- 秋山多菜(フィリピン)
- 亜久楽夢ウスマン(パキスタン)
- イシャ・ラハット(パキスタン)
- 王清揚(中国)
- 小川花(イギリス)
- 櫻木美希(中国)
- 白鳥イルサ・ハニーフ(パキスタン) ※プロジェクトコーディネーター
- 武田ユリア(ロシア)
- ドウグラス・佐脇・オリベイラ(ブラジル)
- 政岡ハルミ(ブラジル)
- 明杏奈(日本)

調査協力

- タイペ・マリエラ(ペルー、東京都在住)

調査補助員

- 石橋愛子(ブラジル)
- 上坪ガブリエレ(ブラジル)
- 内馬場ナユリ(ブラジル)
- 熊谷ゆかり(ブラジル)
- 塩田カリナ(ブラジル)
- 清水ステファニー・ユキエ(ブラジル)
- 山田あなべり(ロシア・ブラジル)
- 劉佳淇(中国)

※五十音順

令和6年(2024年)3月 印刷・発行

外国人散在地域における
多様な学びの選択肢創造プロジェクト
報告書

編集・発行 特定非営利活動法人 アレッセ高岡
〒933-0928富山県高岡市守山町35 西織ビル402
TEL：080-8885-6823(事務局)
E-mail：info@alece.org
HP：https://www.alece.org/



本報告書は、休眠預金を活用した（公財）日本国際交流センター（JCIE）
「外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業」の助成を受けて作成しています。



一般財団法人日本民間公益活動連携機構(JANPIA) 休眠預金活用事業
公益財団法人日本国際交流センター(JCIE) 外国ルーツ青少年の教育スタート支援事業